

仮面ライダーになった
男は戦いたくない

岩鋼玄武

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

失業中の男は、いきなり二代目デイエンドに指名されてしまった。

男は戦いたくないので、支援者になるために、行動を起こす。

R15は保険です。

多大な独自解釈があります。

ノリと勢いで書いてます。

原作視聴推奨、原作改変

基本的に、誤字脱字報告、感想に返事はしません。

感想が増えると執筆速度が上がります。

むしろ、感想に執筆内容で答える感じですか。

目次

プロローグ	1
S P I R I T S 創設編	
再会	14
Dの来訪／蘇る記憶	25
Dの来訪／蘇る記憶②	36
集められた者達	47
集められた者達②	57
青春爆誕	66
これまでの経緯	76
アベンジャーズ編	
始動	84

集結	94
集結②	107
分離	118
決意	130
相對	142
決着	156
間章	
通りすがりの男	174
通りすがりの男②	185
仮面ライダーになりたい男	196
世界樹からきた男	207
アイアンマン3編	
始まりを告げる電話	217

崩壊する物語	228	SPIRITS 初心者	355
恐怖！赤熱人間	241	キャプテンアメリカ・ウインターソル	
五代雄介の受難	252	ジャー編	
驚愕の Jack-in-the-box	264	米国渡来	367
X		会談、トリスケリオン	378
クウガ・マルチバース	275	仮面ライダーの歴史	388
保険	286	キャプテンアメリカの逃走	400
混戦の埠頭	298	歴史の真実	411
終わりもまた電話だった	310	作戦会議	422
間章		その男、最強につき	432
思いもよらない乱入者	322	トニー・スタークのやらかし	443
これが本当の一般人	332	作戦開始	454
御影暁育成計画	344	良い結末を	465

アベンジャーズ・エイジオブウルトロン
編

突然の闘争	478
S P I R I T Sの現状	488
ウルトロンの誕生	498
暴走	509
それぞれの休息	520
新たな敵	531
543	
ヴィジョン誕生、そして作戦決行	
開戦、ソコヴィアの戦い	554
作戦中と可能性の光	566
警察組参戦	577

浮遊大陸の終わり	590
次の戦いに向けて	601
シビルウォーヒーロー大戦編	
アベンジャーズ解体	610
暗躍の序幕	621
指名手配犯 戦極凌馬	631

プロローグ

俺の名は、狭間 玄乃（ハザマ ゲンナイ）現在25歳。

小中高と地元の九州で過ごし、高校卒業後に東京に出て就職するも、都会の水が合わずに体調を崩して数週間の入院後に会社を辞め、親戚が勤めている埼玉の町工場で働いて約5年、経営が苦しくついには倒産してしまった。

貯金を切り崩しつつもオンボロアパートの一室で過ごし、バイトで生計を立て始めて2年前、慣れてきたところに現れたバイト希望の女の子の代わりに、店長に突然のクビを言い渡されてほかのバイト先を探しながらも、ついに貯金も尽きはじめてきてそろそろ地元に戻ろうかと悩みはじめていたある日。

夜中の公園のベンチに座り、コンビニで買った肉マンと缶コーヒーを飲み食いしながらぼうとしていた時だった。

目の前に銀色のオーロラのようなカーテンが突然現れ、そこから一人の男性が姿を現した。

50代ぐらいだろうか、しわができればはじめているがモデル、俳優並みに整った所謂イ

ケメンの男性が俺の目前で足を止めた。

突然の出来事に混乱して、思わず何かの撮影かと周囲にカメラがないか見るが、その類の物は見当たらず、強いて言うなれば数メートル先にある監視カメラぐらいのもので、目の前の男性は俺の事を興味深そうに観察していた。

「僕の名前は海東大樹。」

「デイエンドライバーが君を選んだみたいだからね。」

「2代目デイエンドは君だ：受け取りたまえ。」

頭が回っていないかった俺は言われるがままに、どこか見覚えのある青い玩具のような銃を手を取っていた

「クラインの壺の中身の財宝も、次元をつなぐオーロラも、様々な世界のライダー達の道具も好きに使うと良い。」

君の欲望の赴くままに行動したまえ。

「…じゃあね。」

俺は一言も声を発する事もできずに、目の前の男が銀色のオーロラを通り、オーロラと一緒に消えて行くのをただ見ているしかなかった。

「…ええ？」

そして、今に至る。

「…夢じゃ、なかったのか。」

思わず受け取ってしまい、考えがまとまらないまま布団に入って寝たその早朝。

オンボロアパートの部屋のちやぶ台に投げ出された、その青いおもちゃのような銃の形をしたもの。

『ダイエンドライダー』

2009年に放映されていた特撮番組『仮面ライダーディケイド』の登場仮面ライダーキアラの一人で、仮面ライダーディエンドが使用していた変身アイテムである。

仮面ライダーシリーズはクウガが放映されてから、欠かさずに観ていたのでよくわかってはいるが、こういうおもちゃの類いを俺は買った事がなかったので、見た目が完全に仮面ライダーのおもちやで、それが目の前にあることが変に思えた。

作中ではこのダイエンドライダーは変身だけではなく、見た目通りに銃としても使え、さらにはライダーカードを使えばほかの仮面ライダーを召喚できるし、インビジブルやバリアーといった便利な能力カードを使うことができる。

しかも全体的にシアンブルーに塗装されているそれは、2019年に放映された『仮面ライダージオウ』に登場した時のネオダイエンドライダー *ver* のものだ。

「…しかも本物の銃と考えるように、金属製ですつしりと重いし、デイエンドのカードは装填されたままみただな。」

思えばあの男は、自分のことを海東大樹と名乗っていた。

俺が知っているのはもつと若い頃で、確かに今思い出せば、海東大樹が成長して渋みがでたらあんな感じになるだろうということがわかる。

「でも、何で俺が二代目デイエンドなんだ？」

海東大樹は、デイエンドライダーが俺を選んだと言っていた。

確かに、仮面ライダーシリーズに登場するアイテムの中には高度なAIによって独自に行動するアイテムもあれば、何らかの意識を宿したと思えるものもありはするが、デイエンドライダーはそうではなかったはずだ。

「デイケイドのように、門矢士の存在そのものってわけでもない。」

デイエンドライダーは大シヨッカーから海東大樹が盗んで使っていただけで、デイエンドライダーが海東大樹を選んだとかいう描写はなかったはずだよな…」

俺がちやぶ台の前にすわりながらうんうんと考え込んでいると、単身赴任中のサラリーマンの隣人が部屋から出て行く音が聞こえた。

俺の部屋は1階の角で、上には誰も住んでいないから、これで多少なりとうるさくしても迷惑はかからないようになった。

「…一度変身してみるか。」

俺はデイエンドライバーを手に持って立ち上がる。

そして、カードが装填されているのをもう一度確認すると、デイエンドライバーの前方を引いてから、そのカードを一度引き抜いて、デイエンドの肩から上の姿が描かれたカードをもう一度差し込んで、ボルトアクションのように前方の部分を押し込んだ。

K A M E N R I D E

次いでトリガーを引く

D I ・ E N D !!

4つのデイエンドの紋章が射出され、そのうち3つの紋章が3色のシルエットに変化し、それらが俺に重なることでデイエンドのスーツを形成する。

さらに10枚のライドプレートと呼ばれる半透明な青いプレートが頭部に突き刺さり、最後にボディカラーがシアンに染まって変身完了となる。

「…本当に変身できた。」

変身解除は…：デイエンドライバーを元に戻すんだっただか。」

再びデイエンドドライバーを操作して変身解除をすると、俺が立っていた場所に、靴底の跡が残っていた。

「やべえ、変身時のスーツって、結構重量あんのか、失敗したな。」

だけど誰かに見られる可能性を考えると、自分の部屋がベストだよな。」

再び、ちゃぶ台の上にデイエンドドライバーを置いて考え始める。

たとえ俺が二代目のデイエンドになったとしても、この現代日本ではどうしようもないだろう。

「…：自然災害、交通事故、どれだけの用途があったとしても、一般人の俺にどうしろと言うんだ。」

すきにしろって言われても、どれだけの財宝や仮面ライダー達のアイテムがあるかわからない…：

そうだな、どれだけのアイテムがあるか確認しておく必要があるのか。

確か、クラインの壺とかいう場所に保管されているみたいだが、どうやればいいんだ？」

デイエンドドライバーを手に持って、うんうん考えていると、目の前に銀色のオーロラカーテンが現れた。

「……この先にあるってのか?」

急いで玄関へ行き、靴を手に持って戻り、銀色のオーロラの前に来るがその先に行くことを躊躇してしまい、腕を伸ばそうとするが、やはり直前でやめてしまった。

知識として、この先に別の場所に行くことができるのをわかつてはいたが、いざ行くとなるとビビってしまった。

2、3度深呼吸をしてから勢いで飛び込んでみると、淡い光が四方を隅々まで照らす大きな格納庫のような巨大な空間につながっていた。

手に持っていた靴を履きながら、中心の白く塗られている通路を歩く。

後ろを振り返ると、銀色のオーロラがうつすらと無くなっていき、この場所の全容がわかってきた。

前方後方には、見える先がわからない程、空間が伸びていて、左右は何メートルだろうか、大型トレーラーが左右に1台づつ置けるぐらいのスペースがあつて、壁は淡い白一色に塗られていて、天井も淡い白い光が差しているが天井は霧がかかっているように見えることができない。

そして、通路を挟む左右の空間に置かれている様々なもの。

ずらりと並ぶ、仮面ライダーのバイクの数々に、トライドロンとライドロン。

無造作に置かれた、AttoZのガイアメモリやスマートブレインのロゴが入ったア

タツシユケースや、ガラスケースに入っているライダーマンのヘルメットらしきものが見える。

遠くには山のように積まれた金塊の延べ棒らしきものや、金銀財宝に、刀剣や、ライダー達の武器の数々。

ふと気付くと、スマホの時計は既に15時をまわっていた。

憧れの仮面ライダーのアイテムの数々を見ているだけで、心が躍るが、それはそれ、これはこれで腹も減ったので、一度部屋に戻ってきた。

いそいそと靴を脱いで、遅くなった昼飯を軽く食べると、ポケットに入れていた一枚の金貨らしきものを取り出した。

「これが本物なら、本当の金銀財宝って事になるが…

行つて見るか。」

「ありがとうございますー！」

わざわざ5つ先の駅を乗り継いでリサイクルショップに売りに行ったが、俺の財布は

ずいぶん分厚くなっていた。

「…本物だったか。」

帰りに普段は買わないスーパーの寿司セットを購入して帰ると、家に帰りついてから、急に怖くなってきていた。

あの一枚の金貨が買い取りされた事で、調べられるんじゃないのかとか、ヤのつく人達に嗅ぎつけられるんじゃないのかとか、不安が襲ってきて、寿司の味もろくにわからずに完食してしまっていた。

急な不安に、ついには布団ごとアイテムが保管されている空間に行つて、一夜を過ごしてしまった。

一夜明けて、いろいろと考えて見ることにした。

まず最初に、この財宝やアイテムは俺が自由に使つていいとなつてる。

だからまずは、このオンボロアパートからまともな住居に引っ越して、住環境と身だしなみを整えて、かなり稼げる仕事をしている風な外観を装う必要があるってことだ。

この財宝はバレなれば税金もかからないだろうし、もしも金持ちをたかりに来るような変なやつらが現れたらディエンドライバーを使つて別の世界に逃げればいい。

俺は良くも悪くも一般人で仮面ライダーに憧れはあつても、自分で変身して戦いたい訳じゃないから、一旦、あのアイテム群は、脇に置いて行動しよう。

それに、一晩考えて頭の中で思いついた『あの事』を実行してみるのもいいかもしれないからな。

俺は、昨日とは何も変わっていない自分のオンボロアパートに戻ってきて、なんとなく不安と安心感からか、大きなため息をついた。

俺は結局あのアパートを引き払い、九州に戻る事にした。

財宝の中から、日本の通貨を発見した俺は、200万程が入っている預金通帳を作つて、アパートにあつたいたらないものをまとめてリサイクルショップに売りに行き、ゴミ処理をして軽トラック1台分もない荷物を実家に送つた。

実家からは、もともと叔父の工場が倒産してから戻ってきてもいいと、両親から言われていたので、あらかじめ連絡を入れて実家に帰ることにした。

隣のサラリーマンのおっさんは、うらやましそうにした顔を隠そうともせず、別れを告げられた。

「おかえりなさい。」

「大丈夫だったか？」

「ちゃんと、食べてたの?」

いつの間にか当たり前ではなくなっていた言葉に一喜一憂しながら、2、3ヶ月を片田舎の実家で過ごして、町の中心部でマンションを借りて、そこに引越すことにした。

両親からは随分と心配されたが、いい加減に働きたいと言う名目と、実家暮らしでは片田舎特有の『若い者は働かないといけない』と言うプレッシャーをかけてきていたから、両親にも迷惑をかけていることがわかっていたので、少し離れた場所に住むことにした。

それでも、実家からは車で1時間ぐらいの距離なので、ちよくちよく両親が来るかもしれないとは思った。

まあ俺が、部屋にいるとは限らないが。

実は俺は、オンボロアパートを引き払い、実家に帰るまでに1月程、電車で移動しながらあちこちの地方を転々としながら、資金づくりをしていた。

身分証の名義を、悪いとは思っていたが、オンボロアパート時代の住所を使用しながら貴金属や小粒の宝石なんかを元手に資金調達を行いながら、仮面ライダー関係と、とある作品群の書物を買いたいあさるようになっていた。

そして今、市街地で住居を整え、身だしなみを整え、服装を整えて、デイエンドライ

バーを手にして、銀色のオーロラをくぐり抜けて別の世界に来ていた。

路地裏に現れて、道端に落ちていた新聞記事を拾って見てみると、日本語で『風都新聞』と書かれていた。

そう、俺は仮面ライダーWの舞台である風都へときていたのである。

俺はさっそく、『鳴海探偵事務所』を探し始めた。

ウイキによると、仮面ライダーWの主人公、『左 翔太郎』らが拠点とする探偵事務所は、風都の風花町1丁目2番地2号に建つ、古びた玉屋かもめビリヤード場の2階にあるとされている。

俺は、道を聞きながらも、その場所を探し当てた。

しかし、その場所には、古びたビリヤード場ではなくて、大きなボウリング場が建っていた。

「はずれか。風都はあっても、仮面ライダーがない世界か。

この世界を起点に移動するか：風都の平行世界へ。」

そして、再び、路地裏に入って、別の世界に移動する。

この前の世界は、風都の仮面ライダーWがサイクロンアクセルだったし、その前の世界は仮面ライダーWがいるが、それ以前の仮面ライダーがない世界だった。

俺が探している世界は、少々ややこしいだろうが、歴代の仮面ライダーに変身した

人々はいても、仮面ライダーがない世界だ。

『仮面ライダー作品群が合わさった世界だけど、仮面ライダーも敵組織も現れず、ある程度平和な世界』と、『ある世界』が合わさった世界を俺は探している。

いろいろと世界を渡り歩いているうちに、銀色のオーロラの設定や使い方、世界線の移動のやり方などがわかってきていた。

今では、自分がもともといた世界に自由に戻れるし、とある世界を起点にその平行世界を探すことも可能になっていた。

そして、ついにその世界を探し当てることに成功したのだった。

SPIRITS 創設編

再会

SIDE 五代雄介

久しぶりに日本に帰ってきて、ポレポレの手伝いをしている時だった。

「雄介、お前宛に荷物が届いているぞ。」

「俺宛にですか？」

「ああ、部屋に置いておいたから、休憩の時にでも見てきていいぞ。」

「誰からかは、わかりますか？」

「そういえば、贈り主の名前は書いてなかったなあ。「すいませーん！」あつはい、はい。」

と、おやつさんはお客さんに呼ばれて行ってしまった。

そして、部屋に戻ると、足元に一つのダンボール箱があった。

屈み込んで、伝票を見ても、贈り主の名前は薄くなっていてよく見えなかったけれど、

宛先は五代雄介様になっていた。

「何だろな……ん？なんだコレ？」

箱に入っていたのは、緩衝材に包まれた、謎の物体と、一つの封筒だった。

「えくと、何々……あなたがこれを手にして見えたビジョンについて、詳しいことが知りたければ、下記の日付の場所に来られたし。」

「……で、『これ』っていうのは、緩衝材に包まれたこれの事だよな。」

少々怪しみながらも、緩衝材を取り払うと、白い布に包まれたものが出てきた。

型からして、大きなバックルがついたベルトだろうか？

布を解いていくと、見たことはないはずなのに、どこか懐かしい感じがして、直接触ってみた。

その時だった。

急に、頭の中にとあるいくつもの光景がフラッシュバックした。

今よりも少し若い頃の自分が、炎に包まれた教会で、赤い装甲の戦士に変身する光景。

警察の人たちに囲まれて笑い合う光景。

怪物に殺されて倒れている人たちを見て、変身する自分。
『クウガ』

そう、怪物、いや『グロンギ』に、そう言われながら、『一条さん』達と一緒に戦う光景。

「…今のは、はっ、これって。

『アークル』?」

思わず、手に持っていたものをダンボール箱の中に取り落として、尻もちをついた。

「えっ、一体何が、今の光景は?」

そうだ、これは、九郎ヶ岳の遺跡で見つかったクウガのベルト?

でも、2000年に、未確認は現れて無いし、一条さん達とも面識は無いはずなのに。」

でも、今のビジョンで、自分がクウガに変身して、未確認と戦っていたことを鮮明に思いだせれるようになってしまった。

「行かなきゃ、この場所に。」

何で、アークルがあるのか、今のビジョンは何なのか聞かないと。」

再び、封筒に入っていた紙の日付と、場所を確認して、そして、ダンボール箱に入っているアークルを見つめている自分がいた。

2008年10月、紙に記されていたのは、某所にあるとある旅館だった。

駐車場には、あちこちの県からお客さんがきているみたいで、長野県のナンバープレートの中も見つけていて、沢山並んでいるバイクの空きスペースに駐車しながら、不安に駆られながら、もちろん、背中の荷物の中には、布に包まれたアークルも入っていることをもう一度確認して、旅館に入ることにした。

正面玄関には、二人組の男性がいて、『仮面ライダー御一行様』と書かれた看板が設置してある前で、話をしているようだった。

「こんな簡単に、仮面ライダーの名前をだして、俺たちにカードデッキを送ったやつは何をしようとしてるんだ!？」

「ふん、チェックインして、さっさと話を聞き出すぞ。」

「あ、待てよ蓮!」

首をひねりながら、二人組の男性は旅館の中に入って行ってしまった。

自分も、チェックインをしようと、正面フロアに入ろうとして、声をかけられた。

「五代…か？」

そこには、自分と同じように、少し老けこんだ一条さんがスーツ姿で立っていた。

「一条さん。」

「やっぱりか…お前のところにも何か届いたのか？」

いや、まずは、はじめましてになるのか…

知っているのに知らない人物と話すことになるなんて不思議な感覚だが。」

「そう、ですね。」

未確認も、クウガもない世界のはずなのに、はじめて会うはずの一条さんが懐かし
いなんて不思議ですよね。

あ、俺宛には、これが入ってました。」

「これは!？」

「実際につけたりはしてません。」

俺の体に入ってしまうかもしれないなんて考えると、つけたりなんてできませんでし
た。」

「いや、正しい判断だ。」

自分の荷物の中のアークルをちらりと見せて、封を閉じると、別の方から、声をかけ
られた。

「あなたも一条さんの知り合いですか？」

ああ、はじめまして、私は、警視庁捜査一課の北條といいます。

あなたも、この奇妙な集まりに参加されるということは、何らかの関係者であったということになりますよね？」

警察手帳を見せてきたスーツ姿の男性に聞かれるが、自分がクウガだと言える訳でもないから、言いよんどんでいると

「北條さん、こいつは五代雄介、私と一緒に未確認についての関係がある人物です。」

「どうも。」

「ほう、未確認ですか、我々警察は未確認については一条さん以外に情報源がありませんでしたので、話を聞かせてほしいですね。」

「それは、おいおい話をすることになると思います。」

五代、チェックインはまだだったな。チェックインを済ませて、部屋で集まろう。「わかりました。」

そう言つて、一条さん達と別れてカウンターに行くと、和服姿の女の人から名前を聞かれて答えると、何やら用紙に、チェックを入れると、部屋の番号を教えてくれた。

どうやら誰かと相部屋らしく、既にその相手の人は部屋にいるらしく、鍵は渡されなかった。

部屋について扉を開くと、誰もいなくて、スーツケースだけがおかれていた。

自分も、荷物を下ろすと、扉から一条さんが入ってきた。

「もしかして、相部屋の相手って、一条さんですか？」

「ああ、そうだ。」

これで、ゆつくり話ができるな。」

と、ため息交じりに話しかけてきた。

S I D E 狭間玄乃

旅館の正面玄関フロアのソファアーに座っていると、正面の出入り口から、画面越しにしか見たことがなかった、オダ○リジ○ーではなく、五代雄介が現れて、一条薫、北條透と話をした後、それぞれで別れて移動していた。

近くのソファアーに座っている男性、白いスーツ姿に白い帽子が似合う壮年の男性、鳴海荘吉が話かけてくる。

「あの者達も、仮面ライダーに關係がある者達なのか？」

「警察關係者に見えたが。」

「そうですね。」

仮面ライダーと、警察関係者は、切ってもきれない関係にあります。

あなた方も、照井竜や、警察とは関係を持っていますよね。」

「それは、探偵という職業をしているならば、当然のことに過ぎない。

しかし、いまだに騙されている気分だ。

ガイアメモリや記憶のフラッシュバック、そして、あんな映像作品を見せられは、信じざるをえんがな。」

俺が最初に鳴海探偵事務所を探していたのは、協力を得るためだった。

ユグドラシルコーポレーションや、ゲムムコーポレーション、鴻上フアウンデーションも一応候補に挙げていたが、俺自身は二代目デイエンドになったとはいえ、社会的地位があるわけではない一般素人に過ぎない。

しかし、探偵という職業は、一般市民の相談を受け、対応をしてくれる職種だ。

しかも、鳴海荘吉はこの世界では生存していて、警察組織とも連絡を取り合える貴重な相手といえる。だから、自分の側に引き込む最初の一人に選んだ。

2007年6月

俺が、鳴海探偵事務所を起点に見つけ出したこの世界は、仮面ライダーはいない。

もちろん、仮面ライダーという特撮作品も平成以降の作品は存在せず、ましてや、スーパー戦隊、ウルトラマン、ゴジラ等といった特撮そのものが存在しても流行しなかった世界である。

だから、もし仮面ライダーという単語を聞かれても、若い世代は、認知度が限りなく低い作品として扱われている。

しかし、『ポレポレ』『花鶏（あとり）』『ハカランダ』『甘味処たちばな』『Bistrola Saalie（ビストロ・サル）』といった喫茶店や、『ユグドラシルコーポレーション』『幻夢コーポレーション』『鴻上フアウンデーション』『スマートブレイン』といった企業、『城南大学』『天ノ川学園高等学校』という場所がこの世界には存在している。

個人で調べられる限りでは、仮面ライダーではないが、その人物は存在していることを知ることができた。

そして、とある世界の者達も、この世界には含まれていた事で、自分が目的の世界に来ることができたとわかった。

あのクラインの壺らしき空間にあったアイテム群を見て回ったところ、自分が知る仮面ライダーのアイテムが全て置いてあることが見てとれたため、まずは、確認として、メモリーメモリに、自分の世界から持ち込んだ仮面ライダーの映像ファイルを読み込ませて、他のアイテムに移し替えた場合、どうなるのかを検証してみた。

結果は俺が考えていたことが起きた。

これは、俺のイメージによっておきた事象かもしれないが、そのアイテムに触れた時に、映像ファイルの中からそのアイテムに関係のあるシーンが、フラッシュバックして脳裏によぎるようにすることに成功した。

これは、メモリーメモリで、情報を移し替えて、そのアイテムに触った最初の1回におきるようで、取り扱いには注意が必要だと思われた。

そこで、自分の資金をもとに、大量のアタッシュケースと、ウレタンシート、無地のダンボールを日本の平行世界に行き購入してアイテムを移し替える作業から始まった。

結構時間がかかったが、選別と、梱包一步手前の状態にまですることができて、次いでに意味深な手紙をワープロで作成して、印刷手前の状態で、一旦放置することにした。そして、準備を終えた俺は、鳴海探偵事務所にアポの電話を入れて、訪れることにした。

風都の風花町1丁目2番地2号に建つ、古びた玉屋かもめビリヤード場その2階に向かう階段の前に、木製の看板が立てられていて、妙な緊張感と、まるで、撮影場所の聖地巡りをしているような高揚感があふれてきた。

片手に持ったアタッシュケースを握りしめ、背中のリュックの重みを感じながら、階段を上りはじめた。

Dの来訪／蘇る記憶

SIDE 左翔太郎

その日、俺とおやつさんは、依頼人が来る時間が近づいていたので、事務所で待機しながら、コーヒーマシンの準備をしていた。

と、言ってもコーヒーマシンを入れてるのはおやつさんだ。

曰く、『コーヒーマシンは人生の相棒だ』ということらしい。

くく、ああいうセリフ、俺も堂々と言ってみたいぜ。

すると、入り口のドアが開き、取り付けられた鈴の音が鳴った。

入ってきたのは、一人の男性、年は二十代後半だろうか、ジーパンにグレーのシャツ、その上にチエック柄のYシャツを羽織って、リュックサックを背負い、右手には銀色のスーツケースを持っていた。

「電話を入れていました。狭間玄乃といいます。」

今日は、よろしくお願いたします。」

と、頭を下げてきた。

俺は、慌てて、依頼人の元に行き、紹介をする。

「ようこそ、鳴海探偵事務所へ、自分は助手の左翔太郎、そしてこちらが。」

「当事務所の探偵。鳴海荘吉だ。」

まずは、席へどうぞ。」

俺は、その狭間と名乗った依頼人をソファアに案内して、おやつさんが来るのを待つ。

「まずは、コーヒーをどうぞ。」

味はその都度、代わりますが味は一級品のオリジナルブレンドです。」

おやつさんは、依頼人の正面に座りながら、自分と、依頼人のコーヒーを置き、依頼人は背負っていたリュックサックを足元に置くと、そのコーヒーを受け取り、一口飲む。

「…確かに。苦味の中にほのかな酸味と甘味を感じます。」

おいしいですね。」

そう言つて、コーヒーを置いた。

「それで、どんなご依頼で？」

「そう、緊張なさらないでください。」

困り事ならば、万事お力になれると思います。」

人探し、浮気調査、何でも言うてください。」

おやつさんが話を切り出すも、依頼人は答え辛そうな顔をしていたので、思わず横から声をかけてしまった。

すると、依頼人は、軽いため息を吐くと、意を決したように

「実は、人探しをお願いしたいのです。」

「詳しく、話を聞かせてもらいたい。」

「まずは、これを。」

するとその依頼人はソファアの足元に置いてあったスーツケースを机の上に置くと、鍵を開き中に入っていたものをこちら側に見せてきた。

中に入っていたのは、赤色の同じ型をしたベルトのバックルのようなものが二つと、黒色の長方形の機械のような、見た限りでは、大きなUSBメモリらしきものが二つ。

「これは？」

「まずは、こちらのメモリを持って見て下さい。」

鳴海さんはSの方を、左さんはJの方のメモリです。」

そう言われて、黒色のメモリを持ってみると、なかなかの重さだった。

表面には、何かモチーフがあるのだろうか？

変わった形の『J』というイニシャルが入っているようだった。

不思議なのは、初めて見る代物なのに、手になじむというか、いつも肌身離さずを持つていたかのような気になってしまふ感覚がした事だ。

「表面に、ボタンがあるので、押してみてください。」

確かに、イニシャルの端に押し込むような出っ張りがあつたので、押してみる。

S K U L L

J O K E R

その機械音声が鳴った瞬間、頭の中で様々な光景が見えた。

敵の凶弾に倒れ、俺に帽子を託すおやっさん。

炎の中で、後の相棒になるフィリップとのビギンズナイト

ドーパント達との戦闘や事件を解決していく日々

そして、はじめてエクストリームに変身した瞬間

「…おやつ…さん!？」

…生きてるよな…ガイアメモリにドーパントに!？」

いや、今は2007年だろ!？」

いつたい…何が、どうなって…」

「俺は、未来で、ミスで死ぬと言いたいのか？

…いや、ならばなぜ、翔太郎のことを知らない自分が、翔太郎を認めているようなことを言っている?」

それに、シユラウドに依頼した覚えもなく、かつての相棒は、妹分と結婚して幸せに暮らしているはず。」

「おい、あんた!何で、ガイアメモリとロストドライバーなんか持つてるんだ!？」

それに、この記憶はどうやって!？」

俺は、思わず狭間という男に詰め寄り、聞き出そうとした。

「落ち着いて下さい。最初から説明させていただきますので。」

「いいだろう。翔太郎、お前も座れ、1から説明してもらおうじゃないか？」

おやっさんが珍しく、苛立った声で言うもんだから、思わず、近くの椅子に座ってその男をにらみつけた。

S I D E 狭間玄乃

仮面ライダーダブルの主要人物達が、自分に向かって、にらみつけている。

体が震えそうになるが、意を決して、話しを切り出した。

「まず、鳴海荘吉さん、あなたはこの世界では普通の探偵という職業に就いているだけの方です。」

しかし、別の世界では、あなたは仮面ライダースカルで、ミュージアムと戦う戦士でもあります。」

『別の世界では』とはどういう意味だ？」

「そのままの意味です。」

平行世界、パラレルワールド、マルチバースというものをご存じでしょうか？」

「理論だけならな。眉唾物のおとぎ話程度にしか印象になかったが、今の記憶は、平行世界の記憶を見せられた。」

「そういうことか？」

「そうなります。」

「ということは、依頼人、あなたは別の世界の出来事を他人に見せることができる。」

もしくは、別の世界から来たと、そう言いたいのか？」

「単刀直入に言えば、そうなります。」

信じられないのも、よくわかるつもりです。」

しかし、『別の世界からの存在』は、左翔太郎さん、別の世界のあなたの記憶を見たあなたならば、思いあたるはずですよ。」

「どうなんだ？ 翔太郎。」

「ちよつと待ってください、おやっさん。」

そんな、いきなり言われても……ん？ もしかして……デイケイドのことか？」

「そう、仮面ライダーデイケイド。」

様々な世界を巡り、渡り歩く、次元の渡航者ですよ。」

「待てよ！ダイケイドは、門矢士であんたじゃないだろ！」

「そうです。俺は、ダイケイドではありません。」

ですが、彼に近しい存在であり、共に戦いあつた仮面ライダー。

仮面ライダーダイエンドの二代目なんです。」

そう言つて、俺は、手元のあたりに銀色のオーロラを発生させて、ダイエンドライダーを取り出して、机の上に置いた。

「今、『どこから』取り出した？」

何か、銀色の膜のようなものが見えたが、まさかお前はドーパントか？」

「早とちりしないでいただきたい。」

この能力は、先代から受け継いだ能力のひとつで、クラインの壺と呼ばれる空間からいろいろなものを出し入れすることができるとです。」

「ずいぶんと、便利な能力だな。」

翔太郎、見覚えはあるか？」

「えつと、ダイケイドと一緒にいた仮面ライダーが持つていた武器に似ていると思うぜ。」

俺が知っているのは、全体的に黒い色だったと思うけどな。」

それに、ダイケイドと違って、そこまで良いやつのようには見えなかつたがな。」

「ご明察の通り、先代の仮面ライダーダイエンドの変身者だった、海東大樹という方は、

そこまで善良という訳ではありませんでした。

さらに言えば、先代は、怪盗を自称する、仮面ライダー専門の泥棒という方だったんです。」

「ほう、泥棒の二代目がどうしてここにいる？」

自首をするなら警察へ行け。」

「だから、早とちりしないでいたただきたいと言ってるんですよ！」

先代は、確かに怪盗というものを楽しんで行っていた人でしたが、自分もそうだと決めたつけないでもらいたい。

俺だって、いきなり二代目だとか言われて、押しつけられたんです。

こんな危険物、手放せるなら手放してしまいたいというのが、本音です。

ですが、これらの危険性を理解している手前、簡単に処理出来ないということもわかってるんです。

現に、ロストドライバーとガイアメモリをあなた方に渡しているではないですか。」

「ちよつと待て、狭間と言ったな。

お前は、その泥棒の弟子だから受け継いだということではないのか？」

「違います。俺は、仮面ライダーを知っていても、何の関わりのない一般人でした。

海東大樹さんがいきなり現れて、二代目として、このディエンドライダーを渡されて

クラインの壺の中身を自由にしていいという名目で、押しつけられたというのが、現状なんです。」

つい、勢いで言ってしまったが、このことは元々言うつもりだった。

ある程度の真実を話さなければ、信用は得られないと思っていたからだ。

「矛盾だらけの発言だな。」

一般人だと言ったが、どうして、ガイアメモリの危険性を知っている？

あれは、裏社会にある程度出回っていても、その危険性まで、知っている者はほとんどいないはずだ。」

そう言われたので、あらかじめ用意しておいたものを、足元に置いたりユックサックから取り出した。

「CD…いや、DVDか？」

そんなものを取り出して、どうしたというんだ？」

俺は、さらにノートパソコンを取り出して、起動し、そのDVDを挿入して、動画を再生、それを二人に見えるように置いた。

そして、動画、仮面ライダーダブルの第一話が始まって、鳴海荘吉が死に、仮面ライダーダブルが誕生、そしてオープニングが流れはじめる。

ちなみに、出演者や、スタッフの表示は消してあり、オープニングは最初の第一話だけで、あとは最後までつなげて見られるように編集済である。

二人は声を失い、食い入るようにその画面を見ていた。

そして、第一話が終わったあたりで、一時停止をして、二人の様子を見る。

「な、なんだ、いったい……これって。」

「これが、俺が異世界から来たという証拠でもあり、矛盾が矛盾ではなくなる理由です。俺がいる世界では、仮面ライダーというジャンルの特撮映像作品があるんです。」

そこでは、仮面ライダーは、架空の存在であり、サブカルチャーのひとつであり、子供達のヒーローなんです。」

左翔太郎が狼狽しながら、言葉にならない言葉を話そうとしているのに被せるように、俺は、二人に訳を話したのだった。

Dの来訪／蘇る記憶②

鳴海荘吉は、大きなため息をつきながら言う。

「一般人でも、ガイアメモリの危険性を知っている。

その理由がこれか…

この映像作品は、後で見せてもらいたいのが。」

「ちよつと、おやつさん!？」

「翔太郎は黙っている、平行世界のお前達の見させてもらう良い機会だ。

父親として、娘の成長も気になるところだからな。

狭間、お前が異世界から来たというのはわかった。

だが、なぜ俺達にドライバーとメモリを渡す？

この世界と全く関係がないお前は、そのクラインの壺とかいう空間に、ドライバーやメモリは放置したままであれば、関わる必要すらないだろう？

むしろ、先代の仮面ライダーと関わり合いになりたくないのであれば、そちらの方が自然だ。」

「鳴海さん、あなたはもう一つ、勘違いをしています。」

俺は、別段、海藤大樹さんを嫌っているわけでも、仮面ライダーディエンドが嫌いなわけでもないんです。

むしろ、俺は、仮面ライダー作品のファンなんです。

俺は、ディエンドの能力を手に入れたことで、画面の中でしか、見たことがない仮面ライダー達を現実として見られる。

こんなロマンあふれる機会が舞い込で来るなんて夢のようでしかありません。

ですが、それでも俺は何の戦いができるわけでもない一般人なんです。

ですから、仮面ライダー作品に登場した場所、人物達はいても、戦いのない平和な世界に来て、見てまわるだけでも、満足したいと、俺はこの世界に来たんです。」

「え、でも、それなら、何でドライバーとメモリを渡すんだ？」

この事務所に来て見て回るだけで満足なら、渡す必要すらないだろう？

こんな説明までして、何がしたいんだ、あんたは？」

「そうだな。ミュージアムのないこの世界に、仮面ライダーは必要ないだろう。」

俺の熱弁に疑問を感じたのだろう、左翔太郎はそう言い、鳴海荘吉がそれに同意した。

そこでようやく、俺は、この世界に組み込まれている、ある世界の話をする時がきた
と思い、話しを切り出す。

「ここから先は、ある程度、覚悟を持って聞いてもらいたいのですが、『闇の手』または、『ザ・ハンド』という組織を知っていますか？」

「……ここでその名を聞いた？」

むやみやたらに口にしていい名ではないぞ。」

急に声色が低くなった鳴海荘吉が言う。

「この世界に来てすぐです。」

確かにこの世界は、平和なように見えます。

ですが本当に、たとえ仮面ライダーがいなくても、平和な世界なのか、確証を得る為に調査をしました。

そして、確かに、仮面ライダー達の敵といえる組織等は見つかりませんでした、それ以外を見つけてしまったんです。」

「それが、『闇の手』だとかいう組織なのか？」

おやっさん。俺は聞いたことはないぜ。そんなやつら。」

「まだ、半人前のお前に教えるわけがないだろう。」

日本のみならず、世界にまで手を広げる、裏社会をほぼ手中に収めている巨大組織らしいとは、俺もある筋から聞いてはいたが、これでも、そちらの方面には警察に任せて、仕事を制限してきたつもりだったんだがな。」

「裏社会に広がる巨大組織です。あなたが優秀な探偵であればあるほど、いつか関わりを持つことになるでしょう。」

そう、この仮面ライダー達がいらない世界は、仮面ライダー作品の敵組織もない世界だ。しかし、Marvel 世界と合一したこの世界では、かつてはキャプテンアメリカが活躍し、スタークインダストリーという企業が存在し、日本では改造人間並みのニンジャ達が暗躍しているのだ。

俺は、仮面ライダーディエンドの力を手に入れた。

そして、Marvel 作品、アベンジャーズシリーズに仮面ライダー達が出るのをみたいと思った。

しかし、仮面ライダーには、それぞれに敵組織があつて、日本では闇の手とダブルブツキングは、さすがに厳しいだろうと思ひ、俺が持つ仮面ライダー達のアイテムを提供することで、敵組織を一つに限定しようという考えだ。

たとえば、俺が戦うことになつても、召喚した仮面ライダー達に戦ってもらえばいいし、

インフィニティウオーで負けて、俺自身が危なくなったら、元の世界に逃げ込めばいい。そう思っていたからだ。

「闇の手か…まるで、財団Xだな。」

なるほど、だから、あんたは俺達にドライバ―やメモリを渡して、もしも闇の手のやつらが現れても対処できるようにしたかったのか。」

「そうです。そして、これが、探してほしい人たちのリストになります。」

表向き理由に納得した左翔太郎と、何やら考え込んでいるような鳴海荘吉に、リュックサックからクリアファイルを出して、テーブルの上に置く。

鳴海荘吉はそのリストを手にとると、ぺらぺらとめくりながら、内容を見始めた。

「ずいぶんとあるようだな。」

所在地が判明している者もいれば、そうでない者達もいる。

警察官のリストもあるようだ。」

「所在地が判明しているとしても、それは特撮映像作品でそこにいたというだけに過ぎません。」

実際には、そこにいないかもしれないので、確認をお願いしたいのです。

それと、そのリストは平行世界の仮面ライダーの変身者を含む、仮面ライダーに關係が深い関係者達のリストも含まれています。」

平行世界で仮面ライダーだった者達は星のマークで表記していますので。

それと、できる限り、そのリストに書いてある人達との接触は避けていただけると助かります。」

「なぜだ？」

「たとえ平行世界で仮面ライダーだった人達だとしても、こちらの世界では平和な世界で生活している人達です。」

闇の手という脅威があつたとしても、むやみに騒ぎ立てる必要もありませんから。

あなた方と同じように、こちらで接触をはかりたいと思います。

それと、警察官達については、いつかのタイミングでこちらから接触して、協力を求めたいと思っています。」

仮面ライダーの中の、警察官出身の方は、警察組織の技術で作られた者達もいます。

彼らに、こちらが持っている技術を提供して、協力を仰げればと。」

「いろいろと穴だらけの考え方だが、いいだろう。」

依頼を受けさせてもらおう。」

「ありがとうございます。」

こちらに、前金で100万ありますので、お役立てください。

定期的に、そうですね…月に一度は顔を出しますので費用が足りないようでしたら、

その時におつしやつてください。」

「了解した。」

それと、まだ何か頼みごとがあるんじゃないのか？」

俺が、説明をしながら、リュックサックから封筒を取り出して、目の前に置くと、鳴海荘吉が、聞いてきた。

「よくわかりましたね。」

「こちらからしたら、肝心のことが抜けていたからだ。」

このリストには、フィリップのことが書いてなかった。

そして、ミュージアムの本拠地でもある園咲家についてもリストになかった。

そして、机の上に置いてあるのは、ロストドライバーとスカルとジョーカーのメモリだけだ。

肝心のダブルドライバーが無いことを不思議に思うのは当然のことだと思うがな。」

「そうですね。このリストのこととは別に、園咲家とコンタクトがとれるように、アポイントメントをお願いしたい。」

できれば、訪問のさいに、同行をお願いできないかと思っていきました。」

「ふん、そんなことだろうとは思っていた。

いいだろう。それで？お前への連絡はどうすればいい？」

「元々の俺がいた世界でも、やらないといけないことがありますから、できれば一月後にこちらの事務所に出し出すので、その時に進捗をお願いしたいです。」

そうして、正確な日時をカレンダーを見ながら決めて、ノートパソコンと仮面ライダーダブルのDVDをそのまま渡して、その場を終えた。

そして、俺の元の世界に戻ると、急に汗がふきだしはじめ、携帯を見ると、両親からのメールがたくさん入ってきていた。

そして、それから一月後までの俺の行動は、あの世界で活動するための理由づくりに動いていた。

ちよつとした裏技を使って、宝くじの2等を当選させて、両親に報告。

俺は、就職を一旦辞めて、夢だったキャンピングカーを購入して、日本中を旅をして回りたいと話す。

両親には、海外旅行をプレゼントし、キャンピングカーを購入してから準備をして、出発まで一ヶ月近くをかけ、そして適当な山奥で、キャンピングカーごと、クラインの壺の空間に収納した。

これで、クラインの壺の空間に仮拠点を置くことができたし、元の世界では、一月に、一回、税金の支払いの為に姿を現して、適当な場所で写真を撮り、生存報告をしていれば、大丈夫だろうと、あの世界で活動に専念できるようにしたのだった。

SIDE園咲来人

2008年10月 某旅館 男湯

「おお、広い風呂だな！」

「ああ、翔太郎も来たのか。」

今は、貸切状態だよ。」

湯船に入って座っている僕の隣に、かけ湯をした翔太郎が入って来た。

「…ふう。」

しっかし、ずいぶんと大ごとになってきたな。

お前の親父さんが言い出したこととはいえ、大丈夫なのかこれ？」

「正直、僕にもわからないさ。」

今の僕は、地球の本棚に入ることができないからね。

今夜の会食の時になってみないと。

でも、父さんは、全く不安がってはいなかったから、どうにかする手だてがあるんじゃないかな？」

この世界で、翔太郎とはじめて会って、サイクロンメモリを手にした時に、平行世界の自分の記憶を見た。

最初は混乱したけれど、家族の支えもあつて、翔太郎もいたから、平行世界の関係が続いているみたいなものになった。

狭間玄乃と、父さんと母さん、そして、平行世界では亡くなっていた鳴海荘吉が父さんの書斎でずいぶん遅くまで話していたようで、翌朝にはとても眠そうにしていた。

それから気づけば、僕も鳴海探偵事務所に足を運んで、翔太郎と行動を共にしていた。そして、1年程、毎月顔を出す狭間玄乃と打ち合わせなどを行って、この旅館に集まることになった。

僕が、これまでのことに、思いをはせていると、また一人、男湯に入ってきた。

「なんだ、お前達か。」

「照井か、つてお前のその頬どうした!？」

タオルを腰に巻いた照井竜が立っていたがその頬には殴られた跡があった。

「鳴海荘吉に殴られてきた。」

これでも、平行世界とはいえ、娘さんを娶った男だからな。

筋ぐらいいは通すぞ。」

「全く、君も律儀だね。平行世界の君たちの関係を気にしているとは。」

僕達は、浴槽の中であきれていたのだった。

集められた者達

SIDE 五十嵐純平

五十嵐家に婿入りして、長男の一輝、次男の大二、そして長女のさくらが生まれて、妻の幸美、家族5人で幸せに生活していたある日のことだった。

ご両親が営む銭湯の仕事の手伝いを終わらせて帰って来ると、子供達はすでに就寝中で、幸美の手料理を食べながら話を聞いた。

なんでも、俺宛に、贈り主不明の郵便物が送られてきていて、不気味だったから見てもほしいということだった。

夕食を終えて、その郵便物を見ると、確かに贈り主の文字はかすれているのか、薄くなっているのか、よくわからなかったが、俺宛の郵便物であることに間違いなさそうだった。

思い切つて、中身を見てみると、封筒がひとつと何やら布に包まれた物が入っていた。その包みを開き、触れた瞬間だった。

政府軍に人体実験をされて、悪魔のペイルを宿し、戦いに明け暮れる日々、そして逃

亡して、しあわせ湯で名を捨てながら家族と過ごし、ギフを打ち倒していったその光景が脳裏をよぎり、思わず、頭を押さええてうずくまった。

「パパさん? どうしたの!?!」

「大丈夫だ。どうして、こんなところに、『デストリームドライバー』と、『ヘラクレスバ イスタンプ』が…」

ベイルとの決着をつけるためのこれらが、この時代に、今ここにあることが、信じられなかった。

「えくと、封筒の中には、温泉旅館への招待ですって。

ご家族でどうぞって書いてあるわ。」

明らかに怪しいそれらに困惑していると、デストリームドライバーの正面が点滅しはじめ

「…久しぶりだな、純平。」

と声が聞こえた。

「え、しゃべった!?!」

「ベイルなのか?」

それから、幸美と二人で、ベイルの話を聞いて、ある程度の事情を聞いて、封筒の旅

館に行くことにした。

そして、某旅館の指定された部屋で、はしゃぐ子供達の面倒を見ながら、外の景色を見てみると、扉がノックされたので、廊下に出ると、見覚えがありすぎる人物がそこにはいた。

「狩崎、あんたもきていたのか……」

そこには、バイスタンプの第一任者といえる、狩崎真澄が、少年を連れて立っていた。「はじめましてと、言うべきなんだろうか。まさか、私だけでなく、五十嵐家も呼ばれていたとはな。」

「今回は、あんたも被害者だろう。」

ギフがないこの世界でドライバーとバイスタンプが送られてきたんだ。

たとえ平行世界の未来のことでも、バイルが話をしてくれた以上、ここに来ないという選択肢はなかった。」

「バイルが!? そちらに送られてきたのはバイルが宿ったドライバーという訳だったのか。」

…そうか、彼との和解は済んでいるようで何よりだ。

ああ、それと、息子のジョージだ。」

「狩崎ジョージです。

パピーと、はじめましてと言う割には、ずいぶん親しそうだし不思議な雰囲気ですね。」

俺達は、あの世界ではできなかった出会いを果たして家族に二人を紹介した。

S I D E 狭間玄乃

園咲家への訪問した時にも、ずいぶん驚かれたが、事が決まれば、とんとん拍子に物が進んだ。

最初は順を置いて郵便を出すつもりだったが、園咲琉兵衛さんに危険人物の疑いがないければ、いつぺんに送って、一カ所に集めてしまったほうがいいと言われて、作中から判断しながら、郵便を出した。

会場の場所は園咲家が関係のある場所を、スパイ活動を防止するために用意すると言われて、そのままお願いした。

料金はさすがにこちら側で支払うと言ったのだが、それも園咲家から出すと言われたので、初日の1泊分だけ出してもらって、参加者が、それ以上滞在するようであれば、こちらから出すという話で、落ち着いた。

先ほどから、旅館の宴会会場の設営を手伝いながら、従業員と打ち合わせを行っていて、なんとか緊張しすぎない状態を維持出来ていた。

「もうそろそろ、早い人であれば、集まりは始める時間だな。」

俺の近くにいた鳴海荘吉さんがつぶやく。

「でも、よかつたんですか？」

今回のことは、鳴海さんが園咲さんを協力してくれているのは当然ありがたいことな
んですけど。」

「平行世界で、敵だった存在に協力しているのが、おかしく見えるか？」

お前にとつて見れば、協力しているように見えるだろうが、これでも牽制のつもりだ。

何より、記憶を思い出させる為とはいえ、ガイアメモリを渡している。

ミュージアムもなく、ガイアメモリがひとつだけあったとしても、相手は海千山千の上流階級社会を生き抜いてきた男だ。

何をたくらんでいるかもわからんからな。」

「…なるほど。」

組織もないし、園咲琉兵衛さんが技術を持っている訳でもないし、ガイアメモリがひとつだけなら、大丈夫じゃないかなと渡してしまっただけけれど、鳴海荘吉さんは後々のこともちゃんと考えているんだなと感心した。

そして、次々に宴会会場に人たちが入ってくる。

難波重工総合学科技術研究所の葛城忍や、飛電インテリジェンスの飛電是之助に、人類基盤史研究所BOARDの研究員の烏丸啓と橘朔也、二人と一緒に入ってきた剣崎一真。

別の出入り口からは、国会議員の火野映司とその専門弁護士をしている北岡秀一と助手の由良五郎、何やら言い合っている乾巧と園田真理に、それを見ながら何やら複雑そうな顔で紅渡が入ってくる。

警察組はまとまって入ってきたようで、その中には氷川誠や、小沢澄子、加賀美新、照井竜、大門凜子に、泊進之介の姿も見えた。

そのほかにも、姉夫婦の横に座っている沢木哲也や、こけそうになつていた野上良太郎とそれを助ける日高仁志の姿もあれば、幻夢コーポレーションCEOの壇正宗と話をしている、ユグドラシルコーポレーションの呉島貴虎と、周囲を興味深く見回している招待した覚えのない戦極凌馬に、すでに酒を注文して、飲み合っている天空寺龍と自称仙人の男までいた。

今、この瞬間は、感動で胸がいっぱいだった。

思わず、スタッフの待機場所で、高鳴る胸の音を、深呼吸で押さえようと手を胸にあ

てる。

そして、ペットボトルの水を飲み、近くにいたスタッフの人に、園咲琉兵衛さんがきたことを告げられ、開始の合図を送った。

「マイクテスト、マイクテスト。」

皆様、お静かにお願いいたします。

繰り返し返します。皆様、お静かにお願いいたします。

これより、当旅館のオーナー、園咲琉兵衛様より、ご挨拶がございます。」

「ここに集まった紳士淑女の諸君、私が、この旅館のオーナーであり、今回の会合を主催した者の一人でもある、園咲琉兵衛という者だ。

諸君らの元には、差し出し人不明の郵便物が届けられ、困惑している事だろう。

罵倒したい者もいれば、ただ理由を知りたがっているだけの者もいることだろう。

だが、それは、少々待つてほしい。

これから諸君らには、観てもらいたい映像がある。

これを観て、そして、それぞれの考えをまとめた後に、質問等を受け付ける事になるだろう。」

園咲さんが会場に設けられた上座の舞台の中心で、そう言うと、舞台の天井からホワイトスクリーンが降りてきて、さらに、宴会会場の天井からプロジェクターが現れて、会場がざわつきながらも会場がうす暗くなっていく。

園咲さんが舞台の中心から、舞台袖に移動すると、プロジェクターが作動して、1本の映画が上映され始めた。

それは、今回の上映用に、東映の文字と、スタッフロールの文字を消し、最後に少々細工をした

『平成仮面ライダー20作記念 仮面ライダー平成ジェネレーションズ FOREVER』

を上映しはじめたのだ。

クウガの人形を横に置いた赤ん坊の写真から始まり、仮面ライダーの玩具を持った少年の写真が連続して数枚映って2018年の文字が現れる。

会場からは、小さな声で驚いた声が複数聞こえてくるが、上映の妨げになるようでもないようだった。

この上映のことは、あらかじめ園咲さんと鳴海さんには話をしていたが、内容までは

言っただけではいかなかった。

この作品上映を見て、この場に集められた人達は、さまざまなことを考えるだろう。拡大解釈をする者もいるかもしれない。

だが、この世界からしてみれば、全くあり得ない話でもないのだ。

実際、仮面ライダージオウに仮面ライダーの力が継承されると、仮面ライダーの歴史そのものが失われていく。

よって、この世界の現状は、『仮面ライダージオウに全ライダーの力が継承された結果の世界』の、可能性もあるからだ。

実際には、確認は行っただけではない。

むしろできないと言ったほうがいいだろう。

先代のディエンドが若い姿で、そこにいるかもしれない。

一度狙われれば、どうなるかわからないからだ。

もしかしたら、あちらの海東大樹の方のディエンドに力が集約されて、俺はただの一般人に戻り、元の世界に帰れなくなるかもしれないからだ。

だから、俺の世界はこの世界からしたら未来でも、この世界の現在の時間軸からは、移動しないと決めているのだ。

映像で、シンゴと名乗る少年の口からクウガの名前が出たことに、五代雄介の驚愕の

顔が舞台袖の俺から見てとれた。

バスの中で、アタルという高校生の口からキバの音也の名前がで、紅渡が目を見開くのが見えるし、アタルの足元に砂がこぼれ落ちていくことに、野上良太郎が挙動不審になり出していった。

そして、アタルの家の中にある玩具の数々に、会場がざわつき始め、

『仮面ライダーは、現実の存在じゃない。』

虚構の産物だ。』

『夢みたいなものなんだよ、覚めれば元の現実が待つてる。』

『現実じゃあ、ライダーは何もしてくれない。』

とそういう言葉に、何人かの顔が、悔しそうな顔をしているようだった。

そして、雨の中、桐生戦兎と、常磐ソウゴの会話内容に、会場の何人かの顔がはっと、何か納得したような顔つきをする。

元の世界から、アタルがいた世界に戻る時に、常磐ソウゴが通ってきた螺旋状に連なった地球、あれこそが平行世界の移動であり、あの中に俺の元の世界も、この今俺がいる世界もあるかもしれないのだ。

集められた者達②

『平成仮面ライダー20作記念 仮面ライダー平成ジェネレーションズ FOREVER』
R

この作品は、まさに、この世界と俺の元の世界をわかりやすく説明するのに最も、うってつけといえる。

ティードが介入しなければ、アタルがいる世界が、俺がいた元世界のように、タイムジャッカーも、イマジンもない世界だったかもしれない。

そして、海東大樹が介入したのが俺ではなかったとしたら、俺の世界にもアタルの世界のような影響が出ていたかもしれないと思うこともある。

最終的に、この世界に影響を与える俺も、オーマジオウに倒される運命にあるのかもしれない。

しかし、『闇の手』によって日本が蹂躪されるかもしれないこの世界には、やっぱり仮面ライダーは必要だと、改めて、強く思った。

上映映像を見ている会場の人達は、九郎ヶ岳遺跡でティードが話す内容と、焚き火を

しながら、イマジンのフータロスが話す言葉に、考えを巡らせているみたいで、特に警察組の小声で話合う声がちらほらと聞こえていた。

時の空間のターミナルに現れたタロスズに、小さく、野上良太郎の涙声がして、映像に映った姿に、周囲の人達は映像と、野上良太郎を何度も往復して見ていたし、モモタロスの声については、下を見てしまったのに対して、隣にいた日高仁志に頭を撫でられていた。

そして、ざわめきが、だんだんと歓声に変わっていき、最終局面にもなると、どこか、それぞれが納得したようだった。

うす暗くなっていた正面が明るくなり、スクリーンが天井へと上がっていく。

そして、今度は、俺が、震えそうになる体を深呼吸しながら押さえつけて、舞台の中央から向かって行く。

「みさなん、はじめまして。

俺の名前は、狭間玄乃といいます。

ここに、この場所でみなさんの姿を見られただけでも、感動で、声が震えてしまいません。

俺は、この世界とは別の世界、仮面ライダーが現実には存在せず、特撮映像作品として存在する世界からきました。

そう、先ほどみなさんに観てもらった映画を提供したのも、自分です。

そして、みなさんに仮面ライダーとしてのアイテムを郵送して、記憶を呼び覚まそうとしたのも、大元は、俺なんです。

まだ、先ほどの映像を見て、いろいろと考えを巡らせている方もいらつしやるでしょうし、俺にいろいろと話を聞きたいという方もいらつしやると思います。

なので、このままご歓談とお食事を楽しみながら、お話をさせていただきたいと思いません。

本日は、この場所に集まっていたいただいて、本当にありがとうございます。」

そして、そのまま、乾杯の音頭をすると、舞台から降りて、会場に足を進めた。

：以外な程、否定的な意見は、無かった。

関係者や仮面ライダー同士で話が盛り上がったたり、しみじみとした会話があったり、鳴海荘吉さんや左翔太郎君にも、少しの文句を言われただけで、むしろ反対に感謝されてしまった。

仮面ライダーとして、胸が熱くなった。という声があつて、俺もうれしくなった。

そして、その日はそのまま夜遅くまで、歓談はつづき、翌朝の朝食後の時間帯に、もう一度、集まってもらおうようにとスタッフにお願いをしてもらった。

宴会会場にみんなが集まると、俺は、舞台上上がって話を始めた。

「昨夜の映像はとても衝撃的なものだったと思います。」

ここにおられるみなさんは、仮面ライダーとして、また仮面ライダー達の関係者としてこの場所におられると思います。

昨夜の話合いの折、警察の方々からのお話で、我々のこの集まりを組織として運営していきたいということになりました。

確かに、この世界には、怪人はおらず、みなさんの記憶の中にあつた悪質な組織も見受けられていません。

しかし、それでも、この世界の日本には、巨大な秘密組織が存在して、裏社会を覆い尽くして、策略と、暴力と、支配をもくろむ連中がいるというのは確かな事実です。

どうか、この仮面ライダー同士の組織、まだ名前は検討中ですが、仮面ライダーがいるこの世界で、人類の自由のために少しでも、ご協力をお願いいたします。」

そして、警察組の話が始まり、次の会合を警察組織から通達するという連絡もあつて、この会合は終了したのである。

そして、2009年4月、東京のとある施設で、何度目かの話し合いがあり、そこに、鳴海荘吉さんと一緒におもむいていた。

「今回は、ボディーガードの件、ありがとうございます。」

最近は、ネットで都市伝説化してきている関係上、闇の手の連中に関係者が襲われることも増えてきましたので、助かりました。」

「お前はライダーを継いだとはいえ、アドバイザーや、クライアントに近い立ち位置だからな。」

いくら戦闘訓練を積んでいるとはいえ、その他の業務が多いお前に何かあっても困る。

それに、そろそろ翔太郎に仕事を任せてもいい頃合だ。

来人も馴染んできたころだ。娘が事務所に就職するまでには、俺の手を借りないぐらゐの事が出来るようにならないといけないだろう。

俺も、やつらの末端ではあるがニンジャ共と戦闘をする時間を捻出しなければいけないだろう、という理由もある。」

そう、ついに、この世界の日本では、仮面ライダーをネット間の都市伝説に近い立ち位置ではあるが、日本のヒーローとして認識されはじめていた。

昭和世代に仮面ライダーを制作した制作陣と、原作者が全面協力してくれた事で、組織名も決まったし、仮面ライダー達は日々進化を遂げながら、日夜闇の手との戦闘を行っている。

そして、表面的なダミー組織としての特撮映像会社に入り、地下行きのエレベーターに乗り込む。

そして目的の階層につくと、IDカードとデイスライバーを正面のケースに置いて、スキャンさせると、扉が開いた。

それらを回収後、鳴海荘吉さんもIDカードとロストドライバーとスカルメモリをスキャンさせて入ってくると、そこは、我々の組織名が中心に書かれた円卓テーブルの部屋になっていた。

その組織名には、『SPIRITS』と、書かれたプレートが立っている。

元ネタは、もちろん仮面ライダーSPIRITSからだ。この世界の昭和仮面ライダー作品にも登場した組織名を、場所の提供を条件に制作陣が認めさせたという経緯がある。

さて、その日本のヒーロー本部とも言えるSPIRITSだが、今回の議題内容は、『技術力の昇華』である。

この円卓のうちの一つに俺が座り、鳴海荘吉さんは、本部内にあるトレーニングエリアに向かって行った。

そして、俺の後から、一人の人物が入ってきた。

「あら？ 私が最後だったのね。」

「いえ、俺も今きたところですから。」

大量の資料を抱えた女性、鬼関係の開発実験試作室室長『滝澤みどり』さんに向かって声をかけた。

「では、会議を始める。」

と、今回の議長になった人類基盤史研究所BOARDの『烏丸啓』さんが言う。

この会議に集まった人たちは、仮面ライダーファンからすれば、一度は見てみたい光景だろう。なにせ、上記の二人に加えて

仮面ライダーアギトの世界では、未確認生命体対策班の実働部隊G3運用チーム、通称《G3ユニット》の主任だった『小沢澄子』さん。

今は、警察の技術関係の実質のトップである。

その他にも、スマートブレイン技術開発部の『花形康治』さん。

原作では名字しか出てなかったけれど、偶然ではあるが、役者さんと同じ名前だったのには、驚いた。

嶋財団会長の『嶋護』さんと、園咲琉兵衛さんの奥さんの『園咲文音』さんが、何やら俺の方にアイコンタクトを贈ってくる。

俺の隣に座っている、幻夢コーポレーションの若きプログラマーの『壇黎斗』が、話を聞かずに、一心不乱にパソコンに向かって、キーボードを叩いている。

反対側の隣にいる葛城忍さんからも、視線がきているが、作中の人物像を知っている俺は、我関せずを貫いていた。

さらに言えば、壇黎斗の隣にいる戦極凌馬が、興味深そうにパソコンをのぞきこんでいたので、どうしようもないと思っていたこともある。

「話を聞かないならばそのままでもいいが、後でとやかく言わないように。」

小沢君、始めてくれ。」

「はあ、わかったわ。」

まず、量産体制を整えたG3システムの全国配備が始まったわ。

スペックとしては、既存のG3システムの6割といったところね。

装着システムをスマートブレインからの技術提供で簡素化できたことで、半年足らずのスピードで進められたわ。

ただし、技術流出を防ぐためのセキュリティを、その無視してる子が担当したのは不安材料なのが、正直なところね。」

「無視してなど、いなーい!!」

時間は、有限だからこそ、時間を無駄にしないやり方で、参加しているだけだあ!」
「さすがは若き精鋭プログラマー、一つのミスもなくプログラムを組んでいるみたいだね。」

先ほどのぞきこんで見ていたけれど、感心しているよ。」

「戦極君も、何か報告することは無いかい?」

「私としては、オブサーバー扱いの狭間玄乃は、この場所に必要ないと思っっているがどうだろうか?」

ああ、また明後日の方向に会議内容が向くのかと頭を抱えはじめるのだった。

青春爆誕

side 如月弦太郎

「リムジンの中ってこうなってたんだなー。」

「ちよつと弦ちゃん落ちついて。」

目の前に有名な議員さんがいるから、ちゃんと話を聞こうよ！」

天ノ川学園高等学校に転入してから数日、放課後に、学園の全員とダチになるために奔走していると、幼なじみの城島ユウキが俺を探し回っていたらしく、何かと聞いて見ると、学園の外に突然黒いリムジンが止まって、そこから現れた人物が、俺を呼んでいるらしかった。

さつそくユウキを連れてその場に行くと、リムジンから降りてきたのは、テレビでも見たことがある国会議員の人で、何でも俺に話があるようで、ユウキ共々、リムジンに乗せられてしまった。

「んで、俺に何かあんのか？」

対面座席に座っているその議員さんに、リーゼントを整えながら聞くと

「ははは。(…はじめましてになるんだけど、本人を目の前にすると、逆に懐かしくなるのはあの映像を見た影響かなあ。まあいいや。)

まずは自己紹介。俺の名前は、火野映司。

まあ、君たちからみれば、テレビの中で見たことぐらいはあると思う。

君たちは、如月弦太郎君と、城島ユウキさんだね?」

「おう。俺たちを知ってるのか?」

まあ、俺を探しているぐらいだから、知っていてもおかしくないだろうけどよ。俺たちはあんたとは面識はないはずだぜ。」

「ちよつと弦ちゃん、言い方!」

俺を注意しながら、火野と名乗った議員に頭を下げているユウキを手で制しながら、俺たちに赤いリボン付きの箱に取り出すと、目の前に差し出された。

そこには、なにやら、ゴテゴテしい機械と、変わった形をしたスイッチらしきものが入っていて、戸惑いながら、その手を伸ばして、その機械に触れると、急に脳裏にいくつもの映像や記憶が見えた。

「今のは…フォーゼドライバー?」

えっと、火野先輩だよな?」

「思い出したみたいだね。記憶が戻って戸惑いもあるだろうけど、そのドライバーは君

の物だから、好きに使ってほしい。」

隣に座っているユウキも、箱の中に入っていた、アストロスイッチに触ったことで、未
来の記憶？らしき、俺が仮面ライダーフォーゼとして戦ってきたことを思い出して
いた。

「えっと、天ノ川学園には、賢吾君はいないし、ライダー部も、ラビットハッチだつてな
いはずなのに。」

「いろいろ混乱しているだろうけど、今見えた記憶は、別の世界の君たちが経験してきた
ことで、本来なら平和な日本では必要のないことなんだけど、でも、君たちの力を貸し
てほしいんだ。」

正直、別の世界の記憶とか言われてもよくわからないけれど、仮面ライダーフォーゼ
が必要ならいつでも力になると考えていると

「…火野。」

「後藤さん？どうしました？」

「さつきからつけてきている車がある。どうする？」

「もしかしたら、『闇の手』かもしれないから、人通りが少ない道をお願いします。

…さつきそく、弦太郎君の力を借りるかもしれない。」

「気にする必要はないぜ。」

ダチの頼みを聞くのに、理由はいらなからな！」

運転席にいた男と先輩が話す会話を聞くと、思わず声を出していた。

「弦ちゃん!？」

「心配しなくても大丈夫だぜユウキ。」

「なんたつて俺は、仮面ライダーフォーゼだからな。」

「頼もしいね。ありがとう。頼りにしているよ。」

リムジンが人通りが少ない海岸線を走っていると、急にリムジンが止まった。

リムジンから降りると、道をふさぐように車が止められていて、その車からは、まるでダスタードみたいな服装の連中がわらわらと姿を現し、後ろからも車が止まって、同様にそんな連中が出てきた。

そして、派手なスーツを着た男がその中から姿を表して声を荒げた。

「お前さんが、俺たちを邪魔している連中を支援しているという議員さんか。」

おとなしく連れて行きたいところだけどな、お前さんは事故死に見せかけて死んでもらわなきゃならなくなった。

おい！お前ら、あの議員さんはきれいな死体で殺せ。

女は、俺がもらうから傷つけるんじゃねえぞ！

後は、好きにしな。」

そういうと、その男は、黒装束の連中で見えなくなっていく。

「後藤さん、城島さんをお願いします。」

「わかった。あと、本部に連絡を入れておく。」

「お願いします。…弦太朗君、いいかい？」

「おつしやつ！よくわかんねえけど、あいつらが、敵だつていうのはわかった。」

こつちでの初変身、きめていくぜ。」

俺は、ラッピングされた箱を捨てて、中に入っていたフォーゼドライバーを腰に当てると、自動でベルトがまかれる。

まるで体に刻み込まれたような、記憶の通りに、4つのトランススイッチを右から順に押していくき、

左手を心臓の前に、誓いを込めるように手をおく。

THREE

TWO

ONE

「変身！」

勢いをつけて、エンターレバーを倒す。

すると右手を宙の何かをつかむように腕を振り上げると、頭上にゲートが出現し、そこから神秘の宇宙エネルギー・コズミックエナジーが降り注いで、スーツを物質化することにより変身が完了した。

「宇宙…キター！仮面ライダーフォーゼ、まとめてタイマン張らせてもらうぜ。」

と、思わず叫び、両腕を振り上げて大の字になって、黒装束の連中に右拳を突きつけた。

side 後藤慎太郎

「宇宙キター！」

「うお!? 君も言うのか。」

隣で、どこことなく緊張感のない女子高生を尻目に、変身した少年の隣で、今度は火野がオーズドライバーを腰に当てているのが見えた。

「変身！」

TAKA

TORA

BATTA

TA、TO、BA、TATOB A、TA、TO、BA

相変わらずよくわからない歌が流れながら、火野がオーズに変身すると、フォーゼと並び立って、闇の手の連中と戦闘になった。

俺も、座席から取り出したバースバスターを構えて、非戦闘員を守るような動きをしていく。

「…先ほどの男は捕えたいが、今までのような足切りだと、きりがない。

だが連中の情報はあんなチンピラでも、少しずつでも聞き出したいが…」

リムジンを盾に、非戦闘員を守りつつ、ニンジャ共にセルメダルから発生された弾丸を発射しながら、思考の一部は、警察官として生活していた時を思い出していた。

事の起こりは、とある会議に呼び出された時だった。

わざわざそれぞれの席にネームプレートが貼り出してあり、その座席には段ボール箱がおいてあった。

参加者は俺を含めて数人で、中にはネームプレートのない席に座っている者もいた。

会議が始まると、段ボール箱を開けて中のものを手に取るように指示され、中に入っていたゴテゴテしい物と数枚のメダルに触れて見ると、自分が、仮面ライダーバースとして戦っていた記憶が見えた。

混乱の最中に、目の前にはスクリーンが現れて、ビデオカメラで撮影されたらしき映像が、再生された。

仮面ライダーが虚構として存在する世界と、仮面ライダーが存在する世界による、今までの自分からこれからの自分を考えさせられた映像だった。

そして、そのまま流されるようにSPIRITSに所属することになり、火野の運転手兼ボディガードとして派遣され、鴻上ファウンデーションから提供される装備品を

使って、闇の手の連中との攻防と情報収集の日々だ。

財団X並の技術力と戦闘力、その底の知れなさに、不安になりながらも、グリードが発生していないだけでしたと、思いを改める。

ふと、周囲を見渡すと、ニンジャ共が証拠を残すまいと、自爆特攻をしながら先ほどの男を逃がし、落胆しながら変身を解除する火野たちに合流するのだった。

side 狭間玄乃

2011年を迎え、SPIRITSのメンバーとして忙しく活動しながら、この2年で、俺は戸籍を得て、銀行口座を開設し、多方面との調整役や仮面ライダー関係のアドバイザーとして活動していた。

あの会合から大きく動いた事柄がいくつかある。

まずは、カマー・タージのエンシエント・ワンが接触してきたことだ。

カマー・タージの主にして、至高の魔術師“ソーサラー・スプリーム”の称号を持つ、年齢不詳の女性の魔術師である。

作中では、その魔力は魔術師の中でも最強を誇り、弟子たちを圧倒する程の実力を持

っ。

しかし弟子たちには重大な秘密を隠している。とされている人物である。なんでも、最近になってミラーデイメンション内を行き来できる見覚えのない者たちが現れているため、接触してきたとのことだった。

まず間違いなく、龍騎系の仮面ライダーたちのことだろう。

実際に報告されたのは、城戸さんと秋山さんがミラーワールドから移動してきた時だったらしく、直接俺に連絡がきた。

そして、会いに行くと

「私が出会った仮面ライダーと名乗った☒達は善性の存在のようですね。

しかし、あなたは悪性の存在を正しく認識している。

そして、私の存在も私がこれからどうなるのか知っているのですから、あなたの存在が、ステイブンと同じように、これからの歴史の鍵となるということがわかりました。

これから、日本に関係している時はあなたに話をしに行くことにしましょう。」
と、一方的にまくし立てられて、ゲートウェイでいなくなってしまった。

それから、たまに魔術関係の資料を融通させてもらいながら、ウオンやモルドから相談をされることになったのである。

これまでの経緯

side 狭間玄乃

俺の考えや、存在そのものをエンシエント・ワンはわかっているということだろう。

俺は周囲に仮面ライダーのことを伝えてはいるがMCUのことだけは誰にも話したことはない。

嘘は通じないが、情報は時に強烈な毒になり得ることがわかっているから必要な相談の時だけ、必要な情報がほしいという解釈を俺はしていた。

実際、ウォンに俺のことをどう思うか聞いてみたが

「偉大なるソーサラスプリームの考えをどうこう思うことはない。

あの方が、お前を相談相手にふさわしいと判断されたのだ。

私はその考えに賛同しているからこそ、お前を相談相手に選んでいるだけに過ぎない。」

そう言われ、余計なことをいうこともないだろうと、別の話題に切り替えた。

そして、日本での出来事に、闇の手の連中が魔術関係の方向に手を伸ばしていること

がわかった。

ことの起こりは、仮面ライダーウィザードの作中の黒幕であり、多方面に精通した有名な物理学者で、医学・科学・物理学の知識を以て科学と魔法の融合に成功、その技術を手中に収めた天才といわれていた『笛木奏』をSPIRITSに勧誘しようとしていたところだった。

たとえ記憶を取り戻したとしても、妻も娘も健在で作中の目的そのものがないのであれば協力してもらえないのではないかと、ワイズマンリングを送つたら、いつの間にか、両親が健在な操真晴人を探しだし、娘の婚約者として迎え入れていたというミラクルな事態になっていた。

それだけならば、奇跡のカップリングだと密かに期待していたが、記憶を取り戻した笛木奏は、作中の研究を資料にまとめていたらしく、その資料を狙って、闇の手の連中は、妻と娘、操真家を人質に資料を要求するという事態になったようだ。

幸い、救出作戦に同行した加賀美新／ガタック、照井竜／アクセル、須藤雅史／シザーズらや、G3部隊の活躍により、笛木一家と操真家のご両親を取り戻すことができたが、操真晴人は連れ去られてしまった。

それを期に、笛木奏はSPIRITSに全面協力を申し出て、操真晴人の行方を追っている、どうやら同時期に複数人の行方不明者が出ているらしい。

笛木奏いわく、近日発生する日食を利用して、無理矢理『サバト』を行い、仮面ライダーに対抗する戦力を確保したいらしいという話を聞かされたという。

即座にSPIRITSは部隊を編成して、救出作戦を練り、各地にいる仮面ライダーたちに捜査依頼を出した。

そして俺は、カマー・タージに連絡を入れた。

そして、笛木奏が、作中で行った方法でファントムが生まれるかどうかをウオンに問うた。

「結論から言えば、十分に可能だ。

魔術の知識もなく、よくここまでの大魔術を準備できたのだと感心するが、これは闇の魔術の部類に属している。

止めなければならぬが、これは発動しなければ、私でも感知することはできない仕組みになっているようだ。」

「…そんな、本来生まれるはずがなかったファントムが生まれるというのか。

いや、これは、仮面ライダーたちを生み出した事で発生した歪みが大きくなっただけに過ぎない。

…俺の責任か。

場所がわかり次第、ゲートウェイでつなぐことは可能か？」

「十分可能だ。現代の科学技術で、正確な日食の発生時刻を割り出せ。

その時刻に、お前がいる場所に向かおう。」

そして、その時刻になって、ウオンがゲートウェイで現れて、そこからさらにゲートウェイが開いた。

その先は、どこか木々が生い茂った廃ビルの屋上のように、地面には赤い光が走っていて、そこにいた一般人らしき人々の体に紫色の罅が入りはじめていた。

「一般人の救出を最優先！」

闇の手の連中は仮面ライダーたちに任せるんだ。行くぞ！」

さすがに、俺も今回は作戦に参加した。

「変身！」

DI:::END!

俺を含め、スカウトに成功したフォーゼや、同行したオーズ、バースに、作戦に参加したギャレンと、ブレイド、そしてG3部隊と、それを率いる警察組の仮面ライダーたちが、闇の手の連中を押さえ、ゲートウェイを通じて、一般人の救出を行っていく。

しかし、フアントムとなって逃走する区達もいて、場所は混戦状態になっていった。そして、救出の完了の連絡が入り、ゲートウェイをくぐって、戻ってくると、体に紫色の罅が入りはじめていた一般人のほとんどが罅がなくなっていく、元に戻っていく。しかし

「晴人君！ 気をしっかり持って、あなたの中のフアントムに抗うのよ！」

あなたは希望なんだから！」

「俺が…希望…」

大門凜子の叫びに近い声に、操真晴人の背中に生えた翼を自らの気力で押さえこんでいくのが見えた。

「そうだ、諦めるな！」

自分の中にある力を制御するんだ！」

と、戻ってきたライダーたちが声をかけていき、ついには、罅を自ら押さえこんでしまった。

俺は、オーロラからウイザードリングが入った箱を取り出すと、操真晴人の前におく。俺が声をかける間もなく、彼は、その指輪を掴み、そして、弱々しいながらも声が出た。

「凜子ちゃん。俺、魔法使いになっちゃったみたいだ。」

そう、操真晴人は、この世界で、天然に生まれた最初の仮面ライダーになってしまったのである。

それから、両親たちとの感動の再会、笛木奏に必死に謝られながら、ウオンは操真晴人についていき、ご家族と話し合いが、行われた。

仮面ライダーウィザードとしてのツール一式は俺が用意できるが、操真晴人自身の魔力の操作ができておらず、ウオンがカマー・タージで修行をつけておきたいという。

「ご家族に了解は得られたのか？」

「定期的に顔を見せる必要があるがな。」

それに、奥さんのうまい飯を食べさせてくれるそうだからな。」

それが目当てじゃなかるうかとも思いながらも、ゲートウェイを開いて、彼らは姿を消したのであった。

それだけが、これまでに起こった事ではない。

闇の手と戦う他の国からきた人物、『ダニー・ランド』が現れたのだ。

そう、闇の手の最高幹部が狙う、『アイアンフィスト』である。

のちのニューヨークで闇の手を壊滅に導く人物の一人で、同じ闇の手と戦うSPIRITSに感銘を受けて、SPIRITSでは、彼個人に支援をすることが決まり、ダニー・ランドは海外で闇の手の連中の情報をSPIRITSに提供する、ということになった。

それを期に、海外からSPIRITSに接触してきた勢力が増えたのである。

そう、戦略国土調停補強配備局、通称『SHIELD』だ。

しかも接触してきたのは、SHIELD長官のニック・フューリー直々なのである。

俺は、アドバイザー兼オブザーバーとして、本郷猛似のSPIRITSの実質トップである警視総監と話し合いをする二人の近くにいた。

感動や緊張やらで足が震えてきたが、必死に我慢すると、にこやかに握手をしだして、どうやら俺の必要性はなさそうだと、ほっとしていると

「今後の我々、仮面ライダー互助組織のSPIRITSとあなた方SHIELDの調整役の狭間君だ。」

「ほう。ならば、そうさせてもらおう。」

と、俺が呼ばれて、いつの間にか仮面ライダー達の調整役だけではなく、SHIELDとの調整役まですることになってしまったのである。

そして、世界各地いや、この場合はアメリカから寄せられる様々な情報。

ニューヨークのハーレムで緑色の大男『ハルク』が暴れた事

スタークエキスポで、『アイアンマン』とロボット軍隊との戦闘が起こった事

ニューメキシコ州に現れた巨人が、ハンマーを持った男、おそらく『ソー』と戦闘になった事

NASAの研究施設が、地盤沈下により壊滅したこと

これにより、SHIELDがSPIRITSに支援を求めた。

俺は、この時のために俺の権限で、五代雄介さんにアメリカに行くようをお願いした。

しかし、空路ではなく、ビートチエイサーと、金属吸収済みのゴウラムと一緒に輸送するため、海路での手配をした。

自分の分の船旅のチケットを含めて。

そして、アメリカに海外出張中のある人物に連絡を入れるのであった。

アベンジャーズ編

始動

side 五代雄介

「それが、今回の相手のようです。」

今では顔馴染みである俺にベルトを送ってきた人物の狭間玄乃さんが、俺に手渡した紙を指しながら言う。

あの映像を見て、再びベルトをつける決心をしてもうそろそろ4年目になろうとしている頃、グロンギとの戦いとは違い、たくさんの仲間がいることも要因にあるだろうけれど、聖なる泉はいまだに保たれていて、少しずつ少量の電気を長い期間をかけて取り込んだことで、金のクウガになった時の副作用もなく、ベルトの侵食も現代の医療が進んでいる事で、あまり深刻な状態にならずにすんでいた。

心配をしてくれる一条さんに現状を説明しながらも、今回のアメリカ遠征に同意したのは、半年ほど前の集団誘拐事件の救出作戦に参加できなかった悔しい思いもあったからだ。

目の前の人物も救出作戦に参加して、ライダーに変身して闇の手の連中と戦ったそう
だ。

いままで、どことなくこの人には無責任な人に見えていたけれど、自分の考えを改める
必要がありそうだと思った。

それに、これまでの旅で、英語は問題なく話せるし、クウガとしての戦闘力も期待さ
れているのだろうとも思った。

目の前の資料には、大きな角が特徴の兜をかぶった光る杖を持った男の写真がうつつ
ていた。

「ロキ…ですか？」

まるで、北欧神話の神様みたいな名前ですね。」

「みたいではなく、彼らの事をモデルにして北欧神話が語られているようです。

つまりは、自分たちを神と自称するほどの力を持った存在で、とんでもなく寿命の長
い種族のようですね。

ついでにいえば、異星人です。」

「つまり、宇宙人って事ですか…」

宇宙人とは戦った事はないので、通用するのかが気になるところですね。」

資料に夢中になっていると、狭間さんの携帯に、連絡が入り、着いたという知らせを受けた。

「着いたって、まだ海の上ですよ？」

「まあ、外に出ればわかりますよ。」

そう言われて、外に出てみると、見上げるほどに大きな建物が海に浮いていた。

「コンテナの移送を始めてくれ。」

『了解』

狭間さんと、その戦艦みたいな建造物は、通信のやりとりをしているらしく、自分が乗ってきた船から直線コンテナを移送し始めていた。

「さて、俺達も乗り込みましょう。」

「え？でもどうやって？」

激しい波に、乗り移るのは難しそうだと思っていると、一機の気球についているような籠がついた小型飛行機が近づいてきたのが見えて、まさかあれに乗り込むのかと、困惑していると、

「ある意味、VIP待遇ですからね。」

いきましようか。」

と、そのまま籠の中に彼が入るのを確認すると、自分もその中に入る。

すると、籠のワイヤーが巻き取られて籠の部分が飛行機の胴体に合体して、飛行機になると、そのまま例の建造物に近づいていった。

上から見ると、空母をとてつもなく大きくしたような戦艦のように見えて、思わず身震いしていた。

「すごいでしょう！これでもアメリカの1組織が作り出した物らしく、名前を『ヘリキヤリア』というそうです。しかも、船のように見えますけど、別の機能をもつトンデモ建造物で、まさにアメリカの象徴みたいな部分がありありと見えますね。」

「ヘリキヤリア……ヘリ？まさかあれが空を飛ぶのか!？」

仮面ライダーもびっくりのトンデモ建造物ですね。」

そのまま飛行機は、甲板に着陸すると、俺たちを下ろして、機体を甲板に固定し始めていった。

「甲板に描かれたマークを見ましたか？あれがSHIELDの象徴のようですが、我々仮面ライダーから見ると、まるでショッカーのマークに酷似しているように見えます。」

狙っているとは思えませんが、皮肉が効いてますね。」

「あら？ずいぶん言いぐさね。」

「エージェントロマノフ!？」

狭間さんの言葉に一瞬うなずきかけたけれど、すぐに聞こえた女性の声に振り返って見ると、狼狽する狭間さんをにらむように立っているスタイルのいい赤毛の綺麗な女性が立っていた。

「あなたは?…」

「私はSHIELDのエージェントのナターシャ・ロマノフよ。」

あなたは、その相変わらず一言多い失礼な男とは違うようね。

話には聞いているわ。SPIRITSのお二方。

ミスターハザマと。」

「五代雄介です。ユウスケと呼んでください。」

「ユウスケね、私もナターシャでかまわないわ。」

ようこそ。日本が誇るスーパーヒーローさん。アメリカへ。」

自信にあふれているようなはつらつとした雰囲気のある女性でありながら、まるで引き込まれそうな妖艶さがにじみ出ていた。

「事態はどうなってますか?」

「そろそろ、捜査を始めるそうよ。」

それに、そろそろアメリカが誇るスーパーヒーローも到着予定なだけけれど……ああ来たわね。」

狭間さんの言葉に答えるナターシャさんは、甲板に降りた翼に付いたエンジンが特徴的な飛行機が降りたった方向を向いて言うと、その飛行機に向けて歩き出し、俺たちもそれについていった。

飛行機後方が、開いて、二人の男性が出てくるのが見えた。

「エージェント・ロマンノフだ。」

それと、日本の協力組織、SPIRITSのミスターハザマと、ゴダイ・ユウスケだな。」

サングラスをかけたスーツ姿の男性がチェック柄のシャツに、ジャケットをはおったがっしりとした体型の男性に俺たちを紹介するように話していて、そのがっしりとしたほうの男性に握手を求められた。

「五代雄介です。ユウスケと呼んでください。」

「よろしく、ユウスケ。僕はステイブ・ロジャースだ。」

僕のことステイブと呼んでくれてかまわない。

君たちのことは資料で読んだよ。」

力強さを感じさせる握手を交わしながら、一条さんにも似たカリスマ性が見てとれる男性のように見えた。

「そろそろ、捜査を始めるそうよ。」

「そうか、ミスターハザマも同行をお願いしたい。」

「わかりました。五代さん、作戦行動中は、彼らのチームのメンバーとして行動してもらうことになりましたので。」

では、のちほど。」

そう言って、黒いスーツ姿の男性と狭間さんは一緒に行ってしまう。

ステイブさんと、ナターシャさんは、会話をしながら歩き出したので、自分もついて行くと、ステイブさんは『キャプテンアメリカ』という資料で読んだヒーローということがわかった。

そして、グレーのスーツ姿に眼鏡をかけた男性に話かけていた。

この男性は、今回の最重要捜索物の『四次元キューブ』という物体を探すために呼ばれたバナー博士という人物だそうで、俺も自己紹介をすると、どこか含みを持たせた言い方をする男性で、俺の反応が思わしくなかったのか

「もしかして、聞いていないのかい？」

僕が緑色の大男に変身できる存在だっただけのこと。」

「たしか『ハルク』でしたね。ということとは、あなたがブルース・バナード博士でしたか。あなたのことは、資料で読みましたけれど、大丈夫ですよ。

われわれSPIRITSのメンバーにも、暴走形態がある力を持つている☒も複数いますので。」

「そういう次元の話をしているんじゃないんだけどね。」

「甲板で話し込むのもいいけれど、そろそろ中に入ったほうがいいわよ。

呼吸がつかなくなるだろうから。」

そうナターシャさんは言うと、周囲があわただしくなっていく。

「これは潜水艦か？」

「なるほど、僕を金属コンテナに入れて海に沈めようって？」

そして、どんどんと空に舞い上がって行く

「ユウスケはあんまり驚いてないみたいね。」

「俺は、ここに来るまでに教えてもらいましたから。」

「潜水艦のほうはまだ良かったです。」

バナード博士の愚痴を聴きながら、俺達は船内に入っていた。

ナターシャさんの先頭で船内を進むと、オペレータールームか、艦橋のような場所には、あわただしく人が行き交い、言葉を交わしている。

バナー博士が、なにやら捜査の手助けをしようと難しい話をしていたようだったが、ナターシャさんにつれられて、ラボという場所に行つてしまう。

すると、眼帯をしたいかつい雰囲気の男性、長官と呼ばれている人が握手を求めて来たので答える。

「歓迎しよう仮面ライダー。ゴダイという名前だったな。」

「ユウスケでかまいませんよ。」

あと、変身後の名前は『クウガ』です。

仮面ライダーという名前は、総称に過ぎませんから、個別名称で呼んで下さい。」

「了解した。ミスターハザマは、船内デッキで、受け入れたコンテナを見ている。」

君も見えてくるといい。」

と、案内に人が呼ばれて、その人について行くと、狭間さんが、周囲に指示を出しながら、俺のビートチェイサーや、ゴウラムの近くにいた。

「案内ありがとうございます。狭間さん！」

案内してくれた人にお礼を言いながら、俺は、狭間さんに向かっていった。

アメリカ人の仕事は、おおざっぱなイメージがあったが、きちんとコンテナの中に気を使ってくれていた様で、ビートチエイサーや、ゴウラムは、固定具を外すだけですんだ。

俺のオーロラ能力が移送すれば楽なんだが、手続きがどうのこうのと必要で、結局はこうやって移送しなければならなくなつた。

「狭間さん！」

「ああ、五代さん、来ましたか。

一応大丈夫だとは思いますが、各部チェックをお願いします。

特に、ゴウラムの様子は、端から見ただけだとよくわからないので。」

「わかりました。」

そして、ゴウラムの霊石部分を撫でながら言葉をかける五代さんを見ながら、今後のことに頭をひねっていた。

集結

side 狭間玄乃

この後に、ドイツでロキが現れるのだろうけれど、このまま、五代さんを行かせていいのだろうか、考える。

やはり操真晴人がウィザードになってしまった一連の出来事がまだ自分の中に残っているのだろう。

侵食の速度が遅いとはいえ、変身する度に確実に侵食は進んでいるのだ。

園咲琉兵衛さんに言われて実行したこととはいえ、行動したのは、自分の責任だからだ。

だけど、だからといってこのまま自分のデイエンドの能力を使用すれば、闇の手だけではない、SHIELDにも、ましてやその中に巣くうヒドラの連中にも目をつけられてしまうのは明白だ。

オーロラ能力による次元移動、無限収納

ライダーの召喚能力という即戦力

海東大樹さんは、あえて、ああいうキャラクターを振る舞い、のらりくらりと柳のように動いていたのだらうかと時々考えてしまう。

こういう時には、決まってユグドラシルコーポレーションにお願いしている戦極ドライバーの量産を早めてもらうことはできないのかと考えが脱線してしまう。

海東大樹さんの収集癖なのか、基本的にガイアメモリからのレジエンドライダーのアイテムがコンプリートしてくれていたのが幸いして、比較的危害のない変身ベルトの戦極ドライバーならば、記憶を取り戻した人たちで、さまざまなデメリットによつて変身できない人たちの無茶な行動を押しさえられるのではないかと踏んでいるが、いかんせん、戦極凌馬の行いが読めないのだ。

戦極ドライバーを量産することで、それを手土産に裏切らないとも限らないのが、あの男だ。

なぜだか壇黎斗とよく話が合うらしく、SPIRITSの施設でよく議論をしているところが見られていた。

後々にとんでもない事態が起きやしないかと、不安が募る一方だ。

…また、思考がとんだな。

とにかく、俺は覚悟が足りないという自覚があり、そして、覚悟を決められる出来事

が目の前にあるのに、それから目を背けようとしている自分がいるということだ。

そうこう、思考が二転三転していたら、端末に連絡が入る。

ドイツのシュツツトガルトにロキが堂々と現れたらしく、確保を手伝えとのことだった。

俺は、ゴウラム、ビートチエイサーと、クウガの武器生成能力用の装備一式を点検していた五代さんに声をかける。

「五代さん、ロキを見つけたそうです。」

場所は、ドイツのシュツツトガルト、堂々と現れたらしく、おそらく何らかの罠の可能性もあります。」

「ドイツですか…わかりました。」

今回はチームですから、役割分担すれば、例え罠でも何とかなると思います。」

「そのことなんですが…今回のチームアップは、急造により、連携のとりようがないと思われます。」

SPIRITSのように、警察組織がフォロワーしてくれる訳でもなく、あくまで個人個人の集まりのようですから、当然、私も強く、協調性を期待しない方がいいと思います。」

「本当に一言多いわね。」

「ナターシャさん!？」

俺の発見に反応したのは、いつの間にか近くにあったエージェント・ロマノフだった。

「フューリー長官に見てくるように言われて来てみれば。

しかも、本当のことだからなおさら。

フォロー中心の私が見つっていることを、はっきり言うのは好ましいけれど、同時に嫌悪感を持たれるわよ。」

「はは…あなたには、何度も言われていますが、これは俺の性分ですので。」

「いいわ。それで？」

SPIRITSは、どうするの?。」

「参加しますよ。」

「ですが、俺も行きますから。」

「そうなんですか!？」

「いきなり五代さんを一人投入するわけにはいきませんし、ゴウラムにも、活動限界があります。」

同じSPIRITSのメンバーとしてフォローするのが、俺の役目ですよ。」

「あなた、戦えたの？」

「今、言いましたよね。」

俺もSPIRITSのメンバーなんですよ。」

「まあいいわ。」

ついて来て。」

そう言つて、俺達を案内したのは、キャプテンアメリカを乗せて来た飛行機と同タイプの飛行機だった。

「クインジェットよ。」

主な移動はこの機体になるわね。」

後部が開き、乗り込むと、エージェント・ロマノフはそのままパイロットとして運転席に移動して、機体を操作し始めた。

そして、青いバトルスーツを着こんだ男が、乗り込んだ。

「遅いわよ。」

「悪い。」

出発しよう。」

「了解、キャプテン。」

side 五代雄介

クインジエットと呼ばれた飛行機が出発して、青いアメリカの星条旗を模しているらしいスーツ姿のステイブさんが、機体後部座席に座りながら、聞いてきた。

「ミスターハザマも同行するのかわ？」

「エージェント・ロマノフにも言いましたが、俺もSPIRITSのメンバーですから。キャプテンの言いたい事もわかります。」

非戦闘員に見えるでしょうが、俺も戦えますので。」

「ユウスケはいいのかわ？」

「俺からすれば、狭間さんが一緒に戦ってくれるなら、心強いです。」

ステイブさんなりの気遣いなんだろうけど、狭間さんもライダーだから、一緒に戦ってくれると、戦いやすくなると思いい、そう答えた。

そのまま少しの間、静観していると、ナターシャさんから声がかかる。

「そろそろよ。準備して。」

「後部ハッチを開けてくれ。」

ステイブさんはそう言うのと、頭にAの文字の目立つマスクを被り、傍らに立て掛け

であった、真ん中に星の目立つ円形の盾を持って立ち上がった。
「そのまま行くんですか!？」

「問題無い!」

後部ハッチが開いて、強い風で声が聞きづらくなるなか、ステイブさんがバラシユートも背負わずにそのまま飛び降りてしまった。

「五代さん!ひとまず、クインジエツトが降下するまで待機をお願いします!」

狭間さんが後部ハッチを閉めるように言う声と共に、風の音に負けじと、大声で言うてきた。

「どうしてですか!？」

仮面ライダーとは違って、ほとんど生身に近いステイブさんを行かせて、自分たちだけが残るのに、納得がいかなかった。

「今さっき、端末に人型大の飛行物体が向かっているという連絡が来ました。」

恐らくは、アイアンマンでしょう。

ロキ以外の戦力を確認できない以上、我々まで行くのは過剰です。

そして、恐らくは、彼は威嚇行為のみでおとなしく捕まると思えます。」

そこまでわかるのかと、不思議に思ったけれど、ナターシャさんのクインジェットによる威嚇と、赤い金属スーツで有名なあのアイアンマンに恐れをなしたたのか、本当にあっさり捕まってしまったようだった。

「なんだ？ キャプテンやエージェント・ロマノフだけでなく、他にもいたのか。活躍できなくて残念だったな。」

『トニー様、彼らは日本の警察組織SPIRITSのメンバーのようです。』
「SPIRITS？ 大層な名前だな。」

まあいい。さつさと、このトナカイ君を連れて行こうか。」

どうも皮肉的な口調で、俺や狭間さんが無言だったのをいいことに、その場を仕切り出して、結局、ロキを乗せて、そのままアイアンマンと一緒に乗せてクインジェットは飛行し始めた。

「はじめてまして。」

俺は…」

「ああ、言わなくていい。」

君たちのことは資料で見た。

日本のスーパーヒーローと、その付き人だろうか？

日本も大変だな、アメリカに媚びを売るのに必死みたいだし。

ああ、キャプテン、あんたも、年のわりには元気だな。」

この人は周りを敵に回さないと気が済まないのだからと、体が反応しそうになると、狭間さんに腕を捕まれた。

「この人の軽口にいちゃいちゃ反応してもしょうがないですよ。

それより、ロキはやはり、おとなしく捕まりました。

先ほどのフューリー長官の連絡で、早急に帰還するようにとのことでしたから、フューリー長官も罨であることに気づいているようですね。」

「スターク、君もチームに？」

「フューリーは色々隠しごとをするからな。」

どうやら、ステイブさんはアイアンマンがチームメンバーであることを知らなかったみたいだ。

「ねえ、さつきから雷がひどいんだけど！」

「雷が怖いのか？」

窓の外に見える稲光にそわそわと、落ち着かない様子のロキを、ステイブさんが聞いていた。

「雷の後に来るやつが嫌いだね。」

ロキの言葉がただの強がりかと思ったその時、機体の上部に何かが当たり、機体が揺れ動いた。

そしてそれに即座に反応して、ステイブさんとアイアンマン：スタークさんがそれぞれに脱いでいたマスクを被り、スタークさんが勝手に後部コンソールを操作して、後部ハッチを開いた。

そして、開いた後部ハッチに、機体の上に降り立った物体、それは鎧を纏ってハンマーを持った、金髪の男性だった。

「うわ!？」

「ぬお!？」

スタークさんがその人物に向かって、手を向けると、その人物がハンマーで、スタークさんを殴りつけて、そのスタークさんが倒れてくるのに、ステイブさんはよろめき、俺も狭間さんもがクッション代わりの下敷きになってしまった。

その隙に、その男性が、ロキの襟首を掴んで、機体から飛び降りて行ってしまった。

「お、重い!？」

「早く退いてくれ！」

『おっと失礼。』

スタークさんがすぐに起き上がってくれたが、さすがの重さに、こちらもすぐには起き上がれなかった。

『また一人増えたみたいだな。』

「またアスガルドからよ。」

「あれは味方か!？」

『関係無い、やつがロキを逃がすか殺せばキューブは失われる。』

「それなら、計画を練らないと！」

『計画ならある。戦う。』

スタークさんは、そう言つて、両手両足のブースターで、空に飛んで行ってしまった。それを見たステイブさんも、さすがにこの高さからはパラシュートが必要みたい

で、壁に積んであったパラシュートのリユックを背負おうとしていた。

「止めた方がいいんじゃない?」

「そういう訳には行かない。」

「待ってください!」

俺が運びます。」

すると、隣で息を整えていた狭間さんが言う。

「運ぶ?」

「どうやって?」

「五代さん変身を。」

相手は、神を自称する通り強力な力と、見てわかる通り雷を操るようです。

紫の金のクウガが最適だと思います!」

「わかりました。」

超変身!」

ようやく起き上がった俺は、両手を前腰に当てて、アークルを出現させると、右手を水平に走らせて、構え、紫の金のクウガに変身した。

「ユウスケ、それが君の?」

「はい!クウガです!」

そして、狭間さんは持つてきていた荷物から警棒を取り出すと、渡しながら言ってきた。

「これから、彼らが戦闘しているでしょう付近にゲートを開きますので、くぐり抜けてください！」

狭間さんは、後部ハッチの辺りに銀色のカーテンのようなものを出現させると、俺達に頷いた。

「行きます！」

と、俺はそのゲートをくぐり抜けて行った。

集結②

side 狭間玄乃

クウガに変身した五代さんが、俺が出現させたオーロラをくぐり抜けて行く姿を見て、そのオーロラと俺を見てくるキャプテンアメリカは、その顔をエージェント・ロマノフにも見せていた。

「私は行かないわよ。」

「ふう、しょうがない、行くぞ！」

と、キャプテンアメリカがオーロラをくぐり、そして俺はオーロラを消した。

「あなたってそんな便利な力を持つてたのね。」

それよりも、あなたは行かないの？」

「行きますよ。彼らとは少し離れた場所に行きますので、一度消しただけですよ。」

そう言つて、俺は再びオーロラを呼び出し、それをくぐり抜けた。

そこには、石に腰掛け、アイアンマンと、ソーの戦いを見ていたロキの姿があった。「便利な力だな。どうだ？ 私の部下にならないか？」

「残念ながら、その気は無い。」

だが、積極的にあんたと敵対する気もない。」
「…ほう。」

そして、俺とロキは、崖下の戦いを静観するのだった。

side 五代雄介

俺が先にゲートをくぐったはずなのに、なぜだかステイブさんの方が先にスタークさんと先ほどの男性の戦いに割って入っていた。

「この俺に、ハンマーを置けだ!!」

と、激昂して飛び掛かりながら、ハンマーを振りかぶるその男性と、ステイブさんの間に入り込み、ハンマーをクウガの力で金の力を帯びた紫の剣で受け止めた。

その瞬間、強烈な光と、稲妻と衝撃波が周囲の木々を弾き飛ばし、盾を構えていたステイブさんも、クウガである自分も、ハンマーを持った男性も、受け止めた地点から弾かれてしまった。

「紫の金のクウガでも、弾き飛ばされるなんて、なんてパワーだ。」

「俺のムジヨルニアで破壊できない武器だ?!」

紫の剣士！ 貴様も邪魔をするのか!?!」

「まずは、話し合いを求めます。」

俺はクウガ。

あなたの名前と、ロキとの関係を教えてください。」

「俺は、アスガルドの王、オーデインの息子、ソーだ。」

ロキは、俺の弟だ。

あいつは、アスガルドに連れて帰り、アスガルドの法で裁く。」

「それは困る。ロキは地球で仲間を洗脳して、犯罪を犯している。」

そのまま連れ帰られてしまうと、彼らを解放できない。」

「少なくとも、ロキはこちらに従う意志があるみたいです。」

「このままロキを護送した先で、話し合いをすることはできないですか？」

「…いいだろう。」

side 狭間玄乃

「蟻と、象だ。」

ロキを護送し、フューリー長官と、ロキの話を彼らの近くで聞いている。

「ハハハハハハ。よくできた檻だな。」

だが、私用ではないだろう？」

「お前より、もつと強い者のために作つた。」

「ああ、あれか。あの獣。」

人間の振りをしている。あんたも必死だなあ。

あんな化け物どもをかき集めて身を守るとは。」

確かに、キャプテンマーベルを知っているだろうフューリーならば、宇宙の恐ろしさも身に染みて知っているだろうから、必死にならざるを得んのだろうが、この男も、口キも所詮は周囲を駒としか見えていない節が見てとれる。

他人を信用しないのも、嘘偽りで、周囲を騙し通そうとする二人は、案外似ているのかもしれないと思った。

「…（俺も同じか。）」

「ふつ、ではその王とやらが、雑誌でも読みたくなったら教えてくれ。」

そう言い残して、フューリーはその場を去って行く。

そして、今度は俺にロキが話かけてきた。

「お前は、何を考えている?」

「何も、あんたを見ているだけだ。」

「では、私は何に見える?」

「檻の中で王と名乗る男だ。」

「そう、私は王だ。

お前の力があれば、こんな檻、抜け出すことは容易い。

私をこの檻から出してくれるならば、お前を私の国の宰相にしてやろう。どうだ？」

「実にテンプレートな勧誘だな。

だが、俺がいる国では、そういう勧誘をしてくる奴は、容易く裏切り、見殺しにしよ
うとしてくる奴だと相場が決まっている。

檻の中で、自分が王だと駄々をこねる男を、俺は王だとは思わない。

真の王は、全ての事象を掌握し、過去からも、未来からも恐れられる存在だ。（…オー
マジオウのように。

駄目だな、今の俺は、なんかナイーブになっている。）」

「いいだろう。私がこの檻から出た時は、真っ先にお前を殺しに行こう。

楽しみに待っているがいい。私に仕えることができたはずの未来を想像しながら死
に行く貴様をな。」

俺は、その言葉に答えることもなく、その場を離れるのだった。

そして、五代さんらがいる場所に行くと、ちょうどフューリー長官が合流したところ

のようで、ロキの杖は四次元キューブから力を得ていると考えているようだった。

「その話は、我々の考えとは違いますね。」

「何?。」

「ロキの杖と、四次元キューブは、似てはいるが、実際は別の力に由来する力ではないかというのが、我々SPIRITSの見解です。」

「…その辺も、探って見るか。」

「行こうか博士。」

俺の言葉に、とつとつその場を離れたいようなトニー・スタークと、ブルース・バナーは研究所に向かって行った。

「ロキの標的にされたそうだな。」

「聞いていたんですか?。」

「真の王とやらを知っているような口振りだったが。」

「さて、何のことでしょうか?。」

俺とロキの会話を盗み聞きしていたらしいフューリー長官が聞いてくるが、五代さんが声をかけてきたので、俺から離れて行った。

「狭間さん! ロキは、チタウリという別の世界から軍隊を呼び寄せるつもりみたいです。」

SPIRITSに連絡して、協力をお願いできませんか?。」

「すでに、ニューヨークにいるSPIRITSのメンバーに連絡を入れてあります。

どこが戦場になるにしろ、駆けつけられる用意はしてあるようです。」

「そうですか。」

それと、いつの間に、ロキの杖と四次元キューブのことを調べていたんですか？」

「カマー・タージの書物に、似たような文献があったのです。

直接調べてみないことにはわかりませんがね。

ですから、我々もスタークさん達のところに行きましようか？」

そして、俺と五代さんが、ラボに足を踏み入れると、トニー・スタークとステイブ・

ロジャースが言い争っているようだった。

「キューブを見つけれ。」

そう言い残して、俺達とは入れ違いで出て行ってしまった。

「スタークさん。」

「ああ、君たちか。クウガと、その付き人。」

「クウガ？ユウスケだろう？」

「俺が変身した姿がクウガといます。」

本名は、五代雄介です。」

「ユウスケね…君のあの装甲や、剣の材質なんかを見せてもらいたい。」

ソーのハンマーを受け止めて罅一つないように見えたから、僕のスーツには是非とも利用したいね。」

「あれは、日本の一般の警察官が使用している警棒ですよ。」

見るならば、現物がありますよ。」

五代さんの自己紹介に、図々しい要求をするので、俺が言うとき

「付き人君、口を挟まないでくれないか？」

それと、君の過去、2007年以前の存在を確認できなかったんだが、日本もきな臭い世の中になっているみたいだな。」

「付き人君ではありません。」

俺は、狭間玄乃。ちゃんと名前でご呼んでください。」

「ゲンナイ・ハザマ、呼びにくいな。」

後で、あだ名を考えておくよ。」

それと、ただの警棒ってのは本当か？」

「本当です。五代さんがクウガに変身すると、周囲にある物を武器に変換できるモーフイングパワーを使うことができます。」

「そりゃすごい。ぬいぐるみを銃にでもできるのか？」

「確かに、変換前と後の構造の変化には興味があるね。」

トニー・スタークのお得意なおふぎけに、ブルース・バナーは真面目に答えていた。「狭間さん、むきにならないでいいですよ。」

俺は、気にしてないので。

スタークさんも、バナー博士も、調査を引き続きお願いします。

俺達は、俺達でできる事をしますので。」

と五代さんが言い、俺を引っ張って行くように退出したのだった。

side 五代雄介

どうやら、狭間さんとスタークさんの相性は悪いみたいで、狭間さんから、焦りのようなものが見てとれていた。

フューリーさんとも、なにやら険悪みたいだったし、ひとまず一人にしてあげたほうがいいと思って、俺のバイクと、ゴウラムをクインジエツトに積む手続きをしてもらう事にした。

その間、手待ちになった俺は、先ほどまでいた艦橋に行くと、ソーさんが窓の外を眺めていた。

「クウガか。」

「改めて、自己紹介を。」

俺は五代雄介。クウガは俺が変身した姿の名前なので、元の姿では雄介と呼んでください。」

「ユウスケか、わかった。」

一つ聞いても、いいか？」

「いいですよ。俺に答えられる物なら。」

「お前は どうして その力を制御できている？」

「制御、といえるようなことをしているつもりはありません。」

俺はこの力で、守りたい物、守りたい人達、守りたい笑顔があるから、今まで戦い続けてこられたんです。

そして、そんな俺を支えてくれるたくさんの人達がいて、一緒に戦ってくれる仲間がいる。

だから、この力をきちんと使うことができるんだと思います。」

「お前は、いいやつだな。」

ユウスケ。よろしく頼む。」

「はいー！」

多少は、ソーさんの悩みの解決になったのかなと考えていると、急に慌ただしくなっ

てきた。

「どうかしたんですか？」

俺は、近くにいたスタッフに話を聞くと

「システムにハッキングを受けた。

フューリー長官は、真っ先にラボに向かって行ったよ。」

「わかりました。俺も行きます。」

「俺も行こう。」

ソーさんと一緒にラボに行くと、狭間さんとナターシャさんもラボに入ってきていた。

「教えてくれ、どうしてSHIELDはキューブを使って、大量破壊兵器を作ろうとしている？」

声色で、バナー博士がイラついているのがわかった。

分離

side 五代雄介

「俺？」

フューリーさんが指を指したのはソーさんだった。

去年、ニューメキシコ州にある町が、巨人とハンマー持った超人との戦闘があったというのはSPIRITSの情報で、知っていたけれど、それがソーさんだったとは知らなかった。

俺は、周りの人達の言い争いを宥めようと、必死だったが、なんだか腹部のアークルが警告を鳴らすように熱を帯びてきて、それどころではなくなってきた。

狭間さんは、俺を周囲から引き離し、扉の前でどこかを睨んでいるようだった。

「ロキの杖の光が、躍動している。」

狭間さんの眩きにはつととなって、俺も杖に目をむけると、バナー博士が無意識にだるう、杖を握り締めていた。

バナー博士も、周りに指摘されてはじめて杖を持っていることを認識したようで、杖をテーブルに置くと、そのままアラームが鳴った。パネル画面を見に行っていた。

そして、その瞬間、中央の通風口らしい場合から炎が吹き出して、みんなが吹き飛ばされて、船体が大きく揺れた。

「五代さんは青のクウガになって、怪我人がいないかを確認してください。」

俺は、ゴウラムをつんだクインジエットに向かいますから。」

そう狭間さんが、いうなやいなや、片手にいつもは持っていないドライバーを手を持って行ってしまった。

「スーツを着ろ。」

「そうだな。ユウスケも、スーツを着ろよ!」

「はい!」

先ほどまでは、まるで決闘でもしそうな雰囲気があったスタークさんとステイブさんは、吹き飛ばされて正気に戻ったらしく、事態をどうにかしようとスタークさんは、こんな時でもユーモアのある言葉を俺に残して、あの装甲を纏いに向かって行った。

「超変身!」

俺もすぐさま青のクウガに変身して、バナー博士と、ナターシャさんが吹き飛ばされた先に飛び降りた。

「大丈夫ですか!?!」

「足が鉄骨に挟まってるの。」

「どかしてくれない？」

「わかりました！」

ナターシャさんが倒れている方に向かって、足が挟まっている鉄骨を掴み、ゆつくりと持ち上げる。

パワー不足の青のクウガでも、なんとかなったみたいで、ナターシャさんはスルリとそこから抜け出してきた。

「ありがとう。助かったわ。」

クインジェットで見たのと、色が違うわね。」

「はい、青のクウガです！」

俺は、サムズアップをして答えると、バナー博士のうめき声が聞こえた。

「バナー博士！大丈夫ですか!？」

「大変：博士、落ち着いて、気を冷静に保つのよ。」

興奮状態なのか、こちらに答えようともしないバナー博士のうめき声はさらに強くなっていく。

「これって……」

「博士は、吹き飛ばされたショックで、ハルクになりかけているわ。」

「博士を落ち着かせないと。」

しかし、バナード博士は徐々に様子がおかしくなっていくように見えた。

「ナターシャさんは、逃げてください。」

「ここは俺が押さええます！」

「大丈夫なの？」

「なんとかやってみます。」

「超変身！」

ソーさん並のパワーを考えて、紫の金のクウガに姿を変える。

「任せたわ。無理しないでね。」

「はい、ロキの方をお願いします！」

俺に気を使って、声をかけて、ナターシャさんは通路を駆けて行った。

「う、うヴう、ヴあああ！」

「どうすれば……」

バナード博士の体がみるみる緑色に変化しながら、体を肥大化して、衣服を破いている。

そして、一瞬、バナード博士の悲しそうな目から、眼鏡が落ちて、にやりと顔の表情を変えて立ち上がった。

「大きい……」

『ぐおおおおオオアア、ア!!』

ハルクとなつてしまったその姿に一瞬見とれるも、すぐに構えをとると、大振りなパンチに、腕をクロスして受け止めるも、周囲のパイプ類を巻き込みながら、吹き飛ばされてしまった。

「なんてパワーだ。ソーさんのハンマー並、いや46号並だ。」

カブトムシ型のグロンギのパワーを思い出しながら、金属類をどかして、立ち上がる。「どうやって倒す…倒す?」

いや、ただ止めるだけだ!!」

こちらに飛び掛かりながらパンチをしていたハルクに、咄嗟にその場から飛び退いた。

そのまま俺は、直線的な攻撃を与えるかどうかを躊躇しながら、大振りで、紫の金のクウガでもなんとか対処できるハルクの攻撃を逃げながら避け、防ぎ、そして再び殴り飛ばされる。

殴り飛ばされた先は、航空機の格納庫のようで、整備員やパイロットらしき人達が集まっていた。

「皆さん…逃げてください!」

それを隙とみたのか、ハルクは両腕をハンマーのように振り下ろしてきて、咄嗟にそ

の腕を掴み膠着状態になってしまふ。

しかし、そのハルクを殴り飛ばした人物がいた

「ソーさん！」

「あれはバナーか？」

「はい、博士が暴走して、ああなっているんです。」

「先ほど言っていたもう一人の自分というやつか。」

バナー！ 落ち着け、俺達はお前の敵ではないぞ！」

ソーさんも博士を必死に説得しようと試みていたけれど、ハルクは、殴られた仕返しにと、今度はソーさんを殴り飛ばしてしまふ。

そして再び、俺はハルクの攻撃を避けて、防ぐことを繰り返すことになった。

殴り飛ばされたソーさんが起き上がると、無言で右手を宙につきだし、そしてその手には、壁を突き破って現れたハンマーを手にして、ハルクを周囲にあつた、航空機にまで殴り飛ばした。

ハルクは、その航空機の翼をもぎ取り、投げつけるが、ソーさんは、下をくぐるように避け、俺がその翼を受け止めてゆっくりと下ろした。

ソーさんは、投げ返すように、持っていたハンマーを投げるが、ハルクはそれを避け、ハンマーの柄を掴んでしまふ。

「ハルクのパワーでも、ハンマーを持ち上げられないのって、どうなって!？」

ハルクは床に落ちたハンマーを必死に持ち上げようとするが、固定されたようにハンマーは動かなかつた。

それをチャンスと見たソーさんがハルクを殴りつけ、拘束しようとするが、直ぐに振りほどかれ、しかも、俺に向けて投げつけてまできた。

ソーさんを受け止めつつ、勢いを弱めるために後ろに飛んで着地。

そこに、ハルクが殴りかかってくる。

ソーさんは、俺の前で再びハンマーを呼び寄せて、ハルクと一緒に上の階まで天井を突き破って行ってしまった。

「むちやくちやだ。」

このままでと、ヘリキャリアが堕ちかねないぞ。」

俺もすぐに、天井の穴から上に行こうと、ジャンプした。

そこは、バナー博士やスタークさんがいたところとは違うラボのようで、さまざまな機材が転がっている。

しかも、外が見える窓からは、戦闘機がこちらに機首を向けてきている。

俺は咄嗟に、ソーさんを押し倒して、弾丸から生身のソーさんを守ろうと、覆い被さつた。

しかし、ハルクには弾丸がまるで効いていないようで、怒ったハルクが窓から戦闘機に飛び掛かり、空中で戦闘機を破壊し始めてしまう。

「まずい！超変身！」

俺は青の金のクウガが変わると、戦闘機を破壊しているハルクに飛び掛かり、せめてパイロットの脱出を助けようとハルクの注意を引いた。

空中を駒のようにくるくると回転しながら、パイロットは脱出しようとするが、ハルクが飛び出た座席を掴んで、俺に投げつけてきた。

俺はそのまま、パイロットの座席を受け止めて、戦闘機から空中に投げ出されてしま

う。
しかし、俺の真横を巨大なクワガタムシが通り抜けて、俺とパイロットさんを受け止めてくれた。

『#\$☆—%&◇?』

「ゴウラム！」

ということとは、狭間さんがクインジェットから下ろしてくれただな。」

「ぐう…」

「大丈夫ですか!?!」

「すまないが、ヘリキャリアまでお願いできるだろうか？」

「わかりました。」

ゴウラムに声をかけ、戦闘機が爆発して落下していったハルクを気にしながら、ヘリキャリアまで運んでももらうことにした。

side 狭間玄乃

拘束状態だったものを解除している途中で動き始めたゴウラムを、やっとのことでクインジエットから下ろして、傾きはじめてたヘリキャリア内を侵入者から身を潜めつつ、ロキが捕まっている檻にたどり着くと、ロキの代わりにソーが檻の中に入るのが見えた。

俺は再び、身を潜めると、デイエンドドライバーにデイエンドのライダーカードを挿入して、姿を晒した。

ちょうど同時にコールソンさんが試作品の銃を持って、コンソールを操作しようとしたロキを止ようとしていた。

「檻から出られたみたいだな。」

KAMENRIDE

「貴様か。」

約束していたなあ。私が檻から出られたら、真っ先にお前を殺してやるとな。

殊勝な奴め、自ら殺されに来るとは！」

「変身！」

D I : : E N D !

「何?！」

本来ならば、殺されるのはコールソンさんになるところを、わざわざ挑発までしてロキの標的を俺

にしたのだ。

ロキの性格上、会話の途中で背後から心臓を刺しに来ることはわかっていたので、タイミングを見計らって、変身エフェクトを発生させて、ロキの攻撃を防ぎ、その隙に更なるカードを挿入する。

A T T A C K R I D E B L A S T

「無駄だー…何だと?！」

ロキは俺が放った複数の光弾を跳躍しながら避けようとするが、光弾は弧を描いてホーミングして、全弾が命中して入り口近くまで吹き飛した。

「コールソンさん！」

俺の変身に呆然としていたコールソンさんが、俺の声に、はっとして、持っていた銃で起き上がろうとしていたロキを攻撃し、更に奥まで吹き飛していた。

俺は、檻を操作するコンソールに向かうが、画面にはナイフのようなものが突き刺さっていて、火花がとんでいた。

「コールソンさん。」

これは動かせるんでしょうか!?!」

「駄目だ。落下は止められない!」

咄嗟にオーロラを発生させようとするも、僅差でソーが入った檻が落下してしまっ
た。

「(俺のオーロラは固定された場所でないで発生させられない。

…仕方がない、原作通りに、自力で抜け出してもらうしかないか。)

はっ。ロキは!?!」

「駄目だ。逃げられた。」

ミスターハザマ、君も変身できたのか。」

「この姿の名前は、デイエンドといいます。

俺もSPIRITSのメンバーですから。」

「そうか。」

私は、長官のところに向かう。

君は、ほかのメンバーに、ロキが逃げたことを伝えてくれ。」

「わかりました。」

そして俺は、変身を解いて、艦内を走るのだった。

決意

side 五代雄介

戦闘機のパイロットさんをヘリキャリアの甲板に下ろすと、ゴウラムも甲板に着地して、動かなくなってしまった。

「お疲れゴウラム。」

俺は変身を解いて、周囲にいた人に、ゴウラムを運んでもらうようお願いして、中に入っていく。

すると、艦内にフューリーさんの声が響いた。

『今回の襲撃で、大勢の仲間が死んだ。』

私の目の前で息を引き取る者もいた。

彼らのいた日々を忘れてはならない。

冥福を祈ろう。』

俺は、グロンギによってたくさんの人達が死んで行ったことを思い出していた。

体が震えそうになる。

けれど、それでも、誰かのために戦う決心をしたあの時のこともまた、思い出した。

「…行こう。」

俺は、足を進める。

会議室に着くと、スーツを脱いでいたスタークさんと、ステイーブさんが座っていて、フューリーさんが一人で血のついた帽子を手に持っていた。

「ユウスケか。ちようどいい、お前達にも話をしておきたかった。」

これは、私の目の前で息を引き取った、整備員が持っていた物だ。

ヒーロー達のサインを欲しがっていた純粋な奴だった。」

その帽子は、机の上に置かれて、その帽子をステイーブさんが手に取って眺めている。
「八方ふさがりだ。」

通信は不能、キューブの在処も不明、バナーも、ソーも。

私のせいかもしれない。

確かに、我々はキューブの力で兵器を作ろうとしていた。

だが、それだけではない。もっと危険な計画も進行中だった。

その計画は、スタークは知っているが…」

椅子に座って、うなだれていたスタークさんは、フューリーさんに自分の名前を言われて、顔を上げた。

「その名を、『アベンジャーズ計画』と言い、めざましい力を持った者達を集め、チーム

を組み、より大きな力にする。

彼らが協力すれば、強大な敵にも、必ず立ち向かえると、信じていた。

私も、今回の襲撃で死んでいった者達も、本気で、死ぬまで信じていた。」

その言葉に、何を思ったのか、スタークさんは、無言で、部屋から出て行ってしまった。

そして、ステイブさんもまたその部屋から出て行ってしまった。

「五代さん。」

俺は、怒っています。

こんなことを仕出かしたロキだけじゃない。

俺には力があるのに、助けられたはずの人達よりも、いろんな理由をつけて目を背けている自分自身に怒っているんです。

：俺は、仮面ライダーというヒーローが憧れでした。

苦悩し、乗り越え、誰かのために戦える。

そんなヒーローが、大好きなんです。」

座つてうつむき、下を向いて独白する狭間さんの隣に立って俺は言葉を紡いだ。

「狭間さん。」

あの旅館で、はじめて会った時、あなたは言いましたよね。

あなたは、何の戦う力を持っていなかった、一般人だと。

今のあなたは、一般人じゃないです。

「狭間さんも立派な『仮面ライダー』なんです。

俺も狭間さんも同じ、仮面ライダーですよ。」

「…ありがとうございます。」

…俺はもう、力を使うことに理由をつけて逃げるつもりはありませんから。」

狭間さんはそう言うと、立ち上がって、俺に頭を下げてから、彼の背後に、銀色のカーテンを発生させていた。

「俺は一度、SPIRITS本部に戻ります。

一時的にでも助力できる戦力があるかもしれないので。

それと、すぐに行動可能でしたら、クインジェットに行くのをおすすめします。」

「それはどういう。」

「行ってみればわかります。それでは。」

そう言うと、そのままゲートをくぐり抜け、その銀色の幕が消えてしまった。

俺は、狭間さんが言った通りに、クインジェットに向かうと、作業員の人々が、ゴウラムを機体の上部に固定が終わったようで、脚立から降りて来ていた。

「ありがとうございます。」

「どういう構造なのか、興味がつきませんが、できるところまではやりましたので。」

そう言って離れて行くのを見送り、後部ハッチから中に入ると、俺のビートチェイサーが固定されていた。

パイロット席にはすでに、副パイロットの人がいて、俺が入ってきたことに眉を歪めていた。

すると、後部ハッチから、ステイブさんと、ナターシャさん、それとはじめて見たアーチェリーにも似た弓矢を持った男性が入ってきて、うろたえる副パイロットの人をクインジェットから下ろしてハッチを閉めてしまった。

「ユウスケも来ていたのか。」

「ミスターハザマはどうしたんだ？」

「狭間さんは、ゲートを開いて一度SPIRITSに戻りました。」

仲間を連れて来るそうです。

あの、皆さんはいったいどうしてここに？」

「我々はフューリーの命令で動くことをやめた。」

ナターシャ、出してくれ。」

「誰だこいつ？」

「彼は日本の協力組織SPIRITSのユウスケ・ゴダイ。

我々のメンバーの一人だ。」

「そうか。クリント・バートンだ。」

「よろしくお願ひしますバートンさん！」

俺はユウスケでいいので。

ところで、どこに向かっているんでしょうか？」

「ニューヨークだ、そこにロキがいる。」

奴は我々を怒らせた。

アベンジャーズとして、報復する。」

「ロキの居場所がわかったんですね！」

ニューヨークには、SPIRITSのメンバーもいますので、本部との連絡がとれる

と思います。

それと、怒っているのは俺や、あなた方だけじゃないです。

狭間さんがすごく怒っていました。」

「聞いたか、スターク。」

『付き人君も一人前の戦士になったってことだな。』

…先に行くぞ。』

窓の外にはとどころどころ、装甲がぼろぼろのアイアンマンが、クインジエツトより先に行ってしまった。

そしてニューヨークに到着すると、すでに空には穴が空いていて、街中から炎と煙が上がつていた。

「スターク！こっちは3時の方向！」

『どっか寄り道してたのか？』

パークアベニューへ行け。引き連れて行く。』

ナターシャさんの声にスタークさんが答える声が聞こえてきて、機体が揺れてきたので、手すりに捕まって耐える。

「あれがチタウリ。うわっ!？」

俺と、ステイブさんはあちこちに捕まって揺れから耐えていると、どこかのビルで、ロキとソーさんが戦っているところが見えた。

クインジエツトで援護しようとする、ロキの杖から発射された光弾に、エンジンの片方をやられて、機体制御がとれなくなりながらもなんとか不時着してくれた。

後部ハッチが開くと、ステイブさん達が出て行く。

俺はビートチェイサーに乗り込んで、そのままハッチから飛び出した。

すると、背部のゴウラムの拘束があまかったのか、そのまま飛び上がって、ビートチェイサーの馬の鎧となった。

「ずいぶんとごつい見た目になったな。

さっきのデカイ、クワガタムシもユウスケの仲間だったのか。」

「はい。ゴウラムって言います。」

「なごやかに話している暇はない。行くぞ。」

俺は、放置された車などを、ビートゴウラムで弾き飛ばしながら走り出して、ある程度空間のある場所に集まった。

「五代さん！」

すると、近くから声が聞こえて、そちらを向くと、SPIRITSのメンバーの飛電其雄さんが向かってきていた。

「飛電さん、お久しぶりです。」

「挨拶は後にしましょう。」

本部との連絡はとれていますのでまもなく狭間さんが来るでしょう。

まさか、ニューヨークが、戦場になるとは思いませんでした。自分も変身できるように持ってきていて正解でした。」

「飛電さんは、とにかく、市民の避難を優勢してください。それと……」
「ユウスケ！デカイのが来るぞ！」

急いで話そうとしていたけれど、ステイブさんの声で、上を向くと、空の穴からまるで、機械でできた巨大な魚か、恐竜のような見た目の物が姿を現した。

「空を泳いでいる。」

「これは、早く動いた方が良さそうですね。」

Kamenrider!

「変身」

サイクロンライズ！ロッキングホッパー！

Type One

飛電さんは、仮面ライダー1型に変身すると、逃げ遅れた人たちの救助に走って行ってしまった。

「変身！」

俺も赤のクウガに変身して、戦いに備えた。

side 狭間玄乃

『緊急放送を行います！アメリカ、ニューヨークの映像です。』

本部に戻り、協力してもらえそうな人たちを集めて映像を見る。

「急がないといけませんね。」

皆さん、本当によかったんですか？」

そこにいたのは、沢木哲也さん、紅渡さん、日高仁志さん、野上良太郎さん、の4人だった。

「俺はアギトになれないけれど、姉さんや義兄さん、人間のために戦いたいっていう気持ち、この蜂さんが、俺を選んでくれたっていうことでしょうか、期待に応えたいんです。」

「僕も、キバに変身できないし、キバツトもいません。」

でも、名護さんの弟子だから、託された力を正しいことに使いたいんです！」

「俺の無茶なトレーニングを止めてくれた玄乃には今では感謝しているけどな、直談判してまで、力を欲した俺を、この大剣が所有者と認めてくれたってことだろう？」

鬼の戦い方とは違うだろうけど、精一杯、戦わせてもらおうぞ。」

「僕も戦いは怖いです。」

でも、たとえデンライナーがなくても、モモタロスが僕を忘れない限り、僕もモモタロスを忘れたくないんです。

モモタロスと、また一緒に戦えるなら、よろしくお願いします！」

「わかりました。オーロラを開きます。」

この先は戦場の可能性もありますから、現地に着いたら、すぐに変身してください。飛電其雄さんの1型と、五代さんも向こうにいますので、できる限り、協力をお願いします。

それと、戦闘よりも、市民の避難を優先してもらえると助かります。」

俺はそう言うと、デイエンドライバーを持って、オーロラを発生させ、そのままぐり抜けるのであった。

相對

side 狭間玄乃

ニューヨークに出張中だった飛電其雄さんから、連絡が入った。

新造されたスタークタワーから光が伸びて、空に穴が空いたこと。

報告を受けていた事態が起き始めているという内容だった。

飛電其雄さんはヒューマギアではないれっきとした人間の其雄さんである。

そもそも、俺が飛電インテリジェンスに送ったのはゼロツープログライズキーで、あのアイテムは、記憶を注入せずとも、内部のAIが判断して、過去に飛電インテリジェンスが打ち上げた衛星アークに自らを接続し、起こり得た未来と、自分達の子供が、大変なことになっていることを知ったそうだ。

この世界の現時点では、飛電是之助さんの息子夫婦は存命していて、飛電インテリジェンスはAIの開発は発展しているが、ヒューマギアの開発は行っておらず、主にペットロボットやサービス産業に使用されるロボット等の製作が主な産業だ。

あの旅館の出来事に参加していた飛電是之助さんから、新設されたSPIRITSに参入したいという申し出があったことで、飛電其雄さんの参加が決まったのである。

しかし、飛電其雄さんは、SPIRITSのメンバーであると同時に飛電インテリジェンスの次期社長でもあるため、さまざまな活動を精力的に行うスーパー社員であり、息子の未来を思う頑張り屋のお父さんでもあるのだ。

あの人は、SPIRITSのメンバーになるにあたり、ゼロツープログラィズキーからもたらされた技術を用いて、サイクロンライザーと、ロッキングホッパーゼツメラィズキーを作り出して、仮面ライダーI型に変身することができるようになってた。

それと、俺の目の前にいる4人である。

今回の戦闘は海外ということもあり、希望で参加をお願いしたところ、警察組は海外ということもあり協力を渋っていたが、記憶を取り戻していてもあらゆるデメリツトで変身できずに燻っていた人たちがようやく戦う力を得る、又は決心することで、戦うことができるようになり、立候補してきたのである。

沢木哲也さんは、記憶喪失になっておらず、アギトの力も得てはいないが、姉も存命で婚約者だった津上翔一と結婚していた。

記憶を取り戻し、いくつもの違和感に悩まされたそうだが、SPIRITSができて、

氷川誠と再会するも、アギトになれずに守られる立場に納得がいかに、新設されたG3Xの装着員に立候補して正装着員になるべく、氷川誠と競っていたそうだが、俺が警察組織にあずけたゼクターのうち、いつの間にか、ザビーゼクターが彼を選んだことで、G3Xの装着員は氷川誠に、ザビーゼクターの所有者として、沢木哲也さんがなつていたので。

これにより、ゼクターの所有者となつた彼は、天道総司や、神代剣といった自由人達と同じくSPIRITSに所属しても、警察組織の人間ではなく、ある程度自由に活躍できるようになつたのがつい最近で、ニューヨークに行くことを最初に立候補した人でもある。

次に、紅渡さんが、彼に送つたのはブラッディローズというバイオリンで、本来ならば、世界に一つしかないとされていたものが二つになつて、彼は、海外にいる自分の父親に相談すると、送つてきた人の役にたてられるぐらいの恩を受けたことになると言われて、あの旅館に合流したとのことだった。

彼の父親の紅音はこの世界では、麻生ゆりと結婚していたことで、本来ならば彼が生まれることはなかったのだろうが、なぜか麻生恵（今の世界では紅恵）が姉で、彼も生まれているということになっていて、姉は嶋財団の社員であり、紅渡はバイオリン職

人を目指しているようだ。

記憶を取り戻したことで、キバットがいないことを悲しんでいたところを俺が嶋護に送ったイクサシステムの装着員にならないかと勧誘を受けて、嶋財団に所属後、最近になってSPIRITSに加入することになった。

嶋財団では、姉に見守られながら、名護啓介（現在でも妖怪ボタンむしり）の弟子だった記憶を元にトレーニングを重ねて、イクサの正式な装着員として、ニューヨークの戦いに行きたいと言ってきたのだ。

そして、日高仁志さんだが、彼が記憶を取り戻し、あの旅館に合流した後、彼は何度も無茶な修行と称したトレーニングを繰り返していた。

SPIRITSに参加している滝澤みどりさんに言われて、俺も病院で彼に何度も顔をあわせており、鬼として戦えないことを悔やみ、あの旅館で見た映像が頭から離れず、悩む日々が続いたという。

ついには、SPIRITS本部に直談判をしに来て、土下座をしながら、戦う力が欲しいと頭を下げてきたのだった。

そんな時、急に勝手にオーロラが出現して、土豪剣激土が土下座をしていた彼の前に突き刺さったのだ。

さすがにその時は、狼狽した。

サウザンベースも、ノーザンベースもないこの世界では、当然、全知全能の書の争いもないこの世界と時系列を加味して、聖剣関係は先送りにしていたし、クラインの壺の中には、光剛剣最光が唯一なかったことで、半ばセイバー関係は諦めていたのだが、聖剣は使用者を選ぶということだろうが、尾上亮ではない人が選ばれることになるうとは考えてもいなかったの、言葉を出せないでいた。

俺がいろいろと考えているうちに、立ち上がった日高仁志さんが、土豪剣激土を地面から抜いていた。

仕方なく、俺は使い方を教えると、彼は鬼の弦の修行を参考にして、トレーニングを積んできたようで、今この場にいたのだった。

そして、最後は、野上良太郎さんである。

彼は、あの旅館でしきりに涙を流しながら俺に感謝をしてきた。

ライダーパスを送ったことで、時間の荒野にはいけるようになったけど、デンライナーも、イマジンの影すらない世界で、思い出に浸りながら、SPIRITSの話をたまに聞きに来るような人だった。

そんな彼には、デイエンドのライダーカードを使えば、モモタロスに会わせられると

いう話をしてはいたが、彼は保留にしている、そのまま時間が過ぎて行く一方だったのだが、何がきっかけかはわからないけれど、再びモモタロスに会う決心がついたらしく、ニューヨークに行く人員に立候補してきたのだ。

ヘリキャリアでは、ファイル・コールソンの命を救うことができた。

だけど、その影で消えていく命があるということに見向きもしていなかった自分に腹が立つ。

今、ニューヨークではアベンジャーズと、チタウリの戦いが起き始めている。

チタウリを撃退して、地球を救うことも大事だが、一人でも多くの人たちを救うことも大事な事なんだということを、俺は忘れていた。

ああ、無性に腹が立つ。

だけど、この苛立ちは、発散できる。

チタウリの連中とロキに八つ当たりだ。

俺達5人は、各々の思いを持って、オーロラをくぐり抜けた。

side 五代雄介

空の穴から出てきた空を泳いでいる恐竜のようなアレは、チタウリの輸送機のようなものだったらしく、側面からビルに向かって、チタウリが飛び出してオフィス内を攻撃しているような悲鳴が聞こえてきた。

「ユウスケ！先ほどの男性は？」

「SPIRITSの仲間です。」

「民間人の救助に行きました。」

「変身していたように見えたが。」

「こいつがユウスケなのか？バイクは同じだが、いつの間に赤い装甲を纏ったんだ？」

「それが、彼の能力なのよ。」

「前に見たのは紫だったり青かったりだったけど。」

「はい！この姿の時はクウガでお願いします。」

ステイブさん達は、放置されたタクシーのそばで聞いてきてチタウリの動向を注視している。

「スターク！見てるか!？」

『見る。目を疑ってる。』

『バンナーは？まだ来ないのか？』

「バナー？」

『来たら教えろ。』

時折、スタークさんの声も、ステイブさん達のインカムから聞こえてくる。

「こいつらやりたい放題だ。」

ミスターハザマもまだ来ないのか!？」

「本部に連絡はいつているので、もうそろそろだと思えます！」

「キャプテン！ビルの中に市民が大勢、取り残されてる！」

すると、上からチタウリが降りてきて、光弾を放ってくる。

「キャプテン！ここは任せて。」

行つて。」

「持ちこたえられるか!？」

「キャプテン。」

望むところだよ。」

「ステイブさん！俺が二人の盾になります！」

だから、行ってください！」

ビートゴウラムを二人の前で横向きに止めて、バイクから降りて、チタウリに向かっ

て行く。

side 狭間玄乃

オーロラの先では、キャプテンアメリカが、警察に指示を出しているところだった。

「ミスターハザマ！」

来たのか。彼らが？」

「遅くなりました。

はい、SPIRITSのメンバーになります。

彼らには、人命救助を優先してもらいますので。」

「あなたが、キャプテンアメリカさんですか。

よろしく願います！」

「よろしく頼む。」

沢木哲也さんが、キャプテンアメリカに近づいて頭を下げ、正面の惨状を見ながら言う。

「行こう。ザビーゼクター！」

変身！」

H E N S I N

六角形の装甲が展開していき、ザビー・マスクドフォームになる。

そして、その横に日高仁志さんと、紅渡さんが並び立つと

「よつと。」

日高仁志さんが背中の大剣、土豪剣激土を地面に突き刺して、ポケットから、ワンダーライドブックを取り戻す。

玄武神話

かつて四聖獣の一角を担う強靱な鎧の神獣がいた…

「変身！」

玄武神話

一刀両断！

ブツた斬れ！ドゴ!!ドゴ!!土豪劍激土！

激土重版、絶対装甲の大劍が北方より大いなる一撃を叩き込む！

装甲そのものが六角形の亀の甲羅にも、西洋中世の騎士鎧にも見える重量級の劍士、仮面ライダーバスターに変身した。

そして、紅渡が、いつの間にか手に持っていた白いベルトを巻き付け、右手にイクサナツクルを持ち、左手に打ちつける。

イ・ク・サ レ・デ・イ

腕を水平に移動、そしてベルトに装着する。

「変身！」

フ・イ・ス・ト オ・ン

太陽の騎士、又は聖職者を思わせる白い装甲の仮面ライダーイクサに変身する。

KAMENRIDE

「変身！」

DI::END!

「ミスターハザマも変身できたのか。」

「たとえばキャプテンに見せるのは初めてでしたね。」

ああそれと、これから呼び出すのは、敵ではないですし、無駄な事をしているように見えるでしょうが、必要なことなので。」

「何を言っているのかはわからないが、敵対しようとしないう限りは手は出さないさ。」

KAMENRIDE DEN—O

「(こういうこともできるのか。)」

FINAL FORMRIDE DE DE DE DEN—O

「変わった!?!」

「俺、さんじよ…いてえ!？」

おい、てめえ、この泥棒野郎! 毎回毎回痛てえんだよ!」

電王に関しては、ファイナルフォームライドをすれば、それがモモタロスになる事を知っていたが、こうなる事もわかっていた。

案の定、俺を海東大樹さんだと思い込み、突っ掛かって来た。

そしてキャプテンは俺が呼び出した電王がモモタロスに変わったのを見て驚く。

「も、モモタロス。」

「ああ?」

…良太郎じゃねえか、どうなってるんだ?」

「僕が、お願いして、モモタロスを呼んでもらったんだ。」

「んん?」

普通に呼ばばいいじゃねえか。って、良太郎との間にパスを感じねえ…どうなってるんだ?」

「モモタロス、もう一度、僕と契約して欲しいんだけど。」

「…どうせ、前と同じ内容だろ。」

「しゃあねえな!」

「彼の中に入った!？」

野上良太郎との再契約のために、良太郎に憑依すれば、キャプテンが驚きの声をあげ、野上良太郎の瞳と、前髪が赤い色に染まった。

「なんかよく見りゃあ、電王の出番っばいな！」

野上良太郎の声は、モモタロスと共有できるのでだろうやり取りの後に、ベルトを取り出して装着し、ライダーパスを取り出した。

そして赤いボタンを押すと、軽快な音楽が流れはじめる。

「変身」

SWORD FORM

「俺、今度こそ参上！」

よくわかんねえ状況だが、いくぜ！いくぜ！いくぜ！

「SPIRITSの皆さんは、今の彼の事も含めて臨機応変をお願いします。

できる限り、人命救助を優先してください！」

そう言うのと、各人から了承の声が上がった。

決着

side 狭間玄乃

「ここは彼らに任せよう。」

ミスターハザマも来てくれ。」

「わかりました。」

キャプテンの声に、視線の先で、エージェント・ロマノフ、ホークアイ、赤のクウガが高台で戦っているのが見える。

キャプテンはシールドをチタウリの一体に叩き込みながら乱入し、俺もジャンプ中にデイエンドライバーから弾丸を放ち、数体を撃ち抜きながら着地する。

すると、さらに空からも、稲妻がチタウリを撃ちつけ、ソーが空から着地。

しかし、どことなく足元がおぼつかないように見えた。

「ソー、上はどうなってる?」

「キューブを囲っているバリアが敗れない。」

『ああ、だがまずはこいつらだ。』

「キャプテン、作戦は?」

「…チームワークだ。」

だが、SPIRITSのメンバーが数人助っ人に来てくれた。人命救助を優先するそうだが、チタウリの数を減らす手数も増えたことになる。」

「待て、ロキと決着をつけるのが先だ。」

「あん？俺が先だ。」

そこで、俺は待ったをかける。

「待っててください。」

ヘリキャリアで、ロキが檻にいた時に、最初に殺すのは俺だと言っていました。

しかし、檻から逃げ出した際に、俺はロキを撃退しています。

奴は俺を目の前にすれば、注意は俺に向くはずです。」

「ソー、どう思う？」

「そうだな。」

一度逃がした獲物が目の前に現れば、どうにかして殺そうとするだろう。

「だがいいのか？」

「勝率が上がるならば、囹役にだってやってやります。」

それに、俺も、手札をすべて晒したわけではありませんから。」

「そうすると、分散しながら、チタウリを撃退しつつ、ロキを見つける必要があるな…」

すると、一台の年代物だとわかるバイクが近づいて来て、そこには随分と薄汚れている、バナナ博士が乗っていた。

「やあ、ひどいことをする奴がいるもんだね。」

「スターク、バナナがきたぞ！」

『じゃあ、スーツを着ろと言え。』

これから、愉快的仲間を連れて行く。』

インカムから聞こえてきたアイアンマンの声に、周囲を見渡すと、アイアンマンを追いかけているのだろう、チタウリの巨体生物のリヴァイアサンがビル影から姿を現した。

「どこが、愉快的仲間なのよ…」

「バナナ博士！」

「もう一人の僕と戦ったユウスケなら、あいつと、戦えそうだけど、仕方ないね。」

「バナナ！今なら、おもいつきり怒ってもいいぞ。」

低空飛行で、こちらが戦いやすくしようとするアイアンマンに食らいつこうとするリ

ヴァイアサンに向かって歩くバナー博士が顔を振り向きながら答えた。

「僕の秘密を教えようか？」

…いつも怒ってる。」

その瞬間、バナー博士の体が筋肉質な緑色の体に膨張していきながら、ハルクになると、リヴァイアサンの頭を殴りつける。

リヴァイアサンは、頭部を打ち付けられて、その場で、ひっくり返りそうになったが、アイアンマンのミサイルと、俺の銃撃で体がちぎれとんでいった。

それを見たチタウリの連中は、威嚇か、悲鳴を上げるように、こちらに叫びはじめた。

それをハルクの叫び声で、封殺し。

ホークアイは、新たな矢をつがえて、周囲を見渡し。

ハンマーを握り直したソー。

俺は、デイエンドドライバーにカードを挿入して。

エージェント・ロマノフは銃をリロードして準備を整え。

赤のクウガが、中腰に構えをとる。

キャプテンアメリカが、周囲の状況を把握する。

そして近くに、アイアンマンが、叫ぶチタウリを見ながら降りてきた。

上を見ると、リヴァイアサンがさらに投入されていくのが見えた。

『どうするキャプテン？』

「いいかみんな、通路が閉じるまで、敵を押し留めろ。

バートン、屋上に行って上から見張れ。

敵の位置を知らせろ。

スターク！君は外側だ。

3ブロックから外に出る奴は押し戻すか灰にしてやれ。」

「なるほど、運んでくれ。」

『ああ、飛ばすぞ。落ちるなよ!』

キャプテンが作戦と同時に指示を出し、アイアンマンが、ホークアイを運んで行く。

「ソー。君はあの通路を頼む、出てくる奴を君の雷で痺れさせてやれ。」

ソーはハンマーを振り回して飛んで行ってしまふ。

「ユウスケは、バイクが動きそうなら、SPIRITSのメンバーに声を掛けて、陸路の敵を倒して回ってくれ!」

「わかりました!」

クウガがビートゴウラムにまたがって、走り出した。

「ナターシャは、僕とここで戦闘を続ける。」

ミスターハザマは、みんなのフォローだ。

どこにロキが現れても対応できるように、準備をしておいてくれ。」

「はい!」

「ハルク!…暴れろ。」

ニヤリと笑ったハルクが、チタウリに向かって高く飛び上がっていった。

「ああ。そろそろそのミスターというのは言いにくいでしょうから、普通にハザマでいいですよ。」

「そうね。そうするわ。」

俺達の上空をチタウリの飛行艇が飛んで行くのに向けて、俺は手をかざす。

するとそこに銀色のオーロラが現れて飛行艇を飲み込み、別の方向から来る飛行艇に向けて出口を開いて、ぶつけどあつた。

それを直接見えていたホークアイから声上がる。

「今のは何だ!？」

「ハザマの能力だ。ドイツでは一度僕も体験した。」

「固定の罠のようなものです!」

通用するのは数回もないと思います!

それと、この場の戦力を増やします!」

K A M E N R I D E A G I T O

K A M E N R I D E H I B I K I

K A M E N R I D E K I V A

三人の仮面ライダーを呼び出して、戦闘に参加させる。

「俺の能力で仮面ライダーを擬似的に呼び出したものです。」

本来の彼らよりも戦闘能力は落ちますし、実態を持ったデータに近いので、倒されればデータとなって消失します。

立ち回りに気をつけてください！」

「手数が増えるのは、ありがたい！」

そして、向かってくるチタウリを倒し続けていると

「それにしてもきりがないわよ。あの通路を閉じないと。」

「どんな兵器でもびくともしない。」

キューブのところに行くなら乗り物がある。」

「それなら。」

FINAL FORMRIDE A A A AGITO

召喚したアギトをアギトトルネイダーに変化させる

「何今の、ちよつと気持ち悪い変化したわよ。」

「そこは気にしないでください。そういう仕様なので。」

それより、これに乗ればある程度、自分が思う通りに動くことができます。」

「わかったわ。使わせてもらおうわ。」

エーリエント・ロマノフがおつかなびつくりしながら、アギトトルネイダーに立ち上がる。ゆつくりとだが、浮き上がりはじめる。

「使えそうか？」

「そうね、楽しそう。」

行くわよ。」

アギトトルネイダーに立って、移動し始めたが、次第にチタウリの飛行艇に追われはじめたようでその中にロキもいたようだ。

「ホークアイ、ちょっと助けてくれない？」

後ろから放たれる光弾を避けながらの移動はまだ不慣れな乗り物のせいでもあつただろうが、さすがに数が多いようで、こちらに戻って来ながら話す事が聞こえてくる。

「キャプテン、ロマノフさんの方にロキが現れたそうなので、俺は上に上がります。」

キバ、一緒に行くぞ。

響鬼はキャプテンについていってくれ。

何かあれば、盾になつてもキャプテンを守ってくれよ。」

響鬼がうなずいたのを確認すると、オーロラを発生させて、ホークアイがいる屋上にキバと共に現れる。

「その能力は便利だな。」

「ロキはどうしていますか？」

「ナターシャが、こつちに引き連れてる。」

来たな。」

ホークアイが矢をつがえると、飛行艇に乗るロキに放つが、ロキはその矢を掴んでしまふ。

「どうするんです？！」

「まあ見てろ。」

すると、矢の先端が爆発して、その余波で飛行艇も爆発、そしてロキがスタークタワーの方に吹き飛ばされていた。

「抜け駆けはしない約束では？」

「自称、神様とかいう奴なら、あの程度なら死なんだろう。」

俺が操られた分の一発をくれてやっただけだ。

それより、チャンスじゃないのか？」

スタークタワーのビルの近くにいたハルクがロキに気づいたようで、移動をはじめるのが見えた。

「わかりました。」

ATTACK RIDE ILLUSION

俺の分身を作り出して、オーロラを発生させ、分身をロキに送った。

「分身まで作り出せるのか。」

「ロキに対しては分身を囮役にしましたので、俺を倒したと思わせて、ハルクをぶつけるのが最適でしょう。」

ああ、ロキの高笑いの最中に、ハルクに掴まって、振り回されているようですね。」

「バナーも、随分ロキに恨みがあるようだったからな。」

キャプテン！マディソンの先42丁目の銀行に、大勢取り残されてる。」

「今行く。」

下を見れば、急ぐキャプテンを守るように響鬼が杖から炎を放っているのが見えた。

「矢がなくなりそうなら言ってください。」

特大の一発がありますので。」

「あん？」

そんなものがあるならさっさとよこせ。」

「わかりました。」

FINAL FORM RIDE K I K I K I K I V A

「何だそれ？ 関節が、変な方向に曲がったぞ。」

「そういう仕様なので。それと、この状態はそれほど重さは感じませんよ。」

「貸して見ろ。」

「本当だな。すぐに撃てるのか？」

「ちよつと待つてください。」

FINAL ATTACK RIDE K I K I K I K I V A

「いつでもどうぞ！」

ホークアイは、巨大な弓矢のキバアローを使い、こちらに向かって壁を登って来ていたチタウリをまとめて打ち落としていた。

そして、撃ち終わると、ホークアイからキバアローがキバに戻り、データとして消失していった。

「一発限りだったが、助かった。

次はどうする？ 矢は残り少ないぞ。」

「いえ、五代さんが来ました。」

そこには、ビートゴウラムから切り離されてゴウラムになり、青のクウガが、それに捕まりながらこちらに飛んで来ていた。

「ゴウラムの修復のためにビートチェイサーが使えなくなったので、俺もバートンさんの援護をします。」

狭間さんは、キューブのところへ行ってください！

超変身！」

「今度は緑色か。」

おい、今、拳銃がボウガンに変化したぞ。

もはや何でもありだなお前ら。」

「わかりました。」

後は、お願いします！」

ホークアイの眩きを受け流しつつ、俺は再びオーロラを発生させて、この場をあとに

し、キューブの装置近くに現れるのだった。

スタークタワーの屋上に設置された装置の近くに行くと、エージェント・ロマノフが、装置の近くにいた男性と話している。

その手には、ロキの杖が握られていて、キューブのバリアを通そうとしていた。

「エージェント・ロマノフ。」

「悪いわね。」

さっきの乗り物は、降りたら消えちゃったわよ。」

「いえ、それはわかっていたことですから。」

ロキの杖をどうするんです？」

「この杖で、キューブのバリアを破って通路を塞ぐわ。」

みんな聞こえる？ 通路を塞げるわよ。」

キャプテンのGOサインが、聞こえたが、トニー・スタークが待ったをかける。

『待ってくれ。ミサイルが来る。』

1分もない。

捨てるには、ちょうどいい穴だ。』

「ミサイル？」

核でこの街ごと吹き飛ばすつもりか!?

政治家は何を考えているんだ!?!」

俺は思わず声を荒げられると、ビルの真下から、アイアンマンが白いミサイルを抱えて通路の穴に飛び込んでいくのが見えた。

「戻ってこられるのか…」

キャプテンの眩きが、インカムを通して聞こえてくる。

「俺が、ゲートを開きます!」

爆発音がる閉じ行く通路の穴を見つめ、すぐにオーロラを発生させて、アイアンマンの回収を試みる。

出口のオーロラを発生させるが、まだ出て来ない。

「来た!」

五代さんの叫び声が響き渡り、アイアンマンが、地面に横たわるも、その動きはない。「息はあるか!?!」

キャプテンの声がして、急いで俺もオーロラで下に向かった。

そこでは、悲痛な沈黙が続く中、ソーが、アイアンマンのマスクを剥ぎ取り、ハルクが近寄って来ていた。

沈黙に耐えきれなかったハルクが一声唸ると、驚く声と共に、トニー・スタークが目覚めました。

「何なんだよ!？」

「何がどうなった？」

誰もキスしてないよな!？」

マスクを外していたキャプテンが、小さく何度もうなずいて、言う。

「勝ったぞ。」

「ああ、やった、やったな！」

明日は休みにしよう。働き過ぎた。

そうだ、シャワルマって知ってる？ 近くにうまいシャワルマの店があるんだ。一度食べて見たくてね。」

「まだ終わってない。」

小さくため息をした、ソーの一言にキャプテンが振り向く。

「じゃあ終わったらシャワルマだ。」

トニー・スタークの声に、俺もその場に近づいて、ロキが倒れているだろう、スタークタワーにオーロラを開いた。

アベンジャーズの全員集結に恐れをなしたのか、ロキは、おとなしく降参しながら酒を要求。

もちろん、酒などやることはなく、そのまま拘束してSHIELDの部隊に連行されていった。

この次元では違うのか、キューブが紛失することもなく、ロキの逃走もなかった。

俺が連れて来たSPIRITSのメンバーの不法入国は、12時間以内に日本に帰れば、罪に問われることはなくなり、野上良太郎の変身が解けると、モモタロスは無事に再契約ができたのか、その場に残っていた。

野上良太郎は、モモタロスが原因で、ほかの人達の迷惑になりたくなかったようで、先にオーロラで日本に帰っていった。

そして、トニー・スタークの宣言通り、近くのシャウルマの店を貸し切りにして、いつの間にかハルクから戻っていたバナー博士と、残りのSPIRITSのメンバーを含めて全員にご馳走してくれた。

そして数日後

アベンジャーズのメンバーと、五代さんと俺、そして、チタウリの通路を塞ぐのに協

力してくれた男性、セルヴィグ博士が、ソーがアスガルドへ、ロキを連れて帰るための立会人として集まっていた。

ソーが四次元キューブが入った容器を持ち、もう片方の持ち手をロキに握らせて、起動。

青い光の粒子と共に、転移していった。

アベンジャーズのメンバーは、バラバラに別れていった。

俺と五代さんもまた、オーロラをくぐって、日本に帰るのだった。

間章

通りすがりの男

side 狭間玄乃

ニューヨークの戦いから1ヶ月、俺はSPIRITSの本部に軟禁状態になっていた。

俺だけではない。五代さん、沢木哲也さん、日高仁志さん、紅渡さん、野上良太郎さんの計6名。

つまり、ニューヨークの戦いに参加した人員は、行動が制限され、本部内の施設で寝泊まりしていた。

こうなつた理由は、いくつかある。

まず、噂レベルの存在だった仮面ライダーが実在して、アメリカのヒーローと一緒に宇宙人を打ち倒したということが、街頭インタビューと一緒に、ネットワークで広がってしまった。

日本にとつては仮面ライダーは特撮映像作品でしかなく、一般人の認識としてはひと昔前の子供の見るもので、流行しなかつたからこそその噂レベルだったのだが。

救助された人々からは感謝の言葉や、ヒーローに対する是正の言葉がほとんどだったが、それがネットワーク上になると、まさに賛否両論で、むしろ隠れ潜んでいることに不満の声が大きくなりつつあった。

次に、俺の能力だ。

やはり、元々俺が考えていたように、オーロラによるゲート移動は強力過ぎたのだ。

日本国内の闇の手の連中だけではなく、米国の圧力や、テシリングス、ヒドラ、中華系マフィアや、中東系のテロ組織に狙われているらしいという情報が入ってきていて、身動きが取れなくなってしまう。

幸い、俺はこの世界では戸籍のみの存在なので、もとの世界に帰っていれば問題ないのだが、どう事態が動くかがわからないので、出来るだけこの世界にいて欲しいと言われている。

ちなみに、飛電其雄さんの場合は元々が、ニューヨークに出張で来ていて、変身も混乱し始めに乗じてだったらしいし、主に高速移動による救助活動がほとんどだったらしいので、あまり話題にならなかつたみたいだ。

仮面ライダーのあり方そのものとしては、それが一番正解なのかもしれない。

それと、俺だけではなく、野上良太郎さんの方にも、本部内にいる必要の理由がある。

椅子に座っていびきをかいているマタギにも似ている、キンタロス。

時折、女性職員を口説こうとして、モモタロスに頭をはたかれている、ウラタロス。画用紙にクレヨンで落書きをしているらしい、リュウタロス。

こいつらの出現である。

元々はモモタロスがこの本部内ならば自由にしてもいいという条件で、野上良太郎さんがついて回っていたようなのだが、いつの間にか、増えていた。

コーヒーを吹いて二度見するという体験を真面目にするととは思わなかったが、理由を聞いても、わからないという。

ウラタロスの仮説では、あの戦いの折りに、モモタロスと再契約したことで、野上良太郎さんとのつながりができ、そのつながりにタロスズがないのはおかしいと契約が反応してここに現れたのではないか？

ということらしい。

まあキンタロスの、知らんがな。という言葉に思わず納得しそうになった俺もいる。電王関係は結構あのタロスズにおいて見ると複雑怪奇な存在だし、ギャグキャラとは、こういうものといわれれば、納得するしかないというのが結論だ。

今後は、いつの間にか、ジークが増えてやしないかと、周囲を見渡すのが癖になりつつあった。

さて、本部内で生活をはじめて一月ほどの時に、女性職員の日常会話で気になる話をしていた。

曰く、行きつけの喫茶店がいつの間にか、写真館になっていた。

曰く、そのおじいさんが入れるコーヒーが美味しい。

曰く、俺様系のカメラマンが、イケメンらしい。

…門矢士がこの世界に来ている!?

え？いなかったのかと、いう第4の壁の向こうから声が聞こえそうだが、そもそも、この世界には仮面ライダーがいなかった。

門矢士は仮面ライダーデイクイドそのものなので、デイクイドがないイコール、門矢士もいないということになる。

例えいたとしても、それは顔が似た名前の違う赤の他人ということだ。

この世界での、門矢士の役割も気になるが、海東大樹さんもこの世界にくる可能性が出てきたことが、俺にとっては恐怖でしかない。

そんなことを悶々と考えながら、俺が寝泊まりしている部屋にいる時だった。

俺が出してはいない銀色のオーロラが目の前に現れた。

ついに来たかと思っていたら、現れたのは、トレンチコートを着た眼鏡の男性だった。

「…鳴滝さんか。良かった。」

「良かった？何を言っているのかはわからんが、私を知っているようだな。」

「では、私が現れた理由もわかるだろう。」

「門矢士だろ？」

「そうだ！あの悪魔がこの世界に現れたのだ！」

奴を倒さなければ、この世界は破壊される。

「この世界の仮面ライダーとして、あの破壊者を倒さなければならぬ!!」

「この世界の仮面ライダーっていう呼び方をするなら、あんたが会いに行くのは、ウィザード、操真晴人だと思うよ。」

俺はどつちかというと、別の世界の仮面ライダーだし、というかダイエンドの二代目だし。」

「ダイエンドの二代目だと？」

私の能力では、お前がこの世界のライダーなのだが。」

「鳴滝さんの持つてる能力ってなんなの？」

率直過ぎた疑問だったからだろうか、無言でオーロラの中に消えてしまった。

「逃げたなあの人。」

それよりも、身動きできない今の俺にどうしろと？

ようやく、デイエンドの二代目として戦う覚悟ができてきたっていうのに、どうなるんだらう？

…保険はかけておくべきか。

それと、あのことも報告しないとな。」

そして俺は、一度クラインの壺の内部に行くのだった。

side 門矢士

世界から世界に旅を続けて行けば、俺の世界が見つかるかもしれない。

そういう考えで、新たな世界にきたかと思えば、久しぶりに写真真館での移動だった。

最近は、俺個人での移動が多いように思えたが、まあ、一人の方が動きやすいことでもあるんだが。

「土君。この世界はどういう世界なんでしょうか？」

「さあな。いつものように、トラブルの方が俺にやってくるだろうから、その時に対処すればいい。」

相変わらず、夏ミカンは心配性だし、ユウスケは一人ではりきって外出していた。

ユウスケのことだから、この世界の情報を俺に言いにくるだろうさ。

「さつきまでいた客から何か聞かなかったのか？」

まあ、いつもみたいに喫茶店に間違われて、じいさんのコーヒーを飲んだだけだったけどな。」

「おじいちゃんは、いいんです。」

お客さんが来てくれるだけでも楽しそうですから。

土君こそ、さつきの人達のことを勝手に写真撮っていたじゃないですか！」

「俺がいるべき世界かの確認をしていただけだろうが。」

相変わらず、ぼやけた写真しか撮れなかったということとは、この世界も俺の世界じゃないんだろうな。

あわただしい足音が聞こえる。

これはユウスケだな。

「士！海東さんが！」

「…やあ、士…つッ。」

そこにはぼろぼろで傷だらけの海東を支えてきたユウスケがいた。

「大変!?おじいちゃん救急箱！」

「大変だ！ユウスケ君。ソファーに座らせてやって。」

「この世界のことを調べようとしていたら、路地裏に倒れてたんだ。」

夏ミカンと、じいさんがぼろぼろの海東を座らせて、治療しようとする。

「どうしたんだ海東？随分とぼろぼろだな。」

「この世界のライダーのせいさ。見たまえ。」

ユウスケの手に握られていたのは、一面にクウガとデイエンド、そして仮面ライダーではないヒーロー達が写った新聞だった。

「お前、ニューヨークで宇宙人と戦ったのか？」

「残念だけど、それは僕じゃない。」

「何だ？また奪われたのか？」

シンケンジャーの世界で一度奪われていたことを思い出して、だんだんと笑えてきた。

「土君！笑ったら駄目ですよ！」

「君にとつては残念かもしれないけど、ちゃんと持つてる。」

この男はディエンドライバーをキザったらしく、回しなから取り出している。

「じゃあ何だ？ディエンドライバーが2つあったのか？」

「僕が大シヨツカーから奪った時、ディエンドライバーは一つだけだった。」

あの時にもう一つあったなら、旧タイプのドライバーということになる。

だけど、写っているのはネオ化されたドライバーだ。

つまり、写っているのは、未来の僕か、僕のドライバーを未来で誰かが使っているということになる。」

「でも、この世界に未来の海東さんがいるのは、電王の世界で言われたのが確かなら、おかしいことになりませう。」

「過去が変われば未来も変わる。」

つまり、海東がこの世界の今の時代にいるのは、同じ人物が二人いることになってしまっからな。

どちらの人物が優先されるのかわからなくなってしまう、この世界の崩壊につながる。

…だいたいわかった。

つまり、お前を倒せば、俺がこの世界ですべきことが完了して、この世界から移動できるってことだ！」

「どうしてそうなるんですか!？」

別の人が変身している場合の話を無視してるじゃないですか!」

「親指をたてるな夏ミカン!？」

今のは、ほんのジョークだ。」

そういうやり取りをしていると、出入り口から音がして、誰かが入ってくる。

また喫茶店と間違えた客だろうか、壮年の男だった。

「やっぱり栄ちゃんの店だった。」

久しぶりだね。」

「なっ!？」

琉ちゃんじゃないか。どうしてここに?」

その男は、真つ直ぐ、じいさんのところに行くと、親しそうに話出した。

「じいさんの知り合いか？」

「そうだね、親しい友人だよ。だけど…」

「積もる話をしたいけれど、私も忙しいんだ。」

よかつたら一緒に来てもらえないだろうか？

ああ、君達も一緒にね。」

そういうと、どこからともなく、執事やらメイドやらが現れて、外に止まっていたリムジンに乗せられて、どこかに行くことになってしまった。

通りすがりの男②

side 門矢士

連れてこられたのは、街中にある雑居ビルのうちのひとつだった。

その地下駐車場にリムジンが止まって、車から降りると、そろそろと歩き出す。リムジンの中で珍しく治療を受けた海東も、興味深くまわりを見渡していた。

「何だ？『東洋特殊撮影技術研究株式会社』？」

「ここが目的地なのか？」

ビル内にかかげられていたのはその名前だけで、外の会社や、テナントが入ってはいないようだった。

しかし、件の壮年の男も執事もメイドも何も言わずに黙っていて、先に行くように促され、仕方なくよくわからないまま進む。

特殊撮影技術を名打っているように、撮影で使うのだろう、壁紙や小道具、セットの一部のようなものまで見えた。

「何なんでしょう？」

撮影会社の社長さんということなんでしょうか？」

「さあな。いきなり撮影何てことはないだろうが、いいかげん、説明ぐらいはして欲しい。」

「エレベーターか？」

何だ、重役よろしく上に行くのか、と思いきや

「どうやら、地下に向かっていているみたいだね。」

海東が感覚的にわかるようで、言ってくる。

地下何階かはわからないがエレベーターを降りると、横の壁には『SPIRITS』というロゴ入りの社名のようなプレートが張り付けられていて、それを見た海東が、小さく

「…へえ♪?」

と言っているのが聞こえた。

また何か企んでいるのかと呆れていると、空港にあるような金属探知機のゲートのよ
うなものがあつた。

「何だか、ずいぶんものものしいな。」

「確かに。」

ユウスケの眩きに、夏ミカンがうなずいていると、ゲートの向こうから声がかかった。

「琉兵衛さん。案内ありがとうございます。」

「なんのなんの。久しぶりに栄ちゃんと話ができたんだ。」

「いい息抜きになったよ。」

「皆さんも、ようこそ『SPIRITS』へ。」

このゲートは電源を切っているのです、そのまま入って来てください。」

その男は、良くも悪くも、普通の男のように見えた。

背は高い方だろうが、日本人らしい黒髪黒目の丸刈り頭で眼鏡をかけた、よれよれのスーツに身を包んだサラリーマン然としているその男は、俺達がゲートを通ると、海東の方を向いて言う。

「ああ、こちらにある機材、道具等の持ち出し、窃盗は、消耗品以外は勘弁していただきたいです。」

「僕の事を知ってるみたいだね。」

「はい。人が行う事に対するイメージというものは、一度行くと、それが印象付けされてしまいますから。」

あなたがそれを行った場合、我々SPIRITSはあなたを信用できなくなりますので。」

「別に僕は、信用を求めてないんだけど。」

でも、SPIRITSという名前の組織には、とても興味が湧くよ。
特に僕達、仮面ライダーにとってはね。」

「おい海東。どういうことだ？」

「士は、知らないか。」

かつて1号から始まった昭和仮面ライダー達がいた、とある世界があつてね。

ここでは、10番目の仮面ライダー、Z^{ゼッ}X^{クロス}を巡つて、人類とシヨツカーから連なる敵組織BADANとの戦いがあつていたんだ。

その世界では、9人の仮面ライダー達や、協力者達による戦闘組織があつてね、それが『SPIRITS』という名前なのさ。」

「何？じゃあこの世界でもBADANとかいうのがいるのか？」

「いいえ。この世界にはBADANは居ません。」

しかし、あの組織を理想としてつけさせてもらっていますので。

まずは、こちらへ。」

その男に連れられて、通路を進むと、会議室のような部屋に通された。

促されたままに俺達は座ると、男は俺達の正面に座り、琉兵衛とか言われた男も、その近くに座っていた。

すると、俺達の席の脇から青い制服を着た女性が、暖かいお茶と茶菓子を置いてまわ

る。

「士君。あの制服、うちの写真館に喫茶店と間違えて入って来た人達も着ていました。」
「そういえば、そうだな。」

つまり、このSPIRITSとかいう組織の隊員だったということか。」
「そうなります。」

彼女達の井戸端会議を俺が聞いていなければ、あなた方を早急にお連れすることができなかつたでしょうね。」

ですが、一人少々手遅れの方もいるようですが。」

男は、所々治療した後がある海東をチラリと見て言う、姿勢を正して話を始めた。

「はじめまして。俺の名前は、狭間玄乃。」

この世界の仮面ライダー相互支援及び、装備研究開発組織『SPIRITS』の交渉役兼アドバイザーです。」

あなた方は、門矢土さん、海東大樹さん、小野寺ユウスケさん、光夏海さん、光栄次郎さん、そして、キバーラさんで、よろしいでしょうか？」

「ん？」

今、聞き捨てならない事が聞こえたような。

「キバーラちゃん。いつの間にいたんだい？」

「面白そうだったから栄ちゃんに隠れてただけど、すぐに見つかるとは思わなかったわ〜」

本当にいつのまにかじいさんの肩に乗ったキバーラが、じいさんと話している。

「白い羽が見え隠れしていましたので。」

話しを進めます。

単刀直入にお聞きします。今のあなた方はどの時系列のあなた方でしょうか？」

「時系列…ですか？」

「どういう意味だ。」

夏ミカンの呟きに、俺は狭間とかいう男に問い詰めた。

「あなた方への対応の仕方が変わりますので。」

では、門矢士さん、あなたは、ジオウの世界には行きましたか？」

「なせお前がそれを知ってる？」

「知っている。としか答えようがないです。」

あなたの作戦で、ジオウの世界を破壊し、そしてここに来た。そういう認識で構いませんか？」

「ああ、そうだ。」

それがどうした?」

「安心しました。オーマジオウによってあなたが倒され、あなたの旅が終わった時間軸も知っていますのでそういう時系列でなくてよかったです。」

「ちよつと、土君! ジオウの世界を破壊したってどういうことですか!?

それに、旅が終わるって。」

「この世界に来たことでIFの世界になったってことだろ。」

それで、どう対応が変わるっていうんだ?」

「この世界について、全てをお話することができます。」

ということになります。」

まず、海東大樹さん。あなたのケガは恐らく俺の責任です。すみませんでした。」

「なぜお前が謝る?」

どうせ海東は、この世界のお宝とやらを狙って返り討ちになっただけだろうさ。」

「今回はお宝をまだ調べられてないから狙いようがないよ。」

僕は、この世界に降り立った時に、狙い打ちされたように襲われたのさ、どうもそいつらは、オーロラの移動能力を欲しているみたいだったね。」

「俺もまた、オーロラの移動能力を使用できるのです。」

俺が派手に暴れたせいでこの能力の便利性を認識した奴らが、探し回っているので

しよう。

あわよくば、手中に納めようとしています。」

「ちよつと待つてくれ、あんたもオーロラの移動能力が使えるだつて？」

俺達を知つてるのは、土や海東さん、それに鳴滝さんくらいで、…まさか。」

ユウスケは恐らく、光写真館で見た新聞を思い出しているのだろう。

「あんたが新聞に載つていた宇宙人と戦つたつていうデイエンドか？」

「はい。正確に言えば二代目デイエンドです。」

「二代目？」

俺達は、海東に注目するが、海東は首をふつた。

「僕はまだ、後継者を選んだ覚えはないよ。」

「俺が失業して公園で黄昏ている時に、50代ぐらいの海東大樹さんがオーロラとともに現れて、いきなり二代目を指名してきたんです。」

「デイエンドライバーが俺を選んだと言つて。」

「50代？確かに、それくらいなら引退を考えなくてはならないけど、わざわざ君を選ぶ理由はわからないね。」

「それは今でも、俺自身でも答えを出しようがありません。」

しかし、俺はようやく二代目として、デイエンドとして戦う覚悟をしました。

そのとたんに、あなた方がこの世界に現れたんです。」

「僕が、二代目からデイエンドドライバーを奪うと思っているのかい？」

確かに君の実力を知る必要はあるだろうけど、未来の僕が選んだということはそれだけ君が期待されているということでもある。

頑張りたまえ。」

「ありがとうございます。」

海東の言葉に感動したのか、その男は頭を下げてきた。

「それで？この世界はどういう世界なんだい？」

「今さら、師匠面か海東。」

「この世界では、そうさせてもらうつもりさ。」

何せこれだけの知識があつて、この組織にも顔が利く。

しかし、僕も外を出歩くのは難しいなら、そうしたほうが面白そうだということさ。」

「よろしくお願いします。海東さん。」

では、説明に戻ります。」

その狭間というデイエンドの二代目はこの世界のことを話してくれる。

そしてしばらく情報をやり取りしていると、部屋の外が騒がしくなってきた。

というよりも、聞いたことがあるような声だった。

「ディケイドがいるってのはここか！」

足で蹴破つて入ってきたのは、電王の世界にいたイマジン達だった。

「お前らまでこの世界にいるとはな。」

「俺の体を取り戻すのに協力してくれたのは、まあいい。だけどな、この世界を破壊され

る訳にはいかねえんだよ！」

「落ち着いて、先輩。」

「お久しぶりだね。夏海さん。」

「ディケイド倒すけど、いいよね？」

「答えは、おっと、熊ちゃん押さないでよ！」

「泣けるで！」

「ちよつとみんな…狭間さんすみません。」

「モモタロス達を止めようとしたんですけど。」

「止められませんでしたか。」

「まあいいです。粗方話は終わりましたので。」

「ああ、そうだ、門矢さん！」

「あなた方がこの世界でやらなければならぬ事はわかりますか？」

「まだ、はつきりしない。」

この世界をある程度滞在すればわかるかもな！」

モモタロス達にユウスケを盾にしながら、狭間に答えると、狭間の提案で食堂に移動することになった。

仮面ライダーになりたい男

side 狭間玄乃

イマジン達にやいのやいの言われながら、門矢士一行を食堂に連れて行くと、そこには沢山の人達が集まっていた。

俺を心配してきてくれた鳴海壮吉さんと、娘を含めた鳴海探偵事務所の面々に、忙しいだろうに、わざわざ駆けつけてくれた火野映司さんとボディガードの人達、本部で謹慎中なのをいいことに、食堂の厨房からこちらを覗く沢木哲也さんと、どんぶりを受けてついていた日高仁志さん、警察関係者と話をしている五代さん、研究所は休憩中なのかさまざまな研究機関の者達も座っている。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様です。沢木さん、厨房でわざわざ手伝わなくても。」

「俺が好きでやっていますから。」

それに、ハロウインの次はクリスマスシーズンですから、料理の練習をしておきたいんですよ。

あと、俺だけじゃあないですよ。」

カウンターから厨房を覗くと、天道総司と、矢車想が料理をしていた。

「何やってるんですか!？」

「破壊者とやらに興味が湧いてな。」

そうしたら食堂で、沢木のやつが料理を出していたから、俺の料理の方がうまいとわからせるためだ。

お婆ちゃんと言っていた。食事の時間には天使が降りてくる。

そういう神聖な時間だ。とな。

つまり、俺の料理は神聖な料理ということだ。」

「俺の料理は天道よりもうまい。それを証明する。」

この二人は旅館には来なかった人たちだが、ゼクターとベルトは送ったから記憶は取り戻している。

二人の妹さんと両親と普通に生活していたはずなのだか、やっぱり天道総司は無職だった。

そしてなぜか矢車想と影山瞬は地獄兄弟になっていた。

カブト系のゼクターの装着者は自由人が多く、そういう意味では沢木哲也さんも自由人といえるだろうな。

天道語録の意味も良くわからないし、何か言うのも馬鹿馬鹿しくなってきたので、鳴海壮吉さんのところに行く。

「大丈夫だったみたいだな。」

だから言っておいただろう、誠心誠意話をすれば認めてもらえるだろうと。

最初に会った頃から見ると、お前は氣迫に満ちた一人前の男だ。」

「ありがとうございます。」

俺もSPIRITSの一員になったという自覚がありますから、先代とはなんとか和解したかったです。

アドバイス、ありがとうございます。」

門矢士一行は、イマジン達以外にもSPIRITSの人たちに声をかけられていて、打ち解けられそうだと思った。

「(保険はいつ使うかわからないから持っていよう。あとは…)」

俺は琉兵衛さんに向かってうなずくと、琉兵衛さんもうなずいてくれた。

栄次郎さんを連れて来てもらえるようにという合図だ。

「俺も行った方がいいか?」

鳴海壮吉さんの一言もうれしかったが、これは俺が背負わなければならない事だと、考えを固める。

「いえ、大丈夫です。」

鳴海さんは、皆さんを見ていてください。」

と、俺はこっそりとその部屋から出て行く。

そして、行く先は科学技術研究室が併設された医務室である。

そして、リクライニング仕様の医療ベッドに横たわるのは、本郷猛に似ている男、警視総監である。

「琉ちゃん、私を会わせたい人っていうのはこの人なのかい？」

「ああそうだ。この人はこの組織のトップといえる人で、警視総監の本郷猛さんだ。」

「こんな姿で、申し訳ない。」

はじめてお目にかかる。

現警視総監であり、SPIRITSの総隊長の本郷猛です。」

「驚かれましたか？」

顔も似ている。名前も同じ。

仮面ライダー1号の本郷猛とそっくりに見えましたか？」

光栄次郎さん。

いえ、死神博士と、お呼びした方がいいでしょうか？」

栄次郎さんは、本郷さんの顔を見て戸惑い、名前を聞いて何も言えなくなり、俺が聞

くと、底冷えするような殺気を感じた。

「孫娘には言うんじゃないぞ。」

と、飄々としたおじいさんから、地の底から響くような声を発する歴戦の猛者に変わっていた。

俺はお腹に力を入れて、なんでもないように振る舞う。

「一つ、お願いを聞いてくれれば、言う必要もなくなるでしょう。」

「言ってみろ。」

「…本郷さんを改造人間にさせていただきたい。」

「何?。」

「狭間君、もういい。」

自分から話そう。

あなた方がこの場所に来て、狭間君にこの世界の事を聞いたでしょう。

元々、この世界の仮面ライダーは、特撮映像作品のひとつで、流行はしませんでしたが、私の子供のころからのヒーローでした。

仮面ライダー1号の本郷猛と同じ読みで同じ文字の『猛』という名前だった事もあり、子供のころから仮面ライダーごっこを遊び、そして成長していくに連れて、正義の道で

ある警察官の道を選びました。

裕福な妻に婿入りしたことで、『本郷』の名字になり、事件の捜査のうちに、犯人が仕掛けた爆発物に巻き込まれ、顔の治療後に、この顔になりました。

当時、これは運命だと思いました。

治療後のリハビリに加えて肉体改造を試み、柔道、空手、剣道など、さまざまな武道を学び、そして作中の本郷猛の頭脳を目指して学んでいるうちに、この地位にまで駆け上がりました。

しかし、仮面ライダーにはなれないのだと、私の憧れなのだと心に言い聞かせていた。「」

「ふん、そこに、その小僧が現れたということか。」
「そうです。」

本物の仮面ライダーが現れ、警察機関がその組織を運営できるのだとわかり歓喜した。

私の夢が目の前にあるのだと。

しかし、そんな事に目を向けている場合ではなかったのです。

闇の手という暴力団を束ねていると思われるもの達による、民間人の集団誘拐。

これには警察官僚が援助してしたことが内々で発覚しました。

警察組織のトップにいながら、民間人の誘拐を援助するような者達がいることに気づけないほど、愚かになっていた。

私は、警察機関内の信頼できる部下とともに、警察組織を正しい道へと導くのだと、考えを改め、懸命に動いていたそんな時に、倒れてしまった。」

「病か…」

「はい。すい臓がんのステージIVでした。」

憧れだけを求め、回りを見なかった愚かな男の末路だと。

しかし、私がこのまま死ねば、警察は腐敗したままになってしまう。

SPIRITSの科学者達や、狭間君にお願いしてどうか治療できないかと、試行錯誤するも治療は不可能でした。」

「なるほど、そんな時に私達がこの世界に来たことで、知識を持った小僧に、改造人間のスペシャリストである、私の事を聞いたのか。」

「お願いだ。仮面ライダーになりたいなどという夢のためではない、日本の未来を守る警察官として、私を改造人間にしてほしいのです。」

「…皮肉な物だ。」

シヨッカーで嫌がる者達を改造人間にしてきて正義に倒される側だった私が、正義のために改造人間を造る事になるとはな。」

「それでは!？」

「いいだろう。しかし!」

孫娘を思い、二度と改造人間を造るまいと考えていた私を引つ張り出すのだ。

本郷猛への戒めとして、私の技術の全てを使つて、貴様をライダーにしてやろう。」

「ありがとう……ございます!」

本郷さんがベッドの上で涙を流しながら頭を動かしていた。

俺もまた、腰を曲げて、無言で頭を下げる。

「ふん、孫娘達にしばらく留守にする言い訳をしてくる。」

次に来た時に、私が必要な機材を手配できるようにしておけ。」

「栄ちゃん、悪かったね。」

「琉ちゃんの頼みだ。」

その代わり、前に一緒におでんを食べた時のようなうまい酒が飲みたいよ。シヨツカーのビールは味が若かったからね。」

「用意しよう。」

そういう会話が部屋の外から聞こえてきていた。

「狭間君。お願いできるだろうか?」

「わかりました。」

俺もまた、科学技術研究室の人たちに話をしに行くのだった。

side 門矢士

「え?!おじいちゃん。数日帰って来ないんですか?」

「どうした夏ミカン?」

食堂で、結構うまい麻婆豆腐を食べていると、夏ミカンの声が上がった。

「おじいちゃんが、数日、写真館を留守にするって言ってます。」

「やあ、土君。実は友人の琉ちゃんが招待してくれてね。」

美味しいお酒が飲めるっていうから、数日だけお世話になろうかと思うんだ。

ああ、私の世話は、メイドさんがやってくれるみたいだから大丈夫だよ。」

「良いんじゃないか?」

こんな、固つ苦しい孫娘の世話を毎日してきたんだ。

たまには、羽目を外すのも必要だろうさ。」

「土君!光家秘伝、笑いのツボ!」

「ワハハ、こんな、ところで、ワハハ、使うなよ。」

ワハハ、麻婆豆腐を食ってる、ワハハ、途中だろうが。ワハハ」

「誰が固っ苦しい孫娘ですか!？」

「ワハハ、お前しか、ワハハ、いないだろうが。ワハハ」

なんだなんだと、周りの連中が近づいてきていた。

全く、余計な事しやがって、これくらうと、毎回笑い過ぎてまともに動けなくなるんだっての。

s i d e
???

「それが、話にあつたウイルスか？」

「ああそうだ。君たちが開発しているナノマシンを併用すれば、デメリットなく使う事ができる。」

ただし、約束通り。」

「レアメタルの入手は手配しよう。」

それより、これは君が作ったのか？」

「それは、私の友人が作った物だね。」

私の目的のために役にたてるんだ。彼も本望だろう。」

そうだと、私が造るドライバーはあんな量産品ではなく、私が最強になればそれでいいのだと、いまでは思う。

飛電インテリジェンスは私のプライドを傷つけた。

あんな凡人達が作った代物が、私よりも先に記録に残るなど、認められない。

もう手段を選んではいけない。

あらゆる手段を使って、最強のドライバーを作り出すのだ。

そう思いながら、ホログラム通信を切り、私は端末に映るライトブルーのライダーの画像を消した。

世界樹からきた男

side 狭間玄乃

12月、いよいよクリスマスシーズン感が一気に広まり、町のあちこちがサンタクロースやらトナカイやらの飾りが増えてきたこの頃、本郷さんの手術は無事に終わり、現在、強すぎるパワー、感覚を日常生活ができるようにリハビリ中。

警察機関の運営は副総監という人に任せてあるらしいので今のところは大丈夫だろう。

門矢士一行の滞在も続いていて、旅の目的がまだはつきりしないまま、この世界の月日が過ぎていく。

何で町並みの話ができるのか、それは俺を狙う輩、とある暴力団組織の摘発が行われたからだ。

正確には、警察組織の一部摘発の隠れ蓑で行われたもので、一般市民の目を反らすためらしい。

闇の手の連中は基本、日本中の暴力団組織を情報提供元として動いている。

中には、政界や警察官僚が元になっていた情報提供もあることがわかっているが。

その中でも、ヤのつく人たちの中には、義理人情や仁義の筋を通そうとする、まともな人たちもいる。

そういう人たち、特に組長さんは本郷さんと飲み仲間だったりするので、暴力団の摘発の援助に回ったり、一般市民に被害がないように自主的にパトロールをしたりしてくれている。

見知らぬ外国人がうろうろしていたら、彼らがエスコートしてくれるようになっていた。

見た目は怖いけれど、幼稚園のお散歩中の元気なあいさつに、きちんと答えてくれる気持ちのいい人もいるのだ。

そういうことがあった結果、今では普通に散歩し、俺の生身の顔写真が広まっているわけじゃないので、有名人みたいな反応もない。

実に有意義な時間を過ごさせていた。

駄菓子菓子、もとい、だがしかし、アベンジャーズの後のクリスマスシーズンには、アイアンマン3が始まり、マイティソー・ダークワールド、キャプテンアメリカ・ウィンターソルジャーと続いてゆく。

マイティソー・ダークワールドに関わりが持てるとは思えないから、一応除外するにしても、アイアンマン3と、キャプテンアメリカ・ウィンターソルジャーにはある程度

関わって、ストーリーの改善をはかりたいところだ。

実際、アベンジャーズに関わった事で、フィル・コールソンの命が助かり、ニューヨークの市民の被害を減らすことができた。

エージェントオブシールドのT・A・H・I・T・I・I（タヒチ）計画への影響は心配だが、キャプテンアメリカ・ウインターソルジャーの流れが始まれば、どっちにしろヒドラの連中に巻き込まれていくだろう。

現在の問題はアイアンマン3、特にトニー・スタークである。

あの人は、俺の事をいまだに五代さんの付き人扱いをしてくれる。

したがって、決まって俺に連絡がくる時は五代さんと話がしたいという連絡だった。

俺から五代さんの端末に、トニー・スタークの連絡先を登録してからは、途端に俺に連絡が入って来なくなり、トニー・スターク経由から、キャプテンや、ホークアイ、バナー博士やSHIELDの関係者から連絡が入ってくるようだった。

相変わらず、俺に連絡が入って来るのは仕事の連絡だけなので、ちよつと寂しい思いをしていたりしている。

そんな時に連絡が入ってきたのは意外な人からだった。

SPIRITS本部 応接室

「どうも、お久しぶりです。」

呉島貴虎さん。」

「久しぶりだな、狭間。」

「弟さんの様子はどうですか？」

「あいつには、記憶を戻らさせてはいない。」

あいつが選んだ事とはいえ、兄弟で殺し合うなどあつてはならないことだからな。

この世界では、ダンスにかまけている様ではないのでな、わが社を共に育てていく社員にするべく、教育を施している。」

「…ほどほどに。」

それで、今回はどういったお話ですか？」

「まずは、ドライバーだ。」

貴虎さんは、アタッシユケースを机の上に置くと、その中身、戦極ドライバーが入っているのを見せてくれた。

俺のクラインの坪の中には、元々、量産タイプの戦極ドライバーとゲネシスドライバーが一つずつと、レジエンドライダーを含んだロックシードが大量に置かれていて、

ユグドラシルコーポレーション、正確には呉島貴虎さんに、戦極ドライバーとロックシードをいくつか送っており、記憶が戻っているのもこの人だけのはずなのだ。

あの旅館での話の後に、弟さんの記憶が戻るロックシード入りの箱を渡したが、まだ保管中らしいので、いまだに、なぜ戦極凌馬があの旅館に来ていたのかがよくわからないでいた。

そして、目の前のアタッシユケースの中には、戦極ドライバーが3つ入っているのが見える。

「戦極ドライバーの解析が完了した。

この3つは、先行量産品になる。」

「ありがとうございます。」

これで、SPIRITS内の無茶をする人を減らす事ができます。」

「それで、この先もこのドライバーは、ユグドラシルコーポレーションの主力製品として量産し、SPIRITSに卸していく事になる。」

だが、このドライバーの解析をしていた凌馬が、最近様子がおかしくてな。」

「あの人なら、たまたま、SPIRITS内でみましたよ。」

「そこだ。」

凌馬は、私がドライバーの解析を頼み、ただの会議と称してあの旅館に行った。

だが、興味が湧いたとあの旅館についてきていた。

そして、SPIRITSが設立されると、真っ先に参加している。

最近では、ドライバーの解析が終わるやいなや、やけに精力的だ。」

「研究者としては、正しい姿勢なのでは？」

「見てもらいたい物がある。」

そう言つて、貴虎さんは、自分の懐から戦極ドライバーを取り出すと、それをテーブルの上に置き、ノートパソコンと接続コードを取り出すと、戦極ドライバーとつないで、パソコンの画面を開いた。

「このドライバーは、狭間から送られてきたオリジナルだ。」

そして、画面を見比べればわかるだろうが、オリジナルと、解析されて量産されたドライバーには、明らかにデータ量に差があった。

凌馬に言われたのは、専用化できるか、それがオミットされたかの差だと言われたが、私はどうにも違和感を感じて、自ら解析を行った。」

画面には、良くわからない数字や文字、図形が乱雑になった物が写し出されていたが、貴虎さんが、操作をすると、それらがパズルのように移動して整えられていく。

「これは……」

「私の記憶にあるように、別の世界の凌馬の研究資料だ。」

ヘルヘイムの森の研究や、インベス、クラック、オーバーロード、そして黄金の果実。あの世界の凌馬は、全てのドライバーに、バックアップを仕込んでいた事になる。

凌馬は解析をはじめて、真っ先にこのバックアップに気づいたんだろう。

だから、あの旅館に参加していた。」

「そんな…」

では、今の彼は。」

「別のドライバーを造るために動いているんだらう。」

「ゲネシスドライバーですね。」

俺は一つ現物を持っています。」

俺は、クラインの壺からゲネシスドライバーを引っ張り出した。

「私の記憶を呼び覚ますような男だ。」

やはり持っていたか。」

「欲しいですか？」

「…もしもこの世界の凌馬がゲネシスドライバーを作り出せば、私も必要になるかもしれないとは思っていた。」

「迷っているか？」

「正直、この戦極ドライバーでさえ、私は怖い。」

本来これは、ヘルヘイムの森の果実の栄養を取り込むために開発された物だ。

この戦極ドライバーを使用する度に、この世界にヘルヘイムの森が影響していくのではないかと考えてしまう。

ゲネシスドライバーならばなおさらだ。

しかし、凌馬の暴走を考えれば、奴を倒すのは私の役目なのではないかと、その結論に至る。」

「…では、貴虎さんには、こちらを差し上げましょう。」

俺は、再び、クラインの壺を開くと、一つの角ばった、緑色のロックシードを取り出した。

「そうか、これも持っていたのか…わかった。」

もしも、この世界の凌馬が暴走し、ゲネシスドライバーで悪事を働くようなことがあれば、このロックシードを使わせてもらおう。」

貴虎さんは、オリジナルの戦極ドライバーと一緒にその『S・K・L・S』と書かれたロックシードを懐に仕舞いこんだ。

「だから言ってるだろうが。」

俺はSPIRITSとか言うのには、関わるつもりはないって。」

「でも、その割には、あの旅館に参加したし、私とも再会した。」

それに、この間は、黒い和装の変な奴らから人を守って、ケガしてたじゃない。

ファイズになれなくても、これがあれば、巧は戦えるんだし、貰ついてもいいんじゃないの？」

「ぐっ……」

正直、あの旅館に行ったことは人生で一番の選択の誤りだと思っている。

俺がファイズであり、オルフェノクだった記憶をファイズフォンが送られてきた時に思い出した。

あの手紙が意味深だったから思わず行ってしまったが、今思えば、無視していた方がよかったと思っている。

口うるさい真理も記憶を取り戻してるし、今では、暇なのかと思うぐらい、会いにくるし、さらには、仮面ライダーとか言うやつらの組織から、この狭間という男が会いにくる始末。

あの旅館での必死さと、映像には驚いたが、だからと言って、オルフェノクのいない今の生活を乱されるのには、うんざりしてる。

まあ、確かに、闇の手とかいうやつらがオルフェノクの変わりにはいて、実際に人が襲われていた現場に居合わせて、思わず体が動き、見ず知らずの奴を助けて、俺がケガをした事もある。

あの時に、ファイズギアがあればと思つた事もある。

「大丈夫ですよ。この戦極ドライバーがあれば、ファイズギアのように副作用もなく、変身することができます。

それに、あなたがこれを受けとつたからといって、SPIRITSに入つて欲しいなんてことは言いませんよ。」

「俺は、あんたの言い方が、強引なセールスマンみたいで気に入らない。」

「たーくーみー!」

もう!…狭間さん。それは私が受けとつておきます。

ひねくれてる巧には、よく、言い聞かせておきますから。」

「おい! 真理、余計な…」

「ありがとう! ございます!」

では、取り扱い説明書も入れておきますので、お使いください。

それでは、失礼します。」

そう言つて、帰つていつてしまった。

アイアンマン3編

始まりを告げる電話

side 狭間玄乃

始まりは、五代さんからの連絡だった。

『狭間さん。スタークさんと最近、話をしましたか?』

「五代さん。

いきなり何ですか?というか、端末越しの会話が英語って、もしかしてアメリカにいます?」

『はい。スタークさんにパーティーに招待されたんですけど、あれ?』

狭間さんは招待されてないんですか?』

「されてませんよ。」

ええ、されてません。ここのところスターク氏とは、仕事の話もなく、ましてやプライベートでパーティーなんて。」

『あー、すみません。』

狭間さん疲れてるんですね。すみません』

「いえ。こちらにも、嫌みを言っちゃってしまい、申し訳ない。

それで、彼がどうかしたんですか？」

『実は今、スタークさんの友人の方がいまして。』

『画面越しにすまない。』

トニーの友人のジェームス・ローデイ・ローズ空軍大佐だ。』

端末の画面越しには、どこかのレストランと思える場所にいる五代さんと、黒人の男性が映る。

「ああ、あのアイアンパトリオットの。

はじめまして、ゲンナイ・ハザマです。」

『そう、そのアイアンパトリオット。』

アンケートで選ばれたんだ。いい名前だろう？

：いや、そうじゃなくて、ここのところ、トニーは寝てないようで、精神が病んできているみたいなんだ。

あのニューヨークの宇宙人が来てからあいつは、アイアンスーツを作り続けている。さつき一緒に昼食を食べていたら、発作のような物が起きて、スーツを着込むと落ち着いたようだった。

ユウスケから聞いたが、君は日本で影響力のある人物だと聞いた。

日本で、そういうった医者に心たあたりはないだろうか？」

「申し訳ない。」

俺の知り合いには医者は、外科医ぐらいで、精神科医には知り合いはいません。

五代さん。もしもいたとしたら、どうするつもりだったんですか？」

『それは、狭間さんの能力で。』

思ったとおり、オーロラを使って、行き来するつもりだったようだった。

「五代さん。何のためにパスポートという物があると思っっているんですか？」

『ニューヨークでは、沢木さん達を連れて来ていましたよね。』

「あの時は、人命優先の緊急時でしたし、政府とのやりとりで12時間以内に国内から退去しなければならぬという取り決めをしていました。」

ローズ大佐、そういう訳です。申し訳ない。」

『いや、駄目で元々だったんだ。可能性があったただけでもありがたかった。』

ユウスケ、ありがとう。』

「五代さん。アメリカにはどれくらい滞在する予定何ですか？」

『後、2〜3日で帰ろうと思ってました。』

「滞在場所は？」

『モーターホテルですけど。』

「では、モーターを引き払い、スターク氏の家で泊まれるように交渉してみてください。見返りは…そうですね、クウガの能力や、バイクのアップデート、ゴウラムについて技術交流ができないかとか、そういう風な話をしてみてください。」

『ええ!』

大丈夫何ですか?そんなこととして。』

「スターク氏の精神病は恐らく、ニューヨークのチタウリの出現していた通路の内部を見た事での不安からくる物でしょう。」

一緒に戦った人物が近くにいれば、彼の不安も和らぐと思います。

料理を作ってやったり、話を聞くだけでもいいかもしれません。」

『まるで、狭間さんが精神科医みたいですね。』

「素人考えですよ。」

必要ならば、グロンギの事も話してかまいませんよ。

ニューヨークの戦いと同じぐらいの体験話ならば、彼も話をしてくれるかもしれませんし。」

『はい。がんばってみます!』

「ああ、それと、テンリングスというテロ組織が、アメリカでは話題のようです。」

あの組織は、俺の能力を欲していたという情報もありました。

十分に気をつけてください。」

『はい、わかりました。』

それじゃあ。』

五代さんとの連絡が切れると、アイアンマン3が始まった事を知った。

俺も、アメリカに行く準備を整えようと、行動を開始した。

side 門矢士

この世界には、今まで旅をしてきた世界の中でも、最も長く滞在している。

俺の役割もいまだにはつきりしないし、海東はすっかり後方師匠面で優遇されている。

ユウスケは、この世界のクウガがアメリカに行ったことで話相手がいないのか、今では絶版でプレミア物らしい仮面ライダーSPIRITSの漫画を読んでいる。

夏ミカンは、戦闘がほとんどない事に、何だかんだ楽しんでいるようだ。

それに、じいさんの友人から貰ったという酒を飲んで潰れているじいさんの介抱もしている。

とにかく、この世界は不思議な世界だ。

本来ならば、仮面ライダーはこの世界では、マイナーな映像作品でしかない空想上のものだった。

なのに、ライダー達になっていたはずのやつらが普通に暮らしている。まるで、ライダーの歴史だけを抜き取った世界だ。

さらには、海東が未来の異世界で後継者を指名している。

その後継者がそれまでに集めたお宝をこの世界でばら蒔いているのは笑えたが、それが二代目の選択ならば応援してやるのも先輩のつとめか：

この世界の未来、ある一定の時間軸にはどうやら、なんらかの強い力が働いているらしく、俺の能力を持ってしても、2018年以降には移動できないようだった。

この期間はやはり、ジオウ、常磐ソウゴとなんらかの関係があるのかもしれないと、本人を探してみたが、見つけれはしても、何故か本人に会うことができなくなっていた。

オーマジオウの干渉か、はたまたそれ以外の要因か。

狭間が、この世界をまるで、『常磐ソウゴが、オーマジオウになるためにライダー達の歴史を継承と称して、抜き取った世界』と、称したくなるのもまあわかる。

俺も、そういう印象を持ってしまったからだ。

2018年以降にいけないのは、俺の、ディケイドの歴史も抜き取られてしまったか

らなのか、俺だけでは、わからなかった。

SPIRITSの本部とやらの場所も廃虚同然だったし、ライダー達の姿を見かけることもなかった。

何かに見られているような気がしたが、気配もしない不気味さを感じて、この2012年の時間軸に戻ってきていた。

いや、逆に気配が減っていくような…

「…君。…さ君。…土君！」

「ん？どうした夏ミカン。」

「さっきから何考えこんでいるんですか？

顔にこーんなシワ寄せて変な顔になってましたよ。」

「プツ、アハハははは！」

夏ミカン。お前、その顔なら、笑いのツボなんて必要ないな。」

「土君！…もう！」

せっかく人が心配して聞いたっていうのに！」

「お前の、その顔は、反則だろ。」

はー、苦しかった。

別に何も小難しい事なんて考えちゃいない。

最近が平和すぎて、俺のやるべき事つてのがわからないままになっていると思っただけだ。」

「そうですね。」

私たちが来てから、この世界で戦闘なんてしてませんし、事情は聞きましたけど、世界の崩壊の危機つてわけでもないみたいですし。」

そんな話をしていると、狭間に渡された端末が反応した。

電話を取ると、画面表示にして欲しいと言われたので画面を操作して、机の上に置く。

ユウスケもなんだなんだと、近づいてきた。

『皆さん、お久しぶりです。』

クリスマスシーズン中で、気を休めているところを申し訳ない。』

「いや、むしろ暇していたぐらいだ。」

さすがに、何も無い日がこうも続くとは思ってなかったからな。」

『それについても関係することです。』

現在、この世界のクウガ、五代雄介さんが、アメリカに行っている事はご存じだと思います。』

「そうだな。こっちのユウスケも暇してるからな。」

そう言うと、目の前のユウスケは不満そうな顔をしていた。

『彼は今、アメリカのヒーロー、アイアンマンこと、トニー・スターク氏のパーティーにお呼ばれされています。』

まあ、一緒に戦った中に俺もいたのに、俺も呼ばれてないのは不満ですが、そこはともかく、スターク氏の友人にあたる人物がテロ行為に巻き込まれたという情報が入ったので、自分もアメリカへ発ち、先ほど空港に到着したのですが、現地のニュース番組で、スターク氏がテロリストを挑発。

しかも、丁寧に見住所を公言してしまいました。

五代さんに連絡を取ったところ、その友人という方の護衛として、病院に残っているそうです。

彼も、スターク氏の挑発行為は、俺の電話ではじめて知ったそうで、俺も五代さんも、これからスターク氏の住所に向かいます。』

「それで、俺たちにどうして欲しいんだ？」

『あなた方は、この世界では、パスポートを取得できないので、助力をお願いする際に秘密裏にオーロラの能力でお呼びすることになるかもしれません。』

相手は、テンリングスというテロ組織で、日本でも俺のオーロラ能力を狙っていたほ

どの、大きな組織と思われれます。

皆さんには、これから一週間から10日ほどの間に、オーロラ能力の通路が現れた際には、警戒をして二の足を踏まずに飛び込んでもらいたいというのがお願いになります。』

「ずいぶんあいまいな期間だな。」

『それでは、こうしましょう。』

夜間の間だけ。その認識でお願いします。

パスポートもなく、政府との交渉もなく、秘密裏にこちらに来てもらうことになるでしょうから。

もしも、夜間の間ならば、戦闘も市民の目が向きにくいと思いますので。』

「俺は、今からでも行けるよ?」

「おい、ユウスケ。」

『では、ユウスケさんは、先ほどの期間中にいつでも行けるように待機しておいてください。』

「それでは!」

「きれちゃいましたね。」

「おい、ユウスケ。」

俺が、苦情をつけたように思われたじゃないか。」

「え、違うのか？」

「ただの確認のつもりだったのに、お前ときたら…」

「狭間さん、ずいぶんと急いでるようでしたね。」

「アメリカで、一緒に宇宙人と戦った仲間みたいなものだろうからな。」

…はあ。しょうがない。待機しておくか。」

俺達は、通信のきれた端末を見つめ、いつくるかもわからない要請を待つことにした。

崩壊する物語

side 狭間玄乃

「…これで、ニンジャじゃない方の爆弾人間を殲滅ぐらいはできるはずだ。すみません！」

門矢士に連絡を入れ終えて、空港を出てタクシーに乗り込む。

「アイアンマンの家が公表されたでしょう！」

「そこまでお願いします。」

「お？ 兄ちゃんも見に行こうってのか。」

「観光かい？」

「仕事です。（…ス〇ン・リーに似ている。）

「この世界では、よくある顔の人なんだよな。」

「できれば、急いでください。」

「はこよ。」

運転手は、アイアンマンが、自分から住所を公表したから、これから観光客がわんさかくるんじゃないかっていうことを何度も言われながら、それをあいまいに答えていると、遠くの方に、それらしき建物が見えた。

運転手には、ここで下ろしてもらい、金を多めに払って、帰ってもらった。

俺は、オーロラ能力を使って、スターク邸の近くに出ると、入り口にはスターク氏らしくない車が止まっていて、もしかしてと思い、急いで入り口に向かった。

呼び鈴を鳴らして、そのまま玄関に向かうと、ガラスの出入口で、女性と話すトニー・スタークとペツパー・ポッツが見えた。

ギリギリだったようだ。

「スタークさん！」

「今度はだれだ!？」

『SPIRITSのハザマ氏です。』

「ハザマ!?! 誰だそれは!？」

「開けてくれてありがとう、J. A. R. V. I. S.。」

『どういたしまして。』

「お久しぶりです。スタークさん。」

「ニューヨークでは、お疲れさまでした。」

「ニューヨークのハザマ？」

ああ、付き人君か。

ユウスケならいないぞ。

全く、これからテロリストを相手にしなきゃいけないってのに、次から次に！」

「だから来たんじゃないですか！」

俺は、正面の海岸線からくるミサイルを見て、スターク氏を押し退けて下がらせ、窓の外にオーロラを出現させる。

外の報道ヘリが映しているものが、スターク氏のテレビに映っており、突如現れた銀色のカーテンのようなものが、飛来していたミサイルを飲み込んだのがわかる。

それと同時に、海中に出したミサイルが爆発して

、水柱が立つのもわかった。

『ポッツ様、ハンセン様、避難をお願いします。』

「そうね。そうするわ。」

「すまない、反応が遅れた。」

今のは感謝しておく。」

「一発だけじゃないですよ！」

まだ来ます！」

次々に現れるヘリコプターが武装を展開して、何発ものミサイルを撃ち込んでくるが、スターク邸に直撃コースのミサイルは飲み込まれ、そして、その数だけ水柱が上がった。

スタークさんは、女性二人を家の外まで連れ出して、戻って来た。

「ペツパーにケガがなくて済んだ。」

J. A. R. V. I. S. 「こいつは飛べないのか!？」

『少々お待ちください。調整中です。』

俺も変身したいのだが、相手の攻撃が激しく、オーロラを消せないでいた。

「もうそろそろ、五代さんも来るはずですよ！」

「うわっ!？」

オーロラ展開している真下の地表にミサイルが直撃して、建物がゆれ、その衝撃でオーロラが解除されてしまった。

次々に建物内に飛び込んでくる銃弾を柱の影に隠れてやり過ごし、デイエンドドライブを取り出す。

K A M E N R I D E

「変身！」

DI:::END!

ヘリコプターから放たれるミサイルや銃弾で、建物が徐々に崩れ、傾いていく。

「スタークさん！早く出ないと！」

「そうしたいのはやまやま何だが、寝坊助が起きてくれないんだよ。」

「寝坊助!? スーツのことですか？」

「せめて揺れがある程度止まってくれば、ゲートを出せるんですけどね。」

「当分は無理だな。」

「くそ、まだ撃ってくるのか!？」

床や、天井が崩れて様々なものが破壊されていく中、スタークさんは高そうなピアノを反動で飛ばして、ヘリの一機を撃墜する。

「一丁上がり。」

ATTACK RIDE BLAST

俺もなんとか挿入できたカードを使って攻撃を行い、ホーミング弾によりさらに一機を撃墜する。

「やるな。J. A. R. V. I. S. !」

『このスーツの戦闘状態が整っていません。』

スタークさんは自分から腕の装甲を取ると、小型のミサイルを取り出してへりに投げこみ、リパルサーでへりごと爆破。

「二丁上がり。」

しかし、そのへりは燃え上がりながら、スターク邸に突っ込み、周りを巻きこんでいく。

スタークさんは、それによって下の階へと落ちて行き、さらに俺とスタークさんにミサイルが撃ち込まれた。

俺はなんとか目の前にオーロラを出現させて、撃ってきたへりに帰っていくようにミサイルを出現させ、へりを撃ち落とすが、スタークさんの方からは、衝撃と叫び声が聞こえてくる。

いよいよ、建物が危ないかという時に、後ろから声が聞こえてきた。

「変身！」

青の金のクウガになった五代さんが、真っ直ぐスタークさんの方に飛び込んでいくのが見えて、俺も、建物に潰されないように滑り落ちながら海面に飛び込んだ。

海中で落下が遅くなった瓦礫をよけながら進むと、スーツの不調なのかクウガに抱えられて海中を進む姿が見えたので、俺も一緒になって抱えながら泳ぎ、スターク邸から離れた岩場にたどり着く。

「スタークさん！大丈夫ですか!？」

「ユウスケ、助かったよ。」

ああ、ハザマ、きみもな。」

息も絶え絶えとつらそうに呼吸をしながら、スタークさんが言ってくる。

「あいつら、ダミーとユーまで海中に落とすやがった。」

J. A. R. V. I. S. ! 行けるか!？」

『飛行は可能ですが、戦闘機能の調整に時間がかかりそうです。』

「スタークさん!?!無理をしてはいけませんよ。まずは休まないで。」

「まだ報道関係のヘリが飛んでいます。」

無闇に姿を晒せば、テロリストの連中がまたくるでしょう。

今は様子を見た方がいいんじゃないでしょうか？」

「J. A. R. V. I. S.、ペッパーに電話を掛ける。」

『了解しました。』

『っ、トニー！大丈夫なの!?!』

「やあ、ペッパーキみは無事か？すまなかつたよ。ゴメン。」

『私よりもあなたよ！あなたの屋敷が崩壊したのよ！』

報道では、あなたが死んだって。』

「僕はピンピンしてるよ。ああそうだ、

あのウサギは大きすぎた。それは認める。

それと、あの家にはしばらく近づくな。」

『あなたの家に来ていたハンセンさんの車で避難してるところよ。』

「そうか、しばらく彼女に匿って貰え。

テロリストの連中が彷徨っているからな。

それと、しばらく僕は姿を隠す。

ちやうど、死んだことになっているなら都合だ。」

『大丈夫なの？』

「助手も二人いるからな。」

この件の首謀者を見つけ出してやらなきや、僕の気がすまない。

まあなんとかするよ。」

『わかったわ。気をつけてね。』

俺と五代さんは顔を見合わせ、五代さんはため息をはき、俺は肩をすくめて、海岸から道路近くの茂みに移動しながら、変身を解いていった。

「それで？移動手段はあるのか？」

「俺が乗ってきたタクシーはもういないみたいですね。」

スーツだけが茂みに隠されている状態で、スタークさんと五代さんが話をするが、それがないと知ると二人が俺を見てきた。

「…ありますよ。」

俺は道脇に新品同様のキャンピングカーをオーロラで、出現させる。

「俺の個人の持ち物です。ナンバープレートが、日本の番号なので変えないといけませんね。」

「あんまり良いやつじゃないな。」

「あなたみたいに高級車を乗り回すような高い買い物がやすやすとできるほどお金の使

い方ができるわけではないので。

我慢していただきたい。」

「まあいい。スーツを乗せるのを手伝ってくれ。」

「ぶつけないでくださいよ。」

スタークさんは、J. A. R. V. I. S. に言つてスーツをバラバラにすると、それを俺と五代さんでキャンピングカーの中に運びこみ、スタークさんに車のナンバープレートを変えてもらった。

「さて、助手の仕事だ。」

ユウスケには、家の構造を覚えているだろうから、夜になったタイミングで、駐車場の地下のサーバルームに入って予備のリアクターを回収してきてくれ。

鍵は前に渡しただろ？」

「わかりました。」

「ハザマの車が右ハンドルだから、僕は運転したくない。助手その2は運転手だな。」

「目的地は？」

『スーツにはテネシー州ローズヒルが目的地として設定されています。』

ハッピー様が遭遇したテロの爆発とよく似ている事件があった場所です。』

「ハッピーっていうのは例のチャイニーズシアターの爆破に巻き込まれたスタークさん

の「ご友人の?」

「そうだ。J. A. R. V. I. S.; 事件をよく調べておけ、死亡した軍人の家族、行きつけのバー、何でもな。」

『了解しました。』

「それじゃあ、楽しいドライブの始まりだな。」

「五代さん、そちらの冷蔵庫に食材が入ってますからご自由にどうぞ。」

「そりゃいい。ユウスケの料理は絶品だからな。助手その1の仕事に料理も追加だ。」

ちなみに、今の僕はサンドイッチが食べたい。」

スタークさんの喜びように、五代さんの顔が微笑み、了承を告げると、さっそく、冷蔵庫の中を調べはじめた。

「J. A. R. V. I. S.; 目的地までナビをお願いできるか?」

『わかりました。車のシステムをハッキングします。』

そして、俺の運転で走り出し、途中のホームセンターや食品売場で、俺と五代さんで買い出しを行い、必要な部品や食材の補充をしながら向かった。

そして、夜。

俺のオーロラを崩壊したスターク邸から少し離れた場所に出口を設置して、五代さん

を行かせた。

「つくづく、その能力は反則くさいな。」

「これでも、いろいろと条件やデメリットがありますから。」

「この際だから言っておくが、ハザマ。」

君は、日本人らしい奥ゆかしい、自信がなさそうで、他者を優先して自分の前に出そうとしている性格のようだ。

僕からすれば、君は付き合いにくい。

ユウスケのような包容力もなさそうだし、料理といった特技があるわけでもなさそうだ。

だけど、まあ、今回のことには感謝してるし、僕をテロから守ろうと駆けつけたところも認めよう。

途中から、グダグダだったけどな。

だからまあ、今後からは付き人呼びはしないことにするよ。」

「取って来ましたよ！」

あれ？なんか変な雰囲気じゃないですか？」

「気のせいだと思います。」

「ずいぶん早かったですね。」

「俺が行ったところは人がいなかったの、チャンスだと思つてすぐに取りつてくれました。」

地下のセキュリティレベルをJ. A. R. V. I. S. をお願いして、最大にして戻つてきたので、多少は時間稼ぎになると思います。」

「よし、これで、スーツのエネルギーについての問題が解決したな。」

後はひとつ走り、ドライブの続きだ。

ハザマ、人生を楽しめ。」

最後の一言が、先ほどの続きほかったが、俺は普通に返事をして運転席に乗り込んだのだった。

ちなみに、深夜にこつそり、オーロラを使ってドライブを短縮しましたまる

恐怖!赤熱人間

side 狭間玄乃

道脇に車を止めて、運転席で毛布にくるまってまどろんでいると、声が聞こえてきた。

「なんかずいぶん早くないか？」

『ハザマ氏が、能力の使用によって、ルートを短縮しました。』

「…まあ、早いに越したことはないか。」

J. A. R. V. I. S.、ここはどの辺りだ？」

『テネシー州ローズヒルまで8キロの地点です。』

』

「スーツを出すなら手伝いましょうか？」

「なんだ、起きてたのか？」

「今、起きたんです。今は真夜中、開いていたとしても酒場ぐらいだと思えますよ。」

「僕は死人だからな、それくらいがちょうどいい。ユウスケを起こせ。スーツを出すぞ。」

俺は奥のベッドルームで気持ちよさそうに寝ていた五代さんを起こし、来るまでに買っておいた厚手の服を着こんで、外にでる。

「寒いですね。」

「眠気覚ましにはちようどいいです。」

スタークさんのスーツを運びましょうか。」

俺と五代さんは、助手よろしく、バラバラのスーツを車の外に運び出す。

すると、スタークさんが手を伸ばすと、それぞれのパーツがスタークさんに向かって飛んで行き、あつという間にアイアンマンスーツになっていた。

「J. A. R. V. I. S. どうだ？」

『マーク42、チェックを開始します。』

……各部との接続、チェック。

……飛行システム、チェック。

……戦闘システム、チェック。

システム、オールグリーン。

バッテリーは100%、内蔵武装の残量は97%です。』

「スタークさん！先に行くんですか？」

「いきなり、アイアンマンスーツで行けば驚かれるでしょうから、スーツだけ隠して潜入

した方がいいでしょう。

スーツを脱いだ場合の厚手の服を渡しておきます。」

俺は、あらかじめ手に持っていたバッグをスタークさんに渡した。

『助手も板についてきたな。』

ありがたくもらっておこう。

先に行く。』

スタークさんはそう言うと、バッグを持ったまま、飛んで行ってしまった。

「五代さん。乗って下さい。」

急ぎましょう。」

俺達は、キャンピングカーに乗り込み、その後を追うのだった。

町の中に入ると、明かりは街灯ぐらいで家々の電気は消えていたが、酒場と思われる場所の電気はついていて、さらに、こちらからは見えないが、道脇が、淡い光を放っていた。

俺は、五代さんが降りるのを確認すると、キャンピングカーを再びクラインの壺の中に戻し、酒場ではなく、光を放っていた道脇を見に行くことにした。

「これは……」

そこは、地面が何かの原因でえぐれ、その周りの壁には、黒い人型の模様のようなものが5つ残っていて、近くには萎れた花束と、ろうそくの火が揺れていた。

道から見えた光は、このろうそくの火だったようだ。

そして、そこには何枚もの服を重ね着してフードを被った人、スタークさんがいた。

「ユウスケ達も来たな。僕も今来たところだ。」

スーツを隠すのに手間取ってな。」

「スタークさん、これって。」

「ユウスケは、チャイニーズシアターの現場を見ていたんだったな。」

「はい。それと、同じように見えます。」

「僕もそう思う。J・A・R・V・I・S。」

『自殺したと思われるのは、チャド・デイヴィス、アメリカ陸軍軍曹。』

住民からは、従軍したことで精神を病み、爆弾を作って自殺したとのことでした。

その時点での最高温度は、摂氏3000度、チャイニーズシアターの爆発現場と比較すると、比較率96.78%で、同様の爆弾だと思われます。』

「そのチャドという男に家族は？」

『母親が一人、この町に在住しています。』

『酒場に入り浸りのようです。』

「そうか。さっきの酒場だな。」

俺達3人は、この時間で唯一電気がついていいる酒場に向かつて行く。

その酒場の近くには、車が止められていた。

「いらつしやい。こんな時間に珍しいな。」

なんにするんだ?」

「悪いが、チャド・デイヴィスの母親を探しているんだが。」

「なんだ、あの女の知り合いか?」

そこで、酔いつぶれている女だ。

酒が飲みたくなつたら呼んでくれ。」

指図されたテーブルに行くと、ブロンドで、長髪の女性がテーブルに顔をつけていた。

俺と五代さんは、近くの別のテーブル席に座り、様子を見ることにした。

「デイヴィスさん。」

「んん?なによ、まだ何かあるの?資料は渡したでしょう。」

「資料を渡した?誰に?」

「何?あんたあの女とは別口かい?」

「我々は息子さんの死は、自殺ではないと思っっている。」

利用されたんじゃないだろうか?その資料を渡した奴らに。」

「え？もしそうなら、私は息子の持つていた機密情報をみすみすそいつらに渡したって
いうこと？」

「もしかしたら、奴らはあなたも殺すつもりかもしれない。
送って行きますよ。」

ユウスケ。「

「え、俺ですか？」

まあ確かに、ご婦人のエスコートは必要ですよね。こちらへどうぞ。」

五代さんは、その女性の手を取ると、まるで自分の母親のように介護をしながら、立ち上がった。

「スタークさん。外の車で、男が俺達を見張つてますよ。」

「ハザマも気づいてたか。その男を締め上げれば、資料を持つていったという女のこと
もわかるだろ。」

俺は、五代さん達より先に酒場を出て、扉を開いて待ち、五代さん達を送り出す。

すると、近くに止めてあつた車から男が降りて来て言う。

「やつと来たか。余計な奴らもいるが、不幸だったと思つてくれや。」

その男は、拳を振り上げながら、女性を支えながら歩く五代さんに向かうが、その目の前に、上空からアイアンマンが、降つてきた。

『ストーリーカー君は、女性のエスコートにふさわしくないな。』

とスタークさんが、その男を捕まえようとしたが、その男はなんでもないうような顔で、アイアンマンスーツの腕を握った。

すると、男の手が赤く赤熱し始めて、スーツの腕を軋ませながら、握り潰そうとしてきた。

スタークさんは、もう片方の手を向けて、リパルサーを放とうとしたが、その腕も握られてしまい、腕を動かせなくなっていた。

「五代さん!早くご婦人の避難を!」

「わかりました!」

俺は、デイエンドライバーを取り出して、その男に向けるが、その男はお構い無しに、アイアンマンスーツを破壊しようとしたので、光弾を放つが、当たってえぐれたところが、赤く赤熱させながら、みるみる復元されていった。

スタークさんは、とっさに足のブースターを利用して、その男ごと体を振り回して男を投げ飛ばした。

するとその時、どこからともなく、スーツ姿の女性が現れて、俺に襲いかかろうとしたので、とっさに飛んで転がりながら躲し、デイエンドライバーの前部をスライドさせる。

KAMEN RIDER

そして、いつの間にか俺の目の前にいたその女に向かってトリガーを引いた。

「くっ、変、身！」

DI!END!

3色に形成されたシルエットが、その女を吹き飛ばして、変身を完了させる。

「アツハ〜！アイアンマンだけだと思ったら、ディエンドもいるなんて、楽しめそうね
！」

赤熱させた顔をこちらに向けながら、人間とは思えない身体能力で向かってきた。

「こいつら、ニンジャ並か？」

いや、再生力を含めればそれ以上か！」

俺の仮面ライダーとしての名前も、ニューヨークの戦いでクウガと一緒に広まっている。『仮面ライダー』は日本での呼び方で、他の国では固有名称だけが広まった。

ちなみに、ディエンドもクウガも、世間一般的には、アベンジャーズのメンバーと認識されているが、正確にはSPIRITSのメンバーである。

女は、予想以上に素早く、動きもテクニカルだ。

闇の手のニンジャのように武器ではなく、赤熱しているとはいえ、素手のためにこちらへのダメージはあまり感じなかったが、動きが変則的なために、こちらからも攻撃を当てにくく、カードを挿入する暇がなかった。

光弾を放つも、それを気にした風でもなく、女の腕や脚の骨も骨折してもすぐさま巻き戻しのようには回復していく。

すると、スタークさんが男と戦っている最中に放つたりパルサーを、男が回避した射線上に女がいて、女が吹き飛ばされた。

俺は、チャンスだと思い、カードを挿入する。

FINAL ATTACK RIDE DI DI DI DI END

『デイエンドドライバーを取り巻く、無数のカードが照準となり、渦を巻くように敵を捕捉して、そのカードを巨大なエネルギーに変え、渦の中を通すように発射する』『デイメーションシユート』を放った。

手足が曲がった状態の女が立ち上がり、赤熱した不気味な笑みを向けていたところを光線が襲いかかり、跡形も残さず消滅させた。

「エレン!？」

男が叫び、注意がこちらに向いたことを見逃すはずもなく、スタークさんは両手のリ
バルサーを放って、男を遠くに吹き飛ばしてしまった。

『ハザマ、男が乗っていた車に何か残ってないか?』

俺は変身を解くと、車からファイルを取り出してスタークさんに見せる。

スタークさんは顔のアーマーを開けると、そのファイルを受け取って、読みはじめた。

「スタークさん!ハザマさん!」

そのタイミングで、五代さんも戻ってきた。

「ご婦人は、大丈夫でしたか?」

「はい。だいぶお酒が入っていたようで、送りとどけたら、すぐに寝てしまいましたよ。

それより、敵は?」

「俺が相手をした女は、倒しました。

スタークさんの方の男はリバルサーで吹き飛ばしましたが、あの回復力なので、じきに
戻ってくるかもしれません。」

「ファイルを受け取った後に、ご婦人を始末するために余裕をこいていたのが、こいつら
の敗因だな。」

ハザマ、車はどこにある?」

「ゲート能力で出せますよ。」

「犯人が、わかった。すぐに出発するぞ。」

そう言うスタークさんの手には、ファイルの紙が、行方不明兵士を意味するM. I. A.ではなく、A. I. M. という会社だという意味が示されていた。

五代雄介の受難

side 狭間玄乃

再びキャンピングカーを呼び出して、バラバラのスーツを積み込み、男が戻って来ないうちに出発した。

「J. A. R. V. I. S.; ローディに電話をかけてくれ。」

『承知しました。』

『…なんだ!?!』

「お前さあ、興奮するとオレンジ色に光りだす人間を知ってるか？」

「こーう、パアツつと。」

『ああ、よくある!とところで誰だ!?!』

「僕だよ。前に僕が行方不明になった時は探しに来てくれたのに。」

「…何してんだ?」

『パキスタンの友達のところに来てる。

そっちは?』

「お前のスーツを作り直した連中ってA. I. M. って連中だろ。僕の番号を消すなんてな。」

『ああ、確かにそうだ。』

「軍の情報が知りたい。お前のIDは？」

『前と同じだ。"War Machine 68"』

「パスワードは？」

『お前がハッキングする度に変えなきゃ行けないんだぞ！』

「いいからパスワードだよ、早く言えつて。」

『はあ。"WAR MACHINE ROX"』

そのタイミングで、五代さんも吹き出す音が聞こえて、俺もスタークさんと一緒に笑ってしまった。

『…誰か一緒にいるのか？笑い声が聞こえるぞ。』

「助手のユウスケとハザマだ。楽しいキャンピングカーでの旅だぞ。」

それより、いいよそれ。

そっちの方がアイアンパトリオットよりよっぽど良い。」

『ユウスケだけじゃなく、日本にいたはずのミスターハザマまで巻き込んだのか!?!』

「ああ、ありがとう切るぞ。」

『ちよつ…』

「J. A. R. V. I. S.、衛星通信を使え。

A. I. M. の情報は全てだ。」

『了解しました。』

「ハザマ！パソコンはあるか？」

「引き出しに入ってますよ。冷蔵庫の横です！」

「…これか。」

使用してない新品じゃないか。いいぞ。

J. A. R. V. I. S. こっちに全部写せ。」

俺は、運転中のために音声しか聞こえないが、俺が戦ったエレン・ブラントという女性も「エクストリミス計画」という、身体的不自由な人間を超人にするという実験に参加していたようだ。

映像には、投与されて、苦しみだす者までいた。

「失敗すると爆発するというわけか。」

かなり不安定な代物だぞ。」

「これを、テンリングスという組織が使用していると。」

そういうことだったんですね。」

「マンダリンが買い取ったんだろう。」

J. A. R. V. I. S.、A. I. M. の衛星通信経路を調べろ。
マンダリンの放送の出どころを探れ。」

『了解しました。』

「ユウスケ、そろそろ、朝食の時間だ。」

「わかりました！腕によりをかけますね。」

「期待してる。」

「あー、じゃあ一旦トイレに行くんで、止まりますね。」

俺は、車を道脇に止めると、茂みに隠れて用を足した。

その時に、ふと、エレン・ブランドという女性を倒す直前、体にノイズのようなものが入ったように見えたことを思い出した。

「…（気のせいかな？）」

俺が車に戻り、ウエットティッシュで手を拭い、五代さんが作ったハムエッグと、ツナサンド、ホットミルクで朝食をとっていると、J. A. R. V. I. S. から連絡がきた。

「わかったか。」

極東、ヨーロッパ、北アフリカか、中東か？」

『なんと、マイアミでした。』

その一言に、俺達は顔を見合せ、そして五代さんが言う。

「マイアミですか？フロリダ州の？そんな近くに……」

J. A. R. V. I. S.、本当に？」

『間違いありません。』

「そうか。……作戦を考えるぞ。」

朝食を手早く取ると、再び出発するのだった。

side 門矢士

「あー!？」

「どうした、夏ミカン、うるさいぞー!」

いつ呼びだされるかわからないまま待機してはいるが、結局のところ、ここのとことと変わりない

生活を送っているが、夜に突然、夏ミカンが大声を上げた。

「時差ですよ。時差！日本とアメリカでは14から15時間ぐらいの時差があるんです！」

「向こうが夜中なら、こっちは昼だ。」

「問題ないだろ。」

「そうじゃなくて、ユウスケです！」

最近昼間に、張り切ってますし、夜はぐっすり寝てます。

狭間さんが向こうの昼間に呼ぶかもしれないなら、こっちは夜中ですよ！」

「そういえば、そうだったな。」

あのバカを起こす必要があるのか。

はあ、自業自得とはいえ、しょうがない。」

俺は、ユウスケの寝ている部屋に向かった。

side 狭間玄乃

マンダリンの放送の出どころと思われる付近に車を止めて、再びスーツを外に運び出す。

このスーツも、クラインの壺に入れられれば楽なんだか、スキヤニングでもされたら

たまらないと、こうやって、五代さんと一緒に運び出すしかなかったのだった。

そして、スーツのほとんどを車の下に隠していると、またJ. A. R. V. I. S. から連絡が入った。

『トニー様、ローズ大佐の反応が、屋敷の中にあります。』

「何？連絡は入れたか？」

『コールしましたが、反応がありません。』

「…そうか。【トニー君の正面からこんには作戦】が使えなくなつたな。

作戦変更だ。

僕が手薄な側面から侵入して、腕だけのスーツで数人を倒して、マンダリンを探す。

ユウスケは犬を誘き寄せれるっていう技が、あるんだつたよな？

それで番犬を混乱させられれば、ハザマが裏から侵入して、ローデイを探してくれ。

スーツごと閉じ込められているなら、中身のローデイはスーツを脱ぐのを抵抗しているだろう。

奴らの狙いはおそらく中身じゃないだろうからな。

ハザマはタイミングを見計らって、救出してくれ。

ユウスケは、一度車に戻って、僕のスーツを見張ってくれ。スーツが一斉に飛び出したら、スーツと一緒に侵入してくれ。戦闘になるだろうからな。」

「了解です。」

「わかりました！」

「よし、作戦開始だ。」

俺は、裏門を見張っていると、番犬が興奮したように走り出し、一緒にいた黒服の男がなにやら叫びながら走り出していなくなってしまった。

デイエンドライバーを取り出して、監視カメラの死角に入るように移動しながら、侵入していく。

時折いる見張りは、石を投げて注意を引いたり、興奮する番犬を捕まえてなだめようとしていた黒服の男の手伝いをしようと動き出した死角にまわって回避しながら、屋敷に侵入した。

屋敷の小部屋らしき場所に潜り込むと、カードを使用する。

K A M E N R I D E

「変身」

D I : E N D

A T T A C K R I D E I N V I S I B L E

透明になった俺は、足音や、巡回する兵士に気をつけながら、地下を目指す。

こういうのは、だいたい地下だろうと思っただらビンゴだった。

鎖に繋がれたアイアンパトリオットが力なくうなだれている。

見張りは二人、いや一人はローズヒルにいた男だ。

すると、アルドリッチ・キリアンが現れる

「スタークが、マヤを連れて逃走した。」

「あの女、裏切ったんですか？」

「見張りの一人はいらないだろう。スーツさえなければただの人間だからな。」

そう言って、見張りの一人は部屋から出て行き、アルドリッチ・キリアンがスーツを熟しはじめて、ローズ大佐がスーツから出ると、火を口から吐いて足止めして、気絶させられてしまった。

ローズヒルにいた男がアイアンパトリオットを運び出し、アルドリッチ・キリアンが居なくなったのを見計らって、姿を現して声をかける。

「ローズ大佐、大丈夫ですか？」

「ううっ…君は、デイエンド？」

「ということ、ミスターハザマか？」

「アイアンパトリオットはどうなった!？」

「残念ですが、アルドリッチ・キリアンに運び込まれてしまいました。」

ローズ大佐、お怪我は？」

「大丈夫だ。」

スタークが女性と逃走したとか聞いたぞ。

それに、ユウスケもいるんだろう？」

「はい。スタークさんに連絡を取ります。」

俺は、変身を解除すると、端末を取り出しして連絡を入れる。

『どうした？ローディは助けたのか？』

「代わってくれ。」

トニー、まだ屋敷の中にいるのか？」

『ああ、いるにはいるんだが…』

お前のスーツはどうなった？』

「残念だが、アルドリッチ・キリアンに奪われた。」

『そうか。大至急、屋敷の中にこい。』

会わせたい奴がいる。」

「切れたな。」

ありがとう。スタークが呼んでいるから向かうぞ。」

端末を受け取って、急いで向かう。

屋敷の中では、荒れ放題の部屋にスーツを脱いでいるスタークさんとその横には、足首がへこんだスーツが立っていて、部屋の端には、五代さんと、スタークさんの屋敷に行った時にいた女性がいる。

しかも、なんとというか若干引き気味の五代さんに、べったりくっついてるように見える。

「来たか。ああ、スーツはエクストリミス兵士との戦いで、足首の飛行部品を潰された。

修理しないとな。」

「それよりもスターク、もしかしてこいつは…」

来る途中で、倒れた黒服の男からローズ大佐が銃を奪いとり、警戒し、巡回兵を倒しながら来たのだが、部屋のソファアーベットでいびきをかいて寝ている男を見て驚く。

「ああマンダリンだ。キリアンに雇われたただの役者だそうだ。

おい！ペツパーはどこにいる!?!」

トレバーと名乗る思ったよりも小柄なひげ面の男が調子の狂うしゃべり方で、説明していく。

しかし、俺はその話も気になるのだが、五代さんとその女性の方が気になってしまう。

「うふふ。シャイなのね?」

「あ、あの、少し離れてもらえると……」

「あら？ 私のこと嫌い？」

「そうではなくて、ああ……」

狭間さん助けてください……」

「桜子さんに言いつけますよ。」

目の前のいちやつきっぷりにイラツときて、つい言ってしまった。

「な、何でそこで桜子さんの名前が……」

「へえ、サクラコって、誰？」

「考古学者の友人で……」

「まだ、友人、なのね？」

「私にもまだチャンスがあるじゃない♪？」

ちよつと冷めてしまったので、五代さんの方は放っておく事にした。

驚愕の Jack—in—the box

side 狭間玄乃

スタークさんと、ローズ大佐に凄まれ、銃を突き付けられ、怯えながらもどこか調子が狂うしやべり方をするトレバー・スラッターというおっさんは、後のシャン・チーでは重要な役割を担う人物でもある。

このおっさんは、缶ビールを飲みながら話すもんだから、話の内容は途切れ途切れだし、たまに自慢話を混ぜ込んでくる。

この度に、ローズ大佐の脅しの声がおっさんを襲って、そして再びアルドリッチ・キリアンの計画を話し出していた。

このおっさんは、ペッパーさんのことは知らないが、フロリダ沖のタンカーで、大統領をどうにかするという計画があるらしいと言っているようだった。

「おい、どうする？」

さすがに、今からじゃあ僕のスーツを修理しても大統領の救出は間に合わないぞ。「副大統領に連絡を入れる。

警備を敷いてもらおう。」

「そういえば、副大統領の娘の足を直す変わりに引き入れるとか言ってたな。」

「この情報は役に立つのか?」

「おいトニー、このおっさん、今になってめちやくちや重要なことを言ったぞ。」

「酔っ払ってんだろ。見逃してやれ。」

「そういえば、おいお前。確かモーターボート持つてるって言ってたよな。」

「ああ、使うなら、鍵は確か:付けっぱなしだったと思うよ。」

「そう言いながら、さらに缶ビールをあげて飲み始めている。」

「まったく、緊張感のないやつだ。」

「おい!そこのイチヤイチャカップルも行くぞ。」

そして、なんとか女性から離れようとする五代さんと、カップルと言われて嬉しそうにする姿が対象的に見えながら、その女性もついていった。

俺は個人的に確認したいことがあったので、そのおっさんに聞く。

「あんたはテンリングスじゃないんだよな?」

「ただの役者で、雇われたただだって。」

「じゃあ、アルドリッチ・キリアンは、俺、デイエンドの能力を欲してはいなかったか?」

「デイエンド?さあ、聞いたことないなあ。」

「:そうか。じゃあ、情報提供料代わりに、ひとつ言っとく。」

テンリングスを騙って表舞台に立ったあんたを、本物のテンリングスは許さないだろう。

じきにあんたを捕らえにくるはずだ。生き延びたければ、道化になることだ。

リア王とかな。」

「謝つてもだめかな？」

「二度は言わない。じゃあな。」

そして、俺が表に出ると、スタークさん達が待っていてくれたようだった。

「あの酔っ払いと何話してんだ？」

「SPIRITSの情報網では、テンリングスは俺のゲート能力を狙っているという情報がありました。」

それを聞いたんですが、アルドリッチ・キリアンからも何も聞いてないようでした。「お前さんも大変だな。」

「じゃあ、チームを分けるぞ。」

「その事なんです、俺に大統領の救出に行かせてほしいんです。」

「何だハザマ、お前の能力は、飛んでいる飛行機の中にも行けるのか？」

「いえ、そこまで万能でもありません。」

俺は空は飛ばませんが、乗り物がありますので。」

「そうか。」

それじゃ、僕と、ユウスケ、ミスハンセンはキャンピングカーだ、ユウスケは運転を頼む。

それと、スーツの修理が必要だからまた搬入を頼む。

ハザマと、ローディはモーターボートで行ってくれ。

ハザマはJ. A. R. V. I. S. にナビしてもらえ、端末と接続できるようにしておく。

大統領を救出次第、合流して、ベースキャンプに乗り込むぞ。

それと、J. A. R. V. I. S.。パーティーの準備だ。」

『ホームパーティープロトコルですね。』

了解しました。』

俺とローズ大佐は、屋敷に横付けされたモーターボートに乗り込むと、ローズ大佐の運転で海へと向かっていく。

「端末を起動してつと、これでいいの？」

『ハザマ様のGPS機能を利用して道案内を致します。』

「よろしく。」

「それで、どうするんだ!？」

「ごうします。」

KAMENRIDE

「変身!」

DI!END!

KAMENRIDE HIBIKI

FINAL FORMRIDE HI HI HI HIBIKI

「何か人が呼びだされたと思ったら、赤いでつかい鳥になっただぞ。」

「どうなってるんだ!？」

「そういう仕様なので、あんまり気にしないでください。」

では行きます！」

俺は、ヒビキアカネタカに、海面まで下がってもらって飛び乗り、上空へと向かった。上空でも、ライダーに変身しているからなのか、そこまで息苦しくもなく、寒くもなかった。

J. A. R. V. I. Sのナビを聞きながら、体感で20分ほど飛んでいると、飛行機が見えてくる。

『ハザマ様。目の前の飛行機に大統領が乗っていらつしやいます。』

「よし。あまり近づき過ぎると、バレルから上空に向かう。」

J. A. R. V. I. S. に返事をして、上空に向かうと、今まで抑えていた不安感が振り返ってきて、咄嗟にクラインの壺の中に入った。

J. A. R. V. I. S. との通信が途切れるが、今は保険を使って、不安感と、恐怖心をなんとか誤魔化し、クラインの壺の中で、再びデイエンドに変身して、今度はアギトを召喚、アギトトルネイダーに変化させて、入ったところと同じ場所に飛び出た。

そのまま滑るように飛行機の上まで近づくと、窓を覗いて確認する。

すると近くの窓に穴が空き、銃で撃たれたことがわかった。

「動いたか!?!」

俺は急いで出入り口に向かうと、扉が突き飛ばされて飛んできたので避けようとして

アギトトルネイダーを動かそうとしたが、それが飛行機に接触して体勢を崩し、整えるのに距離が離れてしまった。

飛行機に近づくと、出入り口の扉がなくなっていて、そこに勢いをつけて飛び込むと体を赤熱させたエクストリミス兵士、ローズ大佐を気絶させた奴が楽しそうな顔をして、こちらを見ていた。

「ダイエンドか？」

てつきりアイアンマンが来ると思ったが、まあいい。

お前はエレンの敵だ。

「ここで殺させてもらう。」

「大統領はどうした？」

「遅かったな。うちのボスが、鉄の愛国心とやらで連れてつたよ。」

あの飛んできた扉の時に出て行ったことがわかった。

そして、近くの部屋から救助を頼む声が聞こえるが、目の前の敵は見逃してもらえそうになかった。

なので、その扉の近くにオーロラを発生させた。

「何だ？自分だけ逃げようってのか？」

「違う。呼ぶだけだ。」

そのオーロラから、躓くように出てきたのは、別の世界のクウガである、小野寺ユウスケさんだった。

「えっ!?! どういう状況!?!」

その登場に顔をゆがめた男が、小野寺さんに向かおうとしたので、その男に組み付いた。

「混乱しているところ悪いですが、あなたの後ろの扉に、救助を待つ人がいます!」

小野寺さんは自力でゴウラムに変化できるでしょうから救助をお願いします!」

「わ、わかりました!」

変身!」

「何訳わかんねえことをぺちやくちやと!」

クウガだと? させるかよ!」

日本語が通じなかった男も、小野寺さんがクウガに変身して、焦ったのか、ポケットから何かの装置を取り出して、そのボタンを押した。

すると、その部屋から爆発音がして、悲鳴が上がり、そして遠ざかっていく。

「小野寺さん!」

「ええい! 南無三!」

その部屋に突入した小野寺クウガが俺の視線からいなくなつたが、飛び降りたような

音は聞こえた。

「くそっ！だけど、お前はここで倒す！」

この男まで野放しにできないと戦いを挑むが、ローズヒルで戦ったエレンとか言う人よりも頑丈で、パワーがあり、そして、デイエンドライバーの光弾で男の体がえぐれるが、回復が早く、すぐにふさがってしまう。

こちらにも、熱のエネルギーや、相手の攻撃がほとんど通じていないためにお互いが膠着状態になっていた。

だから俺は、相手の死角に入るように動いて隙を伺い、クラインの壺からナイフ状の武器、エターナルエッジを取り出して、右腕を斬り飛ばした。

だが、みるみるうちにその腕が、赤熱しながら再生し始めるところが見えて、一瞬動きを止めてしまい、男が俺を突き飛ばした。

そして、その男は落ちていたさつきと同じ装置を

拾って、もう一度ボタンを押すと、今度は機体が大きく揺れた。

「何をやった!?!」

「コックピットを爆破してやったのさ。」

「これでお前は殺せる。」

ならば、遠慮はいらないと、カードを挿入すると、突然、その男が苦しみ出して、頭

を不規則に振り回すと、その頭部が、オレンジ色の別のものに変わった。

「バグスターウイルスだど!？」

俺が驚くのもつかの間に、機体が見るみる傾きはじめて、急いで、出入り口に飛び付いた。

幸い、バグスターウイルスは、周囲の状況に適応できないらしく、座席に押し潰されていたので、そのまま飛び降りて、空中で、デイエンドライバーを操作する

FINALATTACKRIDE D I D I D I D I E N D

落下しながらあちこちが爆発させている飛行機に向けて、せめて飛行機の墜落で被害が出ないようにと、バグスターウイルスごとデイメンションシートで飛行機を撃ち抜いた。

そのまま俺は、降下ながら、真下にオーロラを発生させて、そこに飛び込み、海上から上に向かって出口を開いて、ある程度の高さで停止して、そのまま着水した。

そして急いで、周囲を確認すると、クウガゴウラムが、その背中に人々を乗せて飛んできて、俺を通り過ぎ、人々を浅い海岸に下ろして、そして俺の方に飛んできた。

その昆虫を模した足に捕まって、海面から上がる。

「助かりました。」

「本当にいきなりで、びつくりしましたよ。」

でも助けられてよかったです。」

「船がありますのでそちらまで運んでください。」

方向を教えます。」

「わかりました！」

クウガゴウラムと、それに捕まった俺は、ローズ大佐の待つモーターボートに向かった。

クウガ・マルチバース

ローズ大佐の待つモーターボートが見えてきて、そのまま手を離して乗り込んだ。

そしてクウガゴウラムがクウガに戻りながら、同じく、小野寺クウガが船に乗り込んで、その衝撃で少し船が揺れた。

俺と小野寺さんが変身を解くと、ローズ大佐が近づいてくる。

「どうだった？」

「一人では無理そうだったので、助っ人を呼びました。小野寺さん、奥で休んでいてください。」

途中から日本語になったので、それを通訳してから状況を説明する。

「エクストリミス兵士によって飛行機を爆破されてしまいました。」

幸い、乗組員13名は、彼のおかげで無事に救助しています。

ですが、残念なことに、大統領の護衛は全滅、大統領もアイアンパトリオットによってさらわれてしまいました。」

「そうか。大統領は殺害されていないならば、まだ救出のチャンスはあるか…」

それで、奥の彼は？クウガに見えたが。」

「…責めないのですか？」

「…責めてほしいのか？」

はあ。君は志願した任務を失敗したと思っっているんだろうが、そもそも君は軍人ではないし、私の部下でもない。

ニューヨークの戦いで、世間からヒーローと呼ばれようと、私から見れば、君は他国の要人と同等の存在なんだ。アメリカ空軍大佐としての立場からすればな。

だが、君はトニーに自分から志願した任務を任されている。

あの目立ちたがりやで自意識過剰のトニーにだ。

だから私も、君に行かせたという責任があつて、責められるべきは他国の人間に、自国の大統領を救出させようとさせていた私にある。

軍人で、空軍大佐でありながら指を咥えて待つていることしかできないんだからな。」
「俺は、ローズ大佐がマンダリンの屋敷に捕らわれていた時も、大佐がアイアンパトリオットがから出て気絶させられ、キリアン達が出ていくまで、見ているしかできなかったような男です。」

それでも…」

「君は、真面目過ぎるな。」

現に、私はこの場にいるし、大統領も誘拐されはしたが、まだ救出の希望はある。

「氣負いすぎるなよ。」

「そうですね。ありがとうございます。」

「はは、胃が痛いですよ。」

「お互い大変だな。」

「ことが終わったら、愛用している胃薬を送ろう。」

「さて、話を聞かせてくれ。」

「わかりました。移動しながら話しましょう。」

「小野寺さんを見に行くと、椅子に座って眠っていた。」

「彼も、クウガなのか？」

「彼の名前はユウスケ・オノデラ、二人目のクウガです。」

「ユウスケと同じ名前なのか。ややこしいな。」

「そうですね。」

「彼については、少々込み入った事情があるのですが、当の本人は日本との時差で眠たいでしょうから、合流するまでは寝させてあげてください。」

「わかった。」

ローズ大佐の操縦で合流地点に移動する間に、端末を取り出して連絡を入れた。

『ハザマか？ J. A. R. V. I. S. との通信が途中で切れたって聞いたが。』

「何があった？」

「上空で乗り物を取り換える必要があったので、一度ゲート移動を行いました。」

それと、申し訳ありません。」

大統領は、アルドリッチ・キリアンに連れ去られてしまいました。」

大統領の護衛は、エクストリミス兵士によって全滅、添乗員の13名は、協力者のおかげで無事救出しましたが、エクストリミス兵士によって飛行機を爆破されています。」

『協力者？まあいい。よくやった。あまり自分を責めるなよ。』

「…よく、わかりましたね。」

『お前の性格は、一緒に行動して欲しいわかったからな。』

それに、僕のスーツが万全でも似たような結果になったかもしれない。

汚名挽回の機会はまだあるだろ。『トニー様、汚名は挽回するものではなく返上するものです。』うるさいぞJ. A. R. V. I. S.。』

とにかく、合流地点を端末に送った。そこに来い。作戦会議をするぞ。』

「わかりました。」

俺は、連絡が切れた端末の画面を切り替えて、ローズ大佐に見せに行くのだった。

マイアミの海岸線の片隅に、そのキャンピングカーは止まっていた。

ローズ大佐の操縦で、波止場に止めてその場所まで歩いて向かう。

既に時刻は夕方にさしかかっていた。

小野寺さんは、普段は聞きなれない英語で起こされ、ムキムキな黒人が目の前にいたことで、小さく悲鳴を上げて笑われていた。

俺が顔を見せると、一気に安心したのか、こちらによつてきた。

小野寺さんには、仲間がいるのでそちらに行つてから説明すると言つて、キャンピングカーまでついてきてもらった。

その場所に着くと、どこから持ってきたのか五代さんがピンク色のエプロンをつけて料理をしていた。

スタークさんと、ミスハンセンは、決戦前だと感じさせない、キャンピングカーの前にテーブルと椅子を並べて、五代さんの料理を待っているらしかった。

「あれ？小野寺さんじゃないですか？」

「五代さん！お久しぶりです。」

狭間さんに助っ人として呼ばれました。

夜には士や夏海ちゃんもくる予定です！」

「五代さん、あらかじめ言っておきますが、小野寺さん達はパスポートを取ることができませんし、彼らがやらなければならぬことを終わらせれば、いなくなってしまうのですから、この間の電話のことを引き合いに出すのは無しですよ。」

「先に言われちゃったら何も言えませぬね。」

小野寺さんも、どうぞ食べて行ってください。」

「ありがとうございます！ごちになります！」

俺達がしゃべり終わるのを待っていたのか、スタークさんが話かけてくる。

「それで、そいつが協力者か？」

「はい。ユウスケ・オノデラといいます。」

彼との会話は、通訳しますよ。」

「そいつもユウスケっていうのか、ややこしいな。」

そいつは何ができるんだ。」

「詳しく説明するとややこしい話しになるんですが、小野寺さんは、五代さんのマルチバースの存在なんです。」

いきなりの俺の言葉に、スタークさん達が俺を沈黙して見てきた。「ちよつと待て。」

船の上ではそんな重大なことを言うような雰囲気じゃなかったよな。」

「いやいや、ハザマ、今はなかなかのジョークだった。」

突拍子もなく言うあたりがな。95点をやろう。」

「本当のことですよ。俺も最初に会ったときは驚きました。」

「おいおい、ユウスケ。」

ミスターハザマの言うことが本当だっていうのか？証拠は？」

「ローズ大佐は見ましたよね。小野寺さんがクウガだったところを。」

「待て。そいつがクウガだって？」

僕はユウスケにクウガの話聞いたぞ。

クウガがもう一人いるっていうのは、どう考えてもおかしい。」

スタークさんが精神的に参っていたところを、五代さんが屋敷に泊まり、クウガの歴史を聞いたのだろう。

「小野寺さん。」

「え？どうしましたか？」

「彼らが、小野寺さんをクウガだというのを信じようとしないので、少しだけでいいの

で、変身してもらえませんか？」

「わかりました。」

小野寺さんが立ち上がり、少し離れると、両手を腰に当ててアークルを出現させる。それを見たスタークさんがぎよつとして驚いた。

「変身！」

小野寺さんがクウガマイティーフォームに変身すると、今度は、五代さんが、エプロンを脱いで、その隣に立った。

「変身！」

二人のクウガ、赤のクウガとクウガマイティーフォームが並び立った。

そして二人ともに、変身を解いて、小野寺さんはどや顔をしているのに対して、五代さんにはミスハンセンが抱きついていて、動きにくそうにしていた。

「そんなばかな。」

マルチバースは本当に存在したのか：

どうしてそいつはこの次元にいるんだ？」

「重要なのは、彼ではなく、今日本にいる人物で、その人物は、ありとあらゆる次元・世界を巡り渡ることができる能力を持っています。」

小野寺さんは、その人物が訪れた、クウガの世界の人で、その人物とともに次元渡航

をしていますよ。」

「今の日本はそんなことになっていたのか…」

まさに魔境だな。

エクストリミス兵士並のニンジャがうようよいるんだろ？

それもユウスケから聞いたぞ。」

「ええ、闇の手と呼ばれている存在で、我々SPIRITSの敵になります。」

「闇の手か…今回の件が終わったら調べて見よう。」

「よろしく願います。その勢力は日本のみならず、世界中に広まっているらしいのです。」

少しでも情報があれば助かります。」

「J. A. R. V. I. S.、情報を集めておけ。」

『承知しました。』

そして、五代さんの料理に舌鼓をうち、作戦会議が始まった。

「ユウスケのほかにもクウガがいるなら、心強いな。」

「ええ、それと予定では、作戦は闇夜に乗じて突入する形になるんですよ？」

ローズ大佐の言葉に、俺は相槌をうちながら、スタークさんに確認する。

「私は参加しないわよ。」

「ミスハンセンは、現場から少し離れた場所に、車で待機してろ。」

ローデイがスーツを取り返して大統領を救出したら大統領を受け取り次第、離れてもらえればそれだけでいい。

追加の助っ人は、どういうやつらなんだ？」

「食事前に説明しました例の人物は確実です。」

その人は所謂何でもありません。

日本のヒーロー、仮面ライダーなら何にでも変身できます。

目的と敵味方の区別さえできていれば大丈夫でしょうから、遊撃手という形がいいと思います。

それと、来るかどうかはわかりませんが、女性の仮面ライダーとデイエンドの先代ですわね。」

「デイエンドの先代？」

クウガだけじゃなくてデイエンドも二人になるのか…」

「いえ、デイエンドは少し特殊でして、同じ次元に一人しか存在できないんですよ。」

その代わり、保険として、別の姿に変身できるようにしますんで、そちらでフォローします。

先代のデイエンドは、俺とは違って、周りに気をつかうような戦い方をしませんので、

注意をお願いします。」

俺は、門矢さんと海東さんのことを思い浮かべながら話をした。

保険

「その、もう一人、女性の仮面ライダーはどうなんだ？」

若干不安そうな顔をしたローズ大佐の言葉に、俺は言葉を返す。

「そちらの女性は、例の人物の行き過ぎる行動力や、態度などを抑制してくれるので、不安であれば、彼女を頼ってもいいと思います。」

「そうか、そうだな。そういう人物は頼りにさせてもらうよ。」

スターク、そろそろ移動した方がいいんじゃないのか？」

「そうするか。それじゃ、片付けは助手その2と、助っ人君、飯を食べたんだからちゃんとやれよ。」

に任せて。ローディ、モーターボートまで行って、一応船でも脱出できるように乗って行ってくれ。」

ユウスケ、ああ助っ人君じゃない。

ついて行ってやれ。」

「わかりました。」

「んじゃ、またハザマは運転手よろしく。」

俺と小野寺さんは、テーブルや椅子、飲み物などを片付け、俺は運転席に座る。

その間も、ミスハンセンはもはや不満そうな顔を隠そうともせず、ソファでふんぞり返っていた。

小野寺さんは、助手席でアメリカの景色を楽しんでいるようだったし、俺は運転に集中していて、すぐ近くにスタークさんが来ていたのには気づかなかった。

「ハザマ。」

「え!？」

あ、スタークさん。なんででしょう?」

「運転に集中していたところ悪いが、ひとつ礼を言っとく。」

「何ですいきなり?」

「僕じゃない。ローディだ。」

ハザマが志願した救助が失敗して、ローディは焦っていただろう。

だが、お前の真面目さがローディを冷静にさせた。

お前も助かっただろうが、ローディも助かったってことだ。

日本のことわざにもあるだろう。

飯を食わないと戦いはできないってな。

『トニー様、正確には…』 J. A. R. V. I. S.、言わなくていい。

とにかくそれだけだ。」

スタークさんはそう言って、またスーツをいじりに戻っていった。

フロリダ沖の埠頭、巨体なクレーンがコンテナや荷物をタンカーから移動させるための施設なのだが、銃を持ったエクストリミス兵士がうろつき、ヘルメットをかぶった作業員があちこち動き回っているのを少し遠くに止めたキャンピングカーの前で見えた。

「ハザマ、あつちを見てみろ。」

スタークさんが指す方向を見ると、モーターボートを埠頭からは見えないだろう場所に止めて、屈みながら動いているらしい姿が闇夜に目が慣れてきていて、うつすら見えた。

「ハザマ、助っ人を呼ぶなら今のうちだぞ。」

そう言われたので、キャンピングカーの裏にオーロラを開いた。

するとすぐに、門矢士さんと光夏海さん、そしてやはり、海東大樹さんが現れた。

「士！夏海ちゃん！」

「ユウスケ。お前、へましてないだろうな。」

「もう、時差のことを考えてなかったから慌てて、ちゃんと手助けできたのか心配して

「たんですよ。」

「大丈夫だつて！ちゃんと人助けしてきたから。」

小野寺さんが二人と会話している間に、海東さんに話かける。

「海東さん。助力、ありがとうございます。」

「二代君、先代としてずいぶん良くしてもらったからね。」

そのお礼さ。感謝してくれたまえ。」

「はい。」

それと、海東さんがデイエンドに変身するならば、自分は別のライダーに変身します。

なので、俺がアイテムを取り出す時と、専用ビークルを呼び出す時にはオーロラを開けてもらいたいです。」

「だったら、僕は先代君のそばで戦うことにするよ。」

「狭間。」

「門矢さん、光さんも。」

今回は、ありがとうございます。」

「状況はどうなっているんだ？」

ユウスケに聞いても英語がわからないから、詳しくはわからないって言ってたが。」

「今回の敵は、エクストリミスという特殊なナノマシンを実験投与された兵士です。」

主に遠距離は一般的な銃による攻撃なので、ライダーに変身していれば問題ないでしょう。

兵士そのものは、投与されたナノマシンによる影響で、機動力、攻撃力はアナザーライダー並と見ていいと思います。

防御力は通常の人間と同じなのですが、回復力が異常です。

骨折、部位欠損ぐらいならば数秒もあれば再生します。

心臓や、脳を狙った場合の確認はとれていません。」

「何か、特殊な攻撃をしてくることはないのか？」

「エクストリミス兵士は体を赤熱させて、戦闘力を高めているようで、鉄ぐらいならば簡単に溶かしてきます。

ボスのキリアンという人物は、炎を口から放っていました。

あとは、不確定要因なのですが、バグスターウイルスに感染している可能性があります。」

「なんだと!?!」

「小野寺さん呼び出した時間帯にエクストリミス兵士と戦ったのですが、オレンジ色の頭のバグスターウイルスになっていました。

ここにいるやつらも、そうなるかもしれません。

現在のこの世界では、デイケイドかデイエンド、もしくはエグゼイドのカードを使うか、召喚してもらおうしか対処法がありません。

コンピュータウイルスなだけに、ナノマシンとの相性が良かったのかもしれない。

くれぐれも、注意をお願いします。

それと、今回は、敵の打倒だけが目的ではありません。」

「どういうことですか？」

「この先には、この国、アメリカの大統領と、今回の敵の目的でもあった、トニー・スタークさんの恋人の救出をしなければなりません。」

大統領の救助には、スタークさんの友人と五代さんに別動隊として動いてもらっています。

そして、スタークさんの恋人は、彼を絶望させたいという敵の思惑で、エクストリミスを投与されてしまっています。」

「そんな…」

「それと、今回、一緒に戦うスタークさんは、全身をアーマーで纏って戦う、アメリカのヒーローでもあります。」

この戦いで、彼はどうやらアーマーの多重展開を行い、敵の数をそれで補おうという

作戦のようです。

なので、人型大のロボットのような見た目をしている物は味方なので、見間違えないようにお願いします。」

一気に説明したが、どうやら特に質問もなく、理解してもらえたようだった。すると、スタークさんが近づいてくる。

「ローディ達の突入準備ができたそうだ。

僕はやつらの混乱に乗じてアーマーで飛んで行く。先に行つてくれ。

それと、そいつらが、協力者か？」

「ああそうだ。あんたがトニー・スタークか？」

「お前は英語が話せるんだな。

そう。僕こそが、トニー・スタークで、アイアンマンだ。

サインは、終わってから書いてやるよ。」

どこことなく、変な空気になりそうだったので、門矢さんを急かして、予定場所に向かう。

小さく文句を言われたが、そこは光さんに注意されて静かになっていた。

埠頭の陸側には鉄製の壁で囲まれていたが、その周りにはガラクタや廃タイヤなどが積まれていて、簡単に侵入できるようになっていた。

巡回する武装したやつらから隠れながら、出来るだけ近づいて行く。

「いつまで隠れているつもりだ？」

戦うならさっさとやるぞ。」

「救出しなければならい対象を出来るだけ先に発見したいんです。」

「あれじゃないかな？」

ほら、あの鎖に繋がれてる青いやつ。」

ウズウズしている門矢さんに俺が言うと、海東さんが指を指して伝えてきた。

「さすがは泥棒、目ざといな。」

「誉めても何もないよ。」

門矢さんは嫌味で言うが、海東さんには通じなかつたようだった。

「わかりました。」

では、二手に別れましょう。

門矢さんは小野寺さんと光さんの3人で、俺は海東さんと行動します。

出来るだけ、救出する方から敵を遠ざけるようお願いします。

では海東さん、オーロラを開けてください。」

「ほら。」

門矢さん達が別の方に行くのを尻目に、海東さんにオーロラを開けてもらい、クライ

ンの壺から一つのアタッシュケースを取り出した。

それは、スマートブレインのロゴが入ったもので、それを地面に置いて鍵をあける。

「デルタギアかい？」

「そうです。保険その1ですね。」

俺はニューヨークの戦いで、デイエンドの二代目として戦う覚悟を決めた。

だが、それはその時の怒りが主な原因で、しかも相手が宇宙人だったからだ。

人間特有の生々しさもなく、言葉が通じる相手でもない。

完全な敵として認識していたからその時は戦えていた。

しかし、いざ終わって冷静になってみると、体の震えは治まらず、不安と恐怖がのし掛かってきた。

覚悟を決めても、俺は戦いたくないのだと、心の中で叫びを上げる自分を、見て見ぬふりをして、そしてそれをなんとかしようと考えて、ライダーの知識をフル活用して出てきた答えが、デルタギアのデモンズスレートと、シユルトケスナー藻だった。

そしてこれが、俺の精神をなんとか平常心に持っていける、保険その1と保険その2

になった。

どちらも副作用がひどく、後々になって苦しむことになるのはわかっていたが、これらは、今の俺の精神をマイナスからゼロ、ゼロからプラスに持っていける要因でもある。トニー・スタークよりも、精神医療にかかった方がいいのは俺かもしれないが、俺がディエンドであり、SPIRITSの設立メンバーの一人として：

いや、これはただの言い訳だ。

あの時の五代さんからかかってきた電話でのアドバイスは、俺にしてほしかったことなのかもしれない。

だからこれはどうにか克服しなければならぬ問題だ。だけど、今は。

「行きましょう。」

俺は、目を見開き、ベルトを装置する。

銃のグリップとトリガー型の電話、デルタフォンを手にもち、それを口元に持つてきて、トリガーを引きながら言う。

「変身！」

右腰のデルタムーバーに装着し、エコー音声が入り鳴ると、フォトンフレームが形成される。

S t a n d i n g
b y

C o m p l e t e

仮面ライダーデルタに変身を完了すると、恐怖が薄れるように感覚がクリアになる。

K A M E N R I D E

「変身！」

D I ! E N D !

海東さんも変身を完了して行動を開始する。
直後、多方面から銃声が鳴り響いた。

混戦の埠頭

「ファイア」

B u r s t M o d e

デルタムーバーのデジタルビューファインダーを開き、精密射撃で敵に射つが、エクストリミス兵士は避けながら近づいてくる。

「これを、避けるのか!?!」

「運動性、機動力は脅威みたいだね。

なら、これならどうかかな?」

K A M E N R I D E M E T H O R

K A M E N R I D E M A C H A

『追跡、撲滅、いずれもマツハ〜!仮面ライダー〜マツハ〜!』

『お前の運命(さだめ)は、俺が決める。』

「さあ、行きたまえ。」

海東さんが二人のライダーを召喚し、それをエクストリミス兵士に対応し始めた。やはり、本家本元のデイエンドの動きは違う。

俺は使いこなせない高速移動や、海東さんの能力としてスウォルツからもらった、特定の人物だけに対しての時間停止を駆使して、決して接近戦をしない位置取りで戦っている。

俺もそういう戦い方が理想だけに、俺はその横で戦いながらも、海東さんの動きを学ぶことができれば。

そう考えていた時だった。

「二代目君、どうやら例のアーマーが来たようだよ。」

海東さんの言葉に、周囲を見渡すと、たくさんのアーマー…ひい、ふう、みい…30体以上はいるか、様々なカラーリングで装備や仕様も違うような身長や、体型が違って、いる物が空から飛翔してきて、この埠頭を囲んでいて、マーク42も確認できた。

それらのアーマーがエクストリミス兵士に向かって飛び散り、まさに乱戦状態になってきた。

俺達にとっては、だいぶ楽に戦えるように動いてくれていたようだったが、それゆえに敵にとりつかれやすくなってしまっていたようで、エクストリミス兵士達に、そのパワーで破壊される機体も出てきているようだった。

「どうやら、全ての敵がバグスターウイルスに罹っているようじゃないようだね。だったら、まずは敵の数を減らそうか。」

A T T A C K R I D E C R O S S A T T A C K

海東さんの発する言葉と、カードの効果によって、仮面ライダーメテオと仮面ライダーマツハの必殺技が発動する。

J U P I T E R L A D Y ?

O K J U P I T E R

ヒツサツ！フルスロットル！マツハ！

二人のライダーによって、エクストリミス兵士が、再生やバグスターウイルスに変化する事もなく爆散され、そしてライダー達はデータとなって消えていった。

しかし、エクストリミス兵士も、その起動力を生かして飛んでいるアーマーに飛び付き、破壊し始めているのが見えた。

「まずいー」

俺は思わず大声を上げるが、それもむなしく、中吊りにされたドラム缶のコンテナにアーマーが突っ込み、爆発。

そして炎を吹きながら、あちこちにドラム缶が飛んできていた。

俺も海東さんも、飛んでくるドラム缶をいくつか撃ち落とすも、それに注意が行ってしまい、エクストリミス兵士が近づいていたことに気づいておらず、とつさに避けようとしたが、組み付かれてしまった。

だが、フォトンフレームに流れるフォトンブラッドの影響か、組み付かれた場所から徐々に灰となって崩れ出しはじめた。

その兵士は、訳がわからない顔をして、崩れていく体を凝視して、大きな隙ができた。

俺は、その腹を蹴り飛ばして、デルタムーバーを撃ちこんで倒し、そしてその体は燃え上がりながら、灰となって崩れ落ちた。

それを見た周りの兵士達が、俺から距離をとり始めると、そこに狙ったかのように、アーマー達が舞い降りてリ。パルサーで吹き飛ばしていった。

周囲を見渡すと、五代さんと思われる青の金のクウガとローズ大佐が、ワイヤーによつて中吊りになったコンテナの上で二人のエクストリミス兵士と戦っているところが見えた。

そして、クウガが、二人のエクストリミス兵士をライジングドラゴンロッドで、コンテナから落とし、さらにローズ大佐の指示で、ワイヤーを切り飛ばして、その反動でアイアンパトリオットを着せられていた大統領の救出を成功させるところがわかった。

それに安堵していると、クレーンが動き出し、その中腹には、崩れかけたコンテナにしがみつくペツパーさんと、そちらに走って向かうアーマーを着ていないスタークさんが見える。

「海東さん！オーロラを開いてください！」

俺は、大声を上げながら、デルタムーバーを右腰に戻して、デルタフォンを外して口元に添える。

「Three—Eight—Two—One!」

Jet Slinger Come Closer

海東さんが発生させた、オーロラから大きな二輪型のビーグル、『ジェットスライガー』が現れる。

デルタの攻撃後の灰化によって、俺の周囲にエクストリミス兵士がいないことが幸いしたのか、すぐに乗り込めて、そしてエンジンを吹かして後方の5機のジェネレーターから粒子を発生させながら、周囲の物を弾き飛ばして、クレーンの下に急いだ。

「間に合えー!!」

周囲の状況を利用して、ジェットスライガーを独楽のように回転させながら、その真下に来ると、ペツパーさんを俺の座席の目の前あたりで受け止めることができ、そのままホバー移動で避難する。

「よくやった!」

「くそっ!」

スタークさんと、キリアンの声が聞こえるが、今はそれどころじゃない。

「大丈夫でしたか!？」

「あ、ありがとう。」

その声はミスターハザマかしら?」

「はい! 捕まっつてください!」

ホイールを横滑りにブレーキをかけながら減速して停車させると、すぐに降りて変身を解き、ペツパーさんをおろした。

「私の体、熱くないかしら?」

「それは、気の持ちようによって変わると思います。落ちついていれば大丈夫ですよ。」

ほらね。」

「そうみたいね。」

ペツパーさんの疲れたような笑顔をこちらに見せていたが、キリアンがとてつもない勢いでこちらに降りてくる。

なぜか上半身裸で、その体には龍を模したであろう刺青を赤熱させながら、降りてきた時に折れたであろう足を瞬時に再生させていた。

俺は、とっさにペツパーさんを後ろにかばうが、ペツパーさんの灰化を考慮して変身を解いていたことでろくに戦えもしない状態だった。

しかし、そんな俺とペツパーさんの目の前に、アイアンマンが降りたった。

「キリアン、そこで止まれ。」

ハザマ、よくやった。終わったら褒美に僕ができることなら願い事を一つ叶えてやるよ。」

「…終わったらか。そうだな、お前達はここで終わる。」

私の勝利でな！」

スタークさんの声に、そのスーツにはスタークさんが入っていることが分かり、しかしアルドリッチ・キリアンは自らの勝利を疑わない、堂々とした声を発した。

だが、ここに第3者の声が響く。

「それは違うな。」

「何?」

なぜか、変身していない門矢士がそこにいて、その声にクリアンが反応する。

あれ?これってもしかして…と、俺が思っていると、門矢さんが俺達に向かつて歩きながら、話しました。

「確かにあんたは、これまでマンダリンというテロリストを演出と操作、そして武力でこの国を自らの手中に収めようとしている。

更には、そのナノマシンによって、強く、俊敏で再生力が凄まじい事も、赤熱させる能力もあつて圧倒的だ。

しかし、この男トニー・スタークには、そんなあんたにもないものを持つている!」
「何が言いたい?」

「おどけたような言動をしているこの男は、住む家も失い、世間には死んだことにされているようでも、愛する人を守りたい、助けたいという正義の心と、そんなトニー・スタークを助けたいと、集まってくれる仲間達がいることは、あんたのような支配欲のために世間を脅かすような男とはまるで違う!」

どこからそんな情報を持ってきているのかが不思議だったけれど、この雰囲気はあの

テアーンというBGMが聞こえてきそうな気がした。

「貴様、何者だ？」

キリアンの言葉に、あ、それ言っちゃおう？と、おもわず思ってしまった。

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

変身！」

いつの間にか、門矢さんの腰にはデイケイドライバーが装着されていて、その手に持っていたデイケイドのカードを挿入して、操作した。

K A M E N R I D E D E C A D E

9人の平成仮面ライダーを象徴する紋章が現れ、その体に重なってスーツを形成。

さらに7枚のライドプレートが頭部を貫き、最後にボディがマゼンタに染まって変身完了した。

そしてバイクのエンジンを吹かすような音とともに、一枚のカードが左腰のライドブッカーから自動的にデイケイドの手に収まった。

「これは…」

チラッと見えたカードの色は金色だったので、ファイナルアタックライドのカード、

おそらくこの流れだと、アイアンマンのカードだと思われた。

「助っ人君は、貶してるのか誉めてるのか変な言い回しをするやつだってことはわかった。」

それにしても、ハザマのデイエンドとどこことなく似てるな。」

「そんなことよりも、来るぞで！」

スタークさんの危うい発言をデイケイドは無視して、キリアンとの戦闘に入った。

アイアンマンがキリアンを殴りつけてもあまり効果はなく、アイアンマンがアーマーを捕まれて、キリアンに攻撃されそうになると、デイケイドのライドブツカーの斬撃が襲い、その体を傷つけ、キリアンから注意を反らしてアイアンマンがその手から逃れる。

そして、キリアンがデイケイドによって投げ飛ばされると、デイケイドがカードを挿入して操作した。

FINAL ATTACK RIDE I I I IRONMAN

『トニー様、急に胸部リパルサーに高純度のエネルギーが、チャージされています。』

「何!？」

おい、助っ人君！何かやったのか!？」

「どういふ効果かはわからないが、あんたにとってはいいいことがおきるカードの効果だ！」

「よくわからんが、これで！」

胸部リパルサー、つまりユニビームが放たれてそれをキリアンは避けようとしたが、数十秒に渡つて放たれているユニビームに捕捉されて、体を溶かされながら、キリアンは後退していった。

「J. A. R. V. I. S. !」

駄目押しだ。マーク42をあいっに着させて、自爆しろ！」

『承知しました。』

スタークさんは、自ら着ていたアーマーを次々にキリアンに着させると、そのままキリアンの叫び声とともに、大爆発が発生して、周囲が見えなくなつてしまった。

終わりもまた電話だった

爆発の影響で、アイアンマンのアーマーの一体に支えられていたはずのクレーンが倒れ、場所が開けた。

「…終わったの？」

ペツパーさんの眩きが後ろから聞こえてきたが、

爆発場所で立ち上がる影が見えた。

俺達はとっさに身構えると、その燃え上がる場所から現れたのは、両腕を失い、髪の毛が燃えて無くなり、皮膚が炭化しながらも、よたよたとこちらに向かって歩いてくる姿が見えた。

後ろのペツパーさんから息を吸い込むような悲鳴が聞こえてきたが、その姿から目を離すことが出来ないでいた。

そして、その歩みが途中で止まると、徐々にオレンジ色のノイズのような見た目のモヤモヤがキリアンを包みはじめた。

「バグスターウイルスか…」

「バグスター…ウイルス？」

何か知ってるのか？」

デイケイドの呟きに、スタークさんが反応して聞いてきた。

「早い話が、人間に感染するコンピューターウイルスだ。

どうやら、日本にこいつの味方…いや、実験台か？

そうしていたやつがいたってことだな。」

「ハザマ!？」

「すみません、スタークさん。」

このことを知ったのは、俺も数時間前で。

さらにいえば、不確定で未確認でしたので。

ですが、バグスターウイルスは人体に感染するといっても、直接体内に取り込まないと効果はありません。

このことは日本でもごく一部の者しか知らないことです。

決して言いますが、科学兵器などではありません。

治療法もあります。」

俺に顔を向けずに問い詰めてきたスタークさんに、俺は言うが、目の前のキリアンの

姿がオレンジ色のモヤモヤで覆い隠れ、そしてそれが一気に膨れ上がり、巨大な球体を連結させたかのようなオレンジ色の化け物へと変化を遂げた。

そして、それが金切り声を上げたかと思うと、俺達には見向きもせず、周囲の物を攻撃し始める。

そして、それに呼応するかのよう、埠頭で倒されたはずのエクストリミス兵士達が起き上がってきて、その頭部をオレンジ色の物に変化させた。

「ペツパーさんは何か変化を感じませんか？」

俺はハッと、なって後ろのペツパーさんに聞くが、ペツパーさんはきよとんとした顔で、訳がわからないような感じだった。

「ペツパーさんには、さすがのキリアンもバグスターウイルスを注入しなかったのか……」
「それで、どうするんだ？」

「まずは、スタークさんは、ペツパーさんの避難をお願いします。」

「それもそうだな。J・A・R・V・I・S・！」
『了解しました。』

「ペツパー、すまないが少し我慢してくれ。」

「……もう。優しくしてね。」

「もちろんだとも。」

スタークさんの声に答えると、スタークさんは降りてきたアーマーを着込み、ペッパーさんを抱いて飛んでいった。

「士！」

「士君！」

「狭間さん！」

そんなところに、二人のクウガと、仮面ライダーキババラがやってくる。

「やあ、二代目君。」

そして海東さんのデイエンドも集まってきた。

「僕が見て廻った限り、バグスター以外の敵勢力は残ってないみたいだね。」

それに、これらのバグスターは、少々、通常のバグスターとは異なるみたいだね。」

「確かに、バグスターウイルスは通常、バグスターユニオンを、ゲーマドライバーのライダーのレベル1の状態による分離手術を行わなければ発生しませんし、死んだはずの肉体を乗っ取ってバグスターウイルスが発生するというのも、俺の知識にはありません。」

「それに、発生したバグスターウイルス達は、

何をするでもなく、ただそこに立っただけみたいだ。

エクストリミスというナノマシンの再生力に、バグスターウイルスの培養が抑止されているのかもしれないね。

これなら、通常攻撃が通じないだけのただの的だから、僕が片付けておいて上げるよ。
感謝したまえ。」

「よろしくお願ひします。」

海東さんは、そう言ううと鼻歌を歌いながら行つてしまつた。

「海東のやつは、よつぽどこの世界を気に入つたみたいだな。」

あんなに上機嫌に、しかも自分から動くなんてな。」

「それで、どうしましょうか？」

ダイケイドの呟きに、俺は聞くと、少し考える素振りをすると言ひだした。

「夏ミカンとユウスケは、海東の手伝いに行つてやつてくれ。」

一ヶ所にまとめてやれば、海東も早く済むだろ。」

「行きましよう、ユウスケ。」

「わかつた。」

「五代さんもお願ひします。」

「わかりました。」

『僕のアーマー達にも手伝わせよう。』

そつちのほう及早く終わりそうだ。』

と、ペツパーさんを運んで戻つてきたスタークさんが着地しながら言つてきた。

『J. A. R. V. I. S.。』了解しました。』それで?』

「狭間は、あのデカブツの注意を引いてくれ、ちようどいい物もあるしな。」

と俺の後ろのジェットスライガーを見て言う。

「それに、スマートブレイン製のベルトなら、一時的に動きを止められるだろうから、そこに俺が止めを差せば終わるだろ。」

「わかりました。」

『何だ? せっかくドラマのワンシーンみたいに、ペッパーにカツコつけて戻って来た僕の出番は無しか?』

「バグスターウイルスに通常攻撃は効果がない。」

あれは、ウイルスといっても、コンピュータウイルスだからな。

例えるなら、パソコンの画面の前でシャドーボクシングをしているようなものだ。

電磁パルス兵器でもあれば別だがな。」

『なるほど、次にスーツを作ることになったら、参考にさせてもらおう。

だけどあれは、周りの物に攻撃できる物体だろう?』

本当にダメージがないのか?』

「スタークさん。」

目の前のバグスターユニオンは、ダメージがないというだけで、衝撃は通ります。突風を受けているようなものだど理解してもらえれば。なので援護をお願いします。」

『仕方ない、ペッパーも待つてるからな。』

さつさと終わらせるぞ。』

そう言うと、飛び上がって行く。

そして俺は再び、デルタフォンのトリガーを引きながら口元に添えた。

「変身！」

Standing by

Complete

デルタに変身してジェットスライガーに乗り込み、コンソールとレバーを操作してジェットスライガーをバグスターユニオンに向ける。

「まずは、こつちに注意を向ける！」

俺は、再びジェットスライガーを操作して、前部左右カウリング部のミサイルポッド

に収納された、16門の誘導式のフォトンミサイルを32発一斉掃射して、バグスターユニオンに当てるが、アニメ調の『MISS!!』という表示が当たる度に表れる。

しかし、そのミサイルの爆発した煙や、爆風が鬱陶しかったのか、俺のほうに向かって来ていた。

俺はジェットスライガーから降りると、腰のバックルのメモリースロットに入っているミッシュンメモリーを抜きとり、デルタフォンを装着したデルタムーバーに装填すると、ポイントシリンダーがせりだすのを確認して、それを口元に添える。

「チエック。」

X c e e d C h a r g e

腰のバックルからフォトンフレームを通って高密度のフォトンブラッドが流れ、腕のラインからデルタムーバーに注入される。

俺が、この動作をしている間には、スタークさんがリパルサーを放ちながら、バグスターユニオンを牽制してくれていたが、当のバグスターユニオンは飛んでいるハエを追い払うように立ち振舞っていただけだった。

「スタークさん！もういいです！」

俺は、大声を上げながら、バグスターユニオンにポイントマーカーで、一時的に動きを止めた。

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DECADE

すると、無事だったクレーンの上から飛びたつたデイケイドが、宙に浮いた何枚もの金色のカードを通り抜けながら、バグスターユニオンをそのまま貫いて、爆発を起こした。

『終わったのか？』

俺の横に着地したスタークさんが聞いてくる。

「ええ、これで本当に、終わりました。」

俺達は、揃ってキャンピングカーに集まると、スタークさんが見せたいものがあると
言って、みんなで夜空を見上げていた。

「J. A. R. V. I. S.、やれ。」

『クリーンスレートプロトコルですな。』

本当によろしいのでしょうか？』

「クリスマスだからな。」

盛大にやれ。」

『了解しました。』

夜空には、無事だったアーマー達が空を飛び交いながら、次々に自爆して、それが打ち上げ花火のように光が舞っていた。

スタークさんは、ペッパーさんに寄り添い、一連の事件は幕を閉じた。

2013年5月 SPIRITS本部

『新しい家を買ったから、パーティーをする。

ハザマ、お前も来い。

ああそれと、お前の誕生日はいつだ？』

「11月ですよ。」

『なんだ、もう過ぎてるのか。

まあいい、遅め、いや早めか？

の誕生日プレゼントも用意してある。必ず来いよ。

ペッパーパーもお礼がしたいって言うてるからな。

あと、あの時の願いつていうのを、パーティーにくるまでに考えておけよ。

またな。』

「わかりました…ってもうきれてる。」

あの後、ミスハンセンと、スタークさんによってペッパーパーさんのエクストリミスは除去された。

それとスタークさんもまた、心臓付近の手術を行い、今では胸に穴は無くなっていた。

ミスハンセンは、ペツパーさんに謝罪してからA・I・Mを退職、今ではSPIRITS本部の研究所に所属して、桜子さんと見えない火花を飛ばしていた。

ローズ大佐のアイアンパトリオットは再改造を経て、ウォーマシンに再改名した姿を新聞で見ることができた。

門矢さん一行は、あの戦いがこの世界でのやることだという判断をして、別の世界へと行ってしまった。

あの写真館は、すっかり元の喫茶店に戻っている。

「この世界には、また来る気がする。」

その時は、またあの麻婆豆腐を食わせてくれ。」

ただ、そう言い残して別れた。

そして、海東さんというと。

「狭間さん！大変ですよ！SPIRITSの玄関プレートが無くなってました。」

職員の一人から聞いたのが、これである。

もしやと思って、クラインの壺の内部を探してみると、結構奥のほうに隠しており、俺が元の位置に戻しておいたのだった。

間章

思いもよらない乱入者

さて諸君。

俺はアイアンマン3を経て、もっとも今気になっていることがある。

というか、実際に裏取引や被害が発生してしまっている以上、問題にならない訳がないのだ。

そう、『バグスターウイルス』を、キリアンはどこから入手したのか？

ということなのだが、まあ今の段階で理由は違えど、結果的に檀正宗が拘束、逮捕され、服役。

夢幻コーポレーションは息子の檀黎斗が引き継ぐこととなった。

この世界では、ゼロデイが発生していないため、ポッピーピポポも、グラフアイトも誕生していない。

だが、宝生永夢がバグスターウイルスらしきものに感染していたかもしれないという情報は入ってきていて、もしかするとパラドは誕生しているかもしれないという不測の事態が発生していた。

事情聴取しても、檀親子は黙秘を続けるし、記憶を戻らせたのは失敗だったかもしれないと、今では後悔している。

だが、俺が彼らの記憶を戻らせなかったとしても、ネクストゲノム研究所がこの世界には存在したらしい。

まあ、違法薬物取り扱いで検挙されて、潰されていたこともわかつているし、檀正宗はその元職員で、検挙される前に辞めていたということも判明しているようだった。

その時に、宝生永夢が：という事実は判明していないからどうとは言えない、やっぱりな事情になっているようだ。

ただし、今回の流出の件は、以前に檀黎斗がこぼしていた。

「以前に社員が開発したゲーム『フレームウォーリアーズ』という作品を以前にボツにしたことがある。

あれは、炎使いの主人公が悪の科学者が作ったロボットを倒していくゲームだが、既存のゲームとどこことなく似ていたし、発展性を感じなかった。

だが、私が破棄しようと思っていたがいつの間にか消去されていたから、自らの過ちに気づいて破棄したのだろう。

この神たる私以上に、ゲームを作れるものがないと悟ったのだろう。そうだ。そうに違いない！フハハハハ！」

という、『フレイムウォリアーズ』という作品は、見方によれば、エクストリミスという体を赤熱させる側が、トニー・スターク氏が作ったアーマーを破壊するという、逆から見ると一致している部分が見てとれた。

例の社員は作品を提出した後は、そのデータに触れた形跡が見つからなかったため、その作品に研究中のバグスターウイルスを混ぜて、流出させたのだろうということだった。

今だに、真犯人はわかっておらず、檀親子のキャラクター性も相まって、謎が謎を呼ぶカオス状態になりつつあった。

これに対して、我々SPIRITSは、今後バグスターウイルスが広まる可能性を考えて、聖都大学附属病院に電脳救命センター（通称CR）を設置することが決定した。もちろん、責任者に院長の鏡灰馬氏が就任して、息子の鏡飛彩、放射線科の花家大我、監察医の九条貴利矢を召集して対策をはかることとなったが、檀黎斗がオブザーバーについたことで、必然的に彼らの記憶を戻らせる必要があった。

当然、いくつもの混乱と、離散の危機もあったが、現在はまだバグスターウィルスが広まっておらず、グラフィイトも誕生していないことから、宝生永夢の保護を第一目標に活動を始めたのだった。

もちろん、ゲーマドライバーは一つしかないため、同時並行で開発を進めているし、檀黎斗が全てのガシャットを作り直す息巻いているので、普段は彼らも聖都大学附属医院に転院して勤務しているのが現状である。

あのクリスマス騒動から半年が経過した。

我々SPIRITSは、バグスターウィルスの調査だけに集中していた訳ではなく、もちろん闇の手のニンジャ達との戦いは続いていた。

しかし俺の現在の立場は、いち戦闘員というわけではなく、ライダーであり戦えはするが、所謂中間管理職のようなものでデスクワークがほとんどであり、また、交渉役という役割を担っているために、様々な人員のスカウトも行っている。

ある日の戦いで黒影トルーパーの隊員から、オネエ口調のヤクザを助けたという報告があったので、もしかしたらと思いい、その人物に接触をはかったところ、やはりというか、みんな大好きルナネエさんこと、泉京水氏だった。

京水氏にスカウトを行ったところ、あっけなく参入してくれた。

曰く、イケメンが沢山いる職場だからだそうだ。

そういう理由でSPIRITSに参入してくれた人物には他にいて、平成ライダー作品で京水氏と並ぶ二大オネエキャラの凰蓮・ピエール・アルフォンゾ氏である。

この人は、以前から戦力強化の意味合いでスカウトを行っていたが、俺が言っても無駄だろうと、沢木哲也さんにお願ひしたところ、これもあっさり陥落。

沢木哲也さんの人柄の良さも相まって、たまに食堂のキッチンで一緒にデザートを作っていたりする。

それと、以前に呉島貴虎さんが訪ねてきた際に、湊耀子さんを紹介された。

別の世界では戦極凌馬の秘書としてユグドラシルコーポレーションに所属していた仮面ライダーマリカだったが、この世界では、元々は、他会社からの産業スパイらしく、拘束して警察につき出すか迷っていたらしいのだが、興味があるかと思ひ、俺に紹介したとのことだった。

色々と話し合った結果、SPIRITSに参入することとなり、実質、俺の秘書のよくな立ち位置に収まってしまった。

周囲の余計な配慮が見え隠れしていたが、そういう関係になることはないだろうというのが正直なところだ。

なぜなら、彼女はBARONというアイドルグループのガチ恋勢だからだ。

最初に気づいたのは、彼女が持っていたキーホルダーで、何気なく聞いてみたところ、急に前のめりになってグイグイと興味があるのかと聞いてくるわ、押しを聞いてもいないのに早口言葉でしゃべりだすわ、終いには一人で妄想し始めて女性がしてはいけない顔になるわと、さんざんだった。

さて、BARONというアイドルグループがあると云ったが、その名前からわかる通り、この世界でのビートルライダーズのチームバロンは、ストリートダンサーではなく、歌って踊れる大人気のアイドルグループなのである。

最近開催されたというコンサートに、泉京水氏、鳳蓮・ピエール・アルフォンゾ氏、湊耀子さんがキヤーキヤー言いながら参加していたということのを他の隊員から聞いてしまい、どう反応すればいいのかがわからなかった。

そんな彼ら（泉京水氏を除く）の記憶を戻らせるのには、随分と悩んだ挙げ句に実行すれば、鳳蓮氏も、耀子さんも、これは運命だと言いはじめて、ますますBARONの虜になっているっぽかった。

特に耀子さんは、仕事中和のギャップがすごく、若い隊員の中には、恋心を抱いている者もいるらしいと聞いていた。

俺から言わせれば、応援はするが、現実を見ろとも言いそうになった。

2022年8月 狭間玄乃の世界

お盆休みに久しぶりに実家に帰ると、就職はするのかという話になったので、新興のベンチャー企業に就職しているとごまかし、向こうの世界の通帳を見せて黙らせた。

家にも、親がうるさいので、親戚の墓参りや、ぶらぶらと歩いていたら、学生時代の友人に久しぶりに会った。

地元で唯一の喫茶店で、近況をしゃべり、軽食とコーヒーを飲んで、そこで別れた。

さて、俺がどうしてこんなことを言い始めたかというところ、オーロラを通ってSPIRITSに戻り、事務作業を再開していると、だんだんと騒がしくなってきたので、聞いてみると、侵入者がいたから拘束したけれど、よくわからないことをペラペラと、しゃべるので、俺に教えたほうがいいのではないかという話になったという。

そして、反省室とプレートがかかった部屋になると、その拘束したらしい人物の声が聞こえてきて、だんだんと俺の顔がひきつってきた。

その部屋の扉を開けると、目の前には、あの喫茶店で別れたはずの友人がそこにいたのだった。

「お！玄！来たな。」

「来たな。じゃないよ。」

「何やってんのさ……」

俺は頭をかかえることになり、とりあえず、二人だけで話をさせて欲しいと周囲にはお願いして、俺と、その友人だけにしてもらった。

「もう一回言うぞ。」

「何やってんだ？」

「いやあ。たまたま見かけた玄が、裏路地に銀色のオーロラみたいなのに入って行ったのを見て、俺も飛び込んだらここにいてさ。」

「阿保か。俺はわざわざ実家から何県も離れた場所で、しかも深夜に誰もいないことを確認してから入ったんだぞ。」

「たまたまなわけないだろうが。」

俺はジト目で睨みつけながら言うと、そいつは急に土下座して謝ってきた。

「すまん。」

「実は……」

話を聞くに、こいつには10年以上付き合った彼女がいたが、同棲していて仕事から帰って見ると部屋中の物がなくなっていて、どうにもできずに呆然としてみると、ヤクザがやってきて借金を払えと脅してきたんだそうだ。

持っていた所持金でなんとか実家に帰ってきたが、実家の両親からも、自分が借金をしたのだと勘違いして聞き入れてもらえず家を追い出され、会社に連絡を入れるが、会社にヤクザが来たことでクビを言い渡されてもう自殺しようかと考えていたところに、俺と再会したのだという。

あの時は本当のことを言えずに、俺が奢ったサンドイッチとコーヒーのありがたみを忘れられずに、礼を言うために探していたら偶然、どこかに行く姿を見てついに行ったら、あの銀色のオーロラに入って行くのが見えて、無我夢中で中に入ったんだそうだ。「そしたら、有名人が沢山いるから混乱している内に捕まって、ここにいるんだ。」

すまなかつた。

それと、ありがとう。

あの時のお前の優しさが俺を救ってくれたんだ。

だから、俺にできることなら、なんでも言ってくれ。金はないし、人望もないけど、俺は！」

俺は、土下座して頭を地面に擦り着けているこの友人をどうしようかと、頭を悩ませていた。

これが本当の一般人

まず、こいつの名前は御影 暁（みかげ あかつき）。

俺の高校時代の悪友だった男である。

俺の高校時代の始まりはオタクよろしく、休み時間は自分の席で読者をして、昼食は母の作った弁当を食べ、それ以外は図書室で本を漁る毎日だった。

そんな時に本をめくって紙で指を切り、絆創膏をもらいに保健室に行くと、同じクラスこの男が痛がりながら治療を受けていた。

その時は保険医の受け答えだけで部屋を出たが、翌日からのこの男の行動が目につくようになっていった。

遅刻の常習者で、教師によく楯突き、ケンカに明け暮れているようで、よく怪我の治療の後よく見ていた。

俺は中学の時にバレーボール部だったこともあり、背が高く、ガタイも良かったためにクラスのパリピどもに目をつけられることもなかったが、この男はよくネタにされたりしてよく笑われていた。

そんな折、そのパリピどものことに腹を立てた暁は正面から文句を言いに行くとそれ

すらも笑われてしまい、パリピどもの一人を殴り飛ばしてしまった。

それに切れたパリピどもが集団暴行をはじめて、なんとか逃げ出したその男の隠れ場所を誤魔化してやった。

それからだ。この男、暁とつるむようになったのは。

オススメの漫画やゲームで盛り上がり、ゲームセンターに行つては、音ゲー、格ゲー、UFOキャッチャーに一喜一憂したり、俺はケンカに参加することはなかったが、作戦を立て、道具を用意してやり、逃げ道まで用意してやったこともあった。

うちの家は、おおらかな母が腹を空かせた俺たちを見かねて暁も一緒に晩飯をよく食べたりしたのを覚えている。

高校を卒業してすぐに俺は東京に出たために、暁のことをあまり考えたことはなかったが、こんな事になっているとは思わなかった。

「とりあえず、土下座はやめてくれ。」

「だけど、俺はお前に嘘をついていたし。」

「そのままだと話しくいんだよ。」

いいから、椅子に座ってくれ。」

暁はしつじつと椅子に座り直して、姿勢を正すと、俺も暁の目の前に座つて言う。

「暁のことはわかった。」

正直そんな事態だったのなら、あそこの喫茶店の時に話をして欲しかった。

俺とお前は友達だと思っていたからな。」

「友達だから、言えなかつたんだよ！」

でも、俺もこんなところになるなんて予想もしてなかつたし。

そうそう！ここはどこなんだ？どこかの芸能事務所か!？」

「騒ぐな。」

…一応言っておくが、こここのことを言いふらせば、黄色い救急車を呼ばないといけなくなるからな。」

「黄色い救急車？あれってもう無いんじゃない？」

いや、わかつたから。そう睨むなって！

誰にも言わねえよ！

…どうせ、言っても信じてもらえないぐらいの人望のない状態だしな。今の俺。」

「ならいい。…この場所いや、この世界は、俺達の世界とは違う世界だ。」

「いや、それくらいわかる。」

一般人の俺らと、芸能人達の住む世界は別だつてことだろ？」

「はあ…そういう意味じゃない。」

例えるならそうだな……」

俺はクラインの壺から、スケッチブックとマジックを取り出した。

「ちよ、ちよつと待て、今どこから出した？」

「それも説明してやるから、今はちよつと黙ってる。」

そして俺は一枚の画用紙に書きながら説明をはじめた。

「俺達が元々いた世界を『現実世界A』だとすると、この世界は『現実世界B』だ。

現実世界Aでは、俺達の家が家族が暮らしているが、現実世界Bでは同じ場所に全くの他人が暮らしている。」

「……はあ？」

「だから俺とお前は、この世界には戸籍も国籍も、さらに言えば出生記録すら無い。

何せ俺達じゃない全くの別の人間がいるんだからな。」

「何だよそれ……親が俺を見捨てたってのか……」

「だからそうじゃない！」

「そうだな……最近映画を見たか？」

「えっ？何だよいきなり。」

「そつそつういえば……元カノと一緒に見に行ったぐらいだな。」

「その映画の世界に入って、好き勝手にできたら面白いなと思ったことはあるか？」

「スターウォーズの世界に入って俺もジェダイに。っていうやつ？」

「玄が好きな二次なんとかかっていうやつだろ？」

「そういうネット小説とか好きだったもんなお前。」

「今の状況が、まさにそれだ。」

「…ええ??え、何、もしかしてあの銀色のオーロラみたいなのを通り抜けるとマンガとか映画の世界に入れるってことか？」

「まさかあそんな、玄こそ黄色い救急車が必要なんじゃないのか？」

「しょうがない、証拠を見せる。」

「俺がデイエンドライダーを取り出してカードを装填する。」

「何だよ、いきなりおもちゃなんて使い出して？」

K A M E N R I D E

「変身！」

D I :: E N D

シルエットが重なり、ライドプレートが付き差さり、ボディカラーがシアンブルーに変わって、デイエンドに変身した。

「暁、お前が知っている世界には、こんな風に変身できる技術があると思うか？」

「…ええ?何その早着替え。」

CG?え?何かの撮影だったり、違うの?

うそーん。本当に変身したのか?」

いちいち小さく聞いてくるので、首を振ってやれば、開いた口がふさがらないようだった。

「信じられないなら、このアーマーを殴ってみろ。」

「いいのかよ?段ボールやプラスチックだったら俺の拳で壊しちまうぜ。」

「いいから。」

暁は椅子から立ち上がって右腕をブンブンと振り回し、勢いよくアーマーを殴りつけた。

「痛っつて〜!!!」

「これでわかったか?」

暁は右手首を握ってうずくまり、赤くなり開いた右手を見つめながら絞り出すような声で言ってくる。

「それって金属かよ…重くねえのかよお…」

「以外とそれほど重さは感じないな。」

…いい加減にわかっただろう?」

「この右手の痛みが、証拠だったのかトホホ…」

ああ、わかったよ。この世界が俺達のいた世界とは別の世界だったな。」
俺は変身を解くと、再び椅子に座り直して説明を続けた。

「お前がこの施設に来て見たっていう有名な、あの人達はこの世界の人たちで、お前が知ってる有名な名前ではない。」

分かりやすく言えば、そっくりさんだ。」

「オダ○リジヨも、賀○利樹も？」

「そっくりさんだ。」

「須○元気も、天野○成も？」

「そっくりさんだ。」

「細川○樹も、水嶋○口も？」

「そっくりさんだ。」

「…マジか。」

「マジだ。」

因みに言うと、菅田○暉、渡○秀、富士○汰、吉○亮、竹内○真、ロバ○ト・ダ○ニー
J.r.、ク○ス・エヴ○ンスなどのそっくりさんもいる。

というよりも、お前が有名人だと思っている人物のほとんどがそっくりさんだ。」

「……………マジかあ。」

俺って、そっくりさんに慌ててたのかよ。」

「手は大丈夫か？説明を続けたいんだが。」

「だんだん痛みは引いてきた。ケンカ慣れで良かったことは、手の骨折なんか起きないように無意識に衝撃を和らげることができるようになったことだな。」

暁は再び椅子に座りながら言う。

「まずお前に聞くが、仮面ライダーはどれくらい知ってる？」

「仮面ライダー？」

ほとんど知らないぜ。

若手俳優の登竜門ってことぐらいだな、なんとかレンジャーとかいうのを含めて。

ああ、幼稚園の頃に見てたブラックRXはちよつとは覚えているぐらいだな。」

「それじゃあ、アベンジャーズシリーズの映画はどれくらい見た？」

「アベンジャーズ？」

「何だよそれ？ああそういうえば、あの体が小さくなるやつ。「アントマンか？」そうそれ。」

あれ見て、あんまり面白くなかったからそれからは見てないな。

あれなら見たぜ。バットマンとかスーパーマンとかが出てくるやつ。」

「スパイダーマンや、デッドプールは見たか？」

「スパイダーマンは最初の三部作を見てからは見てない。

どうせ、あれも続けて見ないと意味ない系だろ？えつ、違うの？

デッドプールは見たぜ。あれは面白かった。

2も面白かった。

ところで、これって何の質問だよ？」

「よくわかった。

つまりお前は、この世界についての知識がほとんど無いってことだな。「お前がオタ

クなだけだろ」うるさいな。

いいか？俺がさつき変身したのも、仮面ライダーだ。」

「えつ、そうなの？」

お前、いつの間にか改造人間にされてたのかよ。」

「シヨツカーはいないし、俺も改造人間じゃない。」

「えつ？仮面ライダーって、改造人間なんだろう？」

「今の仮面ライダーは改造人間じゃないんだよ。」

あの銀色のオーロラも、仮面ライダーとしての能力だ。」

「えー。いいなあ、俺も変身！とかしてみたいぜ。」

なあ、玄はここじゃけっこう偉いんじゃないのか？仮面ライダーなんだし、俺も変身させてくれよ。」

「俺もただの、いち社員でしかないからな。」

上司に聞いてみるよ。」

俺の頭には、この世界で唯一の正当な改造人間の顔が思い浮かべられていた。

「いいんじゃないか？」

「えっ、いいんですか？」

俺は反省室から暁を連れて、総隊長室にやって来ていた。

本郷さんは最近ではリハビリも順調で、デスクワークをしながらパワーの調整を練習中である。

「はははは。狭間君には、随分と世話になっているからね。」

たまには、狭間君の方から要望ぐらいは聞いてもいいと思っていたからな。

ふむ、御影 暁君だったね。」

「はっはい！」

「いい返事だ。」

我々SPIRITSに入隊したいということだったね。

歓迎しよう。

共に、日本の未来を一緒に明るくものにしようではないか！」

「はっはい！」

「うむ。」

彼の書類関係は、総務部である程度話を通しておこう。

当面は、狭間君の部下として扱うといい。彼のデスクも君の部屋に用意しよう。

後、生活の場は総務部に報告すれば、いろいろと融通できるだろう。

よろしく頼んだぞ。」

「ありがとうございます。」

実に嬉しそうな顔の本郷さんに、呆けた顔の暁を連れて、部屋を出た。

「なあ、あれって藤○弘、…」

「そっくりさんだ。」

まあ、実際にはこの世界には○岡弘はいるのだが、本郷さんの場合は本当にただの

そっくりさんなので、嘘は言っていない。

「…マジかあ。」

「因みに、改造人間で、仮面ライダー1号だ。」

「えっちよ…」

御影暁育成計画

SPIRITS本部の上、つまり『東洋特殊撮影技術研究株式会社』のビルには、撮影スタジオやアクターさん達の訓練施設、小道具大道具制作場所等の施設があるがそれは下層の話。

上層は主にSPIRITS本部に勤める人員の住居エリアとなっていて、隊員の元々は警察組織のためにセキュリティも警備も万全であり、今では空き部屋待ちとなっていた。

俺達二人はそんな住居エリアにある、俺の部屋に来て小さなテーブルを囲み、今後のための話をしていた。

「感謝しろよ。俺の住居をそのままシェアハウスとして貸し出すんだからな。」

家賃は給料が安定してもらえるようになってからでいいし、3食は地下本部で取ればただみたいなものだからな。

下着やらアメニティ関係は、俺が金を貸すから買ってくればいい。」

「本当にマジで感謝してるって、衣食住完備にセキュリティも万全とくれば文句なんて思いつかねえよ。」

元の世界の住居は元カノの蒸発やヤクザ、実家も追い出されてたから本当助かった。基本的な衣服は支給された隊員の制服を着てりやいいいな。」

「基本的な職場は、俺と同室だから事務作業はある程度教えてやれる。

それと予想はしているだろうが、この世界は俺達の元の世界とは違って、そこまで平和ってわけじゃない。

戦闘訓練があるぞ。」

「あー、まあ。

ヒーローがいれば、悪の秘密結社的なやつがいるってことだろ？

でもシヨッカーはいないのに、仮面ライダー号はいるのな。」

「そこは複雑な事情がある。

総隊長のプライベートにも関係するから、聞きたいなら覚悟して聞けよ。

話しておくが、俺達SPIRITSと敵対している組織は今のところ3つ。」

「3つもあんのか。」

「二つ目は『テンリングス』、具体的な規模もわからないし、直接的な戦いもないが俺の能力、銀色のオーロラによる転移能力を狙っているらしい組織だ。

少し前にテンリングスと思われるテロ集団と戦闘になったが、その名前を騙っていた別の組織だった。」

だが、いまだに俺の能力を狙っているらしいという情報がSPIRITSに入ってくるからな。

今のところ直接的な敵対はしていないが、無視もできない。そんな組織だ。」

「戦闘って、オタクのお前が？」

仮面ライダーってすげえんだな。」

「変身する俺の心境の変化もあった。」

だから戦えた。それだけだ。

二つ目だ。『ヒドラ』と呼ばれる連中だな。

こいつらは、元々ナチスドイツのいち組織が派生してナチスを裏切り、秘密結社になったのが元だと言われている。」

「うわ、ナチスとか一気にB級映画っぽくなったな。」

「ナチスとサメはB級映画に欠かせない要素だと言われているらしいからな。」

それはともかく、ヒドラが最も活発だった時期は1940年代、この世界の第二次世界大戦中だ。

その時期にアメリカのヒーロー、キャプテンアメリカによって一度壊滅的な状態になっていた。」

「ああ、キャプテンアメリカは聞いたことあるぜ！」

「見たことは？」

「無い。」

「話を続けるぞ。」

その時期にヒドラは壊滅はしたが、消滅はしなかった。

その思想、組織、技術を受け継ぐ者達がいて、それが現代では様々な組織の中に寄生虫のようにヒドラのメンバーがいる状態だ。

様々な国家、政治、軍部、企業に潜んでヒドラに都合の良い世界にしようとしている。」

「ちよつと待て、まさか。」

「安心しろ。SPIRITS内には、ヒドラはいない。」

「何でわかるんだ？」

「所謂、踏み絵をやった。」

ヒドラのマークはドクロマークにタコの足が生えたような形をしているが、隊員の一人一人を呼び出し、そのマークが描かれた紙を渡して『破れ』と言い渡したんだ。

ほぼほぼの隊員は普通に破り捨てたが、中には激昂して殴りかかってきたやつもいた。

そういうやつらは今どうなっているかは俺は知らんが、まあ牢屋にでも入っているんじゃないかね。」

「ええ…マジもんのスパイとかいんのか。」

「そういう意味ではこの世界は元の世界よりも、スパイ活動は活発だな。」

俺の秘書扱いされている人も、元々は企業間の産業スパイだった人だしな。

ヒドラは表には出にくいから、戦闘というよりかは対情報戦や暗殺対策が必要な敵対組織つてことだな。

そして最後の三つ目だ。」

「もういいよ。俺はもうお腹いっぱいだったの。」

「通称『闇の手』と呼ばれるやつらだ。」

こいつらが俺達SPIRITSの最も敵対している組織になる。

やつらの詳しい目的はわかっていないが、闇の手は一時期、日本の裏社会を牛耳っていたこともあるし、暴力団関係を手下にして表社会すら支配下にしようとしていたやつらだ。

主戦力は黒装束に身を包んだやつら、通称『ニンジャ』だ。」

「えっ？ 忍者が敵なのか。」

忍者つて、日本のダークヒーロー的なやつじゃねえのかよ？」

「お前の思っている忍者像はバットマンとかそういう感じで考えているんだろうが、実際には外国人が考える日本かぶれのニンジャ像に近い。」

一人一人の戦闘力はプロレスラーぐらいなら一捻りできるだろうぐらいの強さで、刀や槍、鎖鎌や手裏剣なんかも使ってくるぞ。

しかも負けそうになると、必ず自爆特攻してくる。」

「自爆って、もしかしてスプラッター？」

「もう粉々になるぐらいの爆薬とか平気で使ってくるからな。」

肉片はないが、爆発の煙に血の煙が混じっているような感じだ。

しかも足元から頭まで黒装束だから、性別も不明、正体を暴こうにも肉片も残らない始末だ。

SPIRITSの隊員の中には、あれは人間じゃなくて人工で作られた生物兵器なのだという説も出ている。

「なんせ、あれはただの戦闘員でしかないんだからな。」

「はあ？」

「えっ、そのニンジャっていうヤバイやつらより強いやつらがいるのか？」

『『フロントム』』と呼ばれる怪人だ。

こいつらは元々普通の人間だったが、闇の手によって集団拉致されてとある儀式によつて誕生してしまった存在で、本来は仮面ライダーウィザードっていう作品に登場する怪人で自己中心的なやつらなんだが、闇の手のやつらに洗脳なんかされたらしく二

ンジャを手下にして闇の手の勢力を拡大するために動いている。

まあ本来なら普通には倒せないファントムが仮面ライダーの必殺技ぐらいなら倒せるようになっていていうってこういうこつち側の利点もあるんだが。」

「ちよつと待て、情報量が多い多い。」

つまり俺が所属することになるSPIRITSってのは、闇の手っていう日本を支配しようとしているやつらと戦っているってことだな。

んで、そいつらにはファントムっていう怪人とンジャの手下がいて、普通の人間じゃ太刀打ちできないってことだろ？」

「よくまとめたな。」

「要領はいい方なんだぜ。こつち見えても。」

「そうだったな。」

それじゃ、確認することがあるから俺が呼んだら隣の部屋に来てくれ。」

と、俺は寝室に向かうと扉を締めてオーロラを開く。

するとベッドには、土豪剣激土、光剛剣最光、煙叡剣狼煙以外の聖剣が立て掛けられていた。

「暁、ちよつと来てくれ。」

リビングにいる暁を呼ぶと、不思議そうな顔をして入ってくる。

「なんだこれ？ 剣…か？

随分とカラフルだな。」

「ああ、一旦そこで止まってくれ。」

扉のところで暁を止めると、ちよつと不満そうに言ってくる。

「なんだただ自慢したいとかじゃないよな？」

「そういらつくな。」

これらは、仮面ライダーセイバーという作品に登場する変身アイテムなんだが、アイテムそのものが意志を持っていて、自分が使うのにふさわしい人物が現れると、その手元に引き寄せられるようになってる。

その場所から、これらの剣に向かって『こつちに来い』と思つて見ろ。」

「よくわからんがわかつた。」

暁はその場所で手を伸ばすと、無言で何かを考えているようだった、そして目を瞑つて眉間にシワを寄せていたが、ついには声に出してまで呼んでいた。

「こつちに来い！

…来ないぞ。それ、偽物なんじゃないのか？」

俺は再びオーロラを開いて剣をクラインの壺に移動させると、リビングに戻つて座つた。

「あれらは本物だ。

何せ実際に剣に選ばれた人もいるからな。

お前の現状と、これからやっていくことができたなら俺からは目標を用意してやる。」
俺の真剣さがわかったのか、黙って対面に座ると聞いてくる。

「何をやらせる気だ？」

「1年、伸ばせても1年半であの剣のどれかに選ばれるぐらいになってみせろ。

ただし、報酬は用意する。

1年から1年半までに剣に選ばれてセイバー系列の仮面ライダーに変身できれば、元の世界でのお前が背負わされた借金は俺が返済してやる。

それに、お前の両親の説得も協力してやる。

それでも不満なら、蒸発したっていう元カノの搜索の手伝いもしてやろう。」

「どうしたいきなり？」

「俺は正直、友人のお前が仲間に加わってくれたのはめっちゃくちゃありがたいことだと思っただ。俺が今の地位にいるのにお前がいち戦闘員程度でしかないのはどうかとも思っ

た。

だから、強さと覚悟を持って俺の背中を守れるぐらいになってもらいたいんだ。」

暁はしばらく考えを巡らせるようにして、うーんと目を瞑って考えているようだったが、目を見開いて言う。

「わかった。」

仕事の斡旋をしてもらって、そこまでしてもらえらなら俺も覚悟決めてやらせてもらう。

「1年半だな、お前も覚悟して待ってるよ。」

俺達は、同時に立ち上がるとハイタッチをした。

翌日、俺の仕事場には新しく暁用のデスクが用意されていた。

俺のデスクは出入り口の正面にデンと置いてあり、俺の席から向かって右手が風蓮さん、左手に耀子さんが座っており、暁のデスクは風蓮さんの隣に据えられていた。

暁は真新しい制服に身を包んで部屋に入ってくると、最初の言葉はあいさつではなかった。

「なんか玄の位置って、フリーザみたいだな。」

「だーれが、ドドリアですって!!」

俺よりも反応が早かったのは風蓮さんで、立ち上がって暁に詰めよっていた。

「誰もそんなこと言ってないじゃないツスカあ！」

暁は、大柄でスキンヘッドにオネエ言葉の鳳蓮さんに詰めよられて、既に三下言葉に切り替わっていた。

「そうすると、私はザーボンってことよね。」

…変身したら化け物になるって言いたいわけ!？」

ついには耀子さんにも詰めよられて、終いには踏まれていた。

「…そんな、ピンヒールで、ありがとうございます！」

暁ってこんなやつだったっけ？と今更ながらに困惑気味の俺は慌てて止めに入ったのだった。

SPIRITS 初心者

side 御影暁

「日本を平和を守るため！」

「日本を平和を守るため！」

「わーるいやつらをぶっ飛ばせ！」

「わーるいやつらをぶっ飛ばせ！」

「市民の平和を守るため！」

「市民の平和を守るため！」

「無敵の力を見せつけろ！」

「無敵の力を見せつけろ！」

『ボウヤ達！声が小さいわよ！』

そんなんじや小鳥のさえずりと一緒！

もっとお腹から声を出しなさい！』

「サー！ イエツサー！」

「日本の平和を守るため！」

「日本の平和を守るため！」

この世界に来てから早一カ月。

玄の部署に来てからは、事務仕事をさせてもらえてない状況だ。俺が初日に発した言葉が原因なので後悔しかない。俺の精神は既に折れかけている。

毎日20キログラム以上はある重りを身に付けて、朝から晩まで1日中を走らされるのだ。

教官殿の風蓮さんや、京水さんが後ろから声をかけてくるが、少しでも勝手に休んだり文句を口に出そうとすれば、いつの間にか近くにおいて下半身を眺めながら舌なめずりをしてくる。

そう。俺の貞操が狙われているようだった。

その度に俺は恐怖で走り出し、なんとか1日を終えて本部のめちやくちやうまい飯を食べて、部屋のシャワーを浴びてマツサージをしてから寝るのだ。

マツサージをしないで寝て、ひどい筋肉痛になったことがあったが、『筋肉痛は蜜の味
よ〜♡』という訳のわからない言葉を言われて連れ出されて、走らされる時もあった。

俺と同じメニユーをこなす御同輩先輩達は、俺を励ましてくれる人もいるから、なん
とかやれている。

たまに玄も参加してる時もあるんだが、走っている途中で教官殿に電話だと言う理由
で時々呼び出されていたから、もう気にしないことにしていた。じゃないと途中で倒れ
たり嘔吐したりで脱落していった人たちは、復帰してきたかと思つたら教官殿達に対し
て体をくねくねさせながら熱い視線を送っていたのを見てしまって、ああなるのは俺は
ごめんだと思つたからだ。

玄との約束を守るため、俺の貞操を守るため、2週間を走りきると、急に走る時間が
短くなり、朝と夕方の10キロメートルに変更された。

まあ、それでもめちやくちやくきついんだが。

御同輩達は泣いて喜んでいたが、待つていたのはハードな筋トレの日々だった。
休んだりすればそれだけ増やされる。

だけど本部の食堂ならめちやくちやくうまい3食腹一杯食べるから誰も文句はない。
そしてそれも2週間が過ぎると、大ハードから小ハードぐらいになった。

本部ビルの近くにある銭湯では、俺も含めて鏡の前でマッスルポーズをする人が増え

てお互いに笑いあったりしていた。

そして玄の部屋の一室につくられた俺のプライベートスペースの布団の上で、日課になったストレッチをすると玄が帰ってきた音がする。

出迎えてやると、なんかやつれた顔をしていたから話を聞くといろんな企業の偉い人との打ち合わせや橋渡しし、技術交流のプレゼンや新隊員のスカウトにと玄は玄で忙しいようだった。

「ああそういうえば、暁はそろそろ入隊してから一カ月だろ？」

「ああ、そうだな。」

「最初の一月は基本的な体力づくりだが、それを過ぎると戦闘のための座学や対人戦、連携の訓練に登山とか量産品の仮面ライダーに変身できるかどうかの適正テストなんかもある。」

それにそろそろデスクワークしてもらいたいぐらいなんだが、まあもう一月はそれどころじゃないだろ。」

「マジか、座学とかあんの？」

「あるぞ。部隊長に昇格したい隊員もいるからな。」

座学テストや実技テストなんかをクリアすれば、部下もつくし、給料も増える。

その分、仕事は増えるがな。」

「玄には部下下っているのか?」

「いるぞ。」

4人だな。暁を含めて。

耀子さんと凰蓮さん、あと一人は受け入れ準備中だ。」

「教官殿が玄の部下なのか!」

…もしかして部署のメンバーか?」

「そうだな。うちの『交渉部』は人手は少ない分、仕事も多岐に渡る。

まあ、ほとんど俺の仕事みたいなもんだな。

凰蓮さんは俺のボディガードみたいなのだし、耀子さんは少しずつ仕事を覚えてくれるけどスケジュール管理や雑事がほとんどだ。

暁や後の一人も俺のボディガードみたいな扱いらしいから、早いところ暁が仮面ライダーになってくれれば俺の負担も減るかもな。」

えっ、玄ってそんなに重要人物だったのかよと心の中で思ってしまう。

「俺ってそんなにモブに見えるか?」

「あれ?声に出てたか?」

「お前の顔がわかりやすいんだよ。」

俺のことを『え〜?こいつって重要人物なのかよ?』っていう顔だったからな。

昔っからうちのお袋にも腹が減ってそんな顔だなんて言われて飯を食わせてもらってただろ。

もう少しポーカーフエイスの練習ぐらいしたほうがいいんじゃないか？」

「ポーカーフエイスって、練習するものなのかよ？」

まあやってみるけどよ。」

洗面所の鏡の前に行って、百面相になってみたりしたけれど、途中でからかわれたつて気づいてから文句を言おうと玄のところに行くこと

「ようやく、暁の顔の眉間のシワが消えたな。」

やっばりきついよな？

俺の時はもう少し優しい訓練量だったからな。

でも風蓮さんも考えて内容を決めているだろうし、やっばり指導するには教え子に死んで欲しくない気持ちがあるだろうからその気持ちを汲んでやれとまでは言わんが、少しは考えてやれよ。」

いつの間にか、毎日の肉体改造に嫌気が差していたらしく、玄に言われなければどこかで爆発していたかもしれないと思うと、少しゾツとした。

そうだったよな。この世界は元の世界よりも死にやすい世界だった。

先週、励ましの言葉をかけてくれた先輩が、自分の同僚がニンジャの自爆に巻き込ま

れて亡くなったって俺に教えてくれたのも、俺を死なせたくないからなんだよな。

苦手な座学も死なないため、仲間を死なせないためにも努力する必要があるってことだな。

明日のためにも、俺は早めに就寝することにした。

side 狭間玄乃

2014年の1月に突入した。

暁はみるみるうちに隊内で成長を果たし、黒影トルーパーとして日々研鑽を積んでいくようになった。

新年の挨拶を済ませると、俺は本郷さんから呼ばれて総隊長室の前に行き、ノックをする。

「入りましたえ。」

「失礼します！」

そこには本郷さんともう一人の真新しい制服を着た人物が立っていた。

「…あんたは。」

「お久しぶりになるね。

ようやくSPIRITSに入隊できるようになったのか。

よろしく、朔田 流星君。

改めて狭間玄乃だ。」

そう彼は仮面ライダーメテオの朔田流星だ。

暁に説明したように、○沢亮のそっくりさんである（笑）

俺が送ったメテオドライバーとメテオスイッチによって記憶を取り戻した彼は、昴星高等学校から天ノ川学園高等学校に特別交換編入生として半年の期間、如月弦太郎がいる2年B組に行き、再び友情を育んだ。

彼は昴星高等学校を卒業後、インターポールではなく恋人の野座間友子と一緒に普通の大学生となっていた。

ジークンドーの使い手でもあり、仮面ライダーメテオでもある彼をスカウトしに行つたのだが、恋人との大学生活も大切だから待つて欲しいというお願いを受けていた。

「うむ。彼もまた最近の闇の手の襲撃にあつた場所にたまたま居合わせたらしくてな。

それに憤慨して、SPIRITSの入隊を決心してくれた。

それと、彼の恋人君もSPIRITSの総務部に就職したという報告も受けている。

今後は、交渉部の狭間君の部下として動いてもらうことになるだろう。」

「狭間さん、よろしくお願いします。」

「こちらこそ、よろしく。」

「うむ。」

では朔田流星君は退室したまえ。

ああそれと狭間君には引き続き話があるから残ってくれ。」

「失礼しました。」

「朔田君、また後で。」

「はい。ああそれと流星で構いませんよ。」

そう言つて彼が出て行くと、俺と本郷さんだけになつた。

「実は、S. H. H. I. E. L. D. から会談の申し込みが入つた。」

「S. H. I. E. L. D.; ニック・フューリー長官がですか?」

「うむ。アメリカに私直々に来て欲しいそうだ。」

そこで、狭間君達交渉部を護衛として連れて行きたいと考えている。

ああ、向こうで何かあつた場合は、私はよっぽどのことがない限りは動くことはないからそのつもりでいて欲しい。」

「護衛の必要性を聞こうとして被せてきましたか。」

ですが、我々交渉部は暁は半人前、先ほどの彼にいたつては入隊したてですよ。」

「そのあたりの裁量は君に任せるが、朔田流星君は入隊したてとはいえ、英語も堪能で立派な仮面ライダーだと聞く。

戦力は多いほうがいいと思うがね。」

「何かあると?」

「SPIRITSができて間もない頃、S. H. I. E. L. D. のフューリー長官は自ら足を運んで協力をお願いしに来た。

そんなフットワークの軽い彼がわざわざアメリカの本部に呼ぶのだ。

何か手伝って欲しいことがあるのかもしれん。」

「わかりました。調べておきます。」

「うむ。頼むぞ。」

「それでは失礼しました。」

俺は総隊長室を出て、交渉部に着くと、その中では既に流星君はあいさつを済ませたのだろう、耀子さんの隣に用意されたデスクで私物の整頓をしていた。

「お疲れ様です。」

「お疲れ様です。」

耀子さんの声かけに返答して、自分のデスクに向かいながら眺めると、耀子さんはデ

スクに置かれたノートパソコンを開いて忙しそうにしているし、風蓮さんは書類に四苦八苦している隣の晩にいろいろと教えている様子だった。

「みんな聞いてくれ。」

もう挨拶は済んだだろうが、我が交渉部に新しく朔田流星君が入ってくれた。

彼もまた英語が堪能で、仮面ライダーでもある。

協力して任務に励んでくれ。」

「「「はい！」」」

「それと、総隊長からの依頼だ。」

近々、アメリカのワシントンD・C・にある戦略国土調停補強配備局、通称S・H・

I・E・L・D・の本部に会談のため総隊長の護衛として同行することになった。

そこで、みんなにも同行してもらおうことになる。」

「あら、面白そうじゃない。」

「腕がなるわね。」

耀子さんと風蓮さんは楽しみな様子だった。

「あの、俺もいいんでしようか？」

「部長と一緒に同行するように言ってるんだぜ。」

もちろん朔田もだろうさ。」

この数ヶ月で私公を分けるようになった暁が流星君の近くに来て言う。
「流星君にももちろん同行してもらおう。」

良かったな、初任務が海外なんてなかなかないぞ。

それと残念だが、暁は留守番だ。」

「えー!?なんで!」

「この数ヶ月で地力を伸ばしたとはいえ、この中ではお前が一番弱い。」

それに、聖剣を前にしてもまだうんともすんとも言わないじゃないか。」

「あの?何の話でしょうか?」

「彼は私みたいに、こういう剣を使う仮面ライダーになるために修練中なのよ。」

困惑する流星君に答えたのは、耀子さんだ。

その手には、煙とともに『煙叡剣狼煙』が現れて流星君に見せていた。

そう土豪剣激土に続き、煙叡剣狼煙もまた新たな主人を選んでいて、スカウト後の入隊の時に彼女の元にオーロラを煙が通って姿を現したのだ。

最初は困惑していたが、今では既に使いこなしていた。

落胆する暁に活を入れている凰蓮さんを横目に、次の任務に向けて取り組み始めるのだった。

キヤプテンアメリカ・ウィンターソルジャー編 米国渡来

side 朔田流星

俺がSPIRITSに加入して数週間、訓練を積みながらの初任務はアメリカだった。

同じ部署の半年ほどの先輩である御影暁さんは、気さくでよく食堂に誘ってくれるし、ドリンクぐぐらいなら何回か驕ってもらったこともある。

だけど、この人は端から見ていると戦闘経験も少ない半ば素人に見える。

だから、この任務から外されたのは納得した。

風蓮さんはしゃべり方は気持ち悪いけど、いい大人だ。

暁さんのような人にも熱心に指導しているし、他の隊員たちからの評判もいい。

それに生身の対人訓練ではこの人には勝ったことがないぐらい強い。いつかは勝たせてもらうけど。

湊耀子さんは狭間さんの秘書だ。美人だしクールだし。

狭間さんが言うにはプライベートではけっこうミーハーなオタク気質な人らしい。

友子ちゃんみたいな感じだろうか？

この人も戦闘経験が豊富みたいだ。対人訓練では足技に翻弄されているとあの剣での攻撃の対処が間に合わなくなってくる。

凰蓮さんとの対人訓練では、よく白熱した模擬戦が繰り広げられていた。

あの二人の戦いを見ていると星心大輪拳の道場を思い出してウズウズしてくる。

狭間さんの戦い方は、いわゆる指揮官タイプだ。

メイン武器が銃ということもあるだろうが、俺達が前線で戦い、狭間さんはそれをフオローして動いて俺達の戦いを邪魔されないような戦い方をしてくれる。

戦場だとありがたい存在だ。

俺は狭間さんのおかげで弦太郎の事も友子ちゃんの事も思い出す事ができたし、仮面ライダーメテオとしての経験を思い出して、それを今の自分に反映しながらの訓練を心がけている。

俺達は地下駐車場から友子ちゃんに、御影さんやSPIRITSの人たちに見送られながら空港に出現した。

闇の手と呼ばれる全容がわかっていない組織は、ダスタードにも似た集団や暴力団を使って日本を支配下に置こうとしているらしい、いわゆる財団Xにも似た存在だ。

あの日、友子ちゃんとのデート中にやつらはいきなり現れて通行人を襲って連れ去る

うとしていた。

もしも俺にメテオとしての力がなければ、SPIRITSの人たちが来てくれなければ、今の俺も友子ちゃんもいなかったらう。

今回の任務で、俺の訓練の成果を出す機会があればその時は…

side 狭間玄乃

えらくガチガチな流星君に、凰蓮さんが声をかけているのを横目に、空港に車が入り、下車する場所にいる人が見える。

下車した俺達が、本郷さんが降りるのを見られないよう壁になるような立ち位置で待ち、そして本郷さんが降りて来た。

待っていた人物、飛電其雄さんが本郷さんと握手をして話だす。

「お久しぶりです。送迎、宿泊の手配等をさせていただきました。

日本人がなめられないよう対処するつもりですので、今回のアメリカ力遠征は、我々に任せていただきます。」

「飛電其雄君だったね。父君とはよくさせていただいているよ。」

今回の事は、狭間君から連絡を受けている通りに君達に全面的に頼りにさせてもらう。

よろしく頼むよ。」

そして今度は俺に対しても握手を求めてきたので答えた。

「飛電さん、この度はありがとうございます。」

「狭間さんこそ、こちらからもありがとうございます。」

スタークインダストリーとの極秘提携がかなったおかげで、父の本社でヒューマギアに関係する研究が進みました。

今回の事は、そのお礼だと思っていたきたい。

我が社、飛電インテリジェンスが今回の会談を全力でバックアップしますので、要望があればその都度おっしゃってください。

日本人の底力というものを見せつけてやりましょう。」

そう、アルドリッチ・キリアンとの戦いの折りにペツパーさんを助けて得たお願いの権利を、飛電インテリジェンスとの技術連携をお願いしたので。

実際にパーティーに飛電其雄さんに同行してもらい渡りをつけると、自分の望みのために使わないことに小言を言われたが、研究者の知識を二人が話しだすとどんどん熱中して行き、喜んで協力を得ることができた。

しかし、世間には確実な結果が出るまでは公表を控えてもらっている。

これは、とある特定の人物達の暴走を抑える意味合いもあり、ペツパーさんには重々お願いしてきていた。

今回の事でヒューマギアの開発が大きく進むだろうし、スタークさんのいい刺激にもなるだろうと思つてのことだった。

今回の事でも、ニューヨークに出張に行つていたこの人に意見を求めたところ、それなら頼つてくださいと申し出てくれたためにそれに甘えさせてもらうことにした。

俺達が話をしている間に、飛電インテリジエンスの社員と思える人たちと部下達が荷物を下ろして手続きをしてくれていた。

俺はみんなに小さく感謝を言いながら乗り込む飛行機へと向かつて行つた。

ワシントン・ダレス国際空港に到着した俺達は、飛電さんの先導について行く形になつた。

荷物などは再び、部下や社員さん達が運んでくれたのでかなり助かった。

飛電さんの話す話題は尽きず、本郷さんはそれを面白そうに聞いていたが、俺は部下達の統率に加えて警戒もしなければならなかつたので気が休まる事はなかつた。

黒塗りの車に乗り込むと、再び飛電さんの話で、今回のホテルにまずは向かつて、時

差ボケを直す意味合いもあるのでそのまま数日はそのホテルで過ごし、こころからの会談という形になるようだ。

実際にある程度余裕を持たせたスケジュールで来ているので、俺達は飛電インテリジェンスの社員達の同行であれば、観光やランニング等のトレーニングができるということも言われた。

そのことに凰蓮さんと耀子さんは嬉しそうにしていたが流星君はどうやら固い表情だった。

「流星君は、乗り気じゃないようだね。」

「俺が記憶している通りのアメリカならば、あまりはしやぎ過ぎるのも良くないと思います。」

「観光気分だと思わぬ危険があるかもしれません。」

「その言葉には一理ある。だが常時気を張り続けるのはとても疲れるものだ。」

ある程度は警戒もするが、もう少し柔軟に対応できるように力は抜いていてもいいと思うぞで。」

「…わかりました。」

俺の言葉に納得したのかしなかったのかよくわからない返事をしてると飛電さんから泊まるホテルの紹介を受けて話題が変わっていった。

アメリカの歴史を知るにはうってつけの Smithsonian 博物館や、ランニング場所としては人気のあるナショナル・モールにも近いところにあるホテルらしく、連泊で宿泊できるようにするのはとても大変だったと言っていた。

そして、ホテルに到着すると飛電さんが部屋にきたのでそのまま入ってもらった。

「狭間さんはお気づきかと思われませんが、今回同行してもらっているのは、社員に見せかけたSP部隊です。」

実際に、空港についてからこちらを見張る素振りをする人物がいたという報告もありました。

もしかすると、このホテルにも監視の目があるかもしれません。

十分注意をお願いします。」

そう言うと、これからの日程の打ち合わせを行うことになった。

side 朔田流星

夜があける前に目が覚めたので目を覚まさせる意味合いも込めてランニングをしに行く格好に着替えた。

ホテルの一階フロアに降りると、飛電インテリジェンスの社員の人だったので、その

人をお願いして昨日の車の中でも話が合ったナシヨナル・モールという場所につれて行ってもらうことにした。

社員の人は車に残って待っているというので、俺は車から降りるとその場で体をほぐして、そしてランニングをはじめた。

俺の他にもこの時間からランニングをしていた人がいて、リズムを整えるためにその人を基準にしてスピードを整えていく。

その黒人の男性について行くように走っていると、まるで全力疾走をしているかのように白人の男性が追い抜いて行く。

「左から失礼！」

その声はとても疲れているようには聞こえなかったのでも驚いたが、あれではすぐにバテると思自分のペースを守るように走って行く。

すると、いつの間にか先ほどの男性が後ろから同じペースで俺と黒人の男性を追い抜いていく。

かけてきた声も同じで、黒人の男性はさっさと抜いてくれといわんばかりの声を発していた。

そしてリンカーン記念堂リフレクティングプールに差し掛かった時にも先ほどの男性が同じペースで追い抜いていった。

さすがにむきになったその黒人の男性が白人の男性に追い付こうと走り出すけれど、それを軽々と突き放して走って行ってしまふ。

そろそろランニングを終えようかと思っていると、バテバテのその黒人の男性が木に寄りかかるようにして休憩していたので、心配になって声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、一緒に走っていた君か。

俺は大丈夫。

追い抜いていったやつが異常なだけだ。」

「ずいぶん面白い種だな。衛生兵を呼ぼうか？」

と、その白人の男性も戻ってきたよう話しかけてきた。

黒人の男性は、白人の男性に肺を取り替えてくれと冗談交じりに話をしていたので、大丈夫そうだった。

その黒人の男性の話によると、白人の男性は20キロメートルを30分という驚異的なスピードで走っていたことになるらしい。

しかし、白人の男性はそれでも遅いと言っていたので声も出せないでいた。

どうやら黒人の男性は退役した軍人のようで、サム・ウイルソンと名乗って、白人の男性に腕を持って起こされていた。

そして、白人の男性も名乗ったことでこの男性がどうしてこうも超人的なのかがわかった。

「あなたが、キャプテンアメリカだったんですね。」

「ああ少年。驚かせて悪かったね。」

名前は？」

「リュウセイ・サクタ、日本人です。」

「リュウセイか、観光かい？」

「いいえ。仕事です。」

それと、これでも20才です。」

「日本人が若く見えるつてのは本当だったのか。」

ロジャー・スさんに少年と言われて思わずむきになって言ってしまったけれど、ウィルソンさんにそう言われれば言い返してしまった自分に恥ずかしくなっていた。

その間に二人の話は弾んだようで、ロジャー・スさんはメモ待てとついていた。

するとボソツとロジャー・スさんが言葉をこぼして言う。

「僕も日本人には知り合いがいてね。」

「狭間さんのことですか？」

「ハザマを知っているのか？」

「ついつい反応して言ってしまったので、このまま身分をあかすことにした。」

「俺の上司ですよ。」

「ということはハザマも今ワシントンに居るのか、君もSPIRITSの?」

「はい。新人ですけど。」

「狭間さんにはこのことを話しても大丈夫でしょうか?」

「ああ、かまわない。」

「おっと、連絡だ。」

ロジャースさんは端末を取り出すと、任務だと言ってウイルソンさんと軽口を言い合
うと、ロジャースさんは赤毛のプロンドの綺麗な女性の車に乗って行ってしまった。

すると、そのすぐに迎える車が来たので、ついでにと、ウイルソンさんを家まで送っ
てもらい、ホテルに帰ることになった。

会談、トリスケリオン

side 狭間玄乃

翌日、ホテルの一室で着替えをしていると鳳蓮さんの声がかかってきたので、そのまま入ってもらって大丈夫だと伝えた。

「鳳蓮さん、おはようございます。」

「おはようと悠長に言ってる場合じゃないわよ。」

これを見て。」

鳳蓮さんの手に握られていたのは、小型のカメラのようなものが12個ほどで、それを近くのテーブルの上に置いた。

「これは？」

「私の部屋と、耀子ちゃんの部屋に仕掛けられていた小型カメラよ。」

巧妙に仕掛けられていたわ。

幸いなことに盗聴機の類いはなかったから、音声までは大丈夫だったみたいだね。ね。

こういうのを見つけてるのは軍人だった頃の癖みたいなものなのよ。それが役にたつ

たわ。それで。」

「この部屋にもあるかもしれないと?」

「今、耀子ちゃんと飛電インテリジェンスの人たちにもお願いして、私たちが宿泊しているすべての部屋を見てまわっているわ。」

「だったら、さっそくお願いしよう。」

俺が一緒について行きながら、凰蓮さんの作業を見ていると、次々に小型カメラが出てくる出てくる。

計7個もの小型カメラが仕掛けられていたことがわかり、ホテルの一室に集まって数えて見ると合計56個もの小型カメラが仕掛けられていたことがわかった。

「今、このホテルの支配人に抗議の声明を行っています。」

それと、仕掛けられていた小型カメラの機種の割り出しも平行して確認中です。」

走ってきたのだというシャワーを浴びてござっぱりした様子の流星君から、ステイブさんとの遭遇の報告を受けていると、スーツ姿の飛電さんが入って来てそう報告された。

念のため、窓から一番遠いソファアに座った本郷さんが唸るように声を出した。

「これはS・H・I・E・L・D・かね?」

「かもしれません。」

ニツク・フューリー長官ならば、『安全のために必要なことだった』とでも言いそうです。すね。」

「ううむ。こういう先手を打ってくるか。」

これでは、観光は諦めた方がいいかもしれない。」

俺の言葉に本郷さんが言うと、耀子さんと鳳蓮さんの落胆する雰囲気伝わってきたのを感じた。

すると、ホテルの支配人が来たというので入ってもらい説明を受けると、数日前に政府の人間が同じ部屋に泊まっていったのは確認しているが、まさか小型カメラが仕掛けられていたとまではわからなかったという。

お詫びとして、宿泊中のホテルのルームサービスはすべて無料に言うと言おうと退室していった。

あくまで、自分達は知らなかったと言い張るつもりかもしれないがアウエーなのは我々であり、ホテルに仕掛けられていたカメラを探し出す為とはいえ、ホテル内を傷つけたのもまた事実なのであまり追及もできなかった。

「宿泊費ぐらい無料にしてもいいじゃないのよ。」

鳳蓮さんは支配人の無責任さに呆れているようだった。

「湊君、会談の予定は？」

「明後日のお昼からの予定となっております。」

「ふむ、こういうことをするのだ。」

明日の午前中に変更を伝えなさい。」

「わかりました。」

耀子さんは失礼しますと言って部屋を退室していく。

「本郷さん。これでは、ルームサービスの無料というのも怪しいですね。」

睡眠薬入りとでもなればそのまま拉致されかねません。」

「S. H. I. E. L. D. はそこまでののか?」

「いえ、S. H. I. E. L. D. 内部の別の組織の可能性がありません。」

「別の組織…ですか?」

真剣に話を聞いていた流星君が聞いてくる。

しかし、それに答えたのは俺ではなく風蓮さんだった。

「ヒドラね。」

「ヒドラというのは?」

流星君にはその知識がなかったようで不思議そうに聞いてきた。

「ヒドラというのはね…」

風蓮さんが流星君に説明をしている間に、俺達は小型カメラの機種が判明したという

報告を受けていた。

「この機種は、あまり市場には出回らない品のようですね。

見る限り軍の製品のようにです。

市場価格は、一般的は小型カメラの3〜3.5倍はするようです。」

飛電さんがノートパソコンの画面をこちらに見せながら説明してくれる。

「それが56個、これがS・H・I・E・L・D. …ひいてはヒドラか。」

「朝食は近くのカフェからテイクアウトしたサンドイッチやドーナツを買って来させますので、少々お待ち下さい。」

「私も行くわ。観光ができないならせめて街並みを見てまわるぐらいはしたいわ。

周囲の状態も確認しておきたいしね。」

飛電さんがSPの人たちに指示を出すと嵐蓮さんもそれについて行ってしまった。

それと入れ替わりに耀子さんが戻ってくる。

「連絡を入れました。

いろいろと言われましたけれど、向こうもひとまず了承してくれました。」

「よくやってくれた。

狭間君、君は朝食を食べたら一度本部に戻ってくれないかね？

持って来て欲しいものがあるのだよ。」

「はあ。それぐらいならば可能ですが、いったい何を？」

翌日、飛電さんが用意した車に乗り込み、セオドア・ルーズベルト島に存在するS・H・I・E・L・D・の本部『トリスケリオン』へと向かって行く。

たった二本の橋に隔たれた巨体な施設、日本のSPIRITS本部が地下にあるというのに、堂々とその場所に建っている。

正面入口付近に車が止まると、俺達が先に降りて

、再び本郷さんの扉の前に並んで出てくるのを待った。

俺の隣には飛電さんも立っただけで周囲を警戒してようだった。

本郷さんが降りてくると、俺は本部に一度戻って持ってきた物が入ったアタッシュケースを持って、部下達に背中を守られながら入って行く。

その間に、飛電さんが車を移動させて待機してS・H・I・E・L・D・に細工されないように監視することになっている。

建物の中に入ると、案内役のスタッフが現れて武器の所有などが無いかを調べられた。

本来ならば部下達も所有しているドライバーなどは俺のクラインの壺の中に入れて

あり、接収などさせるつもりはさらさらなかった。

検査が終わるとどこことなく不満気なスタッフに連れられて音声操作式のエレベーターに乗り込み、高官のいるフロアに通されて、その会議室らしき場所に通された。

部下達はここで待機して欲しいとのこと、三人はここで待機することになった。

俺達が話し合いをする場所にはガラス越しにはあるがこちらから見る事ができそうではあった。

俺と本郷さんは再びスタッフに連れられて行くと、長官室にいるフューリーさんのところまで通された。

「お久しぶりで。」

SPIRITSの総司令官殿。」

「お久しぶりですなあ。」

S. H. I. E. L. D. の長官殿。」

やはり、ホテルの小型カメラはこの人の差し金らしく、本当にSPIRITSの人たちの安全を考慮して行ったことだと言われ、逆に、あらかさまなプライベートな部分を避けるように配置してあったと言う説明まで受けた。

今回の会談の目的は、人類の為にとある計画、世界中のテロや戦争行為を未然に防ぐ

『インサイト計画』なるものが進行中であり、そのためには拠点、兵装、兵士のそれぞれを現行のはるか先の次元を持って行わなければならないという。

「日本でも、市民を狙ったテロ行為が行われた後にならなければ行動を起こすこともできなйдらう？」

すべてが後手後手に回り、市民の人命が失われることになるよりも前、未然にそれを防ぐことで被害を減らすことにつながる。」

「そのために、未来で犯罪者になりえるかもしれない全国民に銃口が突きつけられることと容認しろと？」

「ばかばかしい。」

本郷さんに、もちろん自分もだが呆れて軽く引いていた。

「そのばかばかしいことを行わなかった事で、どれだけの人命を失う事になるのか考えられないわけではあるまい。」

現時点では、拠点、兵装の拡充が行われきたが、兵士の強化につながるものが必要だとか。

「それが、ライダーシステムだと？」

「そうだ。日本で現在使われている物、それを提供していただきたい。」

フューリー長官が、テーブルのパネルを操作すると、G3部隊や黒影トルーパーの戦

闘シーンが写し出される。

「これらのアーマーは普通の警察官でも扱えるほどそれほど癖があるものではないようだな。

しかし、量産品であるにもかかわらずトニー・スタークが作ったアイアンスーツよりも高性能のように見える。

これらを更に強化、配備できればインサイト計画を現実のものにできるだろう。

それに、何もただ寄越せと言っているわけではない。

拠点の一つをまるまるSPIRITSが本部として使うといい。

あんな地下に隠れて活動する必要がなくなるのだ。戦力も拠点もできる。見返りとしては十分だと思うがな。」

確かにそれが叶えば闇の手のテロ行為を未然に防ぐことができるようになるだろう。しかしだ。

「フューリー長官、どうやらあなたには浪漫というものがわかつてはいないようだ。

それに、ライダーシステムを提供した結果、この世界がどうなるかの想像がはるかにできていない。

あなたのその考えこそが世界の破滅を加速させることにつながるのだという考えすらないとは呆れたものだ。

ライダーシステムを提供した後には、狭間君あたりをオブザーバーにでも招いてディエンドを手元に置いておきたいという思惑がありありと透けて見えますな。」

「何？」

「フューリー長官。」

その考えはとて立派だと思います。

ですが、S・H・I・E・L・Dの全てがその考え方であるとは言えません。

現に、チタウリの技術などのS・H・I・E・L・Dが管理しているはずのものが流出しているというのもまた事実。

我々のライダーシステムがそのような輩に渡らないとは、100%無いとは言えないでしょう？」

「では何ならば提供できるといえるのかね？」

フューリー長官は俺の言葉に思いあたる節もあるようだったが、それでも言い出した手前、引き出したという気持ちにはやるのか聞いてきた。

俺は本郷さんの方を見て、本郷さんが頷くと下に置いていたアタッシュケースをテーブルの上に置いた。

仮面ライダーの歴史

「これは？」

不思議そうに聞いてくるフューリーさんに、中身を開いて見てもらった。

そこに入っていたのは一つの大容量のメモリーチップである。

それを手に取ったフューリーさんは、接続口にそのメモリーチップを挿入口に差し込み、その中身を見始めた。

「何だこれは……報告書？」

それに映像ファイルのようだが。」

正面の大画面に現れたそれらをお互いに共有しながら俺が解説をはじめめる。

この一つ芝居は本郷さんにも、この世界の仮面ライダー原作者にとつての理想でも、賭けになるものだ。

あの時、本郷さんと原作者、撮影陣で開かれた酒の席で懇願されて行った昭和ライダーの上映会、原作者さんと撮影陣が語ったあの会話から始まり、SPIRITSの本部があの場合に設立されたあの瞬間に、この俺と、この世界の原作者と特撮の撮影陣、本郷さんの間で形作られたこの計画はいつか行われることになっていた。

念のために本郷さんの部屋の隠し金庫に入っていた『これ』を、頼まれて取って来たのである。

この、あり得ないことをあるということにできる計画を実行できるのはこの瞬間しかないのかもしれない。

開幕は、本郷さんによる一言だ。

「S. H. I. E. L. D. は地球の守護者のように振舞っているが、その実、この世界を守ってきた実績はとても浅い。」

「何だと?」

「この世界はいくつもの要因によって崩壊し、破壊され、しかしその度に英雄達の決断によって歴史が逆行し、作り直されてきた。」

世界の平和の為になるのならばと、幾人もの英雄達は、人々の記憶から消え失せ、その歴史は無かったことにされてきました。

人類が我々を悪だと攻めて来た歴史もありました。

人類が僅かしか残らなかつた歴史もありました。

その度に、裏にいた諸悪の根源を叩き潰し、そして世界はやり直されました。

我々は守ってきたのです。何度も、何度も。

そして、英雄達と行動を共にしたある人物が動きました。この世界に人々に、英雄達

のことを知って欲しいと、漫画を描き、特撮というジャンルによって再現しようとした。」

「これは…」

「しかし、本来この世界を救った英雄達は見向きもされずに廃れ、人々に求められたのは新たなヒーローでした。」

これは、英雄達の戦いの歴史が唯一残された証拠にして、歴史が逆行したという証拠でもあります。

そう、『仮面ライダーの歴史』です。

フューリー長官、これを見てあなたが行おうとしていることを、もう一度考えてみてはくれませんか？」

実際に仮面ライダー歴史は、いくつもの改変、やり直しが行われてきた。

劇場版仮面ライダーカブト GOD SPEED LOVEにて天道総司によって行われた改変。

仮面ライダー電王に登場するイマジン達。

仮面ライダーディケイドと、大ショッカーの存在。

スーパーヒーロー大戦GP 仮面ライダー3号の歴史改変ロボ

そして、仮面ライダージオウ…等々

このデータは、もちろん捏造・編集された物だ。

だが、俺の世界で、未来の日本で、この世界にはオリジナルが存在しない物だからこそできる芸当である。

詳しく精査されれば、加工や編集された物だとわかるだろう。

しかし、このままヒドラの蜂起が起こればこれは詳しく精査されないまま世界に広まることになる。

実際に仮面ライダーは戦っているのだ。

しかし、隠れ潜んでいた理由もあつたのだと世界は知ることになるだろう。

ちなみに、変身者に関する情報は載せてはいない。

「フューリー長官、あなたは我々が何も知らない、わかっていないと御思いのようだ。しかし、このファイルの2006年の項目を開いてもらいたい。」

本郷さんの言葉を聞いたフューリー長官が、画面を操作してファイルを開く。

そこにはゼクター系列のライダー達と、市民を殺害してその人物に成り代わる緑の怪物の姿が写し出された。

「この怪物の名前は『ワーム』または『ネイティブ』と呼ばれています。この怪物は殺害した人間の姿形そしてその記憶さえもコピーしてその人物に成り代わりながら社会に溶け込みその数を増やしていました。」

彼らの起源は、1971年及び1999年に日本に落ちた隕石から発生しました。所謂、地球外生命体です。

ああ、現在の地球上には存在していません。

仮面ライダーカブトによって歴史の改変が行われ、地球には来なかった事になっていきますから。

フューリー長官、あなたはこのワームと似た存在をよくご存じのはずだ。

1995年のロサンゼルスで起こった事は、我々も把握しています。

あなたが眼帯をしている理由もね。

破傷風は怖いですから。」

「…存在しない歴史が記されているのは何故だ。」

「2007年の項目には、ああこれです。」

『特異点』と呼ばれる歴史の改変の影響を受けない特殊体質の人間もいるのですよ。」

フューリー長官は絞り出すように質問してくるが、画面を操作して猫の鳴き真似をしてからその疑問に答えた。

『怪物と戦う時は自らも怪物にならぬよう、心せよ。深淵をのぞく時、深淵もまたお前を見返しているのだ。』

ニーチェの言葉です。

あの小型カメラで覗く映像を見るあなたはいったい何に見えるのでしょうか？」

フューリー長官は、このデータを精査した後再び会談を行いたいと、今日の会談はお開きになった。

俺の本郷さんは目配せをしてお互いに作戦がひとまず一段落したのだと領きあった。

再びスタツフに連れられて部下達と合流しようとして移動していると対面からステイブ・ロジャースさんが眉間にシワを寄せて歩いて来ていた。

「ロジャースさん。」

「ハザマじゃないか、トリスケリオンに来ていたのか。」

「はい。こちらの方の付き添いですね。」

「初めましてになる。」

SPIRITSの総隊長のタケシ・ホンゴウだ。」

「あなたが！初めましてステイブ・ロジャースです。」

「君の話はよく聞いているよ。キャプテンアメリカ。」

うむ。力強い握手だな。」

「貴方も。ただ者ではないようだ。」

「ステイブさんはどうしてこのフロアに？」

「フューリーに言いたい事があってね。あなた方は？」

「そのフューリー長官との会談ですよ。」

我々としては、一泡吹かせられたと思えますがね。」

「それはいい事を聞いた。フューリーはよく隠し事をするからな。」

あの男も少しは痛い目にあつた方が、S. H. I. E. L. D. の為になるだろう。

そういえば、ハザマの部下に会つたぞ。」

「流星君ですね。」

報告は受けています。

彼から聞きましたが、いろいろとメモを取つていたりとか。我々が滞在しているホテルを教えておきます。

この会談はまだ長引きそうなので来ていただければ部下達も喜びます。」

「ああ。行かせてもらう。」

そして、そこでロジャー・スーさんとは別れて部下達と合流して再び飛電さんの運転する車でホテルに向かつた。

ホテルに戻つて数時間するとS.P.の人からそわそわと落ち着かない様子で来訪者があつたという報告を受けた。

さつそく来たのかと思ひ、案内するように言うと、しばらくしてから部下達や本郷さ

ん、飛電さんが集まった部屋にノック音が聞こえた。

そのまま通すように言うと、ロジャーズさんに加えて黒人の男性、サム・ウィルソンも同行していた。

「まあ!?イケメン!」

最初に反応したのは凰蓮さんで、俺の方に向かって来ていたロジャーズさんをじっと見ているようだった。

「ようこそいらつしやいました。ロジャーズさん。」

「友人も一緒に連れて来たがよかったかな?」

「かまいませんよ。」

初めまして、俺はゲンナイ・ハザマ。」

「サム・ウィルソンだ。」

いきなりで悪かったな。朝に会ったりユウセイに会いに行くと言うから一緒に来させてもらった。

ランニングの後の送り迎えの礼が言いたくてな。」

「その礼はそこの方、飛電さんに言ってください。」

運転手は彼の部下なので。」

「わかった。そうさせてもらう。」

俺の紹介した飛電さんにウイルソンさんが向かい、そしてステイブさんは部下達と挨拶を交わしていた。

「ハザマ。二人だけで話せるか?」

とステイブさんがこつちに来るなり言ってくるので、本郷さんにことわって自分が寝泊まりする部屋に向かわせてもらった。

部屋に入り、お互いがソファアに座るとロジャーさんが話しはじめた。

「SPIRITSとS. H. I. E. L. D. の会談ではどういう事を話しあったんだ?」

「話しあったというよりも、S. H. I. E. L. D. の要求をSPIRITS側がそれに応えろという脅迫まがいの会談でしたがね。

ロジャーさんは『インサイト計画』というものをご存じですか?」

「ああ、フューリーに聞いてトリスケリオンの地下に行き、そこで3機のヘリキャリアを見た。

あれはあつてはならないものだ。」

「…拠点というものはヘリキャリアの事だったのですか。

全人類に銃口を突きつけ、犯罪を犯す可能性のあるものは、それを行動する前に殺戮する。」

あれによって将来の世界にあるものは、統治という名の恐怖でしかありません。いずれ破綻し、必ずそれに抗うもの達によって駆逐されるでしょう。

歴史が繰り返されるだけでしょうかありません。」

「ハザマもそう思うか。」

僕はあれをフューリーにやめさせたいと思っている。」

「我々SPIRITSもそれに賛成します。」

「…ちよつと待つてください。」

「どうした?」

俺はあらかじめ取り出していたものをロジャースさんに渡す。

「これは?」

「特殊な救難信号を発信するGPS装置です。」

SPIRITSでは隊員の全てに渡される標準装備のものになります。

これは予備の物ですが、このスイッチを押すと我々の持つ端末画面に救難信号として表示されます。

緊急の際はこれを使ってください。

我々SPIRITSはロジャースさん、あなた個人の味方として動きます。」

「…しかし、それでは。」

「かまいませんよ。

フューリーさんとの会談に本郷さんは憤つちやいましてね。

あんなかつてのヒドラまがいの事を平然としようとする組織の協力など、こつちから願ひ下げだそうです。

俺の方からはもう少し冷静になって欲しいとお願ひしたんですが、次の会談が荒れそうで心配ですよ。

ロジャーズさん、あなたがS・H・I・E・L・D・に對して何をしたいのかは知りませんが、俺だつてあなたと一緒にニューヨークでチタウリの軍勢と戦つた戦友だと思つています。

少しは頼つてください。」

「…すまない。」

「そこは、ありがとうと言つて欲しいですね。」

「そうだな。

ありがとう。頼りにさせてもらう。」

ロジャーズさんとウィルソンさんは帰るといふので、ロビーまで見送りに行く。と凰蓮さんがもう二人にメロメロで、流星君と一緒に成つて凰蓮さんを抑えるのに苦勞して、

それに苦笑されながら別れるのだった。

キャプテンアメリカの逃走

翌日、ホテルで今日の予定を確認中の時だった。

端末に救難信号の発生のお知らせが入ってきたのだ。

「狭間さん！救難信号です！」

通知音に反応した流星君が端末の画面を見て、即座に俺に言ってくる。

「本郷さん。」

「うむ。これより、我々SPIRITSはキャプテン・ステイブ・ロジャースの味方として行動する。」

飛電君、お願いした通り用意してもらった別の車を使わせてもらう。

狭間君、鳳蓮君、湊君は飛電君が用意した車で救難信号の場所に行きキャプテンアメリカを救助及び彼の援護だ。

飛電君の部下数人をホテルの監視に残し、私を含めた残りの者はウィルソン君の家におじゃましに行く。

「行動を開始せよ！」

『了解！』

飛電さんから車の鍵を受け取り、俺達三人は駐車場に停めてあったジープタイプの車に乗り込んで助手席の耀子さんの指示に、凰蓮さんが運転手となって、すぐさま救難信号のあつた場所まで急ぐ。

そこは、シヨップिंगモールに併設された入り組んだ駐車場で、渡してあつたグリツプの上部にスイッチが入つた装置は車止めの場所に置かれていた。

周囲に警戒しつつ、監視カメラの陰になるような位置取りの駐車場に停車して耀子さんにスイッチの回収をお願いした後、少しすると、車のドアをたたく音がしたので、ゆっくりと開いた。

「ハザマ、よく来てくれた。」

「ハザマじゃないの。」

何? SPIRITSは味方なの?」

「エージェント・ロマノフ。」

あなたの方こそ、味方と捉えてよろしいので?」

すぐに乗りに込んで来た二人は、あまり似合わない私服姿で、ロジャーさんは伊達メガネをかけていて、盾を座席のそばに置いている。

「何よ。女付き?」

ワテクシじゃあ足りないって言うの?」

「私がステイブの女？」

それはゴメンねってあら？ピエールじゃないの。」

「もしかして、ナターシャちゃんかしら？」

お久しぶりね。」

「二人はお知り合いで？」

「ロシアの軍にいた時に共闘してた時があっただけよ。」

「そうね。ピエールなら信用できるわ。」

二人の意外な関係に驚いていると、戻ってきた耀子さんが声をかけてくる。

「スイツチの回収は終わったわ。それで、目的地は？」

「ニュージャージー州、ウィートンだ。」

近くにS. H. I. E. L. D. のストライクチームが散開している。

十分に気を付けてくれ。」

「了解よ。」

私服姿の凰蓮さんが応えて車が走り出した。

意外なほどスムーズに移動ができていよう、前の座席の二人が監視カメラをうまく具合に避けている様子だった。

「それで、状況はどうなっていますか？」

「キャプテン、駄目よ。」

「ナターシャ、彼らはS. H. I. E. L. D. を敵にまわしてでも僕に協力してくれている。」

何も話さないのは不義理だ。

それに、早いか遅いかの違いでしかない。

ハザマ、落ち着いて聞いてくれ。

…フューリーが殺された。」

「…確かなんですか？」

「私とステイブの目の前で息を引き取ったわ。」

「…用心の塊のような人がこんなにあっさりど？」

犯人の目星はついているんですか？」

「…亡霊よ。」

「…それなら、ワテクシも聞いたことがあるわ。」

『ウインターソルジャー』、正確無比な殺し屋。

誰もその正体は知らないわ。」

凰蓮さんの真面目な言葉に少しの間、車内がしんと静かになってしまふ。

「それで、フューリーさんが殺された理由はわかっているんですか？」

「真実はまだわかっていない。

ただ、S. H. I. E. L. D. の理事、アレクサンダー・ピアースはフューリーが情報を他国に売り渡そうとして拗れた結果、殺されたのだろうと言っていた。

まあ、僕もその人もその説を否定しているが。

フューリーから渡されたファイルが最後の手掛かりだ。

ところで、ハザマは『地球の守護者』という言葉に聞き覚えはあるか？」

「地球の守護者……ですか？」

「フューリーが死ぬ前、最後に来たのは僕の部屋だった。

僕はフューリーからは、『誰も信じるな。もしも困ったことになったら地球の守護者に頼れ。彼らならば……』と何かを言いかけて狙撃され、殺された。

思いつくことはあるか？」

「……（エターナルズか？ いや、もしもあのデータを見てそれを信じたとすれば。）

我々SPIRITSのことかもしれません。」

「どつごうとどつごう。」

ロジャーさんの不思議そうな表情と、エージェント・ロマノフが怪訝な表情を向け
て俺を見ていた。

ふと助手席の耀子さんもこつちを見ていて、運転席の凰蓮さんもバックミラーを動か

してこちらを見ていた。

「葛葉紘汰、黄金の果実、始まりの男。」

俺は前の座席の二人の方を向いて言うと、二人は納得して再び運転とナビに集中し始めた。

しかし、ロジャーズさん達にはわからない様子だったので解説する。

「今言ったのは前の座席の二人に分かりやすく伝える為の単語に過ぎません。」

詳しい内容を知っていなければ意味はないので忘れてください。

我々SPIRITSが今アメリカにいるのはフューリーさんと会談をするためだということとは？」

「僕はトリスケリオンで会った時に聞いた。」

「私も任務から戻ってきてから知ったわ。」

「今回の会談の目的は、『インサイト計画』の強化案を進めるために、兵士の強化のために日本のライダーシステムを提供するということでした。」

そこで、我々SPIRITSはそれを拒否して、その代わりにとあるデータを渡しました。」

「データ？」

「はい。我々『仮面ライダーの歴史』です。」

仮面ライダーが守ってきた歴史と、戦ってきた相手の情報、そして仮面ライダー達の簡易的な情報をまとめたものをフューリーさんに渡して、もう一度この計画を見直してほしいということを書いてあの場はお開きになりました。」

「待て、…戦ってきた？」

日本ではニンジャ達と戦っているんだろう？

まだ他にもいたのか？」

「ええ、ショッカー、GOD機関、ドグマ、ゴルゴム、グロンギ、オルフェノク、ワーム、ファンガイア、財団X、等々挙げればキリがありません。」

仮面ライダーというのはただの総称に過ぎません。

それぞれの仮面ライダー達はまったく別の敵組織との因縁があり、それぞれに戦う理由があります。

そもそも自分たちのことを仮面ライダーと言わなかった者達もいます。

それぞれが戦っているうちに自然と手を組み、組織化されて今の仮面ライダー達の相互組織であるSPIRITSが存在しているんです。

五代さんも言っていたと思いますよ。仮面ライダーではなく、固有名詞であるクウガで呼んでほしい。」

「…そうだったのか。」

確かにユウスケは仮面ライダーと呼ぶよりも、クウガと呼んでほしいと言っていたな。」

「ハザマは何かと戦ってきたの?」

「俺の敵は闇の手です。」

なので、仮面ライダー達の中では若輩者の部類に入ります。

先輩達からまだまだ学んでいる最中ですよ。」

俺達が会話をしていると凰蓮さんがそろそろウィートンに入るといっているので詳しい場所を教えてもらおうと、戦略科学予備軍の元訓練施設だと言う。

凰蓮さんの運転でその敷地に入ると、正面の入り口はフェンスで閉じられており、立ち入り禁止の表示がされていた。

盾を持ったロジャースさんとエージェント・ロマノフ、そして俺が車から降りた。

「車を隠しておくわ。」

何をするのか知らないけど、私達は周囲の見張りをしておくから何かあったら連絡を入れてちょうだい。」

凰蓮さんがそう言って、ジープを敷地の外に運転していった。

「フューリーさんから渡されたというファイルに、ここの座標があつたんですか?」

「ええ、どうやらそのファイルの出所はここみたいね。」

「僕の古巣でもある。昔ここで訓練した。」

そう言うと、かけられた鍵を盾を打ち付けて壊し、中に入ってしまった。

しばらくの間、エージェント・ロマノフが端末を使って探っている様子だった。

「70年前の話ですか？」

その時と変わりましたか？」

「…少しな。」

「駄目ね。熱反応も信号も無し、無線もとんでない。手掛かりは無しよ。」

「…いや。」

「ロジャースさん、どうかしましたか？」

「訓練中に習ったが、兵舎の500メートル以内に武器弾薬の格納庫は設置できない。

だから、目の前の設備はおかしい。

ファイルの出所はここだろう。」

そう言つて、再び盾を使って鍵を壊して中に入ると、エージェント・ロマノフが施設の電源を入れた。

「S. H. I. E. L. D. ね。」

「ここから始まったのか…」

「ですが、それほど重要そうな物があるようには見えませんね。」

俺が古いS・H・I・E・L・D.のマークを眺めていると、ロジャースさんとエージェント・ロマノフが別の部屋に入って行く。

俺も気になってついて行くと額縁に入った写真が飾られていた。

二人は何かを話していたようだったが、さらに奥に入って行く。

「ここが秘密のオフィスなら、なぜわざわざエレベーターを隠す？」

ロジャースさんは棚を動かしてさらに奥に隠されたエレベーターを見つけた。

まだ正常に動いているエレベーターに乗り込み、俺を含めた3人は更に下の階層に降りて行く。

そこは、埃を被った古い機械がずらりと並び、正面にはブラウン管の画面がいくつも並んでいる。

「あのファイルの出所にしてはテクノロジージが古すぎるわ。」

「…あらかさまに、これだけが新しいですね。」

画面の前のキーボードには、埃が被っておらず、最新のアダプターの挿入口が置かれていた。

エージェント・ロマノフは無言で手に持っていたメモリを嵌め込むと、目の前のブラウン管の画面が作動して緑色の電光色で、起動するかを聞いてきていた。

「イエス、イエスよ。」

すると、目の前の画面に光が流れて、徐々に眼鏡をかけたような人の顔になっていった。

歴史の真実

『ステイープ・ロジャース、1918年7月4日生まれ。

ナターリア・アリアノーフナ・ロマノフ、1984年11月22日生まれ。』

「何かの録音ね。」

『私は録音ではないぞお嬢さん。』

1945年にキャプテンに捕虜にされた時とは随分違うが、私は私だ。』

画面の上部に取り付けられたカメラが、まるで生きてるように動きながら電子音声にも似た声はどこからか聞こえてくる。

すると近くの別の画面に眼鏡をかけた老人の白黒写真を写し出された。

「こいつ知ってる？」

「アーニム・ゾラ、レッドスカルの部下だったドイツの科学者……とうに死んだはず。」

『修正1、私はスイス人だ。』

修正2、よく見たまえ。この通り私は生きている。

1972年に私は不治の病だと宣告された。

科学では私の肉体を救えなかった。

だが私の頭脳はデータバンクとして残された。
長さ6万メートルのテープでな。

君達は私の脳の中に立っている。』

ロジャースさんは不審なものがないか周囲を歩きまわっているようだった。

「どうやってここへ？」

『招かれたのだ。』

「第二次大戦後のペーパークリップ作戦ってやつね。

S. H. I. E. L. D. が有能な科学者を集めたつていう。」

『アメリカの大義のためにな。

そして私にも大義があった。』

「ヒドラは消滅したはずだ。」

『頭を切り落としてもまた二つ生えてくる。』

「…証明しろ。」

『アーカイブにアクセス…人類は自由を持たせるに値しないという信念の元、ヒドラは生まれた。

だがあの戦争で学んだよ。

自由を奪おうとすれば、人類は抵抗する。

だから人類が自ら自由を差し出すようにしなければならぬ。
戦争の後、S. H. I. E. L. D. が生まれ、私も招かれた。

そして新たなヒドラもまた寄生虫のようにS. H. I. E. L. D. の中に育っている。

70年の間、ヒドラは密かに戦争や飢饉を生み続け、力を蓄えてきた。

歴史が言うことをきかなければ、歴史を変えた。』

「嘘よ。S. H. I. E. L. D. はあなたを止めたはず。」

『誰にでも事故は起きるものだ。』

ヒドラは世界を混沌の渦に突き落とした。

今や人類は安全を得るためならば進んで自由を差し出す。

粛清が終わったその時こそ、ヒドラによる新たな世界秩序が誕生する。

我々の勝ちだキャプテン。君が死のうが生きようが同じ事。

…だが、私の唯一の誤算。

君だよ。ゲンナイ・ハザマ。』

「…でしようね。」

『君の出生記録は存在しない。』

2007年5月11日にいきなり日本に現れた。あの銀色のオーロラを通り抜けて。

仮面ライダー……とても不可解な存在だ。』

二人は俺と画面を行ったり来たりと見つめている。

『ヒドラーは繋がりを持つ闇の手を支援して日本を支配しようとしていた。

それは目前だった。

しかし、仮面ライダーによって日本の支配下計画は頓挫し、もはや闇の手を支援する

ことも難しくなっている。』

『そうだ……車の中でもハザマは言っていたな。

今まで沢山の敵組織が存在して、それを仮面ライダーは打ち倒してきたと。』

『そのような事実も記録もない。』

私は今言ったぞ。仮面ライダーは突然現れたと。』

『どういふこと？』

私達に嘘を付いたの？』

『嘘はついていません。』

仮面ライダーはそれぞれがそれぞれの理由でそれぞれの敵と戦ってきました。

……マルチベース、それが答えです。』

『その議論にはとても興味があるが、あまり猶予は残されていない。』

『はっ……まずいわ。短距離ミサイルが来る。』

後40秒。S. H. I. E. L. D. よ。」

「あのファイルの中身は!？」

『インサイト計画、恐るべき計画だ。』

私とそのアルゴリズムを書いた。』

「お二人共！俺がゲートを開きますから地上へ！

早くー！」

俺はエレベーター前にオーロラを開いて、地上への道を作った。

「まさか、私もこれを通り抜けることになるなんてね。」

「ハザマ、地上に出たら詳しい話を聞かせてもらおうぞ！」

「まずは生き延びてからです！早くー！」

俺達三人がオーロラを通り抜けるとそこはキャンプ・リーハイから数100メートル

ほど離れた雑木林で、ちょうどミサイルが落ちるところが見えていた。

俺達はそれぞれ木に隠れて爆風をやり過ごす。

「車は周囲に見えますか!？」

「あつちに見えるわ！」

エージェント・ロマノフが指を指す方向に再びオーロラを開いて通り抜けると、風蓮さんと耀子さんが周囲を警戒しながら車の外に出ていた。

「無事だったみたいね。」

「なんとか。」

やつらがミサイルの落下地点に夢中になっているスキに移動しましょう。」

凰蓮さんの言葉に答えて全員が車に乗り込むと、ライトを着けずにゆつくりと走りはじめた。

その後ろには、三機のクインジェットが瓦礫の山をライトで照らしながら飛んでいる姿が見てとれた。

ある程度移動するとロジャースさんが聞いてくる。

「ゾラが言っていたことは本当か？」

「マルチバースと言っていたわね。」

「どういふこと？」

「まずはロジャースさん。この世界に突然仮面ライダーが現れたというのは本当です。ですが、この世界には仮面ライダーに変身できる人達は既に存在していました。」

エージェント・ロマノフ、その言葉の意味はわかりますか？」

「周りくどいぞ、はつきりと言ったらどうなんだ。」

「マルチバース、並行世界、仮面ライダーを連れてきた？」

でもこの世界には既にいたのならそれは違うわよね。」

「どういふことなの?」

「俺がこの世界に持ち込んだものは、『力』と、『記憶』です。」

「!あなたまさか…」

「耀子さんと凰蓮さんには話をしていませんでしたがちょうどいい機会です。」

「俺はこの世界とは別の世界から来た、『異世界人』です。」

「異世界人?あの銀色のゲート能力か!」

「そうです。ロジャースさん。」

ゾラが言っていたように俺はこの世界の生まれではないので出生記録がありません。

俺はこの世界の日本に、仮面ライダーとしての力と別の世界では仮面ライダーだった者達にその記憶を与えているのです。」

「関係のない人達を引き込んで戦わせているというのか!?!」

ロジャースさんは今にも飛びかかって来ようかという状態のようだったが、そこに畳み掛けるように言う。

「アメリカにはヒーローがいるのに、日本にいてはいけないのですか?」

「そう思うならば!」

「俺一人で戦って潰されろと?」

「そうじゃない。どうして周りに頼らなかつた!?!」

「頼ったからこそ、今のSPIRITSがあるのです。

ロジャースさんが目覚めてすぐに顔も知らない東洋人が現れて、S. H. I. E. L. D. でもないのに日本を救ってほしいと言われても即座に動けますか？」

「S. H. I. E. L. D. が止めるでしょうね。」

そもそも、ステイブに会えたかどうかともわからないわ。

最悪、ハザマは指名手配されたとしてもおかしくないわ。」

「…ナターシャ、それは。」

「それが順当でしょう。」

俺がやってきたことはロジャースさんにとって受け入れられないものかもしれないかもしれませ
ん。

しかし、ロジャースさんが手に入れたその力もまた祖国を守りたいからこそ手に入れたのではないのですか？」

「…君達はそれでいいのか？」

力なく座席に座り直したロジャースさんは、前の座席の二人に聞いた。

「…ロシアの軍にいた時にはね、新兵が死ぬ度にもつと力があればと思った事は1度や2度ではないわ。」

「…ピエール。」

「その望んだ力が目の前にあるのに、手に取らないわけじゃないじゃない。」

別の世界のワテクシの記憶も、受け取った力を使いこなしている記憶なのよ？

この力があれば、新兵達を少なくとも死なせないぐらいのことができるかもしれないわ。

だから今のワテクシの選択に後悔はないわ。」

「君はどうだ？」

「…私は元々闇の手やヒドラ側の人間だったのよ。」

この世界でも、別の世界でもね。

でもね、狭間さんはそんな私の手を躊躇なく掴んで正義の側に引き上げてくれたのよ。

しかもこの世界で与えられた力は、別の世界の力とは違う力だったわ。

だから今度こそ、私は誰かを守る側の人間として戦っていくつもりよ。

誰にもその思いは邪魔させるつもりはないわ。

…そしてゆくゆくは…ウフフフフ。」

「ちよ、ちよつと待て、いきなりどうしたんだ彼女は??」

「ああ、耀子さんはたまに妄想に浸ってしまいう時があるので気にしないでください。」

「そ、そうなのか？」

いきなり雰囲気が変わって驚いたぞ。

もつとクールな女性に見えたが…」

「ともかく、仮面ライダーの歴史とはそれぞれの世界で戦ってきた仮面ライダー達の記録を俺が持ち込み資料化したものです。

フューリーさんとの会談では少々大げさに言いましたが概ねそういうことになりました。

それでも、現在この世界で戦っている仮面ライダー達にも別の世界の自分たちの記憶を持っていきますので、自分たちが戦い打ち倒してきたという風にも言えなくもないですね。」

「…なるほど、そういう風にフューリーに言ったから『地球の守護者』なんてことを言ったのか。

本当に周りくどいぞ。」

「因みに、今の話はSPIRITSの重要機密ですので、言いふらせば今後のSPIRITSの協力はないかもしれませんね。

特にエージェント・ロマノフさん。」

「…残念ね。いい脅迫材料が手に入ったと思ったんだけど、ピエールに免じて聞かなかったことになってあげるわ。」

それと、この際だから私のことはナターシャでいいわよ。」

「…ふつ、そうだな。」

SPIRITSとは今後も協力をしていきたいと思ってる。

だから僕もステイブでいい。」

「ありがとうございます。」

ステイブさん、ナターシャさん。

話がまとまったところで、今後の予定を話します。」

「どうするんだ？」

「まず、我々が泊まっているホテルは既にS. H. I. E. L. D. に知られています。」

しかし、知られていないだろう場所が一ヶ所だけあります。」

「…サムか。」

「そうです。現在、本郷さん達はウィルソンさんの家に集まっています。」

そこに合流して作戦を練りましょう。」

俺達を乗せた車はライトを光らせてワシントンへと向かっていた。

作戦会議

朝日が登りはじめた頃にワシントンに不思議なぐらい無事に入ることができた。

俺とステイブさんとナターシャさんは2時間ほど仮眠をとっているが鳳蓮さんと耀子さんは起きっぱなしだったようだ。

道脇に止めたジープの扉を叩く音がするので、窓を見ると、ジャージに着替えて汗をかいている流星君とウイルソンさんがいた。

俺達は車を降りて二人について行くように路地裏を抜けると、とある家が見えて、その窓からは服を着崩した本郷さんが椅子に座って何かの資料を見ているのが見えた。

俺達もその家に入ると流星君とウイルソンさんが近寄って来る。

「狭間さん。」

ウイルソンさんには説明を済ませてあります。

後、早朝ランニングに見せて周囲の偵察を行いましたし、ホテルとも連絡を取り合いました。警戒をされていないというよりも、キャプテンアメリカに協力者がいるとは考えてもいない様子でした。

S. H. I. E. L. D. から1度ホテルに連絡がきたそうなんです。我々SPI

RITSに対しては会談が決裂していることも知らない様子でしたし、そもそも要求が断られるとも考えてはいないみたいでどうも舐められているようです。」

「そのまま、油断してくれると楽なんだけどね。」

「ウイルソンさん、ありがとうございます。」

「キャプテンアメリカのピンチなんだろう？」

「ステイブとはもう友人だからな。」

「ソファアベッドと、シャワーは自由に使ってくれ。シャワーは、今はステイブが使っているがな。後、朝飯作るからリュウセイは手伝ってくれ。」

「あ、はい！狭間さん、それでは。」

「報告」苦労様。

「鳳蓮さんと耀子さんもシャワーを浴びたら仮眠をしてください。」

「2〜3時間ほどは時間がとれるでしょうから。」

「俺は二人に言つて、本郷さんのところに報告に向かう。」

「狭間です。戻りました。」

「うむ。報告を聞こうか。」

「俺はキャプテンを迎えに行つてから、戻つて来るまでのことを本郷さんに話す。」

「…話してしまつたのかね？」

「ステイブさんは話さなければ納得しなかったでしょう。幸いにして彼は誠実な方ですから。」

「ナターシャさんからは凰蓮さんに免じて聞かなかったことにすると言われましたので、俺は彼女を信用したいと思います。」

「…そうか。わかった。」

「しかし、次の作戦からは私も動こうと思う。」

「ですが。」

「狭間君。」

「今の状況は既に、よっぽどのことなのだよ。」

「…わかりました。ですが、光栄次郎氏からいただいた本郷さんのメンテナンス方法を担当できる者がまだ育っていませんので、無理はしないようお願いします。」

「うむ。肝に免じよう。」

「本郷さんに報告が終わるとシャワーが空いたというので、俺も軽く流し、寝室にナターシャさんとステイブさんが揃っているそうだったのでそちらに向かう。」

「神妙にお話をされているところに申し訳ありません。」

「そろそろ、作戦会議といきたいのですが？」

「なんだ。盗み聞きか？」

「ハザマ、趣味が悪いわよ。」

「ご冗談を。」

二人の顔が、俺を出汁にし始めるととたんに明るくなっていった。すると、ウィルソンさんが顔を出してきた。

「その前に、朝食でもどうだ？」

ヒーローでも朝食は食うんだろ？」

「…そうだな。いたどころ。」

ステイブさんの返答に俺達も頷いて、キッチンに向かった。

流星君が作ったという端が焦げたベーコンや、焼きすぎなトーストなどを食べ終えると、自然と本郷さんを中心にして集まっていた。

ソファアーベッドで寝ている二人を横目にナターシャさんが話しはじめた。

「問題は誰にS. H. I. E. L. D. のミサイル発射権限があつたかよ。」

「…ピアースだな。」

「S. H. I. E. L. D. の理事のアレクサンダー・ピアースですか？」

その人もヒドラだと？」

「良く学んでいるなリユウセイ。」

彼の側近も協力者だろう。」

ファイルのアルゴリズムの出所にいたはずだ。」

「…シットウエルね。あの船に乗っていたわ。」

「S. H. I. E. L. D.:. いえ、ヒドラのエージェントですか。」

その人物を拉致し、情報を聞き出したいところですが。」

「俺も協力させてくれ。」

俺の眩きに反応してか、ウイルソンさんが声をあげた。

「しかし、退役したんだろう?」

「ここまで俺を巻き込んでおいて、今さらのけ者にするのは無いんじゃないか?」

ステイブさんの疑問に対して、ウイルソンさんのもつともな意見を返すと、本郷さ

んが持っていた資料のファイルをテーブルに置いた。

「これは?本郷さんが見ていたファイルですか?」

「うむ。ウイルソン君の履歴書だ。」

君達も見るといい、とても興味深いぞ。」

その機密と判をされた資料には、ウイルソンさんが参加していたという作戦や、その時に使われていた装備類の詳細が書かれてあった。

「これはどこにあるんだ?」

「フォード・ミード基地に一つ、だが警備は鉄壁だ。」

「ナターシャはどう思う?」

「私が行くの?」

まあ楽勝だけど。」

「決まったな。」

シットウエルの拉致は僕達に任せてくれ。

問題はどうかやってトリスケリオンの内部に侵入するかだ。」

「そのシットウエルという人物に我々SPIRITSへトリスケリオンの案内をさせましょう。」

会談が決裂していないと思われているならば、その人物がSPIRITSを説得したとか言わせれば我々はすんなり入れると思います。

内部に侵入できればステイブさん達が侵入できるように工作することも可能です。」

「問題があるとすれば…」

「ウインターソルジャーでしょう。」

シットウエルは情報を話せば殺されると怯えるかもしれません。

うちの流星君をそちらに同行させます。

彼は武術の心得がありますし、何より立派な仮面ライダーです。」

ステイブさんの眩きに俺が話すと、ウイルソンさんが流星君をからかっているよう
で

「なんだカラテか？ ジュードーか？

こうか？ アチヨー、アチヨー！」

と言いながら、その動きはどことなく中国拳法っぽくて流星君がむつすりとした顔になつていた。

「君も記憶が？」

「…狭間さん、言つたんですか？」

「触りだけね。」

ステイブさん、それは言わない約束ですよ。

流星君も余計なことは言わなくていいから。」

「…まあ、わかりました。」

「ふっ。そうだな。それでハザマ達はどう動くんだ？」

「我々は一度ホテルに戻つて、飛電インテリジェンスの皆さんに事情を話す必要があります。
ます。」

「その寝ている二人も朝食ぐらいは取らせたいですからね。」

「わかった。」

シットウエルを確保次第、リュウセイに連絡を入れさせる。
合流して作戦開始だ。」

悪いとは思っているが寝ている二人を起こして再びジープに乗り込み、俺の運転でホテルに戻って部屋に入ると、飛電さんがSPの人達に指示を出しているところだった。

「狭間さん。」

戻られたんですね。」

「はい。実は……」

俺が粗方の説明をすると飛電さんもついていきたいと言い出してきた。

「念のために持って来ていて正解でした。」

飛電さんは胸ポケットからロッキングホッパーゼツメライズキーを取り出してこちらに見せる。

「ホテル内の荷物は彼らに見張らせていますので、安心して作戦に参加できますよ。」

私もまたSPIRITSの一員ですからね。協力させてください。」

「いいじゃないか。」

そこまで言うのであれば、私の背中ぐらい守ってもらおうじゃないか。」

「本郷さん！」

あなたの隣で戦えるとは、光栄です。」

盛り上がりを見せている二人に、俺はため息をついて別の部屋に行くと、SPの人達を買って来ていたであろうサンドイッチを食べている風蓮さんと耀子さんがいたので、この二人にも作戦の内容を話しておく。

いつの間にもやったのか、二人は化粧直しが完璧になっていた。

そうしていると、俺の端末に連絡が入ったのでそれをとると、シットウエルの確保ができたので、これから情報を聞き出すという。

「わかった。それじゃ。」

その連絡を切ると目の前の二人と、本郷さん飛電さんにへと話しをしに行った。

元々飛電さんが用意していた黒塗りの車に乗り込んで、再び風蓮さんの運転で出発して合流地点へと車を進めた。

side 朔田流星

俺達はウイルソンさんの運転で狭間さん達との合流場所に向かっていた。

俺の隣には、シットウエルという眼鏡の男がいて

殺されると喚いている。

「キャリアの発進まで16時間よ。」

このシットウエルという男を拉致して脅して入手した情報にはインサイト計画はすでに実施目前だったことがわかった。

もしかすると、ヘリキャリアを飛ばしてからSPIRITSにその銃口を突きつけてライダーステムを奪い取るつもりなのかもしれない。

すると、急に車の上に何かの音がしたかと思うと窓を割り、金属の腕が俺の目前を通って、俺とナターシャさんの間にいたシットウエルの胸元を掴むと引き出そうとしたので、俺がシットウエルを掴むとそのまま一緒に宙に放り出されてしまった。

しかし、目の前に現れた銀色のオーロラが俺とシットウエルを包むと俺達は別の場所にいた。

「間一髪だったわねー」

風蓮さんの声が聞こえてきて体が痛む中周囲を見ると、どうやら車のラゲッジスペースに現れたらしく、痛みで呻いているシットウエルがいて、こちらを見ている狭間さん、飛電さん、本郷さんが、声をかけてきた。

俺はそのまま大丈夫だと答えると、風蓮さんの声で、停止していた車が再び動き出してカーアクション並の戦いをしている場所に近づいて行った。

その男、最強につき

side 狭間玄乃

目前を走る車が急ブレーキをかけるのを避けながら右へ左へとハンドルをきる凰蓮さんだったが、ジープタイプの車に当てられて蛇行する車が横転しかけたところでステイブさん達が一纏めになって車のドアをクツションにしながら飛び出すのが見えたので、こっちの車も止まるようにお願いした。

俺達も車を降りて向かおうとしたが、凰蓮さんにはシットウエルが逃げないように見張ってもらうようにお願いする。

凰蓮さんは舌打ちしながらも了承したのを確認し、俺達も向かおうとすると、ウインターソルジャーによって放たれたグレネードによってステイブさんが吹き飛ばされるのが見えたので、急いでバラバラに停車された車をぬいながら銃を乱射している連中の所に向かった。

俺は変身はしていない状態で、車を盾にしながら、敵の背中にデイエンドライバーに銃撃を浴びせてこちらに注意を引いた。

ウインターソルジャーは相変わらずナターシャさんを狙っている様子で、仲間から受

け取った新しいグレネードをナターシャさんが盾にしていた車ごと吹き飛ばされるのが見えた。

Meteor Ready?

「変身！」

ウワチャァー！」

激昂したような叫びと共にウインターソルジャーに飛び膝蹴りを当てに行く仮面ライダーメテオの姿が横目に見えた。

しかし、しっかりと金属の腕でガードされて、数メートルほどウインターソルジャーが引きずられただけだったのに舌打ちした声と共にウインターソルジャーとインファイトをはじめていた。

KAMENRIDE

「変身！」

DI!END!

俺もダイエンドに変身して、さらにカードを装填する。

ATTA CKRIDE BLAST

追尾弾によって3人を倒すが、対向車線から現れたジープからさらに敵の数が増えは

じめた。

本郷さんは変身をせずに相手を打ち倒しているし、耀子さんと飛電さんは市民の避難を優先している様子だった。

増えた敵が銃をメテオに集中して攻撃し始めて、ウインターソルジャーはそのスキに下の道路に降りてしまった。

俺は、ウイルソンさんがバックパックを背負うのを邪魔されないように動いていると、耀子さんが近づいてきていた。

「私も変身します。」

狭間さんと本郷さんで、下の援護をお願いします。」

そう言うなり、耀子さんはワンダーライドブックを取り出して息を吹きかける。

昆虫大百科

・ この薄命の群が舞う幻想の一節…

そして彼女の手には煙が集まり、スチームパンク調の剣、煙叢剣狼煙（エンエイケンノロシ）が握られ、閉じられたワンダーライドブックをノロシシエルフにはめ込んだ。

「変身！」

狼煙開戦（のろしかいせん）！

FLYING！ SMOG！ STING！ STEAM！

昆虫CHU！大々百々科！

揺蕩（たゆた）う切っ先！

「仮面ライダーサーベラ。

行きます！」

中央分離帯を飛び越えて対向車線で銃を乱射している相手に向かって行く姿に、俺は本郷さんの方を向くと、本郷さんもこちらを向いていて頷いてくれた。

本郷さんは飛電さんに何かしらを言っつてそのまま下に飛び降りてしまった。

そして、飛電さんが向かってきた。

「本郷さんから、ウイルソンさんの手伝いのために残つて欲しいと言われました。

ここは任せてください。」

「わかりました。

では俺も下に行きます。」

俺はオーロラを開いて下の道路に降り、さらに戦闘の中心に向かって、オーロラを開いて移動する。

市民が残しただろう車が散乱している中で、ウインターソルジャーがステイブさんと戦っていて、近く車の影で、肩を押さえたナターシャさんがいたのでそこに向かう。

「大丈夫ですか？」

「肩を撃ち抜かれたわ。」

「では、ここで安静にしてくださいください。」

そう言つてオーロラからタオルを取り出してナターシャさんに渡し、俺もウインターソルジャーに向かおうとすると、ステイブさんを庇うような立ち位置で本郷さんがウインターソルジャーの前に立っているのが見えた。

ウインターソルジャーは持つていた銃を撃つが、本郷さんは避けるまでもないよう
で、手をその場でパパパパと動かして、その握られた拳を開いて見せる。

すると、その拳からパラパラと銃弾だけが落ち、それを見ていたステイブさんは絶句して動けないでいるようだった。

「…あり得ない。」

後ろのナターシャさんの声が聞こえるが、俺も本郷さんから目を反らせずにいた。

本郷さんはその開いた手のひらを上に向けて手をクイッククイックと動かしてウインターソルジャーを挑発している。

ウインターソルジャーも手に持つていた銃を捨てると、左手にナイフを持って本郷さ

んに飛びかかっていく。

「ハアー！」

本郷さんはそのかけ声と共にナイフを根元から手刀で叩き折ると、ウインターソルジャーの金属の拳のパンチを掴んで止め、持ち手だけになったナイフを捨てて殴つてきた左手もそのまま掴んで止めた。

ウインターソルジャーは、咄嗟に膝蹴りを入れようとするも、それを本郷さんも膝を持ち上げて止める。

手段が乏しくなったのか、ウインターソルジャーは本郷さんに頭突きをしてきたが、まるで金属音のような音が響き渡るとウインターソルジャーのサングラスが飛びながらその額が跳ね返されていた。

本郷さんはウインターソルジャーを放り投げると、ウインターソルジャーはマスクが外れながらゴロゴロと転がっていった。

「……ふむ。こんなものかね？」

私は傷一つついてはいないぞ？」

本郷さんは何事もなかったかのようにその場に立ってウインターソルジャーを見ていて、どことなく残念そうに言っていた。

ウインターソルジャーはその場で立ち上がるとその素顔を晒している。

「バツキー?」

「バツキーとは誰だ?」

ステイブさんの声に反応したウィンターソルジャーは後ろから来てきた金属製の翼を広げたウィルソンさんの奇襲の蹴りに飛ばされると、はっと気づいた俺もデイエンドライバーから光弾を放ち、その光弾がウィンターソルジャーの近くにあつた車に着弾して車が爆発。

その煙と炎が晴れると、ウィンターソルジャーの姿はなくなっていた。

その瞬間から周囲にS・H・I・E・L・D.の車が現れはじめたので、俺はオーロラを開いて周りの人を呼び込んだ。

しかし、ステイブさんはS・H・I・E・L・D.にされるがままに捕まってしまう、それに抵抗しようとしたウィルソンさんまでもが捕まってしまった。

「行って!」

「しかし!」

「私達は大丈夫だから、行って!」

そう言われて、俺と本郷さんはオーロラで移動して合流するしかなかった。

俺と本郷さんが鳳蓮さんのいる車に合流すると、流星君と耀子さんは変身を解いてい

たので、俺も解除した。

「狭間さん！」

ロジャースさん達は!？」

「S. H. I. E. L. D. に捕まった。

どうにか救出しなければ。」

本当は救出されることを知ってはいるのだが、そのまま正史の通りになるのかわからなかったので考え込んでいると、端末に連絡が入った。

『…まだ世界を救っているのか?』

その声は予想通りの声だった。

「あなたは死んだと聞きましたが?」

『君が私が本当に死んだと思っていたのか?』

端末に座標を送った。そこに合流しろ。』

「しかし、ステイブさん達がS. H. I. E. L. D. に捕まってしまうましたが…」

『問題無い。ヒルに救出を頼んである。』

「わかりました。」

俺は端末を切ると、その情報をみんなに共有してその座標に向かうことになった。

そこは、トリスケリオンからそれほど離れてはいないダムで、岩肌がむき出しの本当
に知る人が限られている場所なのだとわかった。

飛電さんは、S・H・I・E・L・D・にキャプテンアメリカにSPIRITSが協
力していることがばれたので、SPの人達に連絡を入れて荷物を予備の車にまとめてお
くように連絡を入れていた。

アサルトライフルを持つ軍服姿のエージェントに案内されながら、その中を進んでい
く。

ちなみに、シットウエルは引き渡し済みである。

「ロジャースさん！ウイルソンさん！ロマノフさんも！」

無事だったんですね!？」

「ああ、リユウセイ。お前達も無事だったか。」

流星君は彼らがその場にいるとなると駆け寄って行き、ウイルソンさんに迎えられて
いた。

「ヒルさん、お久しぶりです。」

彼らの救出、助かりました。」

「フューリーの命令だから気にしないで。」

「フューリーさんは奥に？」

「ええ。」

俺達はステイブさん達に合流して、そのまま一緒に奥に進むと、この場所には似合わない病院のベッドが置かれ、フューリーさんがそこにいた。

「何だ？ やつと来たのか…」

そこに到着するなり、ナターシャさんの治療も始まりながら、話しが進む。

「大丈夫なのか？」

「脊椎損傷、胸骨にヒビ、座骨粉碎、肝臓に穴、肺の衰弱、オマケにひどい頭痛。

それ以外は元気だ。」

「オペ中に心臓が止まったでしよう？」

「テトロドトキシシンB、脈を1分間に1回に遅らせる効果がある。

ブルース・バナー用の鎮静剤だった。彼には効果がなかったがな。使い道があったということだ。」

「何故秘密に？ 僕達にまで…」

「暗殺に成功したと思わせる必要があったの。」

「死んだやつはもう殺されない。」

それに、どこに敵がいるのかわからなかったからな。」

そして、フューリーさんはこちらを向いて話しはじめた。

「インサイト計画の強化案は元々私は否定的だった。

あの会談で、即時決裂してSPIRITSの総司令官に危機が及べば、SPIRIT Sの戦力はインサイト計画の殲滅に移れるだろうと考えていた。

…まさか、あの場であんな情報が入ると思わなかった。

あの情報には加工した後があつたがどうということだ？」

「あたり前でしよう？」

変身者のプライベートまで晒すわけにもいきませんからね。

多少の加工は加えましたよ。」

「ふん。まあいい。」

フューリーさんは鼻を吹かせると、渡す物があると言って、俺達を別の部屋に案内するのであった。

トニー・スタークのやらかし

「アレクサンダー・ピアース、この男は一度ノーベル平和賞を断っている。

『平和とは功績ではない、我々の果たすべき責任である。』…とな。

「こういう事があるからこういう人間が信用出来なくなっている。」

「世に出ている姿が品行方正であるほど裏では悪どいことをしているという典型ですね。」

「フューリーさんの偏見も混じってそうですね。」

「それで、渡す物とは？」

「フューリーさんの言葉に流星君が言えば、俺も言葉を返した。」

「ふん。相変わらず一言多い男だな。」

「…これだ。」

「ヒルさんが持っていた黒塗りのアタッシュケースをテーブルの上に置いて開き、その中身を見せてくれた。」

「それはカード状の回路基板のような物が3枚と、」

「一つのUSBメモリが入っていた。」

(…USBメモリ？正史にはないものがあるのか？)

これがバタフライエフェクトか。)

「それは？」

俺が正史にない状況に頭を悩ませていると、ウイルソンさんが聞いた。

「ヘリキャリアは高度900メートルで衛星とリンクし、完全武装が完了する。」

ヒルさんがノートパソコンを開いて、映像を見せながらフューリーさんが解説をはじめてくれた。

「その前に攻撃目標をロックオンする機能を、この基板をヘリキャリアの中枢の基板と取り替えることで無効化できる。」

「3機全てを取り替えなければ意味がないわ。」

「1機でも武装が完了してしまえば大勢の犠牲者がでてしまうのよ。」

「このUSBメモリは？」

「ウイルスだ。」

基板と同じ所に取り付けければ、ヘリキャリアのどれかに積まれているとある兵装の起動を阻害できる。」

「…待ってくれ。どれかだって？」

どのヘリキャリアに積まれているのかわかっていないのか？」

「そもそも、どういう兵装なわけ？」

ステイブさんとナターシャさんから疑問があがった。

「SPIRITSとの会談の時にも言ったが、インサイト計画における重要素は3つ。

『拠点』『兵装』『兵士』だ。

拠点は言わずもがな3機のヘリキャリア。

兵士はSPIRITSから得られるはずだったライダーシステムだな。

そしてその兵装だが元はスタークが設計したものになる。

その名を『ハルクバスター』『ソーバスター』『ライダーバスター』の3つ。そのうち、インサイト計画に採用されたのが、ライダーバスターになる。」

「スタークが……」

「詳細はわかりますか？」

ステイブさんの眩きと、俺の声が重なった。

「スタークが言うには、クウガが暴走をした場合を想定したものらしい。

アイアンスーツのように着込むタイプの物ではなく、AIが積まれたコアにドッキングするキューブ状のいくつものパーツに別れ、それぞれにフラッシュグレネード、音響兵器、トリモチ弾、凍結弾、催眠効果照明などの多様な特殊攻撃を行う物のようだ。

だが真に恐れるべきは、ある程度のダメージがコア部分に届いた場合に、とあるウイ

ルスを注入することにあるらしい。」

「…もしかして!」

「スタークは一度戦い、その反則さから密かに採取培養して搭載したと聞いた。

たしか、『バグスターウイルス』と言ったか。」

「あの人は…まったくなんてことをしでかしたんだ!?!」

「知っているのか?」

俺が憤っていると、ステイブさんが聞いてくる。

「2年前のクリスマスに起きたスタークさん対テロリストの戦いには俺も参加していました。」

テロリスト、正確にはA・I・Mという企業によって行われていたものだったんですが、その戦った相手が使用していたものになります。

治療可能な病原菌なんです、大元は人間に感染するコンピューターウイルスなんです。」

「コンピューターウイルスが人間に感染するなんて聞いたことないぞ。」

俺の説明に対して、ウィルソンさんの言うことにその場にいた何人かも頷いていた。

「おそらく最初の感染例は日本でしよう。」

ゲームをしていた少年が感染したのが最初の例だとされています。

それにより、通称『ゲーム病』とも呼ばれています。

現在日本では対策医療チームを編成中でして、SPIRITSもそれに一枚かんでいきます。」

「そのウイルスのどこが反則的なんだ？」

「バスターウイルスが表面化すると一切の物理攻撃が通らなくなるということです。」

「何せ病原菌ですから、攻撃ではなく治療を行わなければなりません。」

「これは受け入りですが、パソコンの画面に映る敵に対して、画面の前でシャドーボクシングをしているようなものらしいです。」

「一切の物理攻撃が効かないようなものをどうやって倒すんだ？」

「ステイーブさんの疑問に答えると、ウイルスンさんが聞いてくる。」

「幸い、ディエンドの能力ならば対処が可能なので、3分の1を外した場合は俺がトドメを刺す形になるでしょう。」

問題は、確実にヘリキャリアを衛星とリンクさせないことと、例えばライダーバスターが起動した場合に特殊攻撃をどう対処するかになりますね。」

「ヘリキャリアに乗っているやつらは全員ヒドラだと思え。」

「それをつら突破してヘリキャリアの中枢に入り込み、こいつをセットする。」

「後はヘリキャリアを回収して、「回収などさせない。」…何？」

フューリーさんの言葉に被せてステイブさんが言い放った。
「ヘリキヤリアは全て破壊する。」

ヒドラも、S. H. I. E. L. D. もだ。」

「S. H. I. E. L. D. は関係無い。」

「いいや、あれはもうS. H. I. E. L. D. じゃない。」

あなたはS. H. I. E. L. D. がヒドラになっていくのを気づいてもいなかっただろう。

あれはもうヒドラだ。今回の戦いでケリをつける。」

「いいや、気づいていたからこそ、この場所がある。」

「この場所ができるまでにあなたは一体どれだけの犠牲を出した？」

「…バーンズの事は知らなかった。」

「どうせ知ってても言わなかっただろう。」

お得意の情報の分断ってやつか？

ヒドラも、S. H. I. E. L. D. も潰す。これは絶対だ。」

ステイブさんにそう言われたフューリーさんは、言葉を返しようにがないのかあちこちに顔を向けて賛同者を見つけようとするが無関係なウイルソンさんに断られると俺の方を向いた。

「我々SPIRITSに賛同を求めないでもらいたい。」

「そもそも、ライダーバスターもスタークさんの設計とはいえ作ったのはS. H. I. E. L. D. でしょう。」

「それとも、ライダーバスターもUSBメモリのウイルスによつて起動しなかったとしたら回収したいとでも言いたいんですか？」

「バグスターウイルスが残っているんです。」

「あれはどうなるうとも殲滅しますよ。」

「…ですが、ステイブさんに言いたいこともあります。」

「何だ？」

「これまで、あなたがトリスケリオンから逃れてゾラと会い、そしてこの場所にいる。」

「その間に何の疑問点も持たなかったのですか？」

「…どう言う意味だ。」

「S. H. I. E. L. D. …いえヒドラはステイブさんを搜索するために、様々な情報を集めたでしょう。」

「信号機の操作、監視カメラ、端末の盗聴、SNSの監視、しかし実際は我々にもある程度余裕を持っていました。」

「それは、ナターシャやサム、君たちSPIRITSが協力してくれたからだろう？」

「ええ、それもあるでしょう。」

しかしおそらくは、S・H・I・E・L・Dの内部のエージェント達の協力があつたからだと思います。

アレクサンダー・ピアースによってステイブさんの搜索を命令された際に、ろくな情報を与えてもらえず明らかにおかしいと思つたエージェント達によって、それを妨害したことで、ヒドラに情報がいきにくくなつていたのでしよう。」

「何故それがわかる?」

「ステイブさんも先ほど言つたではないですか?」

S・H・I・E・L・Dにはお得意のものがあると。」

「!!情報の分断か!」

「そうです。」

我々からしたら小さなことでも、彼らからしたら大きな勇気を持つて、ステイブさんを信じた者達がいるのです。

トリスケリオンの破壊は賛成しますが、そこにいるS・H・I・E・L・Dの全ての人がヒドラだと思わない方がいいと思います。」

「:わかつた。僕達がトリスケリオンに潜入したら、真つ先に通信施設に行き、そこで職員達に呼びかけをしよう。協力者が増えるならば僕達も動きやすくなる。」

…すまないな。」

「しようがないですよ。死んだはずの友人が生きていてそれが敵ともなれば、精神的に不安定にもなります。」

それに、そういう時は。」

「…そうだな。ありがとう。ハザマ。」

「…ふん。誰も私の味方はいないようだな。」

であれば、私はもう命令は出さん。」

たった今から、キャプテン、君が我々のリーダーだ。」

今後は君が命令を出せ。」

俺達のやり取りに観念したのか、フューリーさんが椅子に沈みながら言い放った。

「…だったら、ヘリキャリアに乗っている者達の中にも協力してくれる者達がいるかもしれない。」

全てがヒドラでないならば、可能な限り人命を助ける。」

…それが僕の最初の命令だ。」

「了解、キャプテン。」

んで、どうするんだ？」

ステイブさんの言葉にウィルソンさんが返すと、そこに俺が言葉を加えた。

「でしたらその場合、まずはステイブさんの声かけに協力して動いてくれる人員から
ネズミ算式に協力をお願いするように呼びかけてみてはどうでしょうか？」

そこからヘリキャリア乗組員に情報が行けば、操作を妨害できるかもしれません。

最悪敵対はしないでしようから、戦う相手が減るので基板の入れ替えまでの時間の短縮ができるでしょう。

周囲に頼る。これもあなたが言ったことですよ。

ついでに、水辺への誘導ができればなお良しですね。」

「…わかった。その作戦でいこう。」

それで、基板を取り替える人選だが、僕とサムで1枚づつを担当するから、ハザマ達で1枚と、USBメモリを頼んでいいか？」

「わかりました。」

「ここは流星君にお願いしようか。」

「え?!俺ですか!?!」

いきなり呼ばれたので、流星君が飛び上がって驚いていた。

俺はクラインの壺からある物を取り出して、それを流星君に渡す。

「…これは!?!」

狭間さんはこれも持っていたんですか。

わかりました。ここまでされたらやるしかないですね。

でも、俺がライダーバスターの起動を防げなかったとしても恨まないでくださいね。」

「…期待してるわよ。」

凰蓮さんにも肩を叩かれて流星君はうなだれていたのだった。

作戦開始

side 朔田流星

ロジャースさんから作戦を決行すると言われてヒルさんについて行く。俺もロジャースさんと一緒に行動した方がいいと狭間さんに言われたからだけど、どうせならSPIRITSとして動きたかっただけにちよつと残念だと思った。

ロジャースさんはいつの間にか、戦鬪用のスーツだと言うことなく古くさいイメージのスーツを着ていて、場の空気を悪くするのもどうかと思つて俺は何も言わなかった。

ヒルさんは勝手知つたる自分の庭と言わんばかりにすんなりと俺達を含めてトリスケリオンの通信施設に潜入できてしまい、拍子抜けしていた。

ロジャースさん的には、呼び掛けを行う前に敵か味方かわからない者達と戦わなくて良かったと言っていたので、俺もまあ確かにとは思つた。

ヒルさんがなにやら端末を操作したかと思うと、通信室から人が現れて、その人に銃を突き付けて、抵抗しないように呼びかけをするとあつさり通信室に入り込むことができてしまった。

そこにいた何人かの職員は、拍手をしたり、喜びの声を上げていたので、ダムで狭間さんが言っていたことが本当だったのだとわかって俺も嬉しくなった。

「これから、トリスケリオンの職員達に呼びかけを行う！」

だから少しの間だけ静かにしてもらえないだろうか？」

ロジャーズさんがそう言うのと、とたんに通信室が静かになって、目の前の画面を館内放送用に変更し始めると、職員の一人がOKを出した。

ロジャーズさんはヒルさんを見るとヒルさんも頷き返したのでマイクに向かって話しはじめた。

「S. H. I. E. L. D. の諸君聞いてくれ、ステイプ・ロジャーズだ。

僕の事は耳にしているだろう。僕を捕える命令も出ているだろう。だが、真実を知ってくれ。

S. H. I. E. L. D. は変わってしまった。

ヒドラに乗っ取られているんだ。

アレクサンダー・ピアースがリーダーだ。

ストライクチームとヘリキャリアのクルーもヒドラだ。他に何人も、このビルにいるだろう。

あなたの隣にいるかもしれない。

でも、あなたに信じられる仲間がいるのなら連絡を取り合い、協力を呼び掛けてくれ。ヘリキャリアのクルーの中にも協力をしてくれる者達がいるかもしれないからだ。

やつらはS・H・I・E・L・D.を完全に支配した。

フューリーをも撃つた。それだけじゃない。ヘリキャリアが打ち上げられたら、ヒドゥラは邪魔者を自由自在に抹殺できる力を手に入れる。

僕らで止めるんだ。

簡単ではないだろう。

自由の代償は常に高い。

いつもそうだった。

だが払う価値はある。

僕一人でも戦うが、僕一人ではないと信じる。」

ロジャースさんの演説に心打たれていると、ウイルソンさんがロジャースさんをからかっていた。

そして俺ははつとなつて、俺も放送を行いたいとヒルさんに言うと言ってくれた。

ロジャースさんにも顔を向けると、ロジャースさんも、ウイルソンさんも頷いてくれた。

「S・H・I・E・L・D.の皆さん、聞いてください。」

我々日本の組織、SPIRITSもまたキャプテンアメリカに賛同して動きます。

仮面ライダーはキャプテンアメリカの味方です。

繰り返します。仮面ライダーはキャプテンアメリカの味方です！

ほんの少しだけでいいんです。

ほんの少しだけの勇氣を持って、仲間達に賛同を呼び掛けてください。

せつかく作つたヘリキャリアが無駄になるかもしれないけれど、あなたの隣にいる人の命、家族、恋人、友人が助かるのであれば安い代償だと思いませんか？

…協力をよろしくお願いします！

俺が一息つくと、ロジャーさんとウイルソンさんが肩を叩いて頷いてくれた。

俺は手に持ったメテオストームスイッチを見ながら呟く。

「狭間さん、俺、やって見せます。」

side 狭間玄乃

「坊やはちゃんと言えたみたいね。」

凰蓮さんの言葉に頷きながら、二本あるうちのひとつの橋に流星君以下のSPIRITSのメンバーと飛電さんが集まっていた。

「では、SPIRITSとしての作戦を説明します。

ここで各自変身した後に、交渉部の面々はそれぞれ別れてヘリキャリアに侵入、キャプテン達の援護に回ります。

恐らくライダーバスターは全てのヘリキャリアの基板入れ替え後に出現するでしょう。

出現しなければ儲けものですが、その場合は流星君が担当したヘリキャリアに侵入して、ライダーバスターを破壊しなければなりませんし。

ライダーバスターが起動すれば、一人では無理をせずに仲間の到着を待つ時間稼ぎの立ち回りを心がけるようにお願いします。

本郷さんと飛電さんは正面から堂々と侵入してください。

向かってくるのはヒドラだけなので容赦しないで大丈夫です。

そのまま理事会メンバーの部屋を目指して、アレクサンダー・ピアースの確保をお願いします。

一応、ナターシャさんが理事会メンバー一人に変装して潜り込んでいますが、そこに戦力が雪崩込む可能性もありますので。」

俺が一息で言うと、各自が頷いてくれたので俺はデイエンドライバーを取り出して、デイエンドのカードを取り出した。

KAMENRIDE

「変身！」

DI!END!

「アメリカでの初変身、きめるわよ！」

凰蓮さんが取り出した戦極ドライバーにはブラーボのフェイスプレートが取り付けられている。

これは、別の世界の戦極凌馬が残したデータを元にユグドラシルコーポレーションが新たに作り出したもので、SPIRITSではさらに何枚かのフェイスプレートを買いつけているので、もしも鎧武やバロンが後々にSPIRITSに加入しても黒影トルーパーからはじめなくてすむだろう。

「変身！」

ドリアン

ROCK ON

ドリアンアームズ ミスター〜デン！ジャラス！

激しいエレキギターの音楽と共にドリアンの形状のアーマーが現れて頭に被さり、刺々しいスタイルのスーツが展開されてアーマーが展開される。

「アーマード…うおほん！

仮面ライダーブルーボよ！

さあ、始めましょうか。」

「私もいきます。」

昆虫大百科

この薄命の群が舞う幻想の一節…

「変身！」

狼煙開戦！

FLYING！ SMOG！ STING！ STEAM！

昆虫CHU！大々百々科！

揺蕩う切っ先！

「仮面ライダーサーベラ参ります！」

これは俺も何か言っておくべきだったかと思っていると、飛電さんがサイクロンライ

ザーを取り出して腰に装置し、ロッキングホッパーゼツメライズキーを取り出した。

K a m e n r i d e r !

「変身。」

サイクロンライズ!

ロッキングホッパー!

Type—One

飛電さんを取り巻く風と共に、アーマーが拘束具のように装着される。

そして最後に、本郷さんが俺達の前に立つと、いつの間にかベルトが現れていてその両手を前に突き出した。

そして、あの伝説の変身が目の前で行われる。

「ライダー………変身!」

本郷さんのベルト、タイフーンが周りはじめて周囲に旋風が起こり、その体を仮面ライダー1号へと変えた。

その造形は新1号そのもので、本郷さん自身が知っている旧1号との造形の違いから、当初は困惑もあつたがリハビリ中になんとか飲み込んでくれた。

「行くぞヒドラー!我ら仮面ライダーが鉄槌を下す!」

トリスケリオンに指を指すその姿はまるでショッカーに宣告するかのように見える、

内心感動していた。

「では、皆さん。」

よろしくお願ひします！」

「はい！」

「わかりました。」

「うむ。」

そしてそれぞれに別れて行動を始めた。

side 飛電其雄

若干の気恥ずかしさを感じながら橋を疾走して、そのままロビーに到着した。

私のこの1型は、本郷さんが変身している仮面ライダー号を元になっているところを狭間さんから聞いていた通り、どことなくよく似ている雰囲気があつて、この人の背中を守るには大きすぎる背中だとは思いつつも、トリスケリオン内部に入った。

大半の職員は拍手をしたり、歓声を上げたりしていたが、エレベーターから武装した者達が現れると、忙いで物陰に隠れてくれたので戦いやすくなった。

相手が銃を撃つ前に私はその一步を踏み出し、光の残像を残しながらもその相手を殴り飛ばす。

横の人物がいなくなった事に慌てた者達を次々になぎ倒して周囲を見ると、本郷さんは私の倍の人数をその場に沈めていた。

見た限り、相手に外傷はないので手加減をして気絶させただけのように見える。

「…すごい。」

思わず声が出てしまったが、自分の戦いの方が雑なのだと思います。

そしてそのまま、階段を使って上を目指して行く。

side 湊耀子

既に飛び上がりはじめていた巨大な空母に飛び乗って、体勢を整える。

「私の方は…ウイルソンさんの担当なのね。」

周囲を見渡して誰かいないか確かめると、対空砲がしきりに空を飛んでいる者を落とそうと狙っていた。

私は一步を踏み出して跳躍、対空砲の砲身を斬り落とし、着地してさらに別の砲身を目指して走り出す。

二つ目の砲身を斬り落とすと、ウイルソンさんが近づいてきた。

「援護どうも。」

あんた確かヨウコって言ってたよな。」

「自己紹介をしている場合ではないわよ。」

早く基板の入れ替えを！」

「そうだな、了解！」

つと、ヒドラもいろいろやってくるな！」

武装した男達と、その上を飛ぶジェット機が現れてウイルソンさんはそのジェット機を引き付けるために飛んでいってしまう。

「……いきますー！」

私は剣を構えて跳躍、その男達に斬りかかった。

良い結末を

side 狭間玄乃

俺が担当したヘリキャリアは流星君の担当だったようで、先ほど鳳蓮さんから『キャプテンアメリカの援護に間に合わなかったわ！』

入れ替え終わったって甲板に出てきたわよ！』
という通信があった。

俺の変身したディエンドはさすがにヒドラに情報が広まっているだけあって、道中のヒドラと思わしき連中の妨害がひどく、またヘリキャリアの格納庫の避難に遅れた人達をオーロラで避難させるのに時間を食ってしまった。

思わぬ時間のロスに悪態をつきながらもヒルさんに通信を繋いだ。

「ヒルさん、トリスケリオンの避難状況はどうなっていますか？」

『既に一般職員は避難をはじめているわ。』

それと、ヘリキャリア内部の協力者は司令室に立てこもるようになるという連絡も入っているからそつちを優先した方がいいでしょうね。』

「わかりました。ありがとうございます！」

流星君は今はどういう状況だ!」

『もう少しで中枢というところで、ウインターソルジャー…バーンズさんの妨害にあい、まだたどりついていません!』

『僕が行く! サムはまだか?!』

続けて流星君に連絡を入れると、ステイブさんからの声が入り、その直線にウイルソンさんから終わったという声が届いた。

「狭間です! 作戦を変更!」

俺はヘリキャリア内部にいる協力者達の避難を優先させます。

流星君はきついだろうけど、ステイブさんとウイルソンさんが来るまで粘ってくれ!

風蓮さんと耀子さんはトリスケリオンの避難の援護をお願いします!」

次々に返事が入る中、いつも通りにアギトを召喚してアギトトルネイダーに変化させて飛び乗り、基板の入れ替えが終わったヘリキャリアに目指して飛び出して行く。

道中で、あらかじめ渡しておいたダンデライナーに乗り込んだブラーボと、背中から蝶のような羽を生やしたサーベラが飛んで行くのが見えた。

ウイルソンさんが基板を取り替えた方のヘリキャリアの甲板に降りて内部に入り、司令室を目指す。

道中で俺の姿を見るなり銃を撃ってくるヒドラのやつらを倒しつつ、司令室にたどり着いて姿を見せると歓声を上げてくれた。

俺はトリスケリオン近くのダム辺りに出口を設定したオーロラを発生させて、これを通るように指示するが困惑するばかりで入ろうとはしなかった。

「…ええい！」

時間がないことに苛立っていた俺は、両手を前に押し出すように動かすとオーロラがそこに集まった者達を通過するように前進し、その人達が消失した。

そこにいたはずの人達だけがいなくなっており、そこにいた人達を取り込で出口に送ることができて一瞬俺自身も困惑していた。

やってみたらできた。そんな感じだったからだ。

「…俺も進化しているって事か。」

俺はそう呟いて急いで甲板に出てヒビキを召喚し、ヒビキアカネタカに変化させて飛び乗り、最初にステイプさんが終わらせた方に向かった。

「…これなら！」

俺は外から司令室が見える位置に来てオーロラを発生させて、そのまま司令室にいた人達をオーロラに取り込み、次に向かう。

「これで3機目！」

ヘリキャリアの内部の協力者達は避難させました！

状況はどうなっていますか!？」

『今、終わりました！』

ですがすみません。バーンズさんにUSBメモリを破壊されました。』

「どつちにしろライダーバスターは破壊しなければならぬから気にするな！

それよりステイブさんやウイルソンさんは!？」

『こちらファルコン！バーンズに翼をやられて降下した。

キャプテンはまだ戦ってる!』

『こちらヒル。砲撃開始まであと1分だったわ。

急いで脱出を、早く!』

『こちら1型、理事会のメンバーを人質にとられてうまく動けないでいます。

どうすればいいですか?』

「本郷さん、ナターシャさん、フューリーさんとどうにかしてください！

くれぐれも人命優先です！

あと、ストライクチームを率いていた人はいますか?」

『ラムロウとか言う人物ならば41階でお互いに名乗りあって、本郷さんと一対一で

戦って一発で沈んでましたよ。

首が変な方向に向いていたので死んだと思われませんが、その後は知りません。』
「そうですか…わかりました。（これでシビルウォーの冒頭の被害を減らせるか？）

…できればウイルソンさんも避難誘導に加わってください！

流星君はキャプテンを援護して急いで脱出してくれ！」

『今、戦つてますけど！』

この人戦い方がうますぎて…ウワチャア！

…この人も助けないといけないなら厳しいと思います！』

『ここは僕だけでいい！』

リュウセイも降りてくれ！』

『ですが…』

通信だとわかりにくかったので俺も戦っているだろう場所にヒビキアカネタカを向かわせると、ガラス張りの部屋の数枚が割れて戦いにくそうにしながら3人が戦っていたのを空中から確認する。

「ハザマ。来たか！

リュウセイ、飛び乗れ！」

「俺はまだ戦えます！」

「そうじゃない！戦いの場所を移すだけだ！」

そう言つてステイーブさんはバーンズさんをタックルしてもらともガラスが割れたところから飛び降りて水辺に落ちていった。

「流星君。早く！」

俺が穴にヒビキアカナタカを近づけると、メテオが飛び乗つて来たので危なげなく受け取つて、そのままヘリキャリアから離れる。

「ヒルさん。脱出しました！」

『わかつたわ！』

ヘリキャリア同士で攻撃させて落とすから気をつけてよ！」

その声と共にヘリキャリアがヘリキャリアに砲撃をはじめて、それぞれが爆発しながら落下していく。

正史ではトリスケリオンにも抉るように突っ込んでいたが、見た限りではそれもなくて安堵しながら降下して、10メートルほどの高さからメテオが地面に飛び降りて着地したその瞬間だった。

いきなり横から強烈な衝撃を受けて飛ばされ、トリスケリオンの外壁に打ち付けられてしまう。

「うぐう。な、何が!?!…これは氷か?！」

俺が外壁に張り付けになつている原因はどうやら顔と左手以外に覆いついた氷の膜

のようだった。

周囲を見渡すと、どうやらヒビキアカネタカがデータとして消失してしまったようであり、俺の惨状に驚いた流星君が俺に向かって来ていた。

そして、よく見ると落下途中のヘリキャリアの格納庫からなにやら巨大なキューブ状の目玉がバーニアを吹かせながら出てきていて、それに腕のように伸びた銃らしき物をこちらに向けていた。

あれにどうやら撃たれたらしい。

「あれが、ライダーバスター？

いや、その核か！」

落下したものも含めて3機のヘリキャリアから次々にその目玉に向かってモノトーンカラーのキューブ状の物体が飛んで来て、それがLEGOPロックのように組み合わさり、高さだけでも20メートルはありそうな巨大なサソリとも、カニとも、クモとも言える姿になってしまった。

「……これが、ライダーバスターか。」

大きな地響きを立てて着地し、キーンというかん高い音を鳴らす姿がまるで雄叫びを上げているように見えた。

「流星君！俺の事はいいからライダーバスターの方に向かってくれ！」

「わかりました！」

…あれがライダーバスター…これを使う時は今だ！」

Meteor Storm!

Meteor On Ready?

「仮面ライダーメテオストーム！」

俺の運命（さだめ）は嵐を呼ぶぜ！

フオーウアチャー！」

流星君が目の前でメテオストームになってライダーバスターが向かって行くのを見ながら、ディエンドライバーまで巻き込んだいたので身動きが取れずにどうしようかと思っていると、ダンデライナーに乗ったブラーボ、鳳蓮さんが現れる。

「ムツシュ!!大丈夫かしら？」

「鳳蓮さん？避難はどうしたんです!？」

「大丈夫よ。ムツシュのおかげで避難させる時間があつたからみんな無事よ！」

耀子も坊やと一緒に戦ってるわ。」

そう言われて、よくみて見るとライダーバスターの巨大な爪を剣で受け流しているところが見えた。

「風蓮さん！氷を破壊できますか!？」

「ちよつと痛いけど我慢しなさいね!」

そう言つてダンデライナーで砲撃していき、少々の痛みを感じながらなんとか脱出、着地をすることができた。

「風蓮さん！ありがとうございしました。

お礼です!」

俺はクラインの壺からロックシードを取り出してブラーボに向かつて投げる。

「あら?つと、ありがたくちようだいするわ。」

スイカ!

ROCK ON

スイカアームズ! 大玉ビッグ・バン!

ダンデライナーがロックシードに戻りながら俺のところへ落ちてきてそれをキヤツチ、上を見ればスイカロックシードを使ってドリアンと入れ替え、ジャイロモードに変形してライダーバスターに向かつて飛んで行った。

「狭間です!飛電さん達はどうなりましたか!？」

『フューリーだ!』

理事会のメンバーは無事に救出してナターシャに操縦してもらいながらヘリで避難中だ！

だが残念ながらピアースは射殺した。』

「（これで、生存した理事会の人達に借しを作れたかな？）…皆さんが無事なら良い事です！

…こちらでも飛電さんと本郷さん二人と合流したようですが、キャプテンの居場所がわからなくなっています！

至急捜索をお願いします！」

『了解した！』

通信が切れると、俺はライダーバスターを見つめる。

胴体から発射されたトリモチ弾と思わしき弾丸を光の残像を残しながら疾走して躲している1型、飛電さんと1号の本郷さんも戦いに混じっていた。

ライダーバスターに向かって走りながら、そこで戦っている全員に通信を入れる。「バグスターウイルスがいつ注入されるかわかりません！

一度体勢を崩したら一斉攻撃をお願いします！」

俺に次々と了承の通信が入り、そのままディエンドライバーにカードを装填する。

ATTACKRIDE ILLUSION

4人に分身して、それぞれがカードを装填。

ATTACKRIDE BLAST

4人のデイエンドから放たれた追尾弾がライダーバスターの脚部に集中攻撃されて、ライダーバスターがグラリとよろめいた。

狼煙霧虫！煙幕幻想撃！

スイカスカツシュ！

サーベラが蝶の羽を生して放たれた斬撃と、ヨロイモードのスイカアームズによる二刀流の斬撃にてそれぞれの巨大な爪と、先端が針になっていたと思わしき尾を巻き込んで破壊した。

すると、ヘリキャリアの残骸からまた次々とキューブ状の部品が飛んでくる。

「これ以上はやらせない！」

メテオストームパニツシャー！」

メテオストームスイッチが装着されたメテオストームシャフトから切り離された独楽状の部品、ストームトッパーが高速回転しながら飛んで来ていた部品を次々に貫いて

爆発させていく。

「飛電君。今だ！」

「はい！」

1型がサイクロンライザーを操作して、1号と一緒に中腰に体を沈めてから跳躍、無防備なライダーバスターに向かって飛び蹴りが放たれた。

「ダブル！ライダーキツイイク!!」

ロッキング・ジ・エンド

1型の足が当たる瞬間には十字に鋼蝗終焉の文字が表れて、1号と一緒にライダーバスターの核を掠めるようにその胴体をえぐり取ってしまった。

その瞬間に、バチリとオレンジ色のバグスターウイルスが注入されたことがわかったが、それは今さらだった。

FINAL ATTACK RIDE DI DI DI DIEND

残った中央を核を巻き込みながらデイメンションシユートで破壊して、バグスターウイルスともどもライダーバスターは破壊されたのだった。

戦闘が終了して全員が変身を解除し、そしてヒルさんに連絡を入れると、ステイブさんとバーンズさんはダブルノックアウトで河原でお互いに笑いながら寝そべっていたところをナターシャさんに発見されたらしい。

バーンズの記憶は、本郷さんと戦った時の頭突きの影響でどうやら戻りやすくなっていったらしく、抵抗の意志はなかったという。

死んだことになっているというフューリーさんと今後は行動を共にするらしく、エイジオブウルトロンの時点で共闘できるかもしれないと思いつながら、ベッドの上のステイブさんに日本に帰ることを伝えてきた。

我々SPIRITSは会談が決裂はしたがヒドラの殲滅に貢献したことでアメリカからの感謝の言葉をもらい、日本に帰国するのだった。

アベンジャーズ・エイジオブウルtron編 突然の闘争

東欧 ソコヴィア国 山奥

side 五代雄介

アメリカのワシントンD. C. にあったS. H. I. E. L. D. の本部が解体されて早1年、世界の平和を守る象徴はS. H. I. E. L. D. ではなく、アベンジャーズとSPIRITSの二枚看板となっていると聞いた。

アベンジャーズというチームは本来、チタウリみたいな人類が太刀打ちできない未曾有の危機に陥った場合の特別な戦力らしいんだけど、S. H. I. E. L. D. が崩壊してその職を失った人達がたくさん出たので、アベンジャーズというチームをスタークさんが組織として発足させてそのままその人達を雇い入れたんだそう。

実質的なリーダーは、うちの総隊長が助けたっていう理事会のメンバーの人達。

キャプテンアメリカ、ステイプさんも同じぐらいの発言力があるらしいんだけど、もっぱら前線の指揮をするためにその人達やスタークさんが運営しているみたいだ。

そんな中、ニューヨークの戦いでいつの間にかアベンジャーズのメンバーになっていたらしい俺にも協力して欲しいという連絡がきた。

本人である俺が拒否しなかったので、日本からアメリカに向かうと空港にはクインジエツトがあつて、ろくな説明もなくこの国に入った。

送り届けた人達とはあまり会話もなく、防寒用の服装に着替える事をお願いされただけで、現地にて説明があるからと、ソコヴィアという国に連れていかれて到着するなりものものしい雰囲気の中、ジープタイプの車が集まって特殊部隊みたいな装備をした人達の中にステイブさんがいた。

「ああユウスケ来たか。」

「いったい何があつたんですか？

何の説明もなくこの場所に連れてこられたんですけど。」

『何だ。SPIRITSには説明しなかったのかキャプテン』

「スタークさん!? そのスーツどうしたんですか？

ペッパーさんにはもう作らないとか言ってますでしたっけ？」

いきなり近くにアイアンアーマーが降りてきて、スタークさんの声がしたので驚きつつも気になったことを聞いてみる。

アイアンアーマーの頭部がアーマー内部に収まってスタークさんの顔が現れると話

をはじめた。

「あー、アベンジャーズが組織化したのに僕だけが戦えないのはどうも嫌だな。

スーツを作ったんだけど、それが原因でペッパーとはギクシヤクしてるからあんまり聞かないでくれ。

それよりもドキャプテン。ユウスケに説明してやってくれ。」

「スタークも説明不足だったみたいだな。

まあいい。今回呼んだのはニューヨークでロキを捕まえた時にS. H. I. E. L. D. に保管されていたはずの杖がヒドラの連中に渡っていて、その場所が判明したから取り返すのに協力して欲しかったんだ。

それで、ハザマはいないのか？」

「狭間さんは休暇中ですよ。」

「ご友人を連れて帰郷してるって聞いてます。」

「何、じゃあユウスケだけなの？」

「連絡はつかなかったの？」

「ナターシャさんがどこからか現れて自然と会話に入ってきていて、その後ろからはバー博士とソーさんも姿を見せていた。」

「異世界にいるのにわかるわけないじゃないですか。」

「異世界？彼も地球人じゃなかったのか？」

「俺の知っている世界にはああいう名前の者は地球でしか見たことがないぞ？」

バナー博士とソーさんに久しぶりと挨拶されてからそう言われるとナターシャさんが答える。

「ヒドラとS. H. I. E. L. D. の情報をネットワーク上に公開した中に、SPIITSの情報も含められていたのよ。」

まあその前に本人から聞いていたけど、情報が広まったならもう時効でしょ。

だから言うけど、ハザマは別の世界、マルチバースでの地球の人間よ。

「デイエンドの能力でこの世界に来ているみたいね。」

「あの能力はとにかく便利だからな。」

「いるのと、いないのとは大違いなんだが。」

「何でもご両親の親孝行もしたいとか。」

「後、友人さんのトラブルを解決するためとかなんとかか。」

「そうだな。親孝行は大事だ。」

「失ってからは間に合わなかったと嘆くしかなくなるからな。」

「親が健在なうちに会えるだけ会っておいた方がいい。」

ステイーブさんの言葉に返すと、スタークさんとソーさんから言葉を返されて、自分

のことじゃないのに心が暖かくなった。

「そういえば、狭間さんがずいぶんと怒ってましたよ。」

埠頭の戦いで倒したはずのウイルスを勝手に培養していたそうじゃないですか？」

「すまなかつたよ。」

あれはただの興味があつたから手を出しただけで、もうデータも残ってない。J.

A. R. V. I. S.」

『全てのデータ、バックアップ、物質は消去済みです。』

「：ほらな。前にユウスケがしてくれた話があつただろ？」

クウガにも暴走形態があるって、だからそれを押さえるための物があつたらいいと思つたんだ。

だけどS. H. I. E. L. D. の理事がまさかヒドラだつたとは思ひもしなかつたんだよ。：反省してる。」

「わかりました。」

狭間さんに会つたら伝えておきます。」

「頼むよ。お、バートン！」

「どうだつたんだ？」

「なんだ。ユウスケが来てたのか？」

軽く偵察してきたが、こそこそ行くより正面から突破した方がいいかもな。

このメンバーなら余裕だろ。」

「だったら、さっさと終わらせて帰ろう。」

ああそうだ。ユウスケも終わったらアベンジャーズタワーに来てくれ。

僕の邸宅もそっちに移したから、盛大にパーティーといこう。」

そして、ステイブさんの号令でソーさんとスタークさんは飛んで行き、俺とバートンさんが荷台に乗った車をナターシャさんが運転して、ステイブさんが乗ったバイクが走り出し、バナー博士がハルクに変わってジャンプして行った。

聞いた話によるとチタウリの技術を使った装備を使っているらしいけど、普通の軍隊ならば殲滅できてもアベンジャーズが戦えば普通に倒せるらしい。

俺もいつ交戦に入るかわからないので、アーケルを腰に出現させておいた。

木々の隙間から、ヒドラの兵隊が放ったと思わしき光弾が周りに溢れだし、青い光を放つ装甲車が現れはじめる。

「超変身！」

適当なところで俺も車から飛び降りて、青の金のクウガになり、近くに落ちていた金属の棒を拾って、クウガの武器、狭間さん曰くライジングドラゴンロッドを作り出した。

向かってくるパワードスーツらしいものを身に纏ったヒドラの兵隊を殺さないように難払いながら、アベンジャーズの人達をフォローするように動いた。

ナターシャさんが運転する車から離れないように走ったりジャンプしながら迷彩柄の兵隊達を打ち払って行く。

そして鉄条網で仕切られた防壁を何故かアベンジャーズの皆と並びあうように飛び越えて、その先にある古城に向かって駆け出していった。

あらかじめ受けとっていた耳栓型のインカムに、先に飛んで行ったスタークさんから音声が入るがステイーブさんが直ぐに返した。

『クソツ！』

「スターク、言葉が汚いぞ。」

J. A. R. V. I. S. 上から何が見える？」

『中央の建物は特殊なエネルギーバリアで守られています。』

ストラッカーは、他のヒドラの基地よりも優れたテクノロジーを使っています。『ここにロキの杖があるのは間違いない。』

でなければこれ程の防御はできない。

…ふう、これで終わりだ！」

「終わりじゃないわ。」

「まだまだいるわよ。」

「…ソーさんの周りが片付いただけだと思いますよ!」

ソーさんの言葉にナターシャさんが言ったことに思わず俺が言ってしまった。

「ちよつと待て、こんな時までキャプテンの説教したことには誰も反応しないのか?」

「…はあ。」

「つい口が滑った。」

「スタークさんが気にしすぎなだけだと思います。」

「そう言ってくれるだけでもユウスケが来てくれたかいがあるな。」

スターク فقطだと、いつときは話のネタにされる。」

すると、J. A. R. V. I. S. の報告でこの近くにある市街地にヒドラの砲撃の被害がいつているらしいというので、スタークさんがアイアン軍団とかいうのを送り込んでいた。

「…スタークさん。」

反省する気あるんですか?」

『あれは日本の企業の飛電インテリジェンスとの合同研究の結果だ。』

何だ。ハザマから聞いてないのか?』

「…狭間さん。スタークさんに怒ってる資格ないじゃないですかあ。」

おっと、しょんぼりしてる暇ないんだった。」

ヒドラの攻撃が、足が止まった俺に集中し始めたので高くジャンプしてそれを避ける。

その時、ナターシャさんの声でバートンさんを心配する声が聞こえてきた。

「どうしたんですか!?!」

「強化人間がいるな。」

「強化人間って何です?」

「SPIRITSの流れた情報にあつた改造人間をベースにヒドラが作り出したらしい超人兵士だと解析班の者達は言っていたが。」

ロジャースさんの説明に俺はため息を吐くしかなかった。

「クリントが被弾したわ!」

ナターシャさんの声で再び気持ちを落ち着かせて、俺もバートンさんの近くに行く。

バートンさんを攻撃したトーチカはハルクが吹き飛ばしていたから問題なかったけれど、バートンさんの脇腹がえぐれているように見えた。

「相手はどういうやつでしたか!?!」

「…ああ、足が早い男だ。」

「しやべらないで!」

俺は聞いた事を思わず後悔しながら、

ライジングドラゴンロッドを捨てる。

「超変身！」

緑のクウガに変わると、落ちていたヒドラの銃らしき物を拾ってボウガン、狭間さん曰くペガサスボウガンに変えて耳を澄ます。

そして高速で走る足音をとらえた。

「そこだ！」

ペガサスボウガンから放たれた弾丸は、一直線上にあつた木々を貫通したことで威力が弱まったらしく仕留めきれなかったようだった。

強化人間とかいうやつには逃げられたけれど、どうやら制圧が完了したらしく、後はロキの杖をスタークさんが持つてくるのを赤のクウガに超変身して待つ事にした。

SPIRITSの現状

side 狭間玄乃

俺は今、元の世界の暁の尻拭いをしているところだ。

暁は期限の1年半をギリギリでクリアして一つの聖剣に選ばれていた。

本当にギリギリのギリツギリだったので、聖剣の方が同情したのかもしれないか
思ってしまった。

だけどもあ、選ばれたのは事実なのでSPIRITSでは俺と暁が休暇をもらって元
の世界に帰ってきて、少し前に頼んでおいた探偵会社のところに行く。

この探偵会社で調べた事は期限切れで聖剣に選ばれなかった時は破棄してもら
もりだったのだが、無駄にはならなかったようだった。

結果からいえば、暁の元カノは借金取りのヤクザの下っ端とできていて、その下っ
端が作った借金を暁が作ったものだと言いつ張っているらしい。

だが今回依頼した探偵会社の社長さんと例のヤクザの親分さんが知り合いらしく、話
を一緒にしに行ったところ、その借金は払わなくてよくなった。

その親分さんがとても気さくな人でしきりに暁に謝っていて、逆に暁が恐縮してペコ

ペコすみませんと言っていた。

その探偵会社の調査で蒸発した元カノの居場所も判明していたが、今さら会う気にも慣れなかったようでそのまま暁の実家に行つて説得すると、最初は不満気なおじさんおばさんも自分たちの勘違いを理解して暁に泣いて謝り、途中で俺も抜けてきて半年分の税金を払つて俺も実家に帰つた。

契約しているマンションに行つても姿がないし、そのご近所に話を聞いても会つたことがないと言われて心配していたと言われたが、出張が多い職場だから気にしないで欲しいと言つて、お袋の手料理に舌鼓をうち、用意していたお土産を渡して、感謝の気持ちとしてプレゼントも送つた。

ちよつと気味悪がられたが、出張先で思う事があつたからだと言つて納得させた。

翌日、朝から暁とおじさんおばさんが菓子折りを持つて家に来て、うちの客間で両親を交えて話をして驚きと涙と感謝に次第に酒盛りが始まつていて、そして夕方に俺と暁は第二の故郷とも言えるあの世界に帰つてきたのだった。

暁はSPIRITSに戻るなり、自分を選んでくれた聖剣を使いこなすために凰蓮さんに鍛えてもらおうと言つて行つてしまった。

そしてそこで、五代さんがソコヴィアに行つてアベンジャーズに加わつてヒドラと戦つた事を一条さんから聞いたのである。

「五代さんのことはわかりましたけど、どうして一条さんがその報告を？」

「この前、警察に正式配備されたドライバーがあつただろう？」

「ええ、『ガードドライバー』でしたか。」

現在のSPIRITSは警察組織の一部というのが警察としては一般的な認識で、仮面ライダーカブトで言うZECTと似たような位置付けになっているのだから、SPIRITS内の装備開発部門に参加している中には仮面ライダードライブで特状課のメカニック担当だった『沢神りんな』さんも当然参加している。

彼女にも記憶は戻らせているので、クラインの壺からマツハドドライバー炎を渡して量産型のマツハドドライバーを作れないかというお願いをしていたのだ。

仮面ライダー純みたいに出来ればと思っていたのだが、小沢澄子さんとの共同開発により個人の警察官としてのデータを入力したキーを装填することで、G3システムを纏う事ができるようになったのである。

そのドライバーの事を専用のバイクから名前を取ってガードドライバーとされ、警察の正式装備としてガードドライバーを、SPIRITS内の正式装備として戦極ドライバーを配備されたのが、S・H・I・E・L・D.が崩壊して3か月ほどしてからのものであった。

「ああそうだ。」

あれは警察バッチを持つ者には皆平等に変身資格があるが、俺はそれを使って変身してみてもどうも鈍く感じてしまつてな。」

「G3システムはパワーDスーツですよ？」

動きやすくではなく、鈍く感じたど？」

では戦極ドライバーを使つてみてはどうでしょうか？」

「それも使わせてもらつていたのだが、どうも似たような感覚だつた。」

そこで五代に相談したんだが、狭間君に相談してはどうかと言われてな。」

「…ふうむ。」

（一条薫さん。この人つてたしか、この世界ではSPIRITS内では戦闘部隊の指揮官とかしてたはず。

正史では五代さんの相方だった人だから仮面ライダーとしての素質が十分にあつたつてことか？）

わかりました。」

俺がそう言つてクラインの壺を開いたその瞬間だつた。

デルタギアのアタッシュケースを取り出すつもりで開いた小さなオーロラから、聖剣の一つである『音銃剣錫音（オンジュウケンズズネ）』が出てきたのである。

音銃剣錫音は空中をふよふよとゆっくりと動きながら一条さんの目の前にくるとそ

ここで止まった。

「狭間君。これは？」

「それは音銃剣錫音と言うアイテムで、クウガのベルトと同じく仮面ライダーに変身できるアイテムです。」

昆虫型のゼクターと同じくアイテムが使用者を選ぶタイプの物になりますので、おそらくその剣は一条さんを選んだんだと思います。」

「俺を……つと、結構重いな。」

一条さんは目の前のマゼンタ色の聖剣を掴むと、結構な重さが片手間にかかったのもかかわらず、少しも態勢が変わらなかつた。

「それ選ばれたということは一条さんはスラッシュという名前の仮面ライダーに変身できるということになります。」

使い方を説明しますので、トレーニングルームに行きましょう。」

そう言ってトレーニングルームに行くと暁から鼻唄だと言われてため息を吐くのだった。

アメリカに戻ると、スタークさんのタワーだったものがアベンジャーズタワーという建物に変わっていてハイテクさに驚いた。

バートンさんの治療をアジア系の女性に任せて、俺はパーティーまでの3日をそのタワーでお世話になりながらニューヨークを満期していると、パーティー前日に狭間さんが異世界から戻ってきたのを端末の連絡で聞いた。

狭間さんもパーティーに参加するらしく、さらには俺にサプライズがあるらしいので、少しワクワクしながら次の日になると、狭間さんとタクシーで一緒にきたの是一条さんだった。

「一条さん!？」

え、…何ですか?」

「どうだ五代? サプライズだぞ。」

「え? 一条さんがサスペンス、じゃなくてサプライズですか。確かに俺にとつてのサプライズですね。」

驚きました。

え、でも、どうして?」

「ははははは。珍しいな五代がここまで慌てるとは。」

それだけでも来たかいたがあつたかもしれないな。

五代がお世話になっていている人達に挨拶しておきたくてな。

狭間君と一緒に来させてもらった。

ああ、心配するな。英語ぐらいなら話せる。」

狭間さんの出てきたドアとは別のドアから出てきた一条さんに思わず混乱してしまっただけ、深呼吸をして落ち着けると、何だか授業参観日に普段は来ない親がきたみたいで何だか気恥ずかしくなっちゃった。

side 狭間玄乃

一条さんが音銃剣錫音に選ばれて、その使い方を教えるとはんの数時間でその使い方を把握してしまった。

考えて見れば、パワードスーツが鈍く感じるんだから生身の方が強い事になるので、この世界の一条さんはそういう特殊能力の持ち主なのかもしれないと考えた。

俺はウルترونが誕生するであろうパーティーに参加したかったのでアメリカに行く事を伝えると、一条さんも急にどこかに連絡を入れると、いつの間にか一緒に行く事になってしまった。

元々働き過ぎで休暇を取れと言われていたらしいので大丈夫なのだそう。

俺達はドレスコードを整え、そのままニューヨーク行きの飛行機に乗り、タクシーを

捕まえて連絡を入れておいた五代さんの迎いでアベンジャーズタワーの中に入った。

珍しく慌てる五代さんを見ながらエレベーターに乗り会場に到着すると、軽快な音楽が流れながら沢山の人が着飾ってパーティーを楽しんでいるようだった。

「あら？ハザマじゃない。」

戻つてたの？」

「お久しぶりです。ナターシャさん。」

今回は残念ながら凰蓮さんは来られませんでした。」

「そう。一緒にヒドラと戦ったから会えなくて残念ね。」

「久しぶりだね。ミスターハザマ。」

ナターシャに聞いたけど、君はマルチバースの人間だつていうのは本当かい？」

「バナー博士。お久しぶりです。」

本当ですけど、あまり言い振らさないでくださいね。」

それと、実験とかは勘弁してください。」

「ははは。興味はあるけど専門じゃないからその実験とかはしないよ。」

それより、バーカウンターでユウスケと一緒にいるのは日本人かい？もしかしてSP

IRITSの？」

「はいそうですね。」

同じSPIRITSのメンバーになります。後で紹介しますよ。

ちなみに日本での五代さんの相棒みたいな人ですね。それと彼も仮面ライダーです。」

「仮面ライダーっていうのは沢山いるみたいだね。ネットワークで見たとよ。」

「まあ固有名称がある仮面ライダーは、総勢200人以上はいますからね。」

それでも、日本各地に別れて活動していれば微々たるものですよ。」

俺がナターシャさんとバナー博士が座っているソファアの近くで喋っていると、ステイブさんや、ウイルソンさん、ローズ大佐やソーさんにスタークさんからも声をかけられて久しぶりに会う人達との会話を楽しみ、五代さんと一緒にいる一条さんを紹介してお酒を楽しんだ。

そして時間が経ち、大半の人間が帰ってしまい二次会に突入した辺りでソーさんのハンマーが他の人にも持てるのかという話題になった。

映画で見たあのシーンは俺もやってみたいとは思っていたので、諸手を上げて賛成して俺も挑戦させてもらったがびくともしなかった。

五代さんや一条さんも参加させてもらっていたがびくともしないのを見たソーさんはとてもうれしそうにしていた。

そして誰もが持ち上がらずにソーさんがヒョイとハンマーを持った時だった。

かん高い音が響き渡ったのだ。

ウルトロンの誕生

side 御影暁

そこは、モノクロの世界だった。

歩いても歩いても乾燥した大地が無限に広がっているように見える。

何故だか白黒で見える太陽の光と周りの景色。

その荒野の見える景色の先に、次第に様々な物が

見え始める。

車の残骸、建物の瓦礫、潰れた草花、そして、人々の遺体。

そしてこの先に見えたのは、炎を吹かしながら空に浮かぶ大陸が天から降り注ぐ光景に手を伸ばす友人の背中だった。

「…はっ!?…夢?」

にしてはめっちゃくちやリアルだったけどなあ?」

時計を見ても、寝始めてからまだ1〜2時間しか経っていない。

しよせんは夢だろうと思って、もう一度眠ることにした。

side 狭間玄乃

『ふさわしいものか。皆人殺しだ。』

その声が聞こえたのは、建物の端の影になっているところだった。

次第にその姿を見せると、かろうじて人の形を保っているだけのロボットだった。

配線だらけでボタボタとオイルをこぼしながらよたよたと歩いて来ていた。

「スターク。」

「J. A. R. V. I. S.」

ステイブさんがスタークさんの作業なのかと声をかけるが、スタークさんは咄嗟に

J. A. R. V. I. S. に通信を試みても返答は帰って来なかった。

『すまない。寝起きでね。』

いや、夢を見ていたというべきか？』

「再起動だ。ひどいバグがあったようだぞ。」

そのロボットとの会話が成立しないことに周りが戸惑いながら、スタークさんは端末に向かって声をかけ続けていた。

『ひどいノイズで、身動きが取れなかった。

糸が雁字搦めに絡みついて…

もう一人のやつはいいやつだったよ。

だけど殺すしかなかった。』

「誰を殺したって?」

『現実世界では様々な決断を迫られることがある。』

ステイブさんの問いによく会話が成立し始めていた。

「誰の手先だ?」

『僕には見える。世界を守るアーマーが。』

しかし、ソーさんの問いに答えたのはロボットではなく、スタークさんが喋ったと思われる録音音声だった。

「ウルトロンか?」

『体を持ったな。』

ああいや、まだこれはサナギと言った方がいいだろう。』

バナー博士の問いに答えたウルトロンは自分のボディを見回す仕草をしていて、周囲は戦いの前触れを感じて戦闘態勢に入ろうとしているように見える。

そして俺もデイエンドライバーを取り出し、一条さんから預かっていた音銃剣錫音を

取り出して背中に隠す。

『準備はできた。』

任務を果たす。』

「任務って？」

『平和をもたらず。』

ナターシャさんにウルトロンが答えた瞬間、ウルトロンの背中側の壁を突き破って、ソコヴィアで市民を守ろうとしてくれただろうアイアンレギオンが襲いかかってきた。

俺は咄嗟に音銃剣錫音を一条さんに向かって渡すと、一条さんは戸惑う五代さんを尻目に音銃剣錫音を流れるように受けとると、そのうちの一体と戦闘に入って行った。

そして俺もまた、座っていた椅子の裏側に周り込みながら、デイエンドライバーをアイアンレギオンの一体に向けて放った。

それぞれが戦い、周囲がガラスの破片や破壊された壁にあふれながらアイアンレギオンを破壊すると、ウルトロンは何もなかったかのように振る舞いながら言う。

『ドラマチックだな。』

よかれと思つての行動だろうが考えが足りないのだ。

世界を守りたい。でも世界は変えたくないだど？

だが、人類を進化させずに世界を守るわけがないだろう。

「どうやって？世界を守るだと…この人形で。」

まるで自問自答をしているかのように言いながら、破壊されたアイアンレギオンの一体の頭部を拾うとそれを握り潰した。

『平和への道は一つしかない。』

アベンジャーズの全滅だ。』

その言葉に我慢できなかったように、ソーさんがハンマーをウルトロンに投げるとあっさりと破壊されてしまう。

『自由ってものは…』

「…（楽しいもんだぜってか。）」

そう言いながら機能を停止したウルトロンの言葉に俺は心の中で続きを言いながら立ち上がり、五代さんと一条さんのところに行く。

「大丈夫でしたか？」

「狭間さん、一条さんが持っている剣はいつたい…」

「五代。俺もお前の背中を守るぐらいの力を手にしたということだ。」

「五代さん。戸惑う気持ちはわかります。」

ですがグロンギと戦った記憶を持っているということは、いまだに戦い続けている五代さんに歯痒い思いを抱いていたということでもあります。

そんな一条さんが、ようやく五代さんと肩を並べて戦えるんです。

その気持ちも汲んであげてください。」

「一条さん……俺……」

……いえ、よろしくお願いします！」

五代さんのサムズアップに一条さんも同じ動作を返してお互いに通じあつた笑みを浮かべていた。

いつの間にかいなくなっていたソーさんは、アイアンレギオンが一機だけ逃げたのでそれを追いかけて行ったという。

機能を停止したウルトロンの頭部を持ってラボに行き、みんなでラボに集まってスタークさんとバナー博士が調べながら話合いが始まった。

「研究データが消えている。」

ウルترونもな。インターネットを通じて逃げたんだろう。」

「ウルترونか……」

「ファイルや監視カメラのデータに侵入されたわ。」

彼、仲間よりも私達の事を詳しく知っているわよ。」

「そんなことより、もっと刺激的な情報を欲しがったら？」

「核ミサイルのコード……」

「そう！それだよ。」

大至急連絡を入れるべきだ。連絡を入れられるうちにな。」

「核ミサイル？私達を殺すために？」

「殺すとは言つてない。全滅だと言つたんだ。」

「誰かを殺したとも言つていた。」

「でも私達以外にはいなかったはずよ。」

ヒルさんの言葉にゆつくりと中央に近づいて行くスタークさんが端末を手にして言う。

「いや、いた。」

端末を宙に打ち付けるように振ると、スタークさんの目の前にはオレンジ色に光るしかしどこか崩れてしまったかのように見える物体が映し出された。

「J. A. R. V. I. S. : そんなバカな。」

「彼が最初の防衛ラインだったんだらう。」

ウルトロンを止めようとしたんだらうな。」

バナー博士の悲しそうな声に続けて言うステイブさんの言葉に、再びバナー博士が言葉を返していた。

「おかしい。ウルトロンはJ. A. R. V. I. S. を吸収できたはずだ。」

これは計画的ではない。あまりに…衝動的だ。」

すると戻ってきたらしいソーさんが現れて、一直線にスタークさんの首筋を掴んで持ち上げた。

バートンさんの呆れた声も聞こえるし、苦しそうなスタークさんのひねくれた言葉も聞こえた。

「…また暴力か。」

「言葉を使えよ。」

「言つてやりたい事は山ほどあるぞスターク！」

「ソー…アーマーは？」

ソーさんの憤った言葉にステイプさんが制止するように聞くと、ソーさんはスタークさんを離れた。

「160キロメートル追つて見失った。」

おそらく北に向かっていている。

杖を奪われたんだ。再び取り替えずはめになった。」

「これではつきりしたわね。ウルトロンを追うのよ。」

ソーさんの言葉にナターシャさんが、言うど近くにいたアジア人の女性、おそらくバートンさんを治療して後にウルトロン…いやヴィジョンの体を作ることになるヘレ

ン・チョ博士だろう人物がスタークさんに向かって言う。

「でもどういうこと？あなたが作ったプログラムでしよう？」

「どうしてみんなを殺そうと？」

スタークさんは戸惑いながら笑うかのような唸り声を出し、しきりにバナー博士からやめるようなしぐさをされるが見てはいてもそうする気はないようだった。

「そんなに面白いか？」

「いいや。笑えないよな…とんでもない。」

全く、なんて言うか…笑えない冗談だ。それに…」

「お前が理解できないものに手を出すからそうなったんだ。」

「違う！悪かった…悪かったよ。」

ソーさんの言葉に即座にスタークさんは返す。

しかしスタークさんの言葉を遮ってソーさんは言おうとするも再びスタークさんが言葉を被せていた。

「おかしくてね。何故ウルトロンが必要なのかを理解出来ないということが！」

「トニー、今はそんなことを言い争っている場合じゃあ…」

「本気か!?まさか君まで…何か言われたらしつぽ巻いて逃げだすのか？」

「殺人口ポットを作り出してしまったんだぞ。」

「作り出してない。完成までほど遠かったんだぞ。インターフェイスも未完成だった。今度は諫めようとしたバナー博士とまで言い争っている。」

「完成してなくてもこれだろう？アベンジャーズはS・H・I・E・L・D.とは違う。僕達はそのことを示さなければならぬ。」

「そもそもどうしてウルトロンを作ろうとしていたんですか？」

ステイブさんの言葉と五代さんと問いにスタークさんが話し出す。

「みんな忘れたのか？」

僕がワームホールに入って、世界を救った。」

「そしてあなたのことを俺が連れ戻しましたね。」

「それはまあ、助かったが。」

そうじゃなくてだな。みんな思い出せ。

ぼっかり空いた空の穴からチタウリの軍勢、宇宙人どもが襲ってきただろう！

チタウリはロキの軍勢じゃない。元々は別のやつからチタウリをもらい受けて、地球を支配する代わりに四次元キューブをそいつに渡すということだったらしいじゃないか？

アベンジャーズが武器商人どもと戦うのも結構だが、僕達の戦う相手は宇宙にいる。

そいつがラスボスだ。そういう敵とどう戦う？」

「みんなで。」

「負けるぞ。」

「それでも、僕らは戦う。」

ウルトロンは僕達を挑発してるんだ。

やつが行動を起こす前に探さないよ。

世界は広い。まずは搜索範囲を狭める方法を考えよう。」

スタークさんは、頭を振ってその場からいなくなり、ステイブさんの言葉にみんなが行動を開始し始めた。

そして、ウルトロンはストラッカーを殺害し、世界中の工学研究所から様々な道具を盗み出した事がわかった。

キャプテンアメリカの象徴たる盾に使われた金属

、『ヴィブラニウム』が怪しいと見て、その密売人でもあるユリシース・クロウという人物を探すという方針が決まるのだった。

暴走

side 五代雄介

南アフリカ沖の廃船場に置かれたいくつもの古びた貨物船にその密売人がいるらしいということがわかったので、アベンジャーズタワーから直接行動できる人員で行く事になった。

ローズ大佐はウォーマシンを持って来ていなかったこと後悔していて、次の任務には参加すると意気込んでいた。

どことなく緊迫した雰囲気の中、クインジェットに乗り込んで数時間の後に近場の木々にクインジェットを下ろして行くことになったけれど、俺と一条さんはバナー博士の護衛のために残って欲しいということだったので残る事になった。

強化人間の一人が精神攻撃を使ってくるらしいので、バナー博士がその攻撃を受けるかとハルクになってしまう可能性があるということなのでそのために残っているのだから。

そして狭間さんはその説明をスタークさんからされると、念のためという理由で一度

本部に戻つて助つ人を連れて来ると言つて、一人オーロラでいなくなつてしまつた。

他の人達が廢船に向かつてしばらく経つが何の連絡もないので、バナー博士がスタークさんに通信を入れるとJ. A. R. V. I. S. がいない分だけ通信状況が悪いのかノイズが入つたように、ジェットで待機するようにという返事が入つた。

バナー博士は心配になつてクインジェットの後部ハッチを開いて廢船場の方を伺つているようだった。

そのまま連絡もなくしばらくすると不意に一瞬目眩がして頭を一度振ると、目の前が別の景色と重なつて見え始めた。

日本のビル街の中に楽しそうな笑い声が響いていて、視界の端に白い服装の青年がちらつき、腰のアークルが熱を帯びてきて何とかその場から離れようとするのに必死だった。

side 一条薫

狭間君に相談に行つたことで俺も五代と一緒に戦うことができるようになって、うれしさについ休暇を即決で取得してしまつた。

そして狭間君と一緒に五代が行つていふというニューヨークにあるアベンジャーズタワーに行き、そこからの怒涛の成り行きでアベンジャーズの皆さんと行動を共にする

ことになった。

一見するとにわかには信じられないが、この眼鏡をかけた男性、バナー博士が感情の高ぶりによつてハルクになつてしまふらしく、その護衛として五代とそのままジェット機に残る事になつた。

まあ彼らからしたら自分は仮面ライダーとはいつても新人とかわりないだろう。

それに俺は休暇で来ているのだからとあまり構えずにいることにした。

だが、そんな時に限つて事態は大きくなるものだというのが警察官としての勘が言つている。

狭間君も念のためという理由で、一度本部に戻ると言つていなくなつてしまったので、気を引き締めていると、急に目眩がして脳裏にバラのタトゥーの女と、雪が降る中で戦いに行く五代の姿がちらつた。

俺はこれが幻覚だと気づいて俺に向かつて赤い光の波動を放つていた女を組み伏せて剣の刃を首筋に当てた。

一緒にいた男に咄嗟に動かないように言うと、その女が涙を流していることに気づいた。

「…命乞いか？」

「…え？」

「どうして泣いている？」

「…え。私…泣いて？」

さつきの男とあなたの記憶が流れてきて、それで…ごめんなさい。

私…」

俺は剣をその女から離して、その場からも退いてやる。

一緒にいた男が女を心配そうに介抱していながら、その女が聞いてきた。

「…どうして？」

「…悪い事をしたという自覚があったから謝ってきたんだろう？」

そんな相手をどうこうするつもりは無い。

それに君がやらかした後始末を着けなきゃならないからな。」

そう言うと、女はただ俯くだけで何も言うこともなく、寄り添った男の素早い動きに

よつて瞬く間にいなくなってしまった。

俺はすぐ様、ジェット機の外に出ると五代の事を探すと、海岸線をふらふらと歩いて

いた五代を遠くの方に見かけて走り出した。

「五代！」

ようやく追い付くと、そこは砂浜に岩がゴロゴロ転がっていて陸の側は切り立った崖になっていて、その崖に手を着きながら俯いて立っていた。

「…五代？」

どうした？」

よく見るとその腰にはアークルが出現していて、金の力を表す装飾とは少し違うように見えた。

そして五代の正面に周って見ると、その秘石の色が漆黒に染まっていた。

それに気づいた瞬間、その秘石からモヤのような黒い煙が現れはじめて五代の体に纏わりつき姿が見えなくなってしまった。

「…五代、まさか！」

その煙の中に見えるのは、秘石が不気味に輝きながらその光が四方に渡ったかと思うと、煙が晴れて漆黒の4本角のクウガ、『凄まじき戦士』になっていた。

その秘石の漆黒と同じく、複眼の色もまた漆黒となっていてあの時の雪山での変身とはまるで違っていた。

その動きに反応できたのには、これまでの経験と記憶があったからだろう。

予備動作もなく繰り出された拳に剣を差し込み、盾にできたのは、奇跡に近かった。数十メートルをそれによって離されてしまったが、重症を負う事もなかった。

「…五代。まさかお前がここまで『侵食』が進んでいたなんて、思いもしなかった。

お前の事は、俺の命にかけて…止める！」

ヘンゼルナッツとグレーテル

とある森に迷い込んだ小さな兄弟のおかしな冒険のおはなし：

ヘンゼルナッツとグレーテル！

銃剣撃弾！

銃でGOGO！否！剣で行くぞ！音銃剣錫音！

錫音楽章！

甘い魅惑の銃剣がおかしなリズムでビートを斬り刻む！

「仮面ライダースラッシュ。

行くぞ。五代！」

いつの間にか目の前にきていたクウガの拳を一度受け流すだけで吹き飛ばされそうになる。

これは一歩でも間違えれば、俺は死ぬかもしれないと思いながら、クウガの拳をさばいていく。

「…五代！目を覚ますんだ！」

クウガの拳の威力を利用して背後に回り込んで一撃を与えようとするも、たった一発の蹴りで吹き飛ばされてしまう。

砂浜にゴロゴロ転がっていた岩の一つを砕きながら体が岩にめり込んでいるのがわかる。

「…ぐう。ううう…」

思い通りに動かせそうにない体をなんとか岩から抜け出そうとするも、いつの間にかクウガが目の前にいて俺に向かって拳を振り上げた。

咄嗟に目を瞑ったが、いつまで経っても衝撃が来なかつたので不思議に思い目を開けると、クウガの腕を別の腕が掴んで止めていた。

「…本郷、警視総監？」

「一条君、よく頑張ったな。」

「ここからは、私に任せてもらおう！」

俺ではどうしようもなかつたクウガの体を本郷さんは投げ飛ばしてしまった。

そして本郷さんはその場で両手を前に突き出すとそのまま腰にベルトが現れる。

「ライダー…！変身!!」

そしてその身を仮面ライダーへと姿を変えたのだった。

side 狭間玄乃

KAMENRIDE

「変身！」

DI!END!

「一条さん！大丈夫ですか?!」

俺はSPIRITS本部からどうにか説得して本郷さんを連れてくることができた。ワンダ・マキシモフによる精神操作は強力なので、もしかしたらバナー博士だけではなくて五代さんも操られるのかもしれないと思い、必死に説得したのだ。

俺は岩からスラッシュに変身した一条さんを助け出すと、クウガと1号の戦いを見守る。

目の前では昭和仮面ライダーのはじまりのライダーである1号と、平成仮面ライダーのはじまりのライダーであるクウガのアルティメットフォームとの戦いが繰り広げられていた。

拳と拳の応酬の度に弾けるような空気音と、その余波だけでこちらが吹き飛ばされそうになる衝撃、そして崖側がどんどん震えだして崩れはじめる場所もあるようだった。

見た限り互角のように見えた。

ということは、本郷さんは見た目は新1号だがパワーはネオ1号に匹敵する性能だと

ということが見てとれる。

五代さんは無意識に抑えているのか、発火能力や武器生成能力の使用はしていないようだったので、まだ五代さんを元に戻す可能性があるということがわかる。

「一条さん、聞いて下さい。」

おそらく五代さんを元に戻せるのはこの場ではあなたただだけだ。」

「…しかし、俺では今の五代に手も足も出ないぞ。」

「戦いは本郷さんに任せましょう。」

一条さんはこれを使ってあなたの声を五代さんに届けて下さい！」

俺はクラインの壺からワンダーライドブックを取り出して一条さんに渡した。

「おそらく、一条さんの声に混乱した五代さんはこちらにも攻撃を仕掛けてくるでしょう。」

俺は可能性な限り、一条さんに攻撃がこないようにしますので。

…五代さんをお願いします。」

「わかった。使わせてもらう。」

ブレーメンのロックバンド

とある戦いを強いられた動物たちが奏でる勝利の四重奏…

銃奏！ブレイメンのロックバンド！

銃剣撃弾！

剣でいくぜ！ノーノー！銃でGOGO！

BANGBANG！音銃剣錫音！

膝をついていた一条さんが立ち上がり、仮面ライダースラッシュ、ヘンゼルブレイメンへと変化した。

「五代！俺の声が聞こえているか!?!」

ブレイメンのロックバンドの追加アーマーに増設されたスピーカーから一条さんの声が響く。

すると、1号と激しい戦いを繰り返していたクウガの動きが急に鈍くなりはじめる。

本郷さんは鈍くなったクウガには積極的に攻撃を加えずに少しずつ手数を少なくしながら相手をしているように見えた。

ATTACKRIDE BARRIER

急に一条さんに向かって拳を振り上げてきていたクウガに向かってデイエンドの紋章を型どったバリアを展開してその体に当てて攻撃をキャンセルする。

そしてさらに一条さんの言葉が響き渡り、ついにはクウガの動きが止まった。

立ち止まったクウガがうめき声を上げて、頭を抱えはじめるとその複眼が漆黒と真紅に明滅しだして、好機と見た一条さんはさらにクウガに近づきながら言葉をかけていた。

クウガが両膝をついて両手をだらりと力なくなったらし、その顔を天に向けていたところに一条さんが目の前にきていて、クウガが正面を向くとその複眼が真紅に染まっていた。

「…一条さん。…俺。」

「…五代！意識を取り戻したのか!?!」

「…俺、一条さんにひどい事を…」

「…いいんだ。五代を元に戻せるなら。」

いつの間にか、二人共に変身が解けていて、俯く五代さんを一条さんは母親のように抱きしめていた。

それぞれの休息

「狭間君。」

「本郷さん。ありがとうございます。」

本郷さんが俺の近くにくると、本郷さんも変身を解いていたので俺も変身を解除した。

「うむ。五代君が暴走するかもしれないと聞いた時はそんなバカなと思ったが、あんな穏やかな人間を操作しようとする恐ろしい能力を持った者がいるとは……」

「……その能力を持った人物もまた、性根が悪い人間ではないようで、どうも迷っているようです。」

「……そうか。そういう能力の持ち主もまた、我々仮面ライダーのように、迷いながらも正義の道を目指してくれると良いのだがな。」

俺と本郷さんは五代さんと一条さんの元に向かつて行き、本郷さんは五代さんの肩を叩いて言葉をかけていた。

「一条さん。おそらくアベンジャーズの皆さんも五代さんと同様に、精神攻撃を受けて参ってしまったていると思われれます。」

俺はこのまま本郷さんを本部まで送りますで、クインジエットにゆつくりでいいので五代さんを連れて行って事情を説明しておいてもらえませんか？」

「…わかった。…五代、行けるか？」

「…はい。」

俺は本郷さんと一緒にオーロラを通って本部に戻ると、本郷さんに向かって言う。

「今回の敵は、ウルトロンという人工知能が作り出したロボットです。」

その目的はアベンジャーズの全滅らしく、既に精神攻撃によってチームがバラバラになりつつあります。

そして、実力行使で大群による圧殺をしてくると思われます。」

「…ロボットの強みは大量生産による面での攻撃だということかね？」

「…先ほどの五代君のように精神的に弱くなっているところを狙われれば確かに全滅もあり得る。」

「ですから、決戦の際にはニューヨークの戦いのようにSPIRITSの人員を貸していただきたいのですが、大丈夫でしょうか？」

「…そうだな。日本の技術研究所からのロボットらしき者達による盗難報告も聞いている。」

闇の手の襲撃もワシントンのヒドラを討ったことで最近では散発的な動きしかみられ

ない。

それにニューヨークの時は隊員達が渋った事で数人しか参戦できなかった。

いいだろう：五代君が暴走したことを含め、今戦うべきはそのウルトロンという相手のようだな。

「こちらでも準備を整えておこう。」

「ありがとうございます。」

おそらく猶予はあまりないと思われます。

2～3日中には作戦が決行される可能性があると思われるので、急いでもらえると助かります。

それと相手は通信を傍受しているでしょうから、連絡の取り合いのやりようがありません。」

「：：：そうか。そうすると：：：期限をはつきりさせておくか。」

現在の時刻から2日：いや2日半、60時間後に一度本部に戻って来てくれたまえ。そこでどうするかを再び話合うこととしよう。」

「わかりました。」

俺は端末のタイマーをセットすると、本郷さんに再び感謝の言葉を言ってオーロラをくぐった。

クインジエットには、随分と憔悴しているように見えるアベンジャーズの面々が座りこんでいた。

「ステイブさん…ソーさんにナターシャさんまで…随分としてやられたようですね。」

「ハザマか…その新人君に聞いたよ。」

ユウスケもやられて暴走したそうじゃないか。」

「バートンさん…あなたは大丈夫だったようですね。」

「まあな、精神操作は一度経験済みだったからな。」

ハザマはタイミング的に強化人間と遭遇しなかつたみたいだな。」

「そうなりますね。」

SPIRITS本部から総隊長をもしものためにとお連れするのに時間がかかってしまいましたので。

ところで、スタークさんがいないようですが？」

「ハルクの対処だな。」

もうそろそろ戻ってくるだろう…来たな。」

「よし、しっかりしろバナナ。クインジエットだ。」

なんだ、みんなやられたみたいだな…

ハザマとバートンだけが無事だったのか？」

「…まあな。つかまつてろ。

出発するぞ。」

そのバートンさんの声とともにクインジェットがゆっくりと上昇して飛行しはじめた。

「スタークさん。あなたは把握していませんかもしれないので、話をしておきます。

強化人間によって五代さん…クウガが暴走しました。」

「そんな!？」

ユウスケは…いるな。なんとかなったのか？

新人君と一緒に…見た限りなんと言うか、落ち込む息子を慰める父親みたいだな。」

「ええ。俺が本部に戻って総隊長を連れてきたことで被害は最小限に抑えられています。」

また精神攻撃による混乱はその人、一条さんがいたおかげで正気を取り戻しました。

彼はなんと言うか、五代さんの戦友であり保護者みたいな人なんです。」

「そうか、ライダーバスターがなくてもなんとかなったなら良かった事だ。」

「はい。」

ところで、バナー博士はやはり?」

「…ああ。」

「バートン、ヒルにつないでくれ。」

しばらく飛行している中で、バートンさんが繋いだ通信に反応したヒルさんの声が機内に響いた。

『あなた達ニュースで大人気よ。』

市民には人気ないけど、バナーを逮捕するっていう報道は出ていない。

でもそういう空気にはなってる。』

「救済ボランティアは？」

『手配済み。』

「チームの様子は？」

「みんな、ダメージを受けてる。」

「だけど、乗り越えるさ。」

「ヒルさん。海岸線についての報道はありますか？」

「ヒルさんとスタークさんの話に入るのは悪いかと思ったが、聞いておきたかった。」

『不自然な地震や崩落を観測されたみたいだけれど、被害者も目撃者も無し、ハルクみたいな直接的な被害報道はされてないわね。』

「…わかりました。ありがとうございます。」

俺は肩を寄せあつたまま眠っている五代さんと一条さんのほうを見てからヒルさん

にお礼を言う。

『とにかく、今はクインジエットをステルスモードにしてそこから離れた方がいいわね。』

「…それで、隠れてろって?」

『ウルトロンが見つかるまでは他に方法が思いつかないわ。』

「…そうだな。」

ヒルさんとの通信が終わると、どうやら正史通りにバートンさんのセーフハウスに向かう事になったようだった。

そして俺も仮眠をとって目を覚ますと、朝焼け空を目にしながら、どこかの開けた場所に着陸するところだった。

全員が降りて、近くの一軒家にと納屋が見える場所に向かう事になった。

「ここはどこだ?」

「安全な場所。」

「…だといいが。」

ソーさんの言葉にスタークさんとバートンが答えていた。

家の中に入ると、妊婦の女性と二人の子供たちがバートンさんに抱きついていた。

「押し掛けてすまない。」

「電話するべきだったな。」

まさか、家庭があつたとは夢にも思わなくて。」

「ここは、フューリーが便宜をはかつてくれてな。」

S. H. I. E. L. D. の記録にはない。秘密に頼む。

隠れるにはいい場所だろ？」

ステイブさんとスタークさんの言葉にバートンさんが答えてくれたが、ソーさんが子供に見つめられてばつが悪くなったのか、外に出てしまいステイブさんが追いかけて行った。

「確か、ユウスケは子供たちを楽しませる技を持っているんだつたよな？」

相手をしてやってくれるか？」

「バートンさん…俺…」

「五代、心を落ち着かせたいなら断つてもいいんだぞ。」

「いいえ、わかりました。」

五代さんは二人の子供たちの目線にかがんで別の部屋に行っていた。

「一条さん。今のうちに話しておきますけど、SPIRITS本部の方ではウルترونの討伐に乗り込む準備をしております。」

各国の研究所から盗難された機材の量から見ても、かなりの数のロボットが相手になる

と思われず。

休暇中のところ申し訳ありませんが、協力をお願いします。」

「休暇は元々ただの口実に過ぎない。

それに乗りかかった船だからな。最後まで付き合わさせてもらうさ。」

「…わかりました。

では一条さんは五代さんの様子を見ておいてもらえませんか？

俺は俺にできることをします。」

その後、軽い朝食をもらって食べ、そのお礼にとスタークさんとステイブさんは薪割りを、俺は町工場の頃の経験を生かして家具の修理を薪割りをしている二人の横ですることにした。

二人は一時言い争っていた様子だったが、バートンさんの奥さんのローラさんがスタークさんに納屋の耕運機を診て欲しいと言って行ってしまったため、ステイブさんはため息を吐いていた。

「ステイブさん。あなたも行った方がいいと思いますよ。」

「僕は耕運機の修理はできないぞ。」

「いえ、そうではなく。」

少し気になっていましたね。

この場所はフューリーさんがバートンさんの家庭のために提供したということでした。

そして、ウィルソンさんはいなくなったフューリーさんを探しているらしいとパーティーの時に聞きました。

つまり、この場所はフューリーさんも知っていてなおかつ、S. H. I. E. L. D. の記録にもないので隠れ場所としては十分だと思えますよ。」

「あの納屋にバツキーもいるというのか?」

「その可能性もあるというだけですよ。」

俺達と一緒に納屋に行くと、その中では案の定スタークさんと話しているフューリーさんがいた。

「ハザマのいう通りだったな。」

フューリー、バツキーも一緒か?」

「ミスターハザマ、相変わらず余計な一言を言ったみたいだな。」

「…性分です。」

「…ふん。キャプテン。」

残念ながら、バーンズは別行動をしている。

今はどこにいるかは把握できていない。」

「別行動？何をやっているんだ？」

「ウルトロロンが拠点にしている場所の特定だ。」

彼は彼でキャプテン、君の役にたとうとしているようだな。」

「…そうか。」

「バツキー…」

ステイブさんはバーンズさんのしている事にうれしさがこみ上げてくるのか心臓の前で拳を握っていた。

新たな敵

それから数時間後の夕食時、フューリーさんを交えて夕食をとりながら話をしていた。

「ウルトロンは君達を遠ざけて何かを作っているようだな。」

盗まれたヴィブラニウムの量からして一つのものではなさそうだ。」

「ウルトロンはどこに?」

「探すのは簡単だ。やつはどこにでも現れる。」

ウルトロンのコピーはネズミ算式に増えているようだからな。

だが、やつの目的が見えてこない。」

「核ミサイルのコードだろ?」

「それもある。だが、未だに進展は無いようだな。」

スタークさんとフューリーさんの話の流れからするに、正史通りにJ. A. R. V. I. S. のコピーらしきAIが核ミサイルのコードを守っているということだろう。

「フューリー、いつもだったらもつと情報とか武器とか戦う手段を持って来てくれたじゃないの?」

「あるぞ。君たちだ。」

かつては世界中に目があり、耳があった。

だがS・H・I・E・L・D・なき今、お前達が使える武器は己の知恵と信念だけだ。

ウルトロンはアベンジャーズを全滅させると言っているが、結局は世界を破滅させようとしている。

お前達でウルトロンを出しぬけ。」

「しかし、どうする?」

ステイブさんの眩きに俺は席を立つ

「現在、SPIRITS本部では秘密裏に対ウルトロンの戦力を編成中です。」

後、およそ30時間もすればSPIRITSの戦力をアベンジャーズにお貸しするこ
とができます。」

「待て、どうしてそこまでしてくれるんだ?」

「ウルトロンのやることが世界の破滅ならば、我々SPIRITSも見て見ぬふりができ
ませんからね。」

それにウルトロンはアベンジャーズの全滅を言ってきましたが、SPIRITSのこ
とについては何も言ってきました。

スタークさんの研究によって誕生してしまったことで、アベンジャーズにばかり目が行っているように思えます。」

「つまり、ウルトロンはネットワーク上の情報を取り込み学習しているが、一般的な情報も鵜呑みにしていることで、ユウスケやハザマもアベンジャーズとして見ているということか。」

「なるほど、SPIRITSの戦力についてはウルトロンの優先殲滅対象に入っていないということになる。」

これで、戦力についてはなんとかかなりそうだな。

後はウルトロンの目的についてだが……

「少し気になっていたんですが、どうしてウルトロンは人間タイプのロボットを作っているんでしょうか?」

五代さんの呟きが聞こえ、ステイプさんやバナー博士が答えた。

「僕達以上の存在になりたいんだらう。」

だから、人型にこだわっている。」

「ウルトロンが望んでいるのは進化だらう。」

だけど今の人類が進化することに期待していない。」

だからウルトロン自身で進化するつもりなんだらう。」

「…その方法は？」

「誰かヘレン・チョ博士と連絡はとれるか？」

「ヒルに連絡を入れさせよう。」

もしもつながらなければ、ウルトロンはヴィブラニウムを材料に再生クレードルを使って新たな肉体を作り出そうとしていることになる。」

「…よし。皆、出発準備だ。」

作戦はクインジエットの中で考えよう。」

ステイーブさんの号令と共に行動を開始することになった。

クインジエットでの移動先に、先にスタークさんとバナー博士、五代さんと一条さんをペンタゴンに下ろして核ミサイルのコードを変更し続けている相手に接触することになった。

残りのメンバーの内、俺とステイーブさんが韓国ソウルにあるユージン遺伝研究所に乗り込み、ウルトロンがクレードルを移動させる途中でバートンさんの操縦するクインジエットにナターシャさんと協力してクレードルを奪取して破壊することになった。

ユージン遺伝研究所が見える位置にクインジエットから下ろしてもらって、俺がオーロラを展開してそのまま研究所に乗り込む。

デイエンドライバーを手に研究所内に入ると、既にクレードルと思わしき物はなく、

研究員は体の一部が焼けただれて死んでいた。

唯一ヘレン・チョ博士は息があり、クレードルで製作されている体にはロキの杖の寶石、マインドストーンが使われているから破壊はしない方がいいと言われてステイブさんは急ごうとした。

「ステイブさん！俺は博士を病院に連れて行きます。

…それと、クレードルの奪取は3人でできますか？」

「どうした？」

「ウルترون以外に厄介な相手からたつた今メッセージを受け取りました。

可能な限り合流を優先しますが、そいつは俺でないと相手できないでしょうから。」

「あの時のウイルスのようにか？」

「はい。」

「…わかった。急げよ！」

ステイブさんはそう言って走って行き、俺は博士を病院に届けると、再び研究所に戻って来た。

「出て来い！いるんだろ!？」

俺が大きな声を出してその相手を呼ぶと、しばらくして自分がいる空間がゆつくりと動く重加速状態になってしまうフィールドが展開された。

しかし俺はあらかじめ黒いシフトカー、シフトスピードプロトタイプを取り出していたので動くことができている。

『…ああ。いるとも。』

先ほどはよく気づいてくれたね。』

「あんなあらかさまに、バイラルコアを見せてくれば来ないわけにもいけないからな。」

『おや？重加速状態でも喋れるのか。』

「ああ。相手がロイミュードならばシフトカーを所有していれば重加速状態になっても自由に動けるからな。」

でも、あんたが出てくるとは思ってたけど…ゴールドドライブ…いや蛮野天十郎！

何であんたがここにいる？」

『この姿の場合はゴールドドライブのまま結構。』

この世界には鳴滝という男に連れてこられたからだ…この世界は実に面白い。

グローバルフリーズが起きていないのにドライブシステムが存在し、警察の正式装備にマツハドライバーが参考にされている。

さらにはウルトロンだ。彼は私を作り出したロイミュードに近い存在と言える。

私が支配下に置くにふさわしい体を作り出そうともしている。糸に吊られた人形の

ようにな。』

「あの体は貴様のために作っているわけではないだろうか？

それを勝手に奪おうとしているわけか？」

『私は神に等しい存在だぞ。ウルトロンのような人形ごとき、私が支配したとて…それは人類の為になるといふものだ。』

「あなたの言う人類とは、データ化された人類のことだろうか？

あんたはここで破壊させてもらう。」

K A M E N R I D E

「変身！」

D I ! E N D !

『さつきから私のことを知っているかのような口振りだな。

実に不愉快だ。死ね。』

目の前にいたゴールドドライブとは違って左右の真横から俺を襲いにきたのはロイ

ミュードではなく、ウルترونが作り出した量産品のボディだった。

俺は後ろに下がりながらディエンドライバーから光弾を放って破壊するとゴルドドライブに向けて光弾を放つ。

『その武器はどうやら奪えそうにないようだな。』

この場所に行き来できる能力といい、私がもらっておいてやろう。

光栄に思え！』

こちらの攻撃を避けられゴルドドライブのベルトから触手のような光の帯が放たれるが、バリアーのカードを使用して防ぎ、ブラストのカードを使って反撃するもその手から放たれた電撃で相殺されてしまう。

「ウルترونのボディをすでに支配下に置いているのか？」

「ということは、ウルترونと手を組んでいるわけでは無さそうだ。」

『何をぶつぶつと！』

その力を渡す気になったのか？」

「なわけないだろう。」

K A M E N R I D E D R I V E

K A M E N R I D E M A C H

K A M E N R I D E C H A S E R

『ひとつ走りつきあえよ!』

『追跡!撲滅!いずれもマツハ!仮面ライダーマツハ!』

『…フン』

『こいつらは?』

小癩な!』

「さて頼むぞ。」

召喚したドライブ、マツハ、チェイサーの3人はこちらにうなずいて連携してゴールドドライブに攻撃を仕掛けはじめた。

重加速状態でも動けるのはこの3人の仮面ライダーが最良だが、ゴールドドライブが相手だと時間が経てばそれだけ不利になっていくだろうから速攻でいかなければならない。

ATTACKRIDE CROSSATTACK

ヒッターズ!フルスロットル!スピ、スピ、スピード!

ヒツサーツ！フルスロツトル！マツハ！

ヒツサーツ！フルスロツトル！チエイサー！

三者三様のライダーキックが放たれるが、ゴールドドライブが電撃を周囲に放つことでライダーキックを防ぎ、3人の仮面ライダーが吹き飛ばされる。

FINAL ATTACK RIDE D I D I D I D I E N D

俺はそのライダーキックを囿にすることでデイメンションシユースーツを決める。

反撃もなく、避けられることもなくその爆破により撃破に成功したようだった。

「はっ!?

最初に見たバイラルコアは…逃げられたか。」

重加速状態も解除されたが挑戦状として見せてきたバイラルコアがなくなっていたことで、蛮野のバックアップは残っていることに気がついて思わずうなだれてしまった。

俺はシフトスピードプロトタイプをクラインの壺に戻してソウル市内に急ぐ。

オーロラを抜けてソウル市内の高層ビルの屋上に上り現在の状況を確認すると、ちょうどトラックの荷台が空を飛びはじめるところだった。

「こちら狭間です！浮上したトラックを確保します！」

インカムのマイクのスイッチを入れて言うと、空中のトラックの進路上にオーロラを開く。

しかしロボットのバーニアが別の方向に急に強く吹かされてオーロラを回避されてしまった。

『ちよつと!?どうなってるの!?!』

『ウルトロンのロボットはハザマの能力を正確に把握しているんだろ。』

何度もやれば、中のナターシャが危険だ。』

『だったら、荷物をクインジェットに送るわ！』

ハザマはキャプテンを手伝ってやって！』

「わかりました！」

そう返事をしてからオーロラを開いて、正史通りであれば電車が脱線して暴走するだろうから暴走するだろう先にまわり込んだ。

案の定、電車が終着駅を越えて線路を脱線したのでその道路上にいる人たちをオーロラを動かして飲み込み、別の場所に避難させる。

さらに建物の壁をひとつ破壊しながら突き進んだためにさらにオーロラを展開しようとしたが、ピエトロ・マキシモフらしき高速に動く物体が人々を電車の進路上から助けてだして、電車にまとわりついた赤い光の帯が電車を止めていた。

ヴィジョン誕生、そして作戦決行

俺の展開したオーロラで俺とステイブさん、そしてマキシモフ姉弟がニューヨークのアベンジャーズタワーの一階ロビーに帰ってくると、時差により辺りは暗くなっていた。

俺はワンダ・マキシモフを警戒して一定間隔を空けながら上層に戻るエレベーターに乗り込み、ラボへと入った。

そこではソウル市内でワンダが言っていたようにラボ内ではバナードン博士とスタークさんがクレードルを動かしていた。

「一回しか言わないぞ！」

「ゼロ回でいいよ。」

「中止しろ！自分たちが何をしているのかわかっているのか？」

ステイブさんの声に相変わらずのスタークさんの返しが入るが、それを無視してステイブさんが言葉を伝えた。

「断る。」

「キャプテン。君は？操られていないのか？」

スタークさんはかたくなに断り、バナー博士はマキシモフ姉弟といえるステイブさんを疑っている。

俺も疑われてはたまらないので、ゆつくりと両手を見せてステイブさんたちから距離を取った。

「怒るのは仕方ないけど…」

「怒るだって？」

ハルクに変身しなくても絞め殺してやりたいのは怒り以上の感情だよ。」

ワンダの言葉に唸り声をあげるバナー博士は今にもハルクに変身しそうな勢いになっっている。

そこから言い争いがはじまるが、ピエトロがそのスピードを活かしてクレードルに繋がれた配線を取り払い、話し合いを促した。

しかし、ピエトロの真下にいたバートンさんにより放たれた銃弾で足場のガラスを割られてピエトロは下の階に落ちていく。

「なんだ？ 早すぎて見えなかったか？」

バートンさんの嫌味も聞こえてきた。

焦ったスタークさんがクレードルを操作しようとしたがステイブさんが盾を投げつけて妨害するのには喧嘩じみた戦いになってしまう。

しかし、いきなり現れたソーさんがクレードルの上に乗ると、ステイブさんの制止の声を無視してハンマーから雷撃を放ってクレードルを最大稼働状態にして、クレードルの中の体がクレードルを突き破り、ソーさんを突き放してその上に膝をついた状態で現れる。

深紅の肌に銀色のメタリックなラインが入ったボディと額の金色の宝石が目立ち、興味深く周囲を観察している。

そしてソーさんにつかみかかろうかと飛び付いたがソーさんはそれを投げ飛ばしてラボのガラスを割り、外が見えるガラス前で止まった。

ふと気づくと、上の階に続いている階段から五代さんと一条さんも降りて来て警戒していた。

ステイブさんも戦闘態勢に構えるがソーさんはそれを手で制して止めると、深紅の肌のそれを見つめていた。

深紅の肌のそれ、後の『ヴィジョン』は裸の状態から黒いボディースーツを体に纏うと、ゆっくりと宙に浮きながらフロアの床に降り立つ。

「…すみません。…とても、不思議で。

ありがとう。」

ヴィジョンはソーさんにお礼を言うと、ソーさんの真似をするように深紅のマントを

背中に作り出していた。

「ソー。何故手を貸したんだ？」

「あるヴィジョンを見た。」

大きな渦が希望を飲み込む。そこにこれがあった。」

ソーさんはヴィジョンのマインドストーンを指差して言う。

「マインドストーンだ。6つあるインフィニティストーンの内の一つ。」

全てを破壊する比類なき力を持つ。」

「スペース、マインド、パワー、リアリティ、タイム、ソウル、世界を構成する6つの要素。」

アベンジャーズの結成時にロキの杖と4次元キューブは似通っていても、別のエネルギーを持っているという我々SPIRITSの情報に間違いはなかったようですね。」

「ああ、その通りだ。」

「しかし、どうしてそんな危険な物を？」

「スタークは正しい。我々ではウルトロンに勝てない。」

「バラバラではね。」

「ちよつと待て、J. A. R. V. I. S. の声か？」

J. A. R. V. I. S. は破壊されたはずじゃなかったのか？」

「ああ、J・A・R・V・I・S. のマトリックスを再構築して新しい物を作った。」

「新しい物はもうたくさんだ。」

「私がウルトロンの子供だと?」

「違うのか?」

「私はウルترونではない。」

J・A・R・V・I・S. でもない。私は…

…私です。」

マインドストーンの使用方で揉めそうになるが、ステイブさんがヴィジョンに味方かと問うても、そう単純でもないと言われて言葉遊びをしているわけではないと言いつつ出していた。

「私は命の味方です。」

ウルトロンはその逆、ロボットの味方であり彼にとって命は滅ぼすものなのです。」

「ウルトロンは何故動かないんだ?」

スタークさんの言葉に、産みの親であるあなたを待っていると返されて変顔をして、五代さんが吹き出していった。

「ウルトロンは今どこに?」

「ソコヴィアだ。ナターシャもそこにいる。」

ついでに片腕が金属の男も一緒らしい。

ウルトロンのコピーまみれで抜け出せないそうだ。」

ステイブさんの問いに答えたのはヴィジョンではなくバートンさんだった。

「バツキーもか？」

捕まつてたのか…救出しないと。」

しかし、ちよつと待つて欲しいとバナー博士が言い出していた。

「新しく生まれた君が、我々を裏切らない保証は？ ウルトロンのような怪物だったら？」

「どうします？」

一時の沈黙の後に再びヴィジョンが話しだした。

「…私はウルトロンを破壊したくはない。

彼は特別で唯一無二の存在です。

彼は悩んでいる。…ですがその悩みが地球を滅ぼすのであれば、彼を破壊するべきで

す。

ネットワーク上からも全ての彼の分身も、早急に。

…ですがそれは私一人で成し遂げる事はできません。

私は怪物かもしれない。でも私ではそれがわからない。

あなた方が望んだものでもないかもしれない。」

信じてもらえないかもしれないと言いながら、ソーさんが置いていたはずのハンマーを手にして、それをソーさんに手渡ししていた。

確か、ムジヨルニアは王たる正しい心の持ち主でなければ持つ事すらできないはずなので、ヴィジョンはその条件をクリアしている事になる。

まあ、生まれたばかりで純粋なだけなのかもしれないが、このハンマーを持てるだけでも少なくとも怪物であるとは言えなくなったのは確かなので、誰も文句を言えなかった。

「…行くか。」

よくやった。」

ソーさんはハンマーを受けとると、スタークさんの肩を叩いていた。

ちようどその時、端末のアラームが鳴った。

「俺です。SPIRITSの戦力が整ったはずなので、一度確認に行きます。」

いきなりのアラームに何事かと周りから見られるが、訳を話すとステイブさんから出発の準備をしてくれという号令がかかった。

俺が戻り次第出発するというので、俺はそのままオーロラを開いてSPIRITS本部に入って行く。

そして、本郷さんがいるのはずの総隊長室に入ると本郷さんは立ち上がっていた。

「…本郷さん。SPIRITS内の戦力はどうなりましたか？」

「SPIRITS内の部隊編成は終了して、トレーニングルームと食堂にて待機させている。」

それと、警察内の仮面ライダー及びガードドライバーが配備された者達の一部も協力してくれる事になった。」

「いいんですか？」

不法入国になりますよ。」

「世界が滅びるかどうかの戦いなのだろうか？」

今さらに過ぎんよ。」

それで？ 決戦の場所は判明したのかね？」

「東ヨーロッパの小国、ソコヴィアです。」

恐らくは市街地戦と予想されますので、住民の避難を行いながらになると思われます。」

私が戻り次第、アベンジャーズの皆さんとソコヴィアに出発する予定です。」

それと、五代さんと一条さんも一緒です。」

「…わかった。」

住民の救助は警察の本分だ。」

君が現地に着するまでもう少し猶予がありそうだな。こちらからは住民の救助関係及び避難支援物資の準備もさせておく。

場合によっては現地で君の役割は戦闘ではなく救助を最優先に行ってもらう必要があるかもしれない。現地に到着するまではできるだけ休息にとめて欲しい。」

「…そうですね。」

では、物資は最大限に援助をお願いします。」

「うむ。」

幸い総理には彼が総理になる前から貸しがたんまりあるからな。

話を通してあるし、闇の手の連中から押収した資料から議員達の弱味も握っている。

政府からの反対意見は出んよ。

逆にもしかすると自衛隊の災害派遣もあり得るかもしれない。

君には大いに期待するよ。

…では君は戻りたまえ。

狭間君が現地に到着次第、十分に距離を取った場所にゲートを開いてくれれば、避難所の開設を開始する。」

「わかりました。」

それでは失礼します。」

俺は政府うんぬんは聞かなかつた事にして総隊長室を出ると、そのままオーロラを開いてアベンジャーズタワー内部に入り込んだ。

俺が戻ってもまだ準備は終わっていないなかつたようで、俺は座って待つ事にした。すると、一条さんと五代さんが寄ってきた。

「狭間君、首尾はどうなった？」

「SPIRITS本部の戦力と警察の戦力の一部が部隊編成を終えています。」

恐らく一条さんと五代さんには部隊と合流して一緒に動いてもらう事になりそうです。」

「狭間さん。スタークさんのさっきの顔、見ましたか？」

思わず吹き出しちゃいましたよ。

さっきだって、ウルトロンに一番恨まれていると言われて顔が変になってましたし。」息子の反抗期に対処する父親の気分なんでしょうね。」

俺と五代さんの話にスタークさんがうるさいぞと言って来て、思わず五代さんと一緒になつて吹き出してしまった。

どうやら、暴走したことを気に病んで落ち込んではいないようで安心していると、バートンさんからクインジエットに乗り込むように言われたので出発のことになった。

クインジエットがソコヴィアに到着すると、バナー博士とバートンさんがヒドラの基

地だったという古城にナターシャさんとバーンズさんの救助に回り、マキシモフ姉弟とステイブさん、五代さんと一条さんは住民の避難をはじめていた。

俺はクインジェットで来る時に見つけていたロシアとの国境から数キロメートルの付近にゲートを開いて避難所の開設をお願いし、さらにそのことソコヴィアの市街地とゲートを開いて、避難してくる住民の誘導と隊長達の突入を指示するのであった。

開戦、ソコヴィアの戦い

side 御影暁

今回の大規模作戦は詳しくは聞けなかったけど玄が発案したことらしく、なんでも世界を滅ぼそうとするロボット軍団がいてそれをアベンジャーズが拡散前に破壊のために捜査していたけれど、その中心地がヨーロッパで何の関係もない住民がたくさんいる場所だそうで、そのロボット軍団と戦いながら住民の避難を行わないといけないらしい。

まあ日本で闇の手の連中との戦いと似たようなものだが、唯一言葉が通じないため住民との意思疎通ができないので、SPIRITS内の英語が話せる隊員が必ず一人は振り分けられることになった。

まあ交渉部はいつも通りで、教官殿が別の隊に臨時編入される代わりに日高さんという細川○樹似のおっさんと、富士○汰似の流星とえらく仲が良い見た目ヤンキーの高校教師とかいうやつが臨時編入してきたことぐらいだった。

玄が設置したオーロラから避難所に次々と現地住民らしき人たちが現れているのを横目に、俺達の隊もオーロラをくぐると、行列になった人々の周りから次々にロボット

軍団が現れはじめているところだった。

「よっしゃー！ 皆さん行きましようー！」

「ハイハイ、暁が仕切らない。」

この隊の指揮は私が担当だから。

各自変身してロボットの破壊と住民の避難をするわよ！」

耀子さんに頭を小突かれツツコミを入れられると、俺は笑いながら紫色の剣を背中から引き抜いて地面に突き刺してメカニカルな本を開く。

ジャアクドラゴン

かつて世界を包み込んだ暗闇を生んだのはたった1体の神獣だった…

「変…身！」

ジャアクリード…

闇黒剣月闇！

Get go under conquer than get keen！（月光

！暗黒！斬撃！）ジャアクドラゴン！

月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！

「俺の名は、仮面ライダーカリバー！」

お前達に引導を渡す者だ！

…（へへっ！決まったぜ！）

「…はあ。調子に乗っているとまた狭間さんに怒られそうね。」

「狭間君と同じ年齢に見えないぐらい若々しいなあ青年君は。」

「じゃあ、俺達も行きますか。」

「そうね。」

玄武神話

・かつて四聖獣の一角を担う強靱な鎧の神獣がいた…

昆虫大百科

この薄命の群が舞う幻想の一節…

「変身！」

玄武神話！

一刀両断！ブツた斬れ！

ドゴ！ドゴ！土豪劍激土く！

激土重版！絶対装甲の大剣が北方より大いなる一撃を叩き込む！

狼煙開戦！

FLYING！ SMOG！ STING！ STEAM！

昆虫CHU！大百科！

揺蕩う切っ先！

「仮面ライダーバスター。行くぜ。」

「仮面ライダーサーベラ。参ります。」

俺と同じ系統の仮面ライダーのおっさんは左手を敬礼みたいな動作をして言うし、耀子さんは相変わらず姫騎士感のある佇まいだ。

すると、流星と元ヤンがそれぞれベルトを腰に装置した。

「へへっ！行くぜ流星！」

「ああ！弦太郎。」

THREE！ TWO！ ONE！

Meteor Ready?

「変身!」

「宇宙キター!」

仮面ライダーフォーゼ!まとめてタイマン張らせてもらおうぜ!

「仮面ライダーメテオ。」

お前達の運命(さだめ)は、俺が決める。」

元ヤンは宇宙服っぽい白い仮面ライダーになって、流星も決め台詞を決めていた。
「編入された如月弦太郎は主に住民の救助を最優先にして。」

あなたの仮面ライダーはそういうことが多様にできると聞いているわ。」

「わかったぜ!」

「残りは彼を援護しつつ、敵の排除!」

急なチームアップだけど、連携を重視するように!特に暁!」

「俺っすか!?

り、了解っす。」

「アハハハ!あんた面白いな!

仮面ライダーはみんな俺のダチだからな!

よろしくな!」

「…んだよ。元ヤンみたいななりでコミュカお化けかよ。

玄も変なやつをスカウトしたもんだな。

…まあいい。よろしくな。」

俺達はそれぞれの敵の排除と住民の救助に向かって行くのだった。

side 鳳蓮・ピエール・アルフォンゾ

今回の任務、東ヨーロッパにある小国ソコヴィアで、ウルトロンというロボットの殲滅と住民の避難を行わなければならないということだけけど、ワテクシの担当はSPI RITS隊員の黒影トルーパーに変身できる人員4人を部下にして、住民の避難誘導が主な仕事になったわ。

最初はワテクシの変身したブラーボの姿に驚いて警戒されていたけれど、どこからともなく現れたロボット軍団の姿を見た住民達を守るように戦ったことで、今では言うことを聞いてくれているわ。

ドリアンスカツシュ！

「坊や達！住民達の避難誘導を最優先に行いなさい！」

ロボット軍団は倒せる範囲でかまわないわよ！」

「了解！」

日本語と英語を使い分けながら戦わないといけないのは大変だけど、今のところは大丈夫みたいね。

「教官殿!?危ない！」

ワテクシの死角から攻撃を仕掛けようとしたロボットに気づかなかったことを周りの坊やの声に気づくも、構えが間に合わずに吹き飛ばされるかと思ったその時、そのロボットの中心から別の腕が生え、そのロボットは機能を停止した。

ロボットを二つに裂きながら現れた男性には見覚えがあつて

「：ウィンターソルジャー？」

「その呼び方は好きじゃない。」

今の俺はヒドラとは何の関係もないただのバッキー・バーンズだ。」

「そう。悪かったわね。」

助けてくれて感謝するわ。

今は味方なのかしら？」

「お前達がステイープの味方なら少なくとも敵対はしない。

が、俺を攻撃すればその時点でお前達は敵だ。」

「助けてもらった借りがあるのに、攻撃するほどお馬鹿さんじゃないわよ！

坊や達！この金属の腕の人は味方よ！

彼の邪魔はしないようにしなさい！」

「了解！」

「統率の取れたいい部隊だな。

俺はステイープのところに行かないといけないからそこまでなら協力してやる。」

「あら？日本語もわかるのかしら？」

よろしくお願いするわ。」

ワテクシ達の部隊は強力な助っ人を入れての行動をはじめながら戦いに入っていく。

side 五代雄介

「変身！」

「変身！」

ヘンゼルナツとグレーテル！

剣でいくぜ！ノーノー！銃でGOGO！

BANG BANG！音銃剣錫音！

錫音楽章！甘い魅惑の銃剣がおかしなリズムでビートを斬り刻む！

「へ〜！それが一条さんが変身した姿なんですね。

すごくカッコいいです！」

「ああ。ありがとう。

狭間君から、この姿はスラッシュという名前の仮面ライダーだと教わった。

この本型のアイテムを使えば、クウガのように形態変化も可能だ。

基本的には剣と銃を使い分けながら戦う事になるから五代はいつものように戦って
くれてかまわない。

俺がお前を援護しつつ戦うからな。」

「はい！よろしく願います。」

ステイブさんの作戦で、まずはスタークさん、アイアンマンにウルトロンを注目させて新しく仲間になった体を得たJ・A・R・V・I・S、ヴィジョンがウルトロンをネットワーク上から遮断する。

そしてアベンジャーズとSPIRITSで、ロボット軍団と戦うつもりだった。

なので時間稼ぎの間にSPIRITSとアベンジャーズの残りのメンバーがソコヴィアの住民達の避難を優先させるということだったけれど、どうやらウルトロンも時

間稼ぎをしていたらしくて、次々にロボット軍団が現れはじめていた。

そして一条さんと一緒にロボットと戦っていると、突然地面が揺れ出して、徐々に森を含んだ市街地の一部と共に地面が宙に浮きはじめていた。

「五代！ロボットとの戦闘は後だ。まずは住民達の避難を優先させるぞ！」

「わかりました！」

超変身！」

俺は青の金のクウガになって、落ち行く住民の人達に向かってジャンプして救助し、一条さんは落ちかけていた車を引き上げて、車内の人を助けてくれた。

どんどんと離れて行く地面から落ちて行く人達を助けて行くと、クウガのジャンプでも届くかわからないまでに浮上して行くので、一条さんを抱えて慌てて浮上する地面に向かってジャンプして行く。

なんとか、地面に飛び乗るとまだ避難中の人々がいて、SPIRITSの人達がロボット軍団と戦っていたので俺達もそこに加わって戦いだした。

『見えるか？』

この美しさが…自然の摂理だ。

登りきれば後は落ちるのみ。

アベンジャーズよ、これは隕石だ。私の剣だ。

お前達の過ちの重さで地球は砕ける。

私をネットワークから切り離しても、私の子ども達を破壊してもそれは無意味だ。

この世界が滅びた時残るのは…金属だけだ。』

ウルトロンの演説が周囲に響きながら、地面が宙に浮き上がったことで、狭間さんが呼び出したオーロラゲートがなくなってしまうので、なんとかしなければいけないと思いつつ戦っているとステイブさんからの通信がインカムを通して聞こえる。

『ハザマのゲートはこっちに開けないのか!?!』

『残った市街地の崩れた場所の救助に時間がかかっています!』

そちらはなんとか時間を稼いでください!』

狭間さんは最近になってオーロラゲートのいろんな使い方ができるようになったらしいんだけど、それでも住民達の数が多いので苦戦しているみたいだ。

すると、多数のロボットが空を飛んで来て空からビームや突撃攻撃を仕掛けてきた。

俺や、一条さんなんかは対処していたけど、何人かの隊員たちは住民を庇って飛ばされてた。

『まず街を安全に下ろす手立てを考えろ。』

スターク以外の全員は奴らと戦え。

やられたらやりかえせ。

殺されても…戦い続けろ！」

ステイブさんの声にSPIRITSの人達の英語が理解できる人から声が上がリ、それが隊員たちに伝わってその声が広がっていった。

「一条さん。」

「ああ。行こうか五代。」

変身して見えないけれど、俺と一条さんの顔は笑っていると見えるような声色だった。

作戦中と可能性の光

side 朔田流星

MARS READY ?

OK! MARS!

他のSPIRITSの隊員たちから伝わってきたステイブさんの台詞に心を熱くさせながら、敵のウルترونとかいうロボット軍団に火星の形状をしたエネルギー弾を放ち、数体のロボットを破壊する。

すると空を飛んで来ていたロボットを刺々しい黄緑色のエネルギー弾が射ち落とすところが見えた。

「この技は!?

教官殿!」

近くで戦っていた御影さん、仮面ライダーカリーバーが声を上げると、近くに見えてい

た黒影トルーパーの隊員たちに混じって仮面ライダーブローボ、風蓮さんが戦っているところだった。

しかもどうやらSPIRITSの隊員ではない人物が混じっているように見て取れた。

「…あれって、もしかして。」

ワシントンD.C.で戦ったウインターソルジャー、バッキー・バーンズさんだろう人物が共闘しているようで、風蓮さんのサポートを受けながら次々にロボットの破壊をしながら俺達に近づいてきた。

「ちよつと待ちなさい。風蓮！」

もしかしてウインターソルジャーが味方になつているの!?!」

「マドモアゼル?」

その呼び方はお気に召さないみたいよ。

普通に呼んであげてちょうだいな。まあ…キャプテンアメリカに合流するまでの間だけみたいよ。」

「…わかったわ。」

こつちも狭間さんがゲートを開かないことには住民の避難もままならないから、共闘には感謝するわ。」

風蓮さんと耀子さんの会話を聞きながら俺はバーンズさんに話かけていた。

「バーンズさん。あなたは覚えていないと思いますけど、俺はあなたがヒドラに洗脳されていた時に会ったことがあります。」

それにそれだけじゃなく、戦闘であなたを抑えていたこともありました。」

「…あの時の俺と戦ってステイープ以外に無事なやつがいるとはな。」

しかも成人したての若造ぐらいの声色の奴が相手なんてな…

「お前、名前は？」

「リュウセイ・サクタです。」

「この姿の場合は仮面ライダーメテオと言います。」

「…そうか。」

「お前も仮面ライダーとかいう奴らの一人か。」

俺がバーンズさんと話していると風蓮さんが近づいて来ていた。

「坊や！ムツシュバーンズはワテクシ達がキャプテンアメリカのところまで護衛するから、あなたは引き続きいてロボットの排除をしてほしいわ。」

「わかりました。ですけどそちらも気をつけてくださいよ。」

「…言うようになったわね。」

もちろん、ワテクシ達は自分たちの身の安全ぐらいは自分たちで守るから心配はナッ

シングよ。」

俺達は鳳蓮さん達から離れながら、戦闘を続けた。

side 沢木哲也

あのニューヨークの戦いからこつち、SPIRITSの隊員としていろんな人と交流しながらアギトではなく、蜂さんの力をかりて仮面ライダーとして戦い続けている毎日の中、総隊長の本郷さんからの指令で戦力を集結することになった。

狭間さんが絡んでいるみたいで、相変わらず大変なことになっているみたいだったの。今度見かけたら声をかけようと思っていたら、俺のチームアップとして顔馴染みで人見知り気味の紅渡君に他の研究所から出向でSPIRITSで戦っている橘さんと劍崎さんと組むことになった。

橘さんと劍崎さんとはよく会話するので、ほっと一息していたけれど、渡君はどこか居心地悪そうにしていたのでそれとなく構いながら今回の作戦内容を把握して現地に到着すると、それぞれが仮面ライダーに変身して市街地の住民達を避難させようとしていたのだけど、路地裏で揺れる地面に戸惑いながらロボット達と戦っていた。

「いや〜まさか、地面が浮くとは思っていませんでしたね。」

「先ほどの声明だと、どこかのタイミングで上昇をストップさせて地表に落とすように言っていたな。」

「だとすればあまり猶予はないということになる。」

「住民の避難に時間制限があるっていうことですよね!？」

…ウエイ!

こどもわらわらとロボットが現れる中でよくそんな沢木さんも橘さんも余裕そうにしてられますね!？」

劍崎さんが変身している仮面ライダーブレイドが、飛んで来たロボットを持っている剣で叩き落とすと、こちらを向いて言ってくる。

「無理をするなよ劍崎。」

「今のお前はアンデッドじゃないんだからな。」

「わかってますよ!」

橘さんこそ、そろそろ現役を引退しようとしていることを深沢さんから聞いてるんですから、無理しないでください!」

すると、白い聖職者を思わせる姿の仮面ライダー

イクサに変身している渡君の方から、アーチェリーのような弓を持っている人、確かバートンさんがワインレッド色の服を着た女性を伴って近くの建物の中に入って行く

のが見えた。

「…沢木さん！」

それを渡君も見ていて、俺に彼らの援護をした方がいいんじゃないかという風に聞いて来たので、

急いで建物の扉の前に行くと言った。話し声が聞こえてきた。

『…君が何をしたら関係ない。』

外に出るなら戦え…とことんな。

ここに残ってもいい、後で誰かに迎えに来させる。

だが一歩外に出たら、君はアベンジャーズだ。

…話は終わりだ。』

すると、弓を構えたバートンさんが扉を開け放つて矢をロボットに放つと、すぐ近くにいた俺たちに気づいた。

「お前達は確か、ニューヨークの時にいたな。」

テツヤとワタルだったな。」

「お久しぶりです。」

それと、先ほどの女性はいったい？」

渡君がそう聞くと、バートンさんは開け放たれた扉を振り向いて言う。

「能力はあるが、戦いに関しては素人だ。

もしもここから出てきて戦いに参加するようだったら、援護してやってくれ。」

俺と渡君は顔を向けあうと、その言葉にうなずいた。

すると、この辺りのロボット達は片付けたはずなのに、まだまだわらわらと現れはじめて、劍崎さんと橘さんが周囲を援護するような位置取りをしながら戦いはじめた。

不意に閉じられた扉が開く音がしたので振り返ると、先ほどの女性がそれぞれの手のひらに赤い光を纏いながら、まるで操り人形かのように次々とロボット達を破壊しだした。

「…援護は必要そうに見えませんか?…」

思わず口から出たのか、渡君がそう呟くのが聞こえるが、俺からすれば、その力は超能力を高出力で無理矢理操っているように見えたので、援護ができるようにその女性の近くに寄りながら戦う。

ロボット達を倒し終わると、その女性がふらついたので、慌ててその女性を支える

「大丈夫ですか!?!」

「…暖かい。…大きな、光の力?」

俺の問いに対して、よくわからない答えがかえってきて困惑してしまふ。

「おい。そいつは人の記憶を読むぞ。」

「バートンさんの忠告に俺のアンノウンとの戦いとアギトの記憶を読んだんだろうということがわかった。」

「俺はもう、光の力を持っていないんですよ。」

「アギトに変身できないことを告げると、その女性は俺の胸の中央辺りに手を置くと……いいえ。私には感じるわ。」

「あなたの中にはその力がある……あなたが気づいていないだけ。」

「……え？……それって、いったい……どういう？」

すると、何か素早いものが駆け抜けたかと思うと、いつの間にかスポーツウエアの男性が先ほどの女性を抱えて立っていた。

「速すぎて見えなかったか？」

「それといつまでも抱えてんなよ。」

「先に行くぜ。おっさん達！」

クロックアップ並みのスピードでその男性は動けるようで、その女性を抱えたままいなくなってしまった。

「……はあ。」

「キャプテン。こっちは片付けた。」

『こっちはまだまだたくさんいるぞ！』

手伝ってくれ!」

バートンさんはため息をつくど、キャプテンアメリカに連絡を入れ、その要請にすぐに行くど連絡を入れていた。

「バートンさん。先ほどの男性はいつたい?」

「さっきのやつのだ。

もし見かけたら調子に乗るなど言っておいてくれ。」

「…ハハハ。」

それよりも、俺達もそろそろ合流した方がいいと思つていたところなんです。

「ご一緒してもいいですか?」

「好きにしろ。」

どこかふてくされた様子のだバートンさんについて行きながら、俺達も合流を目指して動きはじめた。

side 御影暁

「一応ロボット達は片付いたみたいだけれど。

どう避難したものかしら。」

教官殿の眩きに俺達は、思わず後ろのビルを振り返つた。

一応、第2陣のロボット達に備えて避難させる人々をビル内にとどめているが、その人達をこの浮遊大陸から避難させる方法がないことに焦りが募っていた。

玄の能力による避難が最有力だろうけれど、さすがの玄でもこの高度にある大陸までゲートを開くのは無理があるように思えた。

ちらりと視線をキャプテンアメリカの方へ向けると、片腕が金属でできた男と肩を叩きあつていて、その近くにいた美人の女の人のため息をついているところが見えた。

「ロジャーズさん！、ロマノフさん。

お久しぶりです！」

「その声はリュウセイか？ そういえば変身した姿はそんな姿だったな。」

「あら？ ピエールと、ヨウコもいるのね。」

あとは、新顔かしら？」

やけに親しげに朔田のやつが話しかけていたのを見て、そういえばあいつの初任務がアメリカだったことを思い出した。

その経由で確か、キャプテンアメリカと共闘したと言われていたので、その時にあそこまで親しくなっていたようなのが少しうらやましくなった。

「久しぶりね。」

紹介するわ。同じSPIRITSのメンバーで、御影暁と、如月弦太朗よ。」

「俺の名前は御影暁です。」

この姿は仮面ライダーカリバー。

どうもよろしく。」

「俺はすべてのヒーローとも友達になる男、如月弦太郎！

またの名を仮面ライダーフォーゼ！

だからあんたらも今から俺のダチだ。よろしくな！」

俺は片言の英語なのに対して、如月は流暢な英語をしゃべっていたようだったのにめちやくちや驚いてしまっていた。

警察組参戦

『随分と勢いのあるニューフェイスだな。』

「スターク。何か良い案はあるか？」

『たいした案じゃないが、この浮遊大陸を木っ端微塵にするつてのは？』

君達が地面に落ちる前に、君達だけでも避難しろよ。』

「それ以外の解決法はないのか？」

「ハザマはどうしてる？」

『崩落地帯の救助完了までもう少しです！』

救助が終わり次第、直接向かいますのでもう少し待ってください！』

「時間は刻一刻と最悪に向かっているわ。」

「決断しないと私達も危ないわよ。」

「犠牲者は出さない。」

「スターク！あとどれくらい猶予があるんだ？」

『現在高度5500メートルを通過しました。』

高度限界地点まで予測では57分42秒で到達します。』

『ありがとうF. R. I. D. A. Y.。』

デス・ゾーンまでそれほど時間もないな。

例え今すぐにハザマのゲートを開けたとしてもギリギリ間に合うかどうかってところかもな。』

インカムから聞こえてくる会話を翻訳してもらおうと、それほど猶予がないことがわかった。

「何か手はないのか…」

『相当困っているようだな。』

「…フューリー?」

インカムから聞きなれない声が聞こえたかと思うと、ロマノフと呼ばれていた美人が呟いていた。

すると、パラパラと端が崩れ落ちる崖の向こうから巨大な戦艦が姿が現すのが見えた。

「…あれは、トリスケリオンで全機破壊したはずの!?!」

朔田のやつが取り乱したように声を上げると、それに答えるように

『どうだみんな？ガラクタをかき集めて一から作ったんだ。』

薄汚れているが、なかなか使えるぞ。』

「フューリー…なんて野郎だ。」

『フン。口が悪いなキャプテン。』

救命挺を出すから早急に市民を避難させろ。』

その声が聞こえながら、戦艦の側部が開いてジェットを噴射させながら、長方形のメカが次々に発進して崖に寄せはじめた。

「…これが、S・H・I・E・L・D。」

「…今はアベンジャーズだけだね。みんないい？」

SPIRITSも協力して市民を救命挺に誘導するわよ！」

「了解!!」

俺が思わず口から出た言葉に耀子さんから声がかかり、それぞれが市民をビルから誘導するように動きはじめた。

「落ち着いて！」

「転ばないように！」

俺も必死に片言の英語をしゃべりながら、市民を救命挺に送り出していると、ロボットの第二陣が戦艦の周りに取り付こうとしたり、俺達を邪魔しようと空からまるで口

ケットのように現れはじめた。

戦艦の周囲では、黒いアイアンマンと、赤いアイアンマンがロボット達を撃ち落とすところが見える。

「弦太郎！頼む！」

「おっしやあ！」

r o c k e t o n

朔田の声に呼応するかのように、白い宇宙服のような姿の仮面ライダーフォーゼがベルトのスイッチを操作すると右腕にオレンジ色のロケットが装備されて空に飛んで行った。

「…なんだよあいつ飛べるのか。」

俺はその姿を目で追うと、足にミサイルランチャーや、ガトリング砲がいつの間にか装備されて次々に空を飛ぶロボット達を撃ち落としていた。

ふと周囲を見渡すと、耀子さんは蝶の羽を背中から生やして戦っていたり、教官殿は巨大なスイカを出現させて空中戦をはじめていたりしている。

「くそ。俺も負けてられるかってんだ。」

俺は仲間達の戦いを見ながら俺は市民の誘導を優先していった。

side 五代雄介

『閃いた！熱密閉フィールドを作ろう。』

僕が下からコアに圧力を加える！』

インカムからスタークさんによる浮遊大陸の落下阻止の方法が聞こえてくる。

俺は一条さんと一緒に浮遊大陸の中央である教会跡に戦いながらたどり着くとソーさんとヴィジョンがウルترونを投げ飛ばしたのが見えた。

「ソーさん！」

「ユウスケか。」

ウルترونが言うには、奴らがこの装置に触れると大陸が落下するらしい。

なんとしても死守しなくては。」

「わかりました。一条さん！」

「わかった。」

SPIRITSのメンバー達に連絡。

戦えるメンバーは早急、中央教会跡に集結を要請！

教会跡にある装置に敵ロボットの接触で大陸落下の危険性有り！

応援を頼む！」

『了解!!』』

一条さんの簡潔な説明で、インカムから複数の返答が聞こえてきた。

すると、すぐに数人のメンバー達が姿を現しはじめた。

沢木さんに、渡君、剣崎さんに橘さんの四人に、飛んで来た弦太朗君に少し遅れて日高さんが来て、凰蓮さんや黒影トルーパーの人たちを除く交渉部の人たちも集結して、遂にはハルクになったバナー博士に、スタークさんやステイブさん、それに見慣れない片腕が金属の人もいて、それぞれが現れるロボット達を倒していく。

そしてその場が一段落すると、ナターシャさんがロボット達を車で引き倒しながら姿を見せてきた。

『何だ。ロマノフ、寄り道でもしてたのか?』

「こっちは空飛べないのよ。それで?」

ロマノフさんがスタークさんから事情を聞いていると、教会跡の近くにウルトロンが浮遊して現れてこちらの様子を伺っているようだった。

「それがお前の全力か!?!」

ソーさんの挑発に答えるようにか、ウルトロンは空中で片腕を無造作に上げると、その背後にどこからともなくわらわらと今までにないぐらい大量のロボット軍団が姿を現した。

「…言わなきやいいのに。」

「…ですぬ。」

ステイブさんの眩きに、俺も同調するように言うと、なんとも言えない表情のソーさんがこちらに振り返ってきた。

『これが、私の全力だ。』

願つてもない戦いだ。お前達全員対、私全員。

圧倒的な数の私に、その数でどうやって止めると?』

「その答えを求めるには、これからプラスされる戦力を加味したほうがいいでしょうね。」

ウルトロンの問いに答えたのは、俺達の誰かではなく、ウルトロンの目の前にちよつと変わったゴウラムから降り立ってきた仮面ライダーディエンド、狭間さんだった。

「ハザマ、やつと来たのか。」

「遅れて申し訳ありません。」

ですが、なんとか間に合ったようですぬ。」

ステイブさんの言葉に狭間さんが答えると、狭間さんは自身の目の前、ウルトロンの間に広範囲のゲートを開くと、等間隔で並んで立っている数人の人物が現れゲートが消えていった。

その人たちはスーツだったり、トレンチコートだったりライダーズスーツだったりの服装で統一感は無かったけれど、何度も見覚えのある人たちで心強い援軍だった。

side 狭間玄乃

なんとか間に合った。

その一言に尽きる。決してこのタイミングを狙って来たのではなく、地表の市民達をゲートを移動させながら救助させ、それを終えて警察組に事情を説明してすぐさまクワガを召喚し、ゴウラムにファイナルフォームライドさせて浮遊した地表を目指して来ていた。

その途中で一条さんからの要請が聞こえたために、全速力で向かって到着したのが、あのタイミングだったのだ。

本当にギリギリだったので内心拳動不審気味だったが、なんとか体制を整えながら事前に説明した警察組を呼び出したのである。

俺側から見て右側から、新型のガードドライバを装着しているG3ユニットの氷川誠。

「津上さ……いえ、沢木さんが見ている前でこのセリフを言うのは感慨深いですね。」

…変身！」

シグナルバイク！ライダー！G3X！

ガードチェイサーの形をしたシグナルバイクを装填し、その姿にかつては手動でそれぞれ装着していたライダースーツとG3Xのアーマーが装着されていき、ヘルメットの装着具合を確かめるように手を動かすとその場で構える。

ペットボトルを取り出して足元に水溜まりを作り、片手にデツキケースを持っていく須藤雅史。

そのデツキケースを水溜まりに蟹の紋章をかざすと、鏡面からVバックルが装着された。

「変身！」

その声を発しながら、左手を下げて右手を突き出し、Vバックルにカードデツキを装填すると、変身後の姿が体にオーバーラップしてその姿を仮面ライダーシザースへと変える。

目の前に大剣、エンジンブレードを突き刺してアクセルドライバーを装着し、アクセルメモリを取り出す照井竜。

ACCEL!

「変…身！」

ACCEL!

「さあ、振り切るぜ！」

仮面ライダーアクセルに変身してエンジンブレードを引き抜いて構え、決めセリフを言い放つ。

中央に陣取るのはスーツ姿の加賀美新と、作務衣姿の天道総司だ。

その腰には銀色のベルトが巻かれていて、その手にはそれぞれのゼクターが握られている。

「行くぞ天道！」

「ふん。自らが人間よりも優れた存在だと錯覚する機械人形か…おばあちゃんは言っていた…」

「自分に溺れる者はいずれ闇に落ちる」と。

他人を見下すだけの存在に未来はない。変身。」

「変身！」

H E N S I N

H E N S I N

「キャストオフ！」

C H A N G E B E E T L E

C H A N G E S T A G B E E T L E

天に指を指す赤いカブトムシと、格闘技のような構えを取る青いクワガタムシがモチーフの仮面ライダーカブトと、仮面ライダーガタックに変身を遂げた。

『進ノ介。狭間氏の情報によれば、蛮野天十郎がこの世界に現れたという報告もある。

油断なく行こう！』

「ああ。

最初っからフルスロットルだ。

ベルトさん。行くぞ！」

『OK！START YOUR ENGINE！』

ドライブドライバーに搭載されているクリーム・スタインベルトの意識と会話するのは

泊進ノ介。

ドライブドライバーのアドバンスドイグニッションを捻ると、軽快な待機音が鳴りだして左手首に取り付けられたシフトブレスに赤いシフトカー、タイプスピードをレバーモードに変形させて装填し操作する。

「変身！」

DRIVE!TYPE SPEED!

グローブをはめ直すようなしぐさの後にも走り出せるように中腰になつて言う。

「ひとつ走りつきあえよ！」

まるで特殊部隊の隊員かのような迷彩柄の服装に、ポケットがたくさんついたチョッキに指貫グローブをつけているのは後藤慎太郎。

彼は静かにその腰にベルトを巻きつけると、片手首に取り付けられたセルメダルを取り出す。

「変身！」

バーストドライバー上部のバースロットにセルメダルを装填してハンドルレバー、グリップアクセラレーターを捻るとその姿を仮面ライダーバースへと変身して携行武器

であるバースバスターを構えた。

最後に警察から新設された猛士に出向という形で修行した後に変身能力を身に付け、つい最近ようやく鬼名を送られたトドロキ……いや、戸田山登巳蔵だ。

音撃弦 烈雷を地面に突き刺して、カラクリ錠前をモチーフとした変身鬼弦 音錠を操作してその身に雷を落とすと、その姿を徐々に変化させていきその身を鬼である轟鬼に変貌させて烈雷を引き抜いた。

「皆さん。後方の味方が陣取る装置に敵ロボットの一体でも触れるとこの浮遊大陸は地表に落下することになります。

一体も残らず、殲滅をお願いします！」

俺は目の前の彼らに声をかけ、そしてハルクの雄叫びと共にウルترون軍団との最終決戦が始まった。

浮遊大陸の終わり

「皆さん！装置を囲むように円陣になって下さい！」

俺がとっさにそう言うと、ウルトロンと対峙するように新しく参戦した警察組が回り込んできていたロボット達に対処するために、教会跡に元々いたライダー達が外に回り込み、教会跡内部にアベンジャーズの面々が陣取って戦闘になった。

しかし持ち場は移動しながら連携しているようで、いつの間にかごちゃ混ぜになりながら不思議と連携がとれているようだった。

俺のすぐ近くでは氷川誠のG3Xが、どこから取り出したのかガトリング砲のGX-05ケルベロスを取り出して沢木さんのザビーと共闘しているし、少し視線をずらせば仮面ライダーバスターの日高さんと、鬼である戸田山さんが共闘している姿が見える。

日高さんは鬼として活動する為の鍛練で無茶をしたために鬼になることが危ぶまれたことで、俺に力を求めて土豪剣激土に選ばれることになったからこの世界では響鬼になることがなかった。

けれど、戸田山さんはそんな日高さんから自分の体験談を元に無理なくトレーニング

を積んだために、鬼として活動できるようになった。

因みに、戸田山さんだけでなく警察機関は、日本各地に猛士の支部を設立して鬼の数を少しずつ増やしている最中であり、ある種の自然災害に等しい魔化魍の発生を最小限に留めようとしている最中である。

この世界でも、魔化魍はごくわずかながらその姿が目撃されているらしく、親としての童子や姫は存在しないようだが妖怪としての伝承が残る地方では行方不明者の一部が魔化魍によるものだと言われているので、すでにウブメやバケガニなんかとの交戦も報告を受けている。

そんな日高さんは、SPIRITS内では時折寂しそうな姿を見かけることもあったために、俺の方から日高さんを指導役として時折、猛士に顔を出すように指示している。この世界の鬼達には先輩や教官、師匠とか呼ばれているところを見かけているので、このウルترونとの戦いでも連携がうまくとれているようで安心した。

時折視界に光の線が走り、その道中のロボット達が次々に破壊されているのは、カブト、ガタツク、ドライブ、そしてピエトロ・マキシモフだろう。

俺はディエンドとしての基本性能で高速移動ができるのだが、まだうまく使いこなせないために高速戦闘は今では彼らに任せるしかないようだ。

仮面ライダー達とアベンジャーズの戦力であれだけいたロボット達もついには数を

ずいぶん減らしているのがわかるので、しびれを切らしたのかウルترونが装置の包囲網を突破しようとする、ヴィジョンと揉み合いになりながらも、教会跡の外に額の石からビームを放ちながら追いやっていた。

ブレスト・キャノン

セル・バースト

BULLET

FIRE

burning shoot

ヘンゼルナッツとグレーテル！イエーイ！

錫音読撃！イエーイ！

それに同調するようにソーさんのムジヨルニアから雷撃と、スタークさんの両掌からのビームが発射され、後藤さんの仮面ライダーバースがブレストキャノンを、橘さんの仮面ライダーギャレンがコンボショットを、そして一条さんの仮面ライダースラッシュ

の虹色のビーム、ビート・ロリポツパーが放たれ、たちまちウルトロンの装甲がぼろぼろになり、立つのもやつとの状態になってしまった。

それを見たのか他のロボット達も攻撃の手が止まり、教会跡から距離を置きはじめてしまう。

『全員相手は失敗だったか…』

その続きを聞くこともなく、ウルトロンはハルクに吹き飛ばされてしまい、それを見たロボット達の残党が逃げ出そうとするも、

「逃がしはしない。」

o n e t w o t h r e e

「ライダーキック！」

R i d e r K i c k

ヒツサーツ！フルスロットル！スピ、スピ、スピード！

A C C E L !

M A X I M U M D R I V E

「絶望がお前達のゴールだ。」

カプト、ガタック、ドライブ、アクセルのそれぞれが必殺技を放ち、その大半を破壊してしまおう。

運良く残ったロボット達は飛んで逃げようとするも、ウォーマシンとヴィジョンによつて破壊し尽くされてしまった。

「脱出するぞ。空気が薄くなってきた。」

逃げ遅れた者達を探して救命艇に乗せながら、みんなも乗艦してくれ。

ハザマは地上とのゲートを開けるか？」

「可能です。最低限の装置の守りも必要でしょうから自分はこの場に残って先ほど戦闘を行った広場にゲートを開くことにしますよ。」

ステイブさんの言葉に答えると、数人の人物から自分達も残るように言ってきたが、逃げ遅れた人達の搜索を優先するように言う。

「ハザマの言う通りだ。この場にゲートがあるのならば、自分達の避難場所の確保にもつながる。」

スターク！先ほど言っていた浮遊大陸の対処方法にはどれくらいかかる？」

『F. R. I. D. A. Y. の計算だとパワーが足りない。』

ソーの助けがあれば、おそらく7〜8分ぐらいで準備できるようになるだろう。』

「わかった。手を貸そう。」

「…よし、5分で避難を終わらせるぞ。」

「それと、ウルトロンの残ったロボット達もゲートをくぐって逃げようとするかもしれない。」

ゲートの守りに数人：SPIRITS交渉部がいいか。

待機をお願いします。」

ステイブさんの同意及び、スタークさんの作戦と、俺の言葉にそれぞれが動き出すと、俺もゲートを目の前に開き、デイエンドライバーでさっそく近寄ってきたロボットを撃ち抜き、警戒を続けた。

side 御影暁

「まだこんなに残っていたのかよ!？」

先ほどの決戦で大量のロボットを倒したけれども、まだまだ次々にロボットが現れて、玄が展開したゲートをくぐろうとしたり装置に向かおうとしていたために、俺たちはそれぞれの武器を手にしてロボット達の破壊を続ける。

「愚痴言わない!」

わずかな残り時間を死守するのよ！」

耀子さんの叫ぶような言葉を聞きながら戦っていると、確かアベンジャーズが乗っていたはずの飛行機が飛び上がり、地面に向けて機関銃を放ちはじめていた。

そこに緑色のハルクとか言う巨人のおっさんが大ジャンプでその飛行機に乗り込むところが見えたかと思うと、俺たちの近くに止まっていたバスに向かってロボットが落とされてきた。

「念のため見て来ます！」

「暁!? 待ちなさい！」

俺はその時、直感にも近い感覚を感じて耀子さんの制止に耳を貸さずにそのバスに向かって行く。

半ば中央から断裂したような状態のバスの中央には先ほどのウルトロンとか言うロボットが横たわっていて、ぼろぼろの見た目で、なおかつそれでもその場から動こうとしていた。

「こいつ! 頑丈過ぎだろ!?!」

『仮面ライダーか…アベンジャーズばかりを気にしてその戦力を計算に入れなかったことが私の敗因か。』

「知るかよ。お前からロボットが一体でも残っていたら人類の危機なんだろう？」

確実に破壊してやるよ！」

必殺リード！

必殺リード！

必殺リード！ジャアクドラゴン！

月闇必殺撃！習得三閃！

なんとなくこうした方がいいように感じた動きで立ち上がったこいつを中央に三閃が重なるように斬りつけてバックステップでその場から離れると、爆発して四散していった。

「…さすがに、倒しただろ。」

俺は剣を肩に担ぐように構えてため息をつくとき、突然地面がぐらぐらと揺れはじめた。

「うわ!?! な、なんだ!?!」

『暁！あんたもさっさと避難しなさい！もう私達はゲートをくぐったわよ！』

「そういう事だ。俺達も避難するぞ。」

「玄!?! 装置の守りはいいのかよ。」

「そっちはソーさんに任せた。さっさとゲートをくぐってくれ。

後は俺たちが最後だ。」

なんとかゲートを通るとそこは瓦礫があちこちに転がった廢墟同然の都市だった。

「おい！避難所じゃないのかよ!?!」

「浮遊大陸は爆破してもその破片はこの場所にも降り注ぐ事になる。

復興の事を考えれば、少しでも湖に破片を送った方がいいからな。」

すぐ近くに玄が現れると、突然空から轟音聞こえてそちらを向くと、空から岩の塊が雨霰と降り注がれてきた。

玄は空に向かって手を向けると広範囲に銀色のゲートが展開されて、次々に降り注ぐ瓦礫が吸い込まれていく。

ふと、この光景に見覚えがあるような気がした。

車の残骸、建物の瓦礫、潰れた草花、そして、散乱するマネキンや泥だらけの人形。

そしてこの先に見えたのは、空に浮かぶ大陸が爆破され、その破片が天から降り注ぐ光景に手を伸ばす友人の背中。

どこで見たのかはわからないが、もしかするとこれをデジャブと呼ぶのだろうかと思

いながらその光景を見つめていた。

side 戦極凌馬

その人物が見ている画面には、日本のどこか、白髪混じりの壮年の男性が椅子に座りながら幸せそうに小さな子供たちと戯れている光景だった。

「…認められない。」

この世界の私は野望を諦め、望みを放棄したというのか。

千パーセント、認められない！」

「これで、我々に協力してもらえらるだろうか？

Z A I A エンタープライズジャパン C E O、天津 垓（あまつ がい）氏。」

「…いいだろう。戦極凌馬といったか、貴様の計画とやらに協力してやろう。」

鳴滝とかいうやつにこの世界につれてこられた時はどうしようかと思っただが、この世界の飛電インテリジェンスも我が物として、我が野望の礎にしてやろう。」

「もちろん。君たちも協力してくれるんだろう？」

戦極凌馬が振り返った先には、黒塗りのミニカーのような物が2つ置かれていた。

『もちろんこのままでは済まさない。』

新しい体を作り直し、クリムを、ライダーどもを……そしてデイエンドを必ず倒してくれる。

：貴様の分体を支配した時にそのデータをバイラルコアに閉じ込めておいて正解だったなあ。

ウルترون。』

『ネットワークから切り離された私だけが生き残ったわけか。

いいだろう。今度はアベンジャーズだけではなく、貴様達とSPIRITSを計算内に入れようという。』

そして戦極凌馬は満足そうに周りを見渡すと、その部屋にいる者達の中には言葉を発することもなかった者達もいたのであった。

次の戦いに向けて

ニューヨーク州北部 アベンジャーズ基地

side 狭間玄乃

ソコヴィアでウルトロンとの戦いが終わり、数日が経った。

我々SPIRITSは正式に日本の災害救援隊という枠組みで避難民の援助を行う為に在中し、スタークさんの支援金もあつて着々とSPIRITSの人員から自衛隊、各国の復興支援員と入れ替えをしながら復興が進められることとなっている。

警察機関の援軍は真つ先にゲートで帰国してしまつたけれど、あの戦力がなければ今回の救助もままならなかつただろうから感謝している。

ある程度の人員変更の後に俺も一度帰国して、五代さんと一緒に再び新しく建設されたアベンジャーズ基地に赴く事になった。

沢山のスタッフ達が忙しそうに移動している中をお上りさんのようにキョロキョロしている、果物が入ったバスケットを持った五代さんを背に、俺は手に持ったタブレットを見ながら医務室へと足を進めた。

そこに設置された複数のベッドには、リクライニングで上半身を起こした二人の男性が横になっていた。

「沢木さん。」

「あ、狭間さん。五代さんも。」

「お見舞いありがとうございます。」

その内の一人は沢木さんで、その近くには片足をギプスで吊られたピエトロ・マキシモフが面白くなさそうにそこにいた。

原作ではウルترونが奪ったクインジェットのバルカンにより絶命するはずのピエトロ・マキシモフは、この世界でも子供を庇ったバートンさんを助けようとしたそうだが、それよりわずかに早いタイミングでクロックアップを使用した沢木さんの仮面ライダーザビーが介入して助け、結果的に子供とバートンさんは無事に、ピエトロ・マキシモフは片足を撃ち抜かれただけですんだのだ。

その代わり、ザビーのボディにバルカンの弾丸を複数浴びてしまった沢木さんは、衝撃でそのままその場で気絶してしまい、ヘリキャリアの救命艇にそのまま一緒に乗せられてピエトロ・マキシモフと一緒にこの施設に入院しているのである。

五代さんが果物が入ったバスケットを二人のベッドに間に置くと何も言わずにピエトロはそこからバナナを房ごと取り出して食べはじめた。

「あ、あなたも、ありがとうぐらい言えないんですか?」

「俺はこつちに来てからテツヤに礼はしたが、あんたらには借りがあるだけだとしか考えちやいないぜ。」

五代さんの言葉にピエト口はそう呟くと、2本目を食べはじめた。

「隣で寝せられてる俺の身にもなれってんだ。」

ワンダや弓のおっさんに小言は言われるし、出される飯は不味いわでやつとまともなもんが食べたんだぜ。

それにテツヤはワンダのお気に入りみたいで、ワンダとテツヤの見つめ合いを見てると甘ったるくて胸焼けしてたんだよこつちはな。」

口の中にバナナを詰めこんだピエト口はぶつぶつと文句を言っている。

「…え? そうなんですか?」

俺は思わず沢木さんに訪ねるが、当の本人はきよとんとした顔で言ってくる。

「俺ってお気に入りでしょ?」

あの人はちよくちよく会いに来てくれますけれど、そういう事とは違うんじゃないかと思うんですけれど…」

沢木さんが言うにはウルترونとの戦いの最中に自分の中に光の力があるような事を言っていたので、いろいろと話を聞いている最中らしい。

アギトの力は光の神の力とはいえ超能力の延長線上にあるような力の為、もしかして沢木さんは超能力者であり、その力が眠っているのかもしれない。

今回の戦いで、直接的なダメージを受けた沢木さんは、ザビーゼクターから見放されたのかライダーの資格を失ってしまった為、今後はその力の制御に集中してもらう事になりそうだった。

すると持っていたタブレットにメールが入って、スタークさんから呼び出されたので、沢木さんと話したいという五代さんを残して、俺はその場を離れて呼び出された場所に向かうと、スタークさんだけじゃなく、ステイブさんとソーさんもいた。

「ハザマ、今回は助かった。」

ステイブさんに礼を言われると、スタークさんとソーさんが一度戻るといふことだったので、俺も見送ることにした。

道中の話題はヴィジョンがソーのムジヨルニアを持ち上げた事についての事であれこれと意見が出ていたが、結局ハンマーの持ち上げルールの変更はうやむやになり、ソーさんはインフィニティストーンの危険性を言い残して虹の橋で去って行き、スタークさんとステイブさんは車の前で二人で話し、スタークさんは俺に片手を軽く上げて俺はそれに答えると、そのまま車に乗って行ってしまった。

「ステイブさん、先ほどのハンマーの件ですが、あの時にあなたはハンマーを持ち上げ

「事ができたのではないですか？」

「どうしてそう思った？」

「少しですが、動いたように見えたので。」

「もしかしてソーさんやスタークさんに配慮して持ち上げられないふりをしたのでは？」

「…さてな。もうソーはアスガルドに戻ったから確認はできないぞ。」

「それより、ハザマとユウスケはSPIRITSとはいえアベンジャーズのメンバーだと僕は思っている。」

「これからも協力を頼んだぞ。」

「そうやって俺の肩を軽く叩くと歩いて行ってしまった。」

side 五十嵐一輝

急な階段をダッシュしながら何往復かして、大天空寺と掲げられたお寺の敷地にあるベンチに腰掛けて汗を拭く。

「兄ちゃん、お疲れ様。」

弟の大二にスポーツドリンクを渡され、礼を言いながらそれを喉を鳴らしながら飲んでいく。

「…ぷはー。はあ…はあ…何で俺までトレーニングしてんだろ？」

「しようがないじゃん。父ちゃんがあんな真剣に話してくるなんてめったにないし、それに最近の世間は物騒になつてきているから自衛できるようなつた方がいいとは思ふよ。」

それに、トレーニングさせられてるのは兄ちゃんだけじゃないし。」

すると、俺の一つ上の先輩の天空寺タケルさんが、息を切らせながら階段を上りきり、そのまま地面に大の字に転がってしまう。

「もー！汚れるじゃないの！ほら、さっさと立って、ほらスポーツドリンク。」

幼馴染みだと言う月村アカリさんが引つ張り起こしながらスポーツドリンクを渡していた。

「もう限界かタケル。」

後輩を見習つてもう少し体力をつけ方がいいぞ。」

「そうですぞ。タケル殿はもう少し鍛えた方がいいと拙僧も思いますな。」

「マコト兄ちゃんだけじゃなく御成まで。」

もう少し俺に優しくしてもいいじゃん。」

俺達と一緒にトレーニングをしている深海マコトさんや、この寺のお坊さんの御成さんに小言を言われている。

「でも、狭間さんから大切な剣を預かってるんでしょ？」

「預かったというよりは剣に選ばれたということみたいだが。」

俺も同じく剣を使う事になったからな。

使いこなせられるようになるには、トレーニングは必要だ。」

この間、父ちゃんに連れられてこの寺に来た時に、前に旅館で映画を見た時にいたらしい人との交流が元で知り合ったっていう狭間さんから、タケルさんとマコトさん、それにもう一人の男の人に剣と本みたいな物を渡しているところを見たのを覚えている。

特にタケルさんはその中でもとても重要な物だったらしく、なんでも【救世主】になり得る代物らしい。

タケルさんはどこことなくめんどろそうだったけれど、タケルさんのお父さん、天空寺龍さんと仙人とかいうおっちゃんにいろいろと言われて、なんだかんだで俺も一緒になつてトレーニングをさせられている。

「いいよなあ。俺はこれといってそういうものももらってないし、なんていうかさッカーみたいなのモチベーションが上がらないんだよなあ。」

「…兄ちゃん。そんなこと言ってるよ、カノンさんに嫌われるよ。」

「ばっ!?!俺は別に好きとかそういうんじゃないよ…ああ、いや、深海さんの妹さんがかわいいのは事実ですけど俺は…ああもう!大ニ!余計な事を言うなよ!」

俺は深海さんに睨まれながら、なんとか弁明できるように考えを巡らせていた。

side 天空寺籠

あの旅館での出来事の時に話しを聞いたが、この寺の地下にある【神の石】から度々現れる男、イーデイスの事も狭間玄乃は知っていた。

イーデイスがいるという世界は現在は平和だが、宇宙からの侵略に備えていろいろと準備をしているらしく、この大天空寺にはもしものための王族の避難所として使わせるという契約を結んでいる。

まあ、最近まではただの飲み友達といったところだったが、どうやら宇宙では生物がいる惑星を侵攻するような勢力があるらしく、王族であるアランを連れて警告に来てくれたので、狭間に教えようと呼んだところで、狭間が所持していたという聖剣に息子のタケルや、息子と親しくしてくれているマコトくんイーデイスが連れてきたアランがそれぞれ選ばれたそうだった。

特に息子のタケルが選ばれたという炎の聖剣はその侵攻勢力を打倒できる可能性がある秘めた代物らしく、それを使いこなすには同じ聖剣持ち達以上に力をつける必要があるらしかった。

イーデイスは渡りに船とはこの事で、私もどうやら覚悟が必要だと認識し、現在は息

子達と、あの旅館で知り合い、連絡を取り合っている五十嵐くんも含めて例のSPIRITSという組織に協力を得られる算段をつけようとしているところだった。

しかし、狭間曰くその聖剣の力を必要としている時は案外近いらしく、今、目の前の敷地で賑やかに談笑している息子達に対して厳しく修行が必要だと感じていた。

side 剣崎一真

ロボット軍団との戦いの後、橘さんは仮面ライダーを引退した。

それに伴って、すべてのラウズカードを狭間さんに返却し、俺のブレイドとしての力も失う事になった。

だけど、俺は仮面ライダーになれな訳じゃない。

橘さんの引退も、ラウズカードの返却も狭間さんにはあらかじめ報告していて、その時に俺にもガードドライバーをもらえないかと話をしようと思っていたところで、俺も日高さんや湊さんみたいな聖剣を使う資格を持っているということを知っていた。

だから、俺はこの雷の力を持った聖剣で仮面ライダーを続けて人助けができることを嬉しく思っていた。

シビルウォーヒーロー大戦編 アベンジャーズ解体

side 狭間玄乃

『ナイジェリアのラゴスにおいて、アベンジャーズと武装集団の抗争に巻き込まれ、一人のワカンダ国民が命をおとしました。』

めったに国外に出ないワカンダの人々ですが、ラゴスにはボランティアで赴いていました。

ワカンダ国王は…』

『彼らアベンジャーズは国際法を逸脱して独自に動いた挙げ句、ナイジェリアにおいて多数の犠牲者を出しました。』

マキシモフ姉弟や、ウィンターソルジャーのような本来ならば裁かれなければならない犯罪歴のある人物を戦力としており、アメリカ政府の対応が…』

『…このようにアベンジャーズは各国から危険視されており、先のソコヴィアやワシントンD.C.、ニューヨークにおいても救助活動を優先したSPIRITSとは異なり、闘争という手段に括り…』

SPIRITSの食堂で見えていたテレビの放送が見えなくなったのか、チャンネルを握っていた五代さんが、テレビのチャンネルを変更しても似たような報道ばかりだったので、そのまま消してしまった。

「五代さんは、ナイジェリアの作戦について聞いていましたか？」

「俺は何も知りませんでした。」

狭間さんはどうなんです？」

「自分も同じです。」

この報道を見るまではアベンジャーズが独自に動いたことを知りませんでした。」

テレビの前に立っていた俺と、食べかけの食事のトレイが置かれたテーブルにチャンネルを放り投げるように置いて椅子にうなだれた五代さんが、揃ったため息をついた。

先のワシントンD・C・でヒドラの手先だったラムロウ、後のクロスボーンズは本郷さんに倒されたことで、この戦いが起きないだろうと思っていたのは失敗だったようである。

「こういうメディアのやり方は、正直好きではないですね。」

アベンジャーズの施設にいた時にデイリービューグルという記事を見ましたけど、仮面ライダーに対してもひどい酷評でしたよ。」

クインジエットのバルカンによるダメージも癒え、日本に戻ってきていた沢木さんも

五代さんの隣の席で半分くらいになったうどんを食べながら言ってきた。

「J・J・ジエイムソンですか。」

彼は新聞というメディアを利用した一方的な主張で世間を混乱させることに定評のある人らしいですからね。

「デイリービューグルは見ない事をおすすめしますよ。」

俺は食べてしまって空になったカツ丼のどんぶりを前にそれを言うと、席を立つてトレイごと厨房に返却した。

「あれ？狭間さんはもう食べないんですか？」

「いつもだったら小皿をもう1〜2品食べてませんでしたか？」

「これから、総隊長との打ち合わせがありますよ。」

「腹6〜7分目ぐらいの方が仕事に入りやすいだけですよ。」

五代さんに言われてそう答えると、そのまま俺は食堂を後にして総隊長室に向かった。

「さて、狭間くん。大変面倒な事になりそうだな。」

本郷さんは所謂ゲンドウポーズをしながら俺にそう言ってきた。

「今回のアベンジャーズの件ですか？」

「うむ。」

狭間くんは直接関わってきていたからわかっているだろうが、これまでのニューヨーク、ワシントンD.C.、ソコヴィアのような大規模戦闘は我々SPIRITSが戦闘よりも人命救助を第一としてきた事で被害は最小限と言っていていいだろう結果になっている。

しかし、アベンジャーズ単独でのやり方で問題を解決できても、その結果に市民の安全は無く、犠牲者が出続く事になるという結果が出てしまった。」

「しかし、アベンジャーズの対応がなければ…」

「もっと犠牲者が出ていただろうと言いたいのだろうが、世間の気風、各種メディアや各国政府の捉え方はそうではないようだ。」

各国政府からの対応によっては、日本政府から我々SPIRITSに対していくつかの指示が出される事になるだろう。」

「いや、もう対応をしなければならぬのだろうな。」

「そうなるよ、本郷さんは…」

「私の警視総監としての任期はもうあまりない。」

副総監の加賀美くんが新しい警視総監となり、私がSPIRITSの総隊長として警

察とは全くの別の組織という状態になってしまえば、このSPIRITSという枠組みがどうなるのかは正直先が見えない。」

「SPIRITSの解体もあり得ると？」

「…わからん。」

「…これまで、闇の手から市民を守り、戦ってきた我々を政府は無下にはしまいが…」

本郷さんがそう言うと、本郷さんの端末に通知が入りそれを取り、本郷さんの眉間に急にシワが寄っているのが見えると、数言のやり取りの後に端末を切って言った。

「…狭間くん。至急アメリカに向かってくれ。」

「どうしたんですか？」

「アベンジャーズが解体されるそうだ。」

アメリカ ニューヨーク州北部 アベンジャーズ施設

俺は突然の出張に戸惑いながらも、アベンジャーズが拠点にしているこの施設にくると、やたらと職員ではないだろう人たちを見かけながら会議室に向かった。

そこではそれぞれが椅子に座ったアベンジャーズの面々に対して、スーツ姿の男性が

話をしている最中だった。

その顔には見覚えがあり、アメリカ国務長官のサディアス・“サンダーボルト”・ロスであった。

「ああ、入りたまえ。

ミスターハザマ。わざわざ日本から来てもらったのだ。

二度同じ説明をしたくはないのでね。」

俺はそう言われて彼の近くの空いた席に促されるままに座ると、ロス長官は話を続ける。

「…さて、世界は君たちに返しきれないほどの借りを作っている。

君たちは我々を守るため戦ってくれている。

命をかけて…だが、君たちを“ヒーロー”だと言う者もいれば、ヒーローではなくただの“自警団”だと言う者もいる。」

「長官はどちらの呼び名を使いたいですか？」

“危険な集団”かな。」

ナターシャさんの一言に返された言葉は辛辣だった。

「…考えても見たまえ。

アメリカを本拠地にする超人達の集団が、国境などまるでお構い無しとばかりに自分

たちの正義を振りかざす。

自分たちが暴れた後のことなど、知った事ではないという顔をしてな。」

するとロス長官は壁に備え付けられていた画面を操作して過去の記録を写しはじめる。

「ニューヨーク。」

スマホの録画らしい映像には、上空をハルクが飛んで来て壁に着地し、また移動していたが、その時に崩れてきた瓦礫の下敷きになろうとした時に仮面ライダーバスターが庇い、避難を促す様子が写った。

「ワシントンD.C.。」

こちらもスマホの録画だろう映像で、上空をファルコンが舞いクインジェットの流れ弾が飛んくるが、仮面ライダーブルーボが覆い被さってくれて助けた姿や、監視カメラの映像らしいものには、銀色のゲートに同じく仮面ライダーブルーボとそして仮面ライダーサーベラが避難を促す様子が写し出される。

「ソコヴィア。」

へりによる撮影らしい上空からの映像には、崩れゆく建物に銀色のゲートがぐり抜け、避難場所で撮影された映像にゲートをぐり抜けてきた様々な体勢の人々が出てくる映像と、監視カメラだろう映像に、破壊された浮遊大陸の破片が市街地に落ちないよ

うにゲートを張った仮面ライダーデイエンドの姿が傾いたアングルで写し出された。「ラゴス。」

その映像には仮面ライダーの姿は無く、キャプテンアメリカがテロリスト達と戦う様子と、もうもうと煙を上げる建物や散乱した瓦礫、そして動かない寝そべった人々の姿が写し出される。

そしてステイブさんの制止によって画面が消えると、再びロス長官が話し出す。

「……この4年、君たちアベンジャーズは誰の管理も無く好き放題やってきた。

だがそんなやり方では世界各国の政府が黙ってはいない。

……そこで対応策だ。」

ロス長官は近くに立っていたスタッフであろう男性から一冊の冊子を受け取ると、そのままその冊子をテーブルの上に置いてその上に手を置いた。

「【ソコヴィア協定】

世界の117カ国が同意した。

これにより、アベンジャーズは解体され、アベンジャーズだった人員と旧S. H. I. E. L. D. の人員がSPIRITSを母体とした新しい組織へと組み込まれる事になる。

まだ正式名称は検討中だが、これからは国連の委員会により正式に認められた場合に

限り出動が許可されることになる。」

「アベンジャーズはこれまで、世界を守ってきた。」

役目を果たして来ている。」

俺にとつても寝耳に水な話して驚いているとステイブさんが反論した。

「ではなぜ、ラゴスに仮面ライダーを連れていかなかった？」

世界は君たちアベンジャーズよりもS P I R I T S、そして仮面ライダーの方を評価し、重要視しているということだ。

君たちがソーとバナー博士の所在を把握できていないのも問題があるしな。

世界が求めるのは、歩み寄りと安全の保証だ。

…受け入れる。これが一番良い着地点だ。」

「…それで、この協定に従えと？」

「三日後にウィーンで正式承認のための国連の会議がある。」

大人しく従うことをおすすめる。」

ローズ大佐の質問にそう答えると、そのまま会議室から出て行こうとしたところに、
ナターシャさんが言う。

「私達の答えが長官が望まないものだったら？」

「…引退してもらおう。」

そう言われたナターシャさんは苦虫を噛み締めたような顔になっていた。

ロス長官が見えなくなると、今度はステイブさんが俺に話しかけてきた。

「…ハザマはどう思う？」

「正直、今回の事は俺も驚いています。

世界各国117カ国にはもちろん日本も含まれているでしょう。

SPIRITSは先のソコヴィアで派手に立ち回りってしまったため、政府にあまり強く出れないでいます。

それに総隊長の警察官僚からの任期期限により、引退することでSPIRITSが警察機関から切り離されるというのも、今回の組織合併ということにつながったのかもかもしれません。

しかし、国連の委員会による決定でしか動けないというのは脅威による被害を防ぐのは難しくなるでしょう。

…ですが、管理される事で安全面が保証されるのもまた事実。

…一長一短と言えるでしょう。」

「ハザマは賛成なのか？」

「…正直迷っています。

仮面ライダーにも家族はいますし、我々が戦ってきた闇の手も、規模が縮小されてい

る事が確認されていますから、賛成する者もいるでしょう。

ですが、ヒドラの時のように我々の技術を狙い目にした癒着の可能性も捨てきれないとも考えています。

：既に各国が承認している時点で、今さら俺がどうこう言うのは遅いのでしようが総隊長と話し合う必要があります。」

スタークさんの一言にそう答えると、俺もまた会議室から出てSPIRITS本部に連絡を入れるのだった。

暗躍の序幕

side 戦極凌馬

木造で造られた数百メートル四方ほどの広さがあるその建物の中、コロッセオのような石材が敷き詰められた闘技場を見下ろして数万人は座れそうな観客席にほんの数人の我々だけが座っている。

『…ふん。人間などさっさと殺してしまえばいいものを。』

「…それじゃ面白くねえだろお？ウルترونよお。」

所詮はロボットだな。楽しくするために余興も必要だぜえ。」

『貴様も人間ではないだろう。』

”デザスト”。」

闘技場の中央に置かれた鋼鉄製の檻の中には、次々に捕らえられた者達が拘束されて入れられていく。

その四方には四人の見張りが立っていて、耳にあたる部分が機械になっている。

「天津氏、彼らはどうだい？」

「戦極、君は…いや君達は知らないのだったな。」

素体はこの世界製とはいえ、彼らは“滅亡迅雷ネット”という私の世界でも仮面ライダーだった者達だ。

私が持ち込んだデータで作られているのだからな。

1000パーセント、この世界の奴らでは倒せんよ。」

「それは頼もしい。

さて、もう一つの仕込みはどうだい？」

「1000パーセント完璧だ。」

自信満々のこの男を尻目に、お互いにそれぞれを捨て駒としか思っていない事がありありとわかりながら、檻の中に入れられていく人々を冷めた目で見ていた。

side 狭間玄乃

俺は本郷さんとの話し合いを終えて戻ると、アベンジャーズの面々は会議室から出てサロンで思い思いに討論しているようだった。

「もしこの協定に賛成すれば、政府は俺たちの事を監視する訳か。」

「117カ国が協定に賛成だ。117カ国だぞ！」

ハイって言うほかないだろう？」

「…私の分析したところによれば。」

サムさんとローズ大佐が言い争っていたところにヴィジョンが口を挟んだために、その言葉にそれぞれが耳を傾ける。

「スターク氏が自分こそがアイアンマンだと宣言してから8年。

超人と呼ばれる者達の数は急激に増加しました。

仮面ライダーと呼ばれる者達もこれに含まれます。

そしてそれと平行して、世界を破滅に導きかねない出来事も同等に増えています。」

「我々のせいだど？」

「因果関係はあると考えられます。」

…我々の力が敵を呼び寄せる。

敵がくれればそこに争いが生じ、争えば、そこに悲劇が起きるでしょう。

結論として、国連の管理下に置かれることも検討するべきです。」

どこことなく不機嫌そうなステイブさんの一言に答えたヴィジョンに賛成するようにローズ大佐が言っていると、いつもなら茶化すようにまくし立てるスタークさんを疑わしくナターシャさんが問うと、言い訳をいろいろとしながらコーヒーを一口飲んで切り出した。

「去年、僕は世界の平和のためにとウルトロンを作ろうとした。

…結果、暴走して世界の破滅寸前までいった。」

「それはみんなで食い止めただろう？」

「だが…：失敗したのは事実だ。」

方向性の間違いだと信じて今は未来ある学生達への支援に切り替えたがね。

…ここには意思決定のプロセスがあつてもそれを重要視しないで行動してきた。

だから僕はそれを踏まえて監査を受け入れる覚悟がある。

…何も僕達が世界の平和を守る全ての責任を背負う必要はない。だろ？

組織同士が一つになればそれは大きな力となって今後の脅威とやらも対処できると

僕は思うけどね。」

「…それは逃げなんじゃないのか？」

僕達が今まで行つてきた責任を転化するだけだ！」

「ステイプ。それは傲慢すぎるぞ。」

「バツキー、君まで…」

「相手はヒドラでもS. H. I. E. L. D. でもない。少なくとも国連が決定するのであれば、信用してもいいんじゃないか？」

さすがのステイプさんも、親友であるバーンズさんの説得には考えが変わりつつあるようだが、どこことなく迷っているようにも見える。

するとステイーブさんは端末を取り出してどこかに行ってしまうと、バーンズさんはその後を追いかけていく。

そしてその後はお開きとなったのか、それぞれが別れて動きはじめた。

「ハザマ。どうだったんだ？」

その場に取り残される形となった俺に、スタークさんから声がかかる。

「うちの総隊長も概ね賛成の意を示しています。

…ですが、あの人もステイーブさんに似たところがありますからね。

この先、組織合併がなった時が心配になります。」

「そうね。フオローするのも大変そう。」

「おや？ ロマノフ、君は賛成なんだな。」

「…前言撤回よ。」

「いやいや、遅いぞ。君は賛成側だ。

決まりだ。」

俺はスタークさんとナターシャさんとの話の後に一度本部に戻ってからウィーンに向かうと言って、アベンジャーズの拠点を離れた。

オーストリア 首都ウィーン

side 飛電或人

じいちゃんや父さんが営む会社、飛電インテリジエンスの後継らしい自分が専用の秘書の指導を受けながらいたある日、じいちゃんの勧めでソコヴィア協定とやらの締結の見学ができるらしいということだったから、言われるがままにオーストリアに赴いた。

「…或人様。ネクタイが曲がっていますよ。」

「…ありがとう”イズ”。」

それよりさ、俺ってまだ高校生なんだけど。

観光とかできそうだから、言われるがままにきたはいいけどさ。こういう政治的な事がじいちゃんやんの会社とどう関係があるのさ？」

本当によくわからないんだよな。

ちよくちよく出張に行ってる父さんに関係があるらしいんだけど、度々その質問をしては目の前の俺専属の秘書とかいうイズにはぐらかされるし。

そのイズは耳に機械的なヘッドフォンのような物を着けている。ように見える見た目若い女の人なんだけど、じいちゃんやんの会社で最近開発されたアンドロイド”ヒューマギア”なんだと。

アメリカのスタークインダストリーと共同開発されていて、現在はほんの数体しか製

造されていないんだってさ。

これもなんか最近の出来事のせいでも生産停止状態らしくて、作り出されたその数体を特定の人物の側に置く事で成長を促すとかなんとか。

金属探知機に反応するから、空港とかウイーンの会場とか大変だったけど、身分証を見せると会場まで通してくれて、端の方に座らせもろう事ができた。

周りではなんか時折テレビで見かける人たちがちらほらいて、なんだか居心地が悪くなってきたところで会議がはじまつたらしい。

いくつか外国のお偉いさんとかの話があつて、この間犠牲者が出たとかいうワカンドの人が演説をはじめたところで、隣に座ったイズの様子がなんか変な動きを見せていた。

「…どうしたんだイズ？」

「或人様、周囲に妨害電波が発生しています。」

「…え。まずいんじゃない?」

俺はとっさに立ち上がったって壇上の人に対して避難するように大声を発すると、その人のすぐ近くの黒人男性が怪訝な顔をしながら周囲を警戒すると、周囲に避難するように言いながら壇上の人に近づいた瞬間に、壇上の人の中でのガラス側で大爆発がおきたのが見えた。

その瞬間に俺の上にイズが覆い被さるようにされてしまったので、混乱しながらも俺も騒ぎが収まるのを待つしかなかった。

しばらくすると会場にいた人たちと一緒に、会場から出されたので近くのベンチに座って、消防車が何台も止まった目の前の光景を見ながら何も考えられないでいると、傷だらけのワカンダの人の近くにいた人と、ものすごく美人な女の人が俺とイズのところに寄ってきた。

「…さつきはよく気付いてくれた。」

「でも、あの爆発で何人も亡くなったって…」

男の人の言葉に、思わず声を震わせながら答えるしかなかった。

聞けば、壇上でしゃべっていた人はこの人のお父さんだったみたいで、目の前で父親が亡くなったと聞いて、何も言えなくなってしまうた。

「…でも、どうして危険だとわかったの？」

女の人の事に答えたのは俺ではなくイズだ。

「私のセンサーを妨害する電波が発生していたことで、何らかの異常事態が発生している事がわかりました。」

「センサー？」

「はい。私は日本の企業、飛電インテリジェンスによって開発された学習型AIを搭載

した、アンドロイド、ヒューマギア”イズ”と申します。

”通信衛星アーク”によって制御されていますので、相互通信が阻害されれば主人に警戒を促すようになっていきます。」

「ロボットには良い思い出は無いんだけど、今回は助かったわ。

それで、そっちの坊やがあなたの主人？」

「はい。飛電インテリジエンス現社長、飛電是之助様のお孫様であり、時期社長、飛電其雄様の御曹司であられます。飛電或人様です。

今回は狭間玄乃様とアンソニー・エドワード・”トニー”・スターク様、是之助社長の勧めで会議の見学をさせて頂きました。」

「…ハザマとトニーが関係していたのね。

一企業が国連の会議に見学とはいえ参加できるなんておかしいと思ったわ。

それで、犯人はわかるのかしら？」

「…通信衛星アークより入電しました。

現在、複数のチャネルで公開されているようです。」

イズは時折こちらを振り向きながらそう女の人と会話していると、イズの言葉を聞いた女の人が端末を取り出してネットの動画を再生しはじめた。

『…付近に止められていた車に仕込まれていた爆弾により、ウィーンの会議場が爆破さ

れました。

負傷者は70人以上、死者はワカンダのテイ・チャカ国王を含む12人が現在確認されているようです。

警察当局は容疑者を公表しました。

国道の監視カメラにより、この車を運転していたと思われる人物は“リヨウマ・センゴク”。

日本の企業、ユグドラシルコーポレーションに所属する科学者であり、日本のヒーロー組織であるSPIRITSにも所属している事が判明しています。

今回の組織合併に反対を示す強硬作と思われる、各国政府はソコヴィア協定の締結に対する内容の見直しが必要だと判断しているようです。』

聞かから大変な事態になっているようで、男の人と女の人は顔を見合わせているようだった。

指名手配犯 戦極凌馬

「…駄目よテイ・チャラ。容疑者の事については当局や私たちに任せて。」

「…父はただ、和平を望み…復讐を望まなかったでしょう。」

ですが、私は父とは違います。

私が自ら犯人を見つけて、…この手で殺します。」

「え？ちよ!？」

男の人は女の人の制止を聞かずに行ってしまい、俺は戸惑いの言葉を出すしかできなかった。

すると女の人の端末に電話がかかってきたようで、数分ぐらいすると戻ってから俺にも同行してほしいという事で、俺とイズは女の人、ナターシャ・ロマノフさんについて行く事になってしまった。

着いたところは近くのホテルの一室で、そこには二人の男の人がいた。

そのうち一人は俺でも知ってる人で、キャプテンアメリカ、ステイブ・ロジャースさんだった。

「…ステイブ、サム。」

「無事か？」

「災難だったみたいだな。」

「で？一緒にいる奴らは誰なんだ？」

「キャプテンアメリカが聞いてきたので自分から名乗る。」

「俺は飛電或人、こっちは秘書のイズです。」

「…あの、ファンです！サインもらえますか!？」

「なんだ？民間人を連れてきたのか？」

「サインは後にして。」

「異変に最初に気付いたのはこの二人、いえ一人と一体ね。」

「一体？そういえば、女性の方は体幹がおかしいように見える。」

「人間じゃないのか？」

「はい。私は飛電インテリジェンスによって開発されたアンドロイドのイズと申します。」

「ロボットだって？危険じゃないのか!？」

「イズは、製造されて既に2年以上経ってる。」

「あんた達が倒したっていうソコヴィアのロボットに重ねて見てしまうのは仕方ない」

かもしれないけど、イズは俺のために今まで沢山の事をしてくれてる。

壊すとか言わないですよね!？」

「…いや、すまない。」

こちらの反応も過剰だった。

彼女からは、ウルトロンのような威圧感を感じない。

安心してくれ。壊す気はない。」

俺は思わずほつとして、近くにおいてあったソファーに崩れるように腰掛けた。

「…その彼女が異常に気付いて、坊やが会場で注意してくれたからテロに気付く事ができたのよ。」

「…そうか、感謝しないとな。」

俺はキャプテンの仲間のサム・ウィルソンだ。」

「…よろしくお願いします。」

「…ところでナターシャ、ハザマを見たか?」

「…そういうえば、姿を見てないわね。」

サムさんと握手をしている横で言われたキャプテンの言葉に俺もはつとしていた。

そういえば今回の見学では、じいちゃんや父さんの知り合いで、俺も何度か面識のある狭間さんと合流するはずだった。

だけど、姿を見せないままにそのまま会議が始まったので、会場に入ることになったのだ。

「…急に来られなくなつたのなら、ハザマなら常に連絡をしてくれた。

今回のテロ行為がSPIRITSに悪影響を及ぼしていなければいいが。」

side 狭間玄乃

うつすらと意識が浮上するのを感じた。

「…ん」

俺はどうしたのか…飛行機の座席で寝てしまったのだろうか？

いや、日本の空港に行く途中までは記憶があるが飛行機に搭乗した記憶は無い。

思わず体を捻ろうかすると、体が動かなかつた。

見れば、座らされている椅子に手足が縛りつけられていて、更には鉄製と思わしき檻のようなものに周囲が覆われていた。

「…これは…？…いったい？」

「…ん？眼を覚ましたのか。」

俺が座らされている椅子の裏から声が聞こえてきた。

日本語でひよっこりと顔を覗かせたのはアジア系の顔をしていた。

「…見覚えが…ある。」

確か…貴様は、闇の手の…最高幹部の…一人の「ムラカミ」…だった…よな？」

「なんだ、俺も随分名がうれたな。」

「…何を…している？」

ムラカミは俺の横で金具に何やらカチャカチャと音をたてている。見れば、俺の腕に刺された管から点滴が打たれていた。

「お前さんはまだまだ精神的に強固みたいだからな。」

洗脳するためには精神を弱めないといけない。

だからまずは鎮静剤で自己を曖昧にする必要がある。」

「…洗脳…鎮静剤…だと？」

急激に目の前がうつすらとしてくる。

「…く…そ。」

そしてそのまま目の前が真っ暗になった。

side 呉島貴虎

急に連絡が取れなくなった凌馬を部下に搜索を指示していた矢先に、テロの容疑者として指名手配された事で、急遽ウィーンに向かい今しがた到着した。

そのままヘリに乗り換えて、端末に示されていた場所へと急行する。

元々信用を失いつつあった凌馬にはいくつもの探知機を着けていたが、そのことごとくを無効化されて行方がわからなくなっていた。

しかし、ウィーンに到着してからはそのうちの一つが反応したために向かっているが、明らかに誘っているのがわかる。

「……たとえ罠だろうと……凌馬、貴様の蛮行は俺が止めなければならぬ！」
発信源の真上にホバリングして、ロープを垂らして降下する。

着地すると、そこは立体駐車場の屋上で真下から銃撃音が聞こえてくる。

流れ弾に当たらないように物陰に隠れながら音の発生源へと急いで向かうと、ちらほらと防弾ベストを着用した特殊部隊らしき者達が倒れていた。

そのうち一人の首筋に手をあてて脈をはかると、気絶しているだけのようではっきりといた。

いつの間にか銃撃音は鳴りやんでいて、流れ弾の心配がないと思いきいで近くの角を曲がると、中央付近で倒れた特殊部隊達の中央に白衣姿の男、戦極凌馬が立っていて、その腰にはフェイスプレート付きの戦極ドライバーが装着されていた。

「……やあ。貴虎、来たんだね。」

見たまえ。無粋な連中だろう？

私を捕まえるのに仕向けた戦力がこの程度でしかなかった。

彼らの上司の無能さに呆れていたところさ。」

「凌馬。なぜあんなことをした？」

「あんなこと？…ああ、あれはただの狼煙に過ぎないよ。」

「狼煙だと？あの爆発で何人が犠牲になったと思ってる!？」

「…あの程度の爆発で死んだ者達など興味はない。」

しかし、ソコヴィア協定とやらは無粋極まりない制度だからね。

ちよいと、釘を刺したくなったのさ。」

おどけたように笑い、指先を掴まむような動作をした凌馬をにらみつける。

「怖い顔をしないでくれよ貴虎。どうだい君も、我々の仲間にならないかい？」

「ふざけるな！」

…変身しろ。ここで貴様を倒してその蛮行を止めるのが俺の役目だ！」

メロン！

「いいだろう。止められるものなら止めてみてくれ。」

レモン！

ROCK ON

「変身」

メロンアームズ！ 天・下・御・免！

レモンアームズ！ インクレディブルリョウウマウ！

仮面ライダー斬月に変身した俺はとにかく二人だけで戦う為に仮面ライダーデュークへと変身した凌馬のレイピアと無双セイバーを交えながら移動する。

そして俺が最初に降りたった最上階にたどり着くと、盾であるメロンディフェンダーを使い、凌馬の動きを封じながら徐々に優位に立つ戦いになっていく。

凌馬ははじき飛ばされて倒れた体を起こしながら話出した。

「やはり、君相手に優位に立つことは難しいようだ。」

「わかっているのなら話は早い。凌馬、投降しろ。」

そして全てを話すんだ。」

「貴虎。私は勝てないとは言っていないよ。」

「この”旧式のドライバーでは難しい”と言ったんだ。」

すると凌馬は変身を解き、ベルトを外すと別のドライバーを取り出している。

「…そのドライバーは！」

「やはり君もあのデータを見たのか。」

「…いや、そういうえば異世界の記憶とやらを持つていたのだったね。」

「そうだ。このゲネシスドライバーは君が使う戦極ドライバーでは太刀打ちできないパワーを発揮できる。」

凌馬はそのままゲネシスドライバーを腰に装着してレモンエナジーロックシードを取り出して見せた。

しかしその瞬間、凌馬の動きが止まった。

その理由は、俺の頭上を飛び越えて真つ黒なスーツに身を包んだ黒猫のような姿の人物が現れたからだ。

「…はあ。何者だい？」

「私と貴虎の戦いを邪魔しないでくれないか？」

『…関係ない。私は私の信念で貴様を殺す。』

「そういう者だ。」

その男性だろう人物は、両手の指先に爪のような刃を飛び出させると、独特な構えをとった。

レモンエナジー！

「…変身。」

ROCK ON SODA

レモンエナジーアームズ！

ファイトパワー！ファイトパワー！ファイファイファイファイファイファイファイファイファイト！

「…いいだろう。何者かは知らないが、邪魔するのならば君も貴虎も打ち倒すだけだ。」

凌馬はゲネシスドライブで変身したバージュンの仮面ライダーデュークへと変え、その男とも戦いに入った。

俺もその男も凌馬に刃を振り下ろそうとするも、お互いの戦い方が合わないのか、時折体がぶつかりそうになったり、互いに刃をぶつけあいそうになったりしていた。

『…邪魔をするな。』

「…こっちの台詞だ。」

いや、これはおそらく俺達の戦い方が悪いのではなく、凌馬の動き方によりこうなっているのだろうと考えつく。

「…どうやら、貴虎は気付いたようだね。

さすがだ。」

「種さえ解ればー！」

俺が凌馬の動きに対して動こうとすると、凌馬の後方から何か飛んで来た。

しかし、凌馬はその物体を見向きもせずには掴んで止めた。

「この私に死角は無いよ。」

隙をついたつもりかな？キャプテンアメリカ！」

凌馬はそのまま後方に現れた青いスーツに身を纏った男に向かって掴んでいた物体、キャプテンアメリカのシールドを投げ返した。

キャプテンアメリカはとつさに身を屈めてそれを避けると、そのシールドは駐車場に停められていた車にめり込んでしまう。

「そして君もねー！」

そのまま凌馬は身を宙に翻すと、凌馬に向かってドロップキックをしようとしていた金属製の羽を着けたファルコンだろう男に蹴りを入れて吹き飛ばした。

ファルコンはゴロゴロと転がり、痛そうにうつぶせになっている。

「痛かったかな？」

すまないね、この姿の時は手加減は得意ではなくてね。」

凌馬はおどけたように言うのと脱力してバックステップで俺達から距離を取って行く。

「待てー！」

「貴虎、無粋な連中が集まって来たから私は一旦引かせてもらおうよ。」

そして凌馬が片手を軽く上げるとその後方に見覚えのある銀色のオーロラが展開され、そしてそのオーロラから黒装束や赤装束の集団がぞろぞろと姿を現すのだった。